

**IBM WebSphere Partner Gateway Enterprise
および Advanced Edition**



E/A 管理ガイド

バージョン 6.1.1

**IBM WebSphere Partner Gateway Enterprise
および Advanced Edition**



E/A 管理ガイド

バージョン 6.1.1

お願い

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、261 ページの『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

本書は、IBM WebSphere Partner Gateway Enterprise Edition (5724-L69) バージョン 6.1.1 と Advanced Edition (5724-L68) バージョン 6.1.1、および新しい版で明記されていない限り、以降のすべてのリリースおよびモディフィケーションに適用されます。

IBM 発行のマニュアルに関する情報のページ

<http://www.ibm.com/jp/manuals/>

こちらから、日本語版および英語版のオンライン・ライブラリーをご利用いただけます。また、マニュアルに関するご意見やご感想を、上記ページよりお送りください。今後の参考にさせていただきます。

(URL は、変更になる場合があります)

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原 典： IBM WebSphere Partner Gateway Enterprise and Advanced Editions
Administrator Guide
Version 6.1.1

発 行： 日本アイ・ビー・エム株式会社

担 当： ナショナル・ランゲージ・サポート

目次

本書について	ix
対象読者	ix
表記上の規則	ix
関連資料	x
このリリースの新機能	xi
リリース 6.1.1 の新機能	xi
リリース 6.1 の新機能	xii
第 1 章 WebSphere Partner Gateway コンポーネント・アプリケーションの管理	1
シンプル・モード・システムでの WebSphere Partner Gateway コンポーネントの管理	2
分散モード・システムでの WebSphere Partner Gateway コンポーネントの管理	2
デプロイメント・マネージャー	3
コマンド行からのサーバーの始動および停止	5
コマンド行からの FTP 管理サーバーの始動と停止	5
単純分散モード・システムでのコンポーネントの開始および停止	6
単純分散モード・システムでのサーバーの始動	6
単純分散モード・システムでのサーバーの停止	7
完全分散モード・システムでのコンポーネントの開始および停止	8
完全分散モード・システムでのサーバーの始動	8
完全分散モード・システムでのサーバーの停止	10
第 2 章 基本の コミュニティー・コンソール・タスク	13
コミュニティー・コンソールへのログイン	13
コミュニティー・コンソール内の移動	14
コミュニティー・コンソールのアイコン	14
コミュニティー・コンソールからのログオフ	16
第 3 章 ハブ管理者のタスク	17
パスワード・ポリシーの管理	17
データベース、データベース・ユーザー、およびパスワードの変更	18
イベント・コードの管理	19
文書検証エラー	19
イベント・コードの表示および編集	19
イベント・コード名の保存	20
アラート可能イベントの指定	20
レシーバーの管理	21
文書検証エラー	21
レシーバーの詳細の表示および編集	21
レシーバーの使用可能化および使用不可化	21
レシーバーの削除	21
HTTP 同期ターゲット・タイムアウトのローカライズ	22
インタラクションと文書定義の管理	22
XML 形式の管理	24
ラージ・ファイルのサポート	24
アクションの使用可能化または使用不可化	24
ハンドラーの管理	25
ハンドラーのインポート	25
ハンドラーの削除	26
ハンドラーでのコンテンツ・タイプ属性の構成	26
マップの管理	26

検証マップの更新	26
検証マップの使用箇所の表示	27
検証マップの削除	27
変換マップの管理	27
EDI FA マップの管理	28
EDI の管理	28
エンベロープ・プロファイル	28
エンベローパー	29
接続プロファイル	30
制御番号の初期化	31
現行の制御番号	32
システム構成データの管理	33
アラート・メール・サーバーの構成	34
システム・アクティビティの表示	34
イベント送達の管理	34
API 呼び出しの管理	35
文書マネージャー情報の管理	36
最大保持時間	36
ポーリング間隔ごとに処理する最大ファイル数	36
ebMS のサポート	37
CPA の WebSphere Partner Gateway へのアップロード	37
事前設定されない属性	38
ebMS でサポートされるアルゴリズム	39
Web サービスを検証するための構成の詳細	40
否認防止ロギングの使用	41
メッセージ・ストアの使用	41
第 4 章 アカウント管理タスク	43
パートナー・プロファイルの管理	43
パートナー・プロファイルの表示および編集	43
パートナーの検索	44
パートナーの削除	44
宛先構成の管理	44
宛先構成のために必要な情報	44
宛先の表示および編集	46
デフォルト宛先の表示および編集	48
宛先の使用箇所の表示	48
宛先の削除	48
トランスポートのアップロード	49
トランスポートの削除	49
トランスポートおよび宛先の再試行	49
順方向プロキシ・サポート	52
証明書の管理	53
certpath 関連プロパティの構成	54
デジタル証明書の表示および編集	56
デジタル証明書の使用不可化	56
B2B 属性値の変更	57
パートナー接続の管理	57
接続コンポーネント	57
接続の重複	58
接続の検索	58
接続構成の変更	61
除外リストの管理	62
除外リストへのパートナーの追加	63
除外リストの編集	63

第 5 章 パートナー・マイグレーションの管理	65
コマンド行からのマイグレーション・ユーティリティの使用	65
コマンド行からの呼び出し	68
コンソールでの XML エlementのマッピング	69
パートナー・マイグレーションのエクスポート	72
独自のインポート・データ作成時の考慮事項	73
インポート・ファイルの手動での検証	73
マイグレーション構成タイプの依存関係	74
エクスポート/インポートの順序	77
BCG インポートと DIS インポート	78
マイグレーションできない構成	78
マイグレーション・ユーティリティの制限事項	78
順方向プロキシ・マイグレーション	79
第 6 章 ログオン認証用の LDAP サポート	81
LDAP の使用	81
コンテナ管理認証メカニズムの使用可能化	81
J2EE セキュリティの使用可能化	81
ユーザー名およびグループ	82
LDAP 認証の使用の停止	82
サンプル LDAP 構成	83
スタンドアロン IBM Tivoli LDAP サーバー用の WebSphere Application Server の構成	83
WebSphere Partner Gateway Console を使用する LDAP ユーザーの指定	85
第 7 章 IPv6 のサポート	87
IPv4 での IPv6 のトンネリングの使用可能化	87
RHEL Linux 3	87
Windows 2003/XP	88
HP-UX 11i	88
IPv6 の使用可能化	88
属性の構成	89
第 8 章 宛先キューの管理	91
宛先キューの表示	91
キュー内の文書の表示	93
宛先キューからの文書の処理の停止	93
宛先の詳細の表示	94
宛先状況の変更	94
第 9 章 文書フローの分析	95
文書分析ツール	95
システム内の文書状態の表示	96
システム内の文書の表示	96
プロセスおよびイベント詳細の表示	97
文書ボリューム・レポート	97
文書ボリューム・レポートの作成	98
文書ボリューム・レポートのエクスポート	98
レポートの印刷	98
パートナー接続のテスト	99
ebMS パートナーの ping	99
Web サーバー結果コード	100
EDI レポート	103
EDI FA 期限経過の検索	103
EDI 拒否トランザクションの検索	105
FTP レポート	107
FTP 統計	107

FTP 接続	108
第 10 章 イベントおよび文書の表示	109
イベント・ビューアー	109
イベント・タイプ	110
イベントの検索	110
イベント詳細の表示	111
AS ビューアー	112
メッセージの検索	113
メッセージの詳細の表示	114
RosettaNet ビューアー	115
RosettaNet プロセスの検索	115
RosettaNet プロセスの詳細の表示	116
ロー文書の表示	117
文書ビューアー	118
文書の検索	118
文書の詳細、イベント、およびロー文書の表示	120
多数の文書の再送	122
EDI 文書の表示	122
文書検証エラー	124
データ検証エラーの表示	124
処理中の文書の停止	125
処理に失敗した文書、または正常に処理された文書の再送	126
ebMS ビューアー	127
ebMS プロセスの検索	128
ebMS プロセスの詳細の表示	128
ロー文書の表示	129
文書の状況の要求と表示	130
宛先キュー	130
第 11 章 実動トラフィックのシミュレーション	131
テストの準備	132
テスト・シナリオの設定	133
サンプル・シナリオ	133
要求と応答のアップロードおよび表示	136
文書タイプの開始と表示	136
オープン文書の検索	137
オープン文書への応答	137
オープン文書の削除	137
第 12 章 アーカイブ	139
ファイル・システム・ログとデータベース・ログのアーカイブおよびパージ	139
アプリケーション・ログ・ファイルのパージ	140
否認防止ファイルのアーカイブ	140
データベース・テーブルのパージ	144
RosettaNet および AS 状態エンジンのアーカイブ機能およびパージ機能	144
状態エンジン・テーブルからのデータの除去	145
データ保存期間	145
ログ・テーブルとサマリー・テーブル	145
データベース・テーブル区画の管理	148
第 13 章 ロギング機能およびトレース機能の使用	151
ロギングとトレースの違い	151
ログ・ファイル管理	152
トレース・ファイル管理	154
シンプル・モード・システムでのトレースの構成	154

分散モード・システムでのトレースの設定	155
両方のタイプのシステムに共通のトレース・タスク	156
ログ詳細レベルの設定	157
WebSphere Partner Gateway のトレース・メッセージの識別	158
EDI, XML, ROD サブコンポーネントのトレース	159
WebSphere Application Server のログ・メッセージとトレース・メッセージの解釈	159
WebSphere Application Server のイベント・タイプ	159
統合 FTP サーバーのロギング	160
第 14 章 FTP サーバー構成管理	163
FTP ユーザー管理	164
第 15 章 トラブルシューティング	165
暗号化された大容量 AS 文書の処理時間の長期化防止	167
暗号化された大容量文書の処理時間の長期化防止	167
メモリー不足エラーの回避	167
文書マネージャーのメモリー構成	168
文書マネージャー・ワークロード	168
文書構造	168
複数言語のデータの照合	168
DB2 エージェント用の十分な仮想メモリーの確保	169
現行構成のエクスポートによるサポート	170
DB2 SQL エラーの修正	170
SQLCODE -444 エラー	171
SQLCODE -289 エラー	171
SQLCODE -1225 エラー	171
BCGMAS データベースでの SQL 0964C (トランザクション・ログ・フル) エラー	172
IBM 保守ログを判読できない	172
WebSphere Application Server 通知メッセージ	172
レシーバー・タイムアウト設定の増加	173
データベース照会効率の最適化	173
イベント 210031 の解決	174
文書マネージャー・サーバーへのネットワーク接続が突然失われるか、サーバーが異常シャットダウンすると、文書が 2 回送信される	174
データ検証エラーが生成された 0A1	174
EDI レポートが最初の 1000 レコードのみをエクスポートする	175
サーバーの再始動後にコンソールが開始しない	175
FTPScripting レシーバーが StringIndexOutOfBoundsException を受信する	175
エラー・シナリオ	175
有効なシナリオ	175
レシーバーが構成ファイルの読み取りに失敗した	176
アラート通知を受信するユーザーの構成	176
ユーザー出口クラスの ClassNotFoundException の解決	176
データベースへのログ記録に失敗したイベントおよびビジネス文書の再処理	177
WebSphere Partner Gateway が javacore を生成した場合の WebSphere Application Server 内での JIT の無効	178
カスタム・トランスポート・タイプの定義	178
WebSphere Partner Gateway エラー BCG210031 および BCG240415 の解決	178
C: 以外のドライブ上での WebSphere Partner Gateway の作成	179
WebSphere Partner Gateway によるパートナー・トランザクションの処理の無効化	179
ブラウザー・エラー: 500 の修正	180
SSL トランザクションを実行するための CRL のダウンロード	180
WebSphere Process Server 内の JMS エクスポート/インポートでのデータ・バインド	181
SSL 接続のためのテスト・パートナー接続の修正	182
エラー BCGEDIEV0056 と BCG210001 の修正	182
ORA-00988 エラーの修正	183
固定ワークフロー・ハンドラーの Content-Types 属性の構成	183

BCG210013 エラーの修正	184
文書伝送パフォーマンスの低下を防止するためのバッファー・サイズの拡張	185
WebSphere Partner Gateway ハブ・インストーラー・ログ・エラー・メッセージ	185
bcgHubInstall.log に記録される DB パスワード必須エラー	185
取り直しチェックの使用および CRL DP サポートの使用	186
文書ボリューム・レポートからのコンソールに関する検索情報の戻り	186
ネイティブ・ライブラリーの読み込み	186
エラー TCPC0003E および CHF0029E の修正	187
CA 証明書の有効期限切れ	188
SystemOut.log 内の VCBaseException	189
2 GB より大きい文書のファイル・サイズのレポート	189
証明書を受信していないために SSL ハンドシェイクが失敗する	189
スレッド停止警告の修正	190
WebSphere MQ メッセージの修正	190
MQJMS2007 エラー	191
MQJMS2013 エラー	191
文書マネージャー例外の停止	191
java.security.InvalidKeyException: 正しくないキー・サイズまたはデフォルト・パラメーター	192
ヒープ・サイズの増加	192
AS トランザクションの MDN 状況「不明」	193
フィックス適用後にサーバーが始動に失敗する	193
WebSphere Application Server のショートカット・ポートの訂正	194
複数ルーターを使用している場合の重複文書配信の回避	194
1024 より大きい解像度のディスプレイでのタブ見出しのレンダリング	194
Oracle 9i リリース 2 の使用時に文書が処理されない	194
データベースが停止したときの文書処理	195
java.lang.NoClassDefFoundError および reprocessDbLoggingErrors.bat	195
キューとディスクがフルまたは使用不可能なときのリカバリー処理	195
付録 A. パフォーマンスの考慮事項	197
キュー・オーバーフローの管理	197
要約データの生成	197
付録 B. 障害発生時イベント	199
付録 C. コンポーネント固有のシステム属性	233
WebSphere Application Server ND 環境変数としての属性の構成	233
RosettaNet 属性値の編集	233
FTP 管理の編集	234
属性表	238
特記事項	261
プログラミング・インターフェース情報	263
商標	263
索引	265

本書について

本書では、企業間 (B2B) 取引コミュニティの要件にあわせて WebSphere Partner Gateway を保守する方法について説明します。本書は、「*WebSphere Partner Gateway E/A ハブ構成ガイド*」に記載されている必要なハブ構成タスクが既に実行されていることを前提としています。

対象読者

WebSphere Partner Gateway を保守する管理者。本書では、次の 2 種類の管理者を想定しています。

- ハブ管理者
- アカウント管理者

ハブ管理者は、コミュニティのスーパー管理ユーザーです。ハブ管理者は、パートナーの構成と接続を含む、ハブ・コミュニティ全体の構成および管理を担当します。アカウント管理者は、ハブ管理者機能のサブセットにアクセスすることができ、内部パートナーまたは外部パートナーの主要な管理ユーザーになっています。

注: 一部の機能には、外部パートナーおよび内部パートナーもアクセスできます。ハブ管理者およびアカウント管理者が使用できるのと同じ制御機能が共用されている場合でも、外部パートナーおよび内部パートナーが常にその制御機能を認識したり、アクセスできるわけではありません。

表記上の規則

本書では、次の表記規則を使用しています。

表 1. 表記上の規則

規則	説明
モノスペース・フォント	このフォントのテキストは、ユーザーが入力するテキスト、引数またはコマンド・オプションの値、例およびコード・サンプル、またはシステムが画面に表示する情報 (メッセージ・テキストまたはプロンプト) を示します。
太字	太字のテキストは、グラフィカル・ユーザー・インターフェース・コントロール (例えば、オンライン・ボタン名、メニュー名、またはメニュー・オプション)、およびテーブルやテキストの列見出しを示します。
イタリック	イタリックのテキストは、強調、資料名、新規用語および文書内で定義されている用語、変数名、または文字として使用されるアルファベット文字を示します。
イタリック・モノスペース・フォント	イタリック・モノスペース・フォントのテキストは、モノスペース・フォントのテキスト内の変数名を示します。

表 1. 表記上の規則 (続き)

規則	説明
<i>ProductDir</i>	<i>ProductDir</i> は、製品のインストール先のディレクトリーを表します。IBM WebSphere Partner Gateway のすべてのパス名は、IBM WebSphere Partner Gateway 製品がインストールされているシステムのインストール先の相対ディレクトリーです。
% <i>text</i> % および \$ <i>text</i>	パーセント記号 (%) に囲まれたテキストは、Windows ^(R) の <i>text</i> システム変数またはユーザー変数の値を示します。UNIX ^(R) 環境での同等の表記は、\$ <i>text</i> であり、UNIX の <i>text</i> 環境変数の値を示します。
下線付きのカラー・テキスト	下線付きのカラー・テキストは、相互参照を示します。テキストをクリックすると、参照先に移動します。
青色アウトラインのテキスト	(PDF ファイルのみ) テキストの周りのアウトラインは、相互参照を示します。アウトラインで囲まれたテキストをクリックすると、参照先に移動します。この規則は、この表内の PDF ファイルに関する「下線付きカラー・テキスト」規則に相当します。
『 』 (かぎ括弧)	(PDF ファイルのみ) かぎ括弧で本書の他のセクションへの相互参照を囲んでいます。
{ }	構文の記述行で、複数のオプションが中括弧で囲まれている場合、その中の 1 つのオプションのみを選択する必要があります。
[]	構文の記述行の場合、大括弧 [] で囲まれた部分は、オプション・パラメーターです。
< >	名前の変数エレメントは、不等号括弧で囲んでほかのエレメントと区別しています。例えば、 <server_name><connector_name>tmp.log のように表記されています。
/ または ¥	円記号 (¥) は、Windows インストールでのディレクトリー・パスの中で、分離文字として使用しています。UNIX をインストールしている場合は、スラッシュ (/) を円記号で置換します。

関連資料

この製品に付属する資料一式には、WebSphere Partner Gateway Enterprise Edition および Advanced Edition のインストール、構成、管理、使用に関する包括的な情報が含まれています。

この資料は、次のサイトからダウンロードするか、オンラインで直接閲覧できます。

<http://www.ibm.com/software/integration/wspartnergateway/library/>

注: 本書の発行後に公開されたテクニカル・サポートの技術情報や速報に、本書の対象製品に関する重要な情報が記載されている場合があります。これらは次の WebSphere Business Integration サポート Web サイトにあります。

<http://www.ibm.com/software/integration/wspartnergateway/support/>

関係するコンポーネント領域を選択して、「Technotes」および「Flashes」セクションを参照します。

このリリースの新機能

このセクションでは、IBM WebSphere Partner Gateway の新機能について説明します。

リリース 6.1.1 の新機能

WebSphere Partner Gateway 6.1.1 は、以下の新機能をサポートします。

- 以前のリリースでは、基本認証サポートは Web サービスのメッセージに対してのみ有効でした。この機能はすべてのプロトコルに拡張されました。基本認証には、セキュア HTTP 接続を使用 (つまり HTTP の代わりに HTTPS を使用) することをお勧めします。
- 符号化と暗号化を除き、圧縮と解凍のサポートが RNIF メッセージに提供されません。
- SOAP 本体と SOAP エンベロープを検証するサポートが提供されます。さらに SOAP エンベロープ解除も可能です。
- すべての HTTP レシーバーに関して最大同期タイムアウトと最大同期接続をローカル側で制御できます。
- FTP サーバーは WebSphere Partner Gateway と統合され、AS3 プロトコル、FTP スクリプト宛先、FTP スクリプト・レシーバー、および FTP / FTPS のレシーバーと宛先をサポートします。
- エラー文書を開始側のパートナー、受信側のパートナー、またはその両方に送信できます。エラー文書フローを WebSphere Partner Gateway コンソールで構成し、WebSphere Partner Gateway 形式または Web サービス形式で送信することができます。
- アーカイバーのパフォーマンスが向上しました。
- 複数の内部パートナーがサポートされています。
- 同時に複数のインバウンド文書またはアウトバウンド文書を再送できます。
- FIPS モードがサポートされています。製品を FIPS モードまたはデフォルト・モードで稼働するように構成できます。
- 宛先、検証マップ、文書定義、対話、およびユーザーに関して、削除機能と使用箇所の表示機能が提供されます。
- 大容量ファイルの圧縮サポートが AS2 文書と AS3 文書に提供されます。
- 暗号化と符号がサポートされています。
- マイグレーション用の構成タイプの依存関係に、イベント・コードとアラート通知が含まれるようになりました。パートナーのマイグレーション機能も拡張され、アラート可能なイベントのインポート/エクスポート定義がサポートされるようになりました。
- 複数の証明書をアップロードするサポートが提供されます。証明書のアップロードと構成を行う新規ウィザードがコンソールに含まれます。

- この製品は現在 AIX 6.1、RHEL 5 (32 ビットと 64 ビット)、SLES 10 (64 ビット)、および Windows Server 2003 (64 ビット) をサポートします。

リリース 6.1 の新機能

WebSphere Partner Gateway V6.1 は、以下の新機能をサポートします。

- 新規ビジネス・プロトコル: AS3、添付ファイル付きの SOAP、CIDX、および ebXML Message Service (ebMS) 2.0 のサポート
- カスタム XML 文書サポートの向上 (構成の向上、XPath 式のフル・サポート、検索フィールドのサポート、ユーザー定義属性のサポート、同期サポートなど)
- 新しい IPv6 のサポートおよび AS3 をサポートするための FTP スクリプト記述の拡張
- 文書定義属性の再編成
- ユーザー出口を使用するための新規文書定義属性
- 文書タイプ別および取引先・レベル別に構成可能な否認防止
- 文書ビューアーへのユーザー定義検索フィールドの追加
- MDN 戻り状況に基づく AS ビューアー・サポートの向上
- EDI 構成ウィザードと EIF インポート・ウィザード (従来は GA02 サポート・パックで提供)
- すべての関係者 (ソース・パートナーおよびターゲット・パートナー、またはすべての加入連絡先) に通知を送信するための新規アラート通知モード。これによりアラート構成が削減されます。
- hubadmin 管理者以外のユーザーに対する再送信許可およびゲートウェイ許可の使用可能化
- 複数のユーザーをハブ管理者にすることができる新規ユーザー・グループ
- ログオン認証での LDAP サポート
- WebSphere Partner Gateway コンポーネント用の WebSphere Application Server ロギングおよびトレースの使用
- WebSphere Partner Gateway Console によるプロパティ・ファイル構成データの集中的な配置および管理
- WebSphere MQ の前提条件製品としての廃止。内部通信には WebSphere Platform Messaging サポートが使用されるようになりました。
- パートナーまたは文書タイプ (あるいはその両方) に基づいた選択的アーカイブ
- 1 つの WebSphere Partner Gateway インスタンスから定義をエクスポートし、別のインスタンスにその定義をインポートすることによる、WebSphere Partner Gateway 構成のマイグレーション
- 簡略化された単一マシン (簡易モード) インストール・オプション
- 複数マシンのデプロイメントに WebSphere Application Server Network Deployment が使用されるようになったことによるクラスター化および一元的インフラストラクチャー管理
- WebSphere Process Server バージョン 6.1 をバックエンド統合システムとして使用するためのサポート

注:

1. XML ベースの管理 API は、バージョン 6.1 で非推奨になりました。

2. WebSphere Partner Gateway バージョン 6.0 とそれ以降のバージョンでは RC5 アルゴリズムをサポートしません。

第 1 章 WebSphere Partner Gateway コンポーネント・アプリケーションの管理

WebSphere Partner Gateway コンポーネント・アプリケーションの管理とは、WebSphere Partner Gateway コンポーネントをホストするアプリケーション・サーバーの始動、停止、および構成を意味します。一般に、これらの管理用タスクでは、インストール処理によって WebSphere Partner Gateway コンポーネントが配置される一連のアプリケーション・サーバーを制御および構成する WebSphere Application Server インターフェースを使用します。

WebSphere Partner Gateway コンポーネント・アプリケーションの管理方法は、製品のインストールにシンプル・トポロジーを使用したか分散トポロジーを使用したかによって異なります。本書では、シンプル・モードおよび分散モードという用語を使用して製品のインストール中に選択したトポロジーを示します。

注: シンプル・トポロジーおよび分散トポロジーの詳細については、「*WebSphere Partner Gateway インストール・ガイド*」を参照してください。

WebSphere Partner Gateway コンポーネントの管理を担当する管理者は、シンプル・モードと分散モードのどちらでインストールされたかがわかっている必要があります。

シンプル・モード・インストールでは、すべての WebSphere Partner Gateway コンポーネントが、server1 という 1 つのアプリケーション・サーバーを使用する同じコンピューターにインストールされます。シンプル・モードのシステムは WebSphere デプロイメント・マネージャーを使用しないため、WebSphere Partner Gateway コンポーネントを開始および停止するための手順は、(Network Deployment ではなく) WebSphere Application Server ベースを使用する場合と同様です。つまり、スクリプトを使用してサーバーの始動および停止を行います。これは、旧バージョンの WebSphere Partner Gateway と同じ方法です。

分散モード・インストールでは、WebSphere Application Server Network Deployment がそれぞれインストールされている 1 つ以上の物理コンピューターに WebSphere Partner Gateway コンポーネントがインストールされます。WebSphere Partner Gateway コンポーネントをホストするアプリケーション・サーバーは、デプロイメント・マネージャー・セルにすべて論理的に包含されます。デプロイメント・マネージャー・セルは、いずれかのコンピューターで稼働する WebSphere デプロイメント・マネージャー・アプリケーションを使用して管理されます。「*WebSphere Partner Gateway インストール・ガイド*」では、単純分散モードと完全分散モードの 2 種類の分散モードについて説明しています。しかし、管理作業でデプロイメント・マネージャーを使用するときにはこれらを区別する必要はありません。デプロイメント・マネージャー・コンソールでは分散 WebSphere Partner Gateway コンポーネント・アプリケーションのビューが提供されますが、インストール先に関する詳細は表示されません。

シンプル・モード・システムでの WebSphere Partner Gateway コンポーネントの管理

シンプル・モード・システムの場合は、すべての WebSphere Partner Gateway コンポーネントをホストするアプリケーション・サーバーを始動および停止する方法を知る必要があります。

WebSphere Partner Gateway コンポーネントを始動するには、次のいずれかのスクリプトを実行します。

- UNIX^(R)
`INSTALL DIR/bin/bcgStartServer.sh`
- Windows^(R)
`INSTALL DIR¥bin¥bcgStartServer.bat`

WebSphere Partner Gateway コンポーネントを停止するには、次のいずれかのスクリプトを実行します。

注: サーバー名を指定する必要はありません。シンプル・モードを使用する場合、サーバー名は常に `server1` です。

- UNIX^(R)
`INSTALL DIR/bin/bcgStopServer.sh`
- Windows^(R)
`INSTALL DIR¥bin¥bcgStopServer.bat`

分散モード・システムでの WebSphere Partner Gateway コンポーネントの管理

分散モード・システムの場合は、WebSphere デプロイメント・マネージャー・アプリケーションを使用してすべての WebSphere Partner Gateway アプリケーションを制御します。インストール中に、分散モード・システム内のコンピューターの 1 つをデプロイメント・マネージャーのホストに選択します。WebSphere Partner Gateway アプリケーションをインストールすると、それらがインストールされたアプリケーション・サーバーはデプロイメント・マネージャーの制御下に置かれます。システム管理者は、デプロイメント・マネージャーを使用して WebSphere Partner Gateway コンポーネントを管理します。これにより、コンポーネントが複数のコンピューターに存在する場合でも、すべてのコンポーネントに対する単一のアクセス・ポイントが提供されます。

デプロイメント・マネージャーを使用してアプリケーション・サーバーを管理する方法について詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment 製品の資料を参照してください。本書の目的上、デプロイメント・マネージャーの動作方法に関する用語と概念について説明します。

分散トポロジーの用語と概念

1. コンピューターをノードと呼びます。
2. システムは 1 つ以上のノードから構成されます。
3. WebSphere デプロイメント・マネージャーとは、システム内のいずれかのノードで稼働するアプリケーションのことです。

4. WebSphere Partner Gateway コンポーネント (コンソール、レシーバー、およびルーター) は、システム内のノード上のアプリケーション・サーバーにインストールされます。
5. 内部でのメッセージングをサポートするために、bcgmas という特別な WebSphere Partner Gateway アプリケーション・サーバーがあります。内部メッセージングは、WebSphere Partner Gateway コンポーネントが通信するために使用するメッセージ・キューを持つ WebSphere MQ の実装であると考えられます。
6. WebSphere Partner Gateway コンポーネントをホストする各ノードは、ノード・エージェントという特別なアプリケーションを持ちます。ノード・エージェントは、ノード上のアプリケーション・サーバーとデプロイメント・マネージャー・アプリケーションの間の接続を提供します。
7. ノードは結合されて、セルという論理グループを形成します。デプロイメント・マネージャーは、システムのアプリケーションを管理できるセルのビューを提供します。
8. セル内のノード上のアプリケーション・サーバーはクラスターに編成されます。クラスター内のすべてのアプリケーション・サーバーは、同じ WebSphere Partner Gateway コンポーネントを持ちます。
9. セルは中央 WebSphere デプロイメント・マネージャーによって管理されます。そのため、
 - セル内のすべてのサーバーをデプロイメント・マネージャーから始動、停止、および変更できます。
 - 内部メッセージングをデプロイメント・マネージャーから管理できます。
10. 分散モードには、単純分散モードと完全分散モードという 2 種類のモードがあります。
 - 単純分散モードでは、3 つの WebSphere Partner Gateway コンポーネントがすべて同じクラスターの一部になります。
 - 完全分散モードでは、通常、各コンポーネントを専用のクラスターに配置します。例えば、コンソールを bcgconsole クラスターに、レシーバーを bcgreceiver クラスターに、文書マネージャーを bcgdocmgr クラスターに配置するというようになります。さらに、WebSphere Partner Gateway コンポーネント間の内部通信で使用するメッセージング bcgmas クラスターがあります。

デプロイメント・マネージャー

デプロイメント・マネージャーの役割は、セル内のすべてのアプリケーション・サーバーに対する単一のビューを提供して、このビューによりこれらのサーバーを管理できるようにすることです。これを行うために、WebSphere Partner Gateway コンポーネントをホストする各ノード上でノード・エージェントを実行する必要があります。デプロイメント・マネージャーは、ノード・エージェントを使用してシステム内のアプリケーション・サーバーと対話します。分散モード・インストール中には、システム内のノードごとにノード・エージェントがインストールされ、デプロイメント・マネージャーと通信するように構成されます。

セルにあるアプリケーションを管理するには、デプロイメント・マネージャーの Web インターフェースを使用します。なんらかの理由でデプロイメント・マネージャーを使用できない場合は、コマンド行から手動で WebSphere Partner Gateway コンポーネントを開始または停止できますが、デプロイメント・マネージャーが再度使用可能になるまで他の管理タスクは実行できません。

実行される最も一般的な管理タスクは、WebSphere Partner Gateway コンポーネントの開始と停止です。デプロイメント・マネージャーでは、その他の管理タスク(サーバーのロギングおよびトレースの構成や、サーバーが使用するJava 仮想マシンの始動パラメーターの変更など)も実行できます。

デプロイメント・マネージャーを使用するには、以下のようにします。

1. WebSphere Partner Gateway アプリケーションをホストする各ノードと bcgmas サーバーがインストールされているノードでノード・エージェントを開始します。コンピューターでノード・エージェントを開始するには、WebSphere の startNode スクリプトを引数なしで実行します。このスクリプトは、<WebSphere のインストール・ディレクトリー>/wasND/Profiles/bcgprofile/bin ディレクトリーにあります。
2. デプロイメント・マネージャーを始動します。デプロイメント・マネージャーを開始するには、WebSphere Partner Gateway の bcgStartServer スクリプトを引数なしで実行します。このスクリプトは、<デプロイメント・マネージャーのインストール・ディレクトリー>%bin ディレクトリーにあります。
3. 適切なインターネット・ブラウザを開きます。
4. <http://<デプロイメント・マネージャーのコンピューター名または IP アドレス>:55090/ibm/console> にナビゲートして、WebSphere Integrated Solutions Console の「ログイン開始 (Welcome login)」画面を開き、ログインします。

注: ログインにユーザー ID は不要です。開始画面の左側には、このコンソールから実行できるタスクのリストが表示されます。

5. クラスター内のすべてのサーバーを始動または停止するには、以下のようにします。
 - 左側のペインで「**クラスター**」をクリックします。
 - 右側のペインで、開始または停止するクラスターを選択します。
 - 「**開始**」または「**停止**」をクリックします。

注: この操作には数分かかる場合があります。ビューを定期的に最新表示させて状況を確認してください。

6. 個別のサーバーを始動または停止するには、以下のようにします。
 - a. 左側のペインで「**アプリケーション・サーバー**」をクリックします。
 - b. 右側のペインで、開始または停止するノードのサーバーを選択します。

注: ノードは、システム内のコンピューターにデプロイされた WebSphere Application Server のインスタンスを表します。

- c. 「**開始**」または「**停止**」をクリックします。

コマンド行からのサーバーの始動および停止

デプロイメント・マネージャーを使用できない場合は、個人のコンピューターを使用して分散モード・システムの WebSphere Partner Gateway コンポーネントを手動で開始したり停止したりすることができます。ログ/トレース設定の変更などの一般的な管理タスクは、デプロイメント・マネージャーが使用可能でない限り実行できません。

コマンド行スクリプトを使用するには、以下のようにします。

1. WebSphere Partner Gateway アプリケーションをホストする各ノードと bcgmas サーバーがインストールされているノードでノード・エージェントを開始します。コンピューターでノード・エージェントを開始するには、WebSphere の `startNode` スクリプトを引数なしで使用します。このスクリプトは、<WebSphere のインストール・ディレクトリー>/wasND/Profiles/bcgprofile/bin ディレクトリーにあります。
2. サーバーをインストールしたマシンの <WebSphere のインストール・ディレクトリー>/wasND/Profiles/bcgprofile/bin ディレクトリーにある `startServer` スクリプトを実行することによって、各 WebSphere Partner Gateway サーバーを開始します。構文は以下のとおりです。

```
startServer <server_name>
```

ここで `server_name` は、bcgconsole、bcgreceiver、または bcgdocmgr です。

3. サーバーをインストールしたマシンの <WebSphere のインストール・ディレクトリー>/wasND/Profiles/bcgprofile/bin ディレクトリーにある `stopServer` スクリプトを実行することによって、各 WebSphere Partner Gateway サーバーを停止します。

構文は以下のとおりです。

```
stopServer <server_name>
```

ここで、`server_name` は、コンソール、レシーバー、またはルーターです。

コマンド行からの FTP 管理サーバーの始動と停止

FTP サーバーを WebSphere Partner Gateway コンソールから管理するには、FTP 管理サーバー稼働していることが必要です。コンピューター上の FTP 管理サーバーを開始するには、`startftpmgmtserver` スクリプトを使用します。このスクリプトは、WebSphere Partner Gateway のインストール・ディレクトリーの下 `/ftpsrvr/bin` にあります。このスクリプトには、コマンド行の引数が一切不要です。FTP 管理サーバーが始動すると、組み込まれた FTP サーバーも暗黙的に始動します。

コンピューター上の FTP 管理サーバーを停止するには、`stopftpmgmtserver` スクリプトを使用します。このスクリプトは、WPG のインストール・ディレクトリーの下 `/ftpsrvr/bin` にあります。このスクリプトには、コマンド行の引数が一切不要です。FTP 管理サーバーが停止すると、組み込まれた FTP サーバーも暗黙的に停止します。

注: これはすべてのデプロイメント方式に当てはまります。

単純分散モード・システムでのコンポーネントの開始および停止

単純分散モード・システムには、以下の 2 つのクラスターがあります。

bcgmasCluster

メッセージング・サーバーを持つメッセージング・クラスター。WebSphere Partner Gateway コンポーネントが動作するためには、少なくとも 1 つのメッセージング・サーバーが稼働している必要があります。

bcgserverCluster

bcgserver という名前のサーバーを持つ WebSphere Partner Gateway コンポーネント・クラスター。3 つのコンポーネント (コンソール、レシーバー、およびルーター) はすべて、bcgserver にインストールします。

ここに示した名前は、インストーラーによって使用されるデフォルトの名前です。デフォルトの名前が使用されていなかった場合は、インストーラーによって別の名前が選択されている可能性があります。その場合には、その別の名前を使用する必要があります。

単純分散モード・システムでのサーバーの始動

単純分散モード・システムでサーバーを始動する前に、WebSphere Partner Gateway コンポーネント・サーバーの始動に先立って、メッセージング・サーバーを始動します。

デプロイメント・マネージャーによるすべてのサーバーの始動

1. bcgmas サーバーおよび bcgserver をインストールした各ノードでノード・エージェントが稼働していることを確認します。
2. デプロイメント・マネージャー・コンソールを使用して、メッセージング・クラスター bcgmasCluster を選択し、「開始 (Start)」をクリックします。
3. bcgmasCluster が開始するまで待機した後、次の手順に進みます。
4. bcgserverCluster を選択して「開始」をクリックします。

各コンピューター上の個別のサーバーの始動

1. bcgmas サーバーおよび bcgserver をインストールした各ノードでノード・エージェントが稼働していることを確認します。
2. メッセージング bcgmas サーバーを選択して「開始 (Start)」をクリックします。
3. 上記の手順を繰り返して、他のすべての bcgmas サーバーを始動します。

注: 少なくとも 1 つのメッセージング・サーバーが始動するまで待機した後、WebSphere Partner Gateway コンポーネント・サーバーを開始してください。

4. bcgserver サーバーを選択して「開始 (Start)」をクリックします。
5. 手順 4 を繰り返して、必要なすべてのコンポーネント・サーバーを始動します。

デプロイメント・マネージャーを使用できない場合のサーバーの始動

デプロイメント・マネージャーを使用できない場合は、以下の手順を使用してメッセージングの bcgmas サーバーおよび bcgserver サーバーを手動で始動できます。

1. bcgmas サーバーおよび bcgserver をインストールした各ノードでノード・エージェントが稼働していることを確認します。
2. サーバーをインストールしたマシンの <WebSphere のインストール・ディレクトリー>/wasND/Profiles/bcgprofile/bin ディレクトリーにある startServer スクリプトを実行することによって、各 WebSphere Partner Gateway サーバーを始動します。

メッセージ・サーバー、コンソール、受信側、またはコンポーネント・サーバーのドキュメント・マネージャーを開始するための構文は以下のとおりです。

```
startServer <server_name>
```

ここで、*server_name* は、メッセージング・サーバーを始動する場合は bcgmas、およびコンポーネント・サーバーの場合は bcgserver です。

単純分散モード・システムでのサーバーの停止

単純分散モード・システムでサーバーを停止する場合は、WebSphere Partner Gateway コンポーネント・サーバーを停止してからメッセージング・サーバーを停止します。

デプロイメント・マネージャーによるすべてのサーバーの停止

1. bcgserverCluster を選択して「**停止 (Stop)**」をクリックします。クラスターが停止するまで待機した後、次の手順に進みます。
2. メッセージング・クラスター bcgmasCluster を選択して「**停止 (Stop)**」をクリックします。

各コンピューター上の個別のサーバーの停止

各クラスター内のサーバーを全部停止したいわけではない場合、サーバーがインストールされているコンピューターごとにサーバーを停止できます。各コンピューター上のサーバーを停止するには、以下の手順を実行します。

1. 停止する bcgserver サーバーを選択して「**停止 (Stop)**」をクリックします。
2. 停止対象のすべてのサーバーが停止するまで、前述の手順を繰り返します。サーバーが停止するまで待機した後、次の手順に進みます。
3. 停止する bcgmas サーバー・メッセージングを選択して、「**停止 (Stop)**」をクリックします。
4. すべてのサーバーが停止するまで、上記の手順を繰り返します。まだ実行中の bcgserver サーバーがある場合は、少なくとも 1 つの bcgmas サーバーを実行したままにしておきます。

デプロイメント・マネージャーを使用できない場合のサーバーの停止

最初に bcgserver サーバーを停止してから、メッセージング bcgmas サーバーを停止します。

1. bcgmas サーバーおよび bcgserver をインストールした各ノードでノード・エージェントが稼働していることを確認します。

2. サーバーをインストールしたマシンの <WebSphere のインストール・ディレクトリー>/wasND/Profiles/bcgprofile/bin ディレクトリーにある stopServer スクリプトを実行することによって、各 WebSphere Partner Gateway サーバーを停止します。

メッセージング・サーバー、またはコンポーネント・サーバーの bcgserver を停止するための構文は、以下のとおりです。

```
stopServer <server_name>
```

ここで、*server_name* は、メッセージング・サーバーを停止する場合は bcgmas、コンポーネント・サーバーの場合は bcgserver です。

完全分散モード・システムでのコンポーネントの開始および停止

まず始めに、完全分散モード・システムには 4 つのクラスターがあることを知る必要があります。それらは以下のとおりです。

- bcgmasCluster

bcgmas という名前のメッセージング・サーバーを持つメッセージング・クラスター。WebSphere Partner Gateway コンポーネントが動作するためには、少なくとも 1 つのメッセージング・サーバーが稼働している必要があります。

- bcgconsoleCluster

bcgconsole という名前のサーバーを持つ WebSphere Partner Gateway コンソール・コンポーネント・クラスター。

- bcgreceiverCluster

bcgreceiver という名前のサーバーを持つ WebSphere Partner Gateway レシーバー・コンポーネント・クラスター。

- bcgdocmgrCluster

bcgdocmgr という名前のサーバーを持つ WebSphere Partner Gateway 文書マネージャー・コンポーネント・クラスター。

ここに示した名前はインストール・デフォルトの名前です。インストール時に、インストーラーによって別の名前が選択されている可能性があります。その場合にはデフォルトの名前ではなく、別の名前を使用する必要があります。

完全分散モード・システムでのサーバーの始動

完全分散モード・システムでサーバーを始動するための始動順序は以下のとおりです。

1. メッセージング・サーバー
2. Partner Gateway 文書マネージャー・サーバー
3. Partner Gateway レシーバー・サーバー (またはコンソール・サーバー)
4. Partner Gateway コンソール・サーバー (またはレシーバー・サーバー)

注: レシーバー・サーバーとコンソール・サーバーはどちらの順序でも始動できます。

デプロイメント・マネージャーによるすべてのサーバーの始動

1. メッセージング・クラスター `bcgmasCluster` を選択して「開始 (Start)」をクリックします。

注: クラスターが開始するまで待機した後、WebSphere Partner Gateway コンポーネント・クラスターを開始します。

2. `bcgdocmgrCluster` を選択して「開始 (Start)」をクリックします。
3. `bcgreceiverCluster` (または `bcgconsoleCluster`) を選択して「開始 (Start)」をクリックします。
4. `bcgconsoleCluster` (または `bcgreceiverCluster`) を選択して「開始 (Start)」をクリックします。

各コンピューター上の個別のサーバーの始動

1. 始動するメッセージング `bcgmas` サーバーを選択して「開始 (Start)」をクリックします。

注: 少なくとも 1 つのサーバーが始動するまで待機した後、WebSphere Partner Gateway コンポーネント・サーバーを始動してください。

2. すべてのサーバーが始動するまで、上記の手順を繰り返します。
3. 始動する `bcgdocmgr` サーバーを選択して「開始 (Start)」をクリックします。
4. すべてのサーバーが始動するまで、上記の手順を繰り返します。
5. 始動する `bcgreceiver` (または `bcgconsole`) サーバーを選択して「開始 (Start)」をクリックします。
6. すべてのサーバーが始動するまで、上記の手順を繰り返します。
7. 始動する `bcgconsole` (または `bcgreceiver`) サーバーを選択して「開始 (Start)」をクリックします。
8. すべてのサーバーが始動するまで、上記の手順を繰り返します。

デプロイメント・マネージャーを使用できない場合のサーバーの始動

注: サーバーは、前のセクションで示した順序で始動します。

1. `bcgmas` サーバーおよび WebSphere Partner Gateway コンポーネント・サーバーをインストールした各ノードでノード・エージェントが稼働していることを確認します。
2. サーバーをインストールしたマシンの `<WebSphere のインストール・ディレクトリ>/wasND/Profiles/bcgprofile/bin` ディレクトリーにある `startServer` スクリプトを実行することによって、各 WebSphere Partner Gateway サーバーを始動します。構文は以下のとおりです。

```
startServer <server name>
```

ここで、*server name* は、メッセージング・サーバーを始動する場合は `bcgmas`、コンポーネント・サーバーの場合は `bcgconsole`、`bcgreceiver`、および `bcgdocmgr` です。

完全分散モード・システムでのサーバーの停止

シャットダウンの順序は始動の順序と逆です。以下のようになります。

1. WebSphere Partner Gateway コンソール (またはレシーバー) サーバー。
2. WebSphere Partner Gateway レシーバー (またはコンソール) サーバー。

注: レシーバー・サーバーとコンソール・サーバーはどちらの順序でも停止できます。

3. WebSphere Partner Gateway 文書マネージャー・サーバー。
4. メッセージング・サーバー。

デプロイメント・マネージャーによるすべてのサーバーの停止

1. bcgconsoleCluster (または bcgreceiverCluster) を選択して「**停止 (Stop)**」をクリックします。
2. bcgreceiverCluster (または bcgconsoleCluster) を選択して「**停止 (Stop)**」をクリックします。
3. bcgdocmgrCluster を選択して「**停止 (Stop)**」をクリックします。

注: クラスタが停止するまで待機した後、メッセージング・クラスタを停止します。

4. メッセージング・クラスタ bcgmasCluster を選択して「**停止 (Stop)**」をクリックします。

各コンピューター上の個別のサーバーの同時停止

各クラスタ内のサーバーを全部停止したいわけではない場合、サーバーがインストールされているコンピューターごとにサーバーを停止できます。サーバーがインストールされているサーバーを停止するには、以下の手順を実行します。

1. 停止する bcgconsole (または bcgreceiver) サーバーを選択して「**停止 (Stop)**」をクリックします。
2. 停止対象のすべてのサーバーが停止するまで、前述の手順を繰り返します。
3. 停止する bcgreceiver (または bcgconsole) サーバーを選択して「**停止 (Stop)**」をクリックします。
4. 停止対象のすべてのサーバーが停止するまで、前述の手順を繰り返します。
5. 停止する bcgdocmgr サーバーを選択して「**停止 (Stop)**」をクリックします。
6. 停止対象のすべてのサーバーが停止するまで、前述の手順を繰り返します。
7. サーバーが停止するまで待機した後、メッセージング・サーバーを停止します。
8. 停止する bcgmas サーバー・メッセージングを選択して、「**停止 (Stop)**」をクリックします。
9. すべてのサーバーが停止するまで、上記の手順を繰り返します。

注: まだ稼働中の WebSphere Partner Gateway コンポーネント・サーバーがある場合は、少なくとも 1 つの bcgmas サーバーを稼働したままにしておきます。

デプロイメント・マネージャーを使用できない場合のサーバーの停止

必ず WebSphere Partner Gateway サーバーを停止してからメッセージング bcgmas サーバーを停止してください。

1. bcgmas サーバーおよび WebSphere Partner Gateway コンポーネント・サーバーをインストールした各ノードでノード・エージェントが稼働していることを確認します。
2. サーバーをインストールしたマシンの *<WebSphere のインストール・ディレクトリ>/wasND/Profiles/bcgprofile/bin* ディレクトリーにある `stopServer` スクリプトを実行することによって、各 WebSphere Partner Gateway サーバーを停止します。構文は以下のとおりです。

```
stopServer <server_name>
```

ここで、*server_name* は、メッセージング・サーバーを停止する場合は bcgmas、コンポーネント・サーバーの場合は bcgconsole、bcgreceiver、および bcgdocmgr です。

第 2 章 基本の コミュニティー・コンソール・タスク

このガイドで説明するタスクは、WebSphere Partner Gateway コミュニティー・コンソールを使用して実行されます。コミュニティー・コンソールは、Web ブラウザーを介してアクセスできるセキュア・アクセス・ポイントを提供する Web アプリケーションです。

この章で説明するトピックは次のとおりです。

- 13 ページの『コミュニティー・コンソールへのログイン』
- 14 ページの『コミュニティー・コンソール内の移動』
- 14 ページの『コミュニティー・コンソールのアイコン』
- 16 ページの『コミュニティー・コンソールからのログオフ』

コミュニティー・コンソールへのログイン

コミュニティー・コンソールには、次のいずれかの Web ブラウザーが必要です。

- Microsoft^(R) Internet Explorer バージョン 6.0、SP1 以降
- Mozilla バージョン 1.7 以降
- Firefox バージョン 1.5 以降

使用しているブラウザについて、利用できる最新の Service Pack とアップデートを必ずインストールしてください。

注: コミュニティー・コンソールでは、セッション情報を保守するために Cookie サポートをオンにする必要があります。Cookie には個人情報には保管されず、ブラウザがクローズすると有効期限が切れます。

表示を最適にするため、最小画面解像度は 1024 x 768 に設定してください。

コミュニティー・コンソールにログインするには、次の手順を実行します。

1. Web ブラウザーのロケーション・フィールドに次の URL を入力します。

`http://hostname.domain:58080/console (unsecure)`

`https://hostname.domain:58443/console (secure)`

hostname および *domain* は、コミュニティー・コンソール・コンポーネントをホスティングするコンピューターの名前およびロケーションです。

2. コミュニティー・コンソール・ログイン・ウィンドウの「**ユーザー名**」フィールドに、適切な名前を入力します。
 - ハブ管理者の場合、デフォルトのユーザー名は `hubadmin` です。
 - オペレーター管理者の場合、デフォルトのユーザー名は `Admin` です。
3. 「**パスワード**」フィールドに、サイトのパスワードを入力します。デフォルトのパスワードは `Pa55word` です。

4. 「会社ログイン名」フィールドに、管理者ログイン名を入力します。ハブ管理者およびオペレーター管理者ユーザーのデフォルトのログイン名は、いずれも Operator です。

注: ユーザー ID とパスワードを LDAP (Lightweight Directory Access Protocol) から集中管理する場合、「会社ログイン名」フィールドは表示されません。LDAP の詳細については、81 ページの『第 6 章 ログオン認証用の LDAP サポート』を参照してください。

5. 「ログイン」をクリックします。
6. 初めてログインした場合は、新規パスワードの作成を要求されます。新規パスワードを入力し、「検証」フィールドにパスワードを再度入力します。
7. 「保存」をクリックします。

コミュニティ・コンソール内の移動

コミュニティ・コンソールは、WebSphere Partner Gateway の構成に使用するさまざまなメニューで構成されています。

各ウィンドウの右上隅に次の 2 つのリンクが表示されます。

- ログアウト

現在の WebSphere Partner Gateway セッションをログオフします。アプリケーションは、引き続きサーバーで実行されます。再度ログインするには、13 ページの『コミュニティ・コンソールへのログイン』の手順を実行します。

- ヘルプ

WebSphere Partner Gateway のオンライン・ヘルプを開きます。

注: ヘルプをクリックしてもヘルプ・ウィンドウが表示されない場合は、ポップアップ抑止機能を実行していないことを確認してください。

コミュニティ・コンソールのアイコン

表 2 に、コミュニティ・コンソールのウィンドウ全体で使用されるアイコンの一覧を示します。

表 2. コミュニティ・コンソールのアイコン

アイコン	アイコン名
	縮小
	コピー
	格納データ
	アクティブ化
	削除
	宛先使用不可

表2. コミュニティー・コンソールのアイコン (続き)

アイコン	アイコン名
	ロー文書の表示
	進行中の文書
	文書処理に失敗
	文書処理に成功
	マップのダウンロード
	編集
	属性値の編集
	編集オフ
	RosettaNet 属性値の編集
	展開
	情報のエクスポート
	レポートのエクスポート
	検索条件を非表示
	変更
	格納データなし
	カレンダーを開く
	順不同 (Out of sequence)
	一時停止
	印刷
	必要入力
	役割、クリックして役割を作成
	開始
	停止を実行依頼しました
	同期データ・フロー。非同期のトランザクションの場合、アイコンは表示されません。
	マップのアップロード

表2. コミュニティー・コンソールのアイコン (続き)

アイコン	アイコン名
	重複する文書イベントが存在する場合、以前に送信された元文書を表示します。
	詳細の表示
	グループのメンバーシップの表示
Help	ヘルプ・システムの表示 注: IBM サポート言語ロケールのいずれかを使用してコンソールを使用すると、「ヘルプ」アイコンが翻訳されます。
	アクセス権の表示
	文書定義の属性セットアップの表示
	ユーザーの表示
	検証エラーの表示
	使用箇所

コミュニティ・コンソールからのログオフ

コミュニティ・コンソールの使用を終了したら、コンソール・ウィンドウの右上にある「ログアウト」をクリックします。ログアウトが実行され、コンソールのログイン・ウィンドウが表示されます。

第 3 章 ハブ管理者のタスク

この章では、ハブ管理者のみが実行できるタスクについて説明します。タスクの内容は次のとおりです。

- 『パスワード・ポリシーの管理』
- 18 ページの『データベース、データベース・ユーザー、およびパスワードの変更』
- 19 ページの『イベント・コードの管理』
- 21 ページの『レシーバーの管理』
- 22 ページの『インタラクションと文書定義の管理』
- 24 ページの『XML 形式の管理』
- 24 ページの『アクションの使用可能化または使用不可化』
- 25 ページの『ハンドラーの管理』
- 26 ページの『マップの管理』
- 28 ページの『EDI の管理』
- 34 ページの『アラート・メール・サーバーの構成』
- 34 ページの『システム・アクティビティの表示』
- 34 ページの『イベント送達の管理』
- 35 ページの『API 呼び出しの管理』
- 37 ページの『ebMS のサポート』
- 40 ページの『Web サービスを検証するための構成の詳細』
- 41 ページの『否認防止ロギングの使用』
- 41 ページの『メッセージ・ストアの使用』

パスワード・ポリシーの管理

システム設定されたデフォルト値以外の値を使用したい場合は、ハブ・コミュニティーのパスワード・ポリシーをセットアップします。パスワード・ポリシーは、コミュニティー・コンソールにログインするすべてのユーザーに適用されます。

パスワード・ポリシーの以下のエレメントを変更することができます。

- 「最小の長さ」 - パートナーがパスワードに最低限使用しなければならない文字数を表します。デフォルトは 8 文字です。
- 「有効期限」 - パスワードが期限切れになるまでの日数を表します。デフォルトは 30 日です。
- 「固有性」 - ヒストリー・ファイルに保持されるパスワードの数を指定します。パートナーは、ヒストリー・ファイル内にある旧パスワードを使用できません。デフォルトのパスワード数は 10 です。
- 「特殊文字」 - これを選択すると、以下のタイプの特殊文字のうち、少なくとも 3 つがパスワードに含まれていなければならないことを示します。
 - 大文字

- 小文字
- 数字
- 特殊文字

パスワードが英字 (ASCII) で構成される場合は、この設定をすることで、より厳しいセキュリティ要件を設けることができます。デフォルト設定はオフです。パスワードが各国文字で構成される場合は、「特殊文字」をオフにしておくことをお勧めします。英語以外の言語の文字セットには、4 つの文字タイプのうち必要となる 3 つが含まれていない場合もあります。

システムでサポートされている特殊文字は、「#」、「@」、「\$」、「&」、「+」です。

- 「名前との差異を検査」 - これを選択すると、ユーザーのログイン名や氏名から推測されやすいパスワードを使用できなくなります。このフィールドは、デフォルトで選択されています。

デフォルト値を変更するには、以下のステップを実行します。

1. 「**ハブ管理**」 > 「**コンソール構成**」 > 「**パスワード・ポリシー**」の順にクリックします。「パスワード・ポリシー」ページが表示されます。
2. 「**編集**」アイコンをクリックします。
3. 任意のデフォルト値を、パスワード・ポリシーに使用したい値に変更します。
4. 「**保存**」をクリックします。

データベース、データベース・ユーザー、およびパスワードの変更

インストール後、WebSphere Partner Gateway コンポーネントが使用するデータベースを変更できます。データベース・ユーザーの名前やデータベース・ユーザーのパスワードも変更できます。

データベースの接続プロパティを変更するには、データ・ソースを変更します。データ・ソースは、コンポーネント・アプリケーションで使用するために、WebSphere Application Server 内に構成されます。データ・ソースを変更する場合は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用します。

コンポーネントが使用するデータベース接続を構成するには、以下の手順を実行します。

1. ブラウザーを使用して管理コンソールを表示します。
2. コンソールの左側のペインで、「**リソース**」 > 「**データ・ソース**」をクリックします。
3. 変更するデータ・ソースを見つけます。選択可能なデータ・ソースの JNDI 名を参照し、ノード名およびサーバー名に基づいて、変更するデータ・ソースを選択します。
4. データ・ソース名をクリックし、データベース名、ホスト、およびポート番号を表示して変更します。
5. 「**JAAS-J2C 認証データ**」をクリックし、別名を選択して、データベースへの接続に使用するユーザー ID およびパスワードを表示して変更します。

6. 「OK」をクリックして変更を行い、「保存」をクリックして変更内容を保存します。

イベント・コードの管理

WebSphere Partner Gateway 内でイベントが発生すると、イベント・コードが生成されます。「イベント・コード」ウィンドウを使用すると、生成されたイベント・コードを参照して、ほかのアプリケーションにエクスポートできます。また、イベント・コードのアラート状況を設定することができます。

文書検証エラー

文書検証エラーを表示するには、「文書ビューアー」タブの「文書の詳細」ページにある「文書の表示」アイコンをクリックします。文書検証エラーについては詳しくは、124 ページの『文書検証エラー』を参照してください。

イベント・コードの表示および編集

次の手順では、イベント・コードの詳細を表示する方法について説明します。イベント・コードの可視性およびアラート状況を編集したり、イベント・コードの重大度を表示できます。

1. 「ハブ管理」>「ハブ構成」>「イベント・コード」の順をクリックします。
2. 「イベント・コード」ウィンドウで、詳細を表示するイベント・コードの横にある「詳細の表示」アイコンをクリックします。
3. 「イベント・コードの詳細」ウィンドウで、20 ページの表 3 に示すパラメーターを設定します。

表3. イベント・コードの詳細

パラメーター	説明
イベント・コード	このイベント・コードに固有の番号を示す読み取り専用フィールド。
イベント名	イベントを起動したアクションに関連したイベントを識別するために使用する名前を示す読み取り専用フィールド。
内部での記述 可視性	イベントを起動した環境を説明する読み取り専用フィールド。 イベント・コードを表示できるユーザー（コミュニティー・オペレーター、コミュニティー・マネージャー、パートナー、またはこの3つの任意の組み合わせ）を選択します。
重大度	このイベント・コードに関連した重大度を示す読み取り専用フィールド。次に示すように、「デバッグ」（最低の重大度）から「重大」（最高の重大度）までがあります。
	<p>デバッグ</p> <p>下位のシステム操作およびサポート。可視性およびデバッグ情報の使用は、ユーザーのアクセス権レベルによって異なります。</p> <p>情報</p> <p>正常終了したシステム操作。これらのイベントは、処理中の文書の状況も示します。通知イベントにはユーザー処置は必要ありません。</p> <p>警告</p> <p>文書処理やシステム機能において、操作を継続できる重大ではない異常。</p> <p>エラー</p> <p>文書処理において、プロセス終了の原因となる異常。</p> <p>重大</p> <p>システム障害によって終了するサービス。重大イベントが生成されると、サポート要員による操作が必要になります。</p>
アラート可能 (Alertable)	選択すると、「アラート」ウィンドウの「定義」タブにあるリストにイベント名が表示されます。これにより、このイベントに対してアラートが設定されます。

イベント・コード名の保存

イベント・リストにあるイベント名のみを保存する（「**名前**の**エクスポート**」）か、またはイベント・リストにある内部の記述をテキスト形式で保存する（「**リスト**の**エクスポート**」）かを選択できます。次のステップを実行します。

1. 「**ハブ管理**」>「**ハブ構成**」>「**イベント・コード**」の順にクリックします。
2. 「**イベント・コード**」ウィンドウで、「**名前**の**エクスポート**」をクリックしてイベントのリストをイベント名のみで保存します。または、「**リスト**の**エクスポート**」をクリックして、イベントのリストを内部記述のみで保存します。

アラート可能イベントの指定

WebSphere Partner Gateway 内でイベントが発生すると、イベント・コードが生成されます。「**イベント・コード**」ページでは、イベント・コードのアラート状況を設定することができます。イベントがアラート可能として設定されると、「**アラート**」ページの「**イベント名**」リストにそのイベントが表示されます。この後、イベントのアラートを設定することができます。

アラート可能にするイベントを指定するには、以下のステップを実行します。

1. 「ハブ管理」>「ハブ構成」>「イベント・コード」の順にクリックします。

「イベント・コード」ページが表示されます。

2. アラート可能にするイベントごとに、以下のステップを実行します。

- イベント・コードの横にある「詳細の表示」アイコンをクリックします。

「イベント・コードの詳細」ページが表示されます。

- 「アラート可能」を選択します。

レシーバーの管理

「レシーバー・リスト」ウィンドウを使用すると、既存のレシーバーの詳細内容の表示と編集、およびレシーバーの使用可能、使用不可の設定、または削除を行うことができます。

文書検証エラー

文書検証エラーを表示するには、「文書ビューアー」タブの「文書の詳細」ページにある「文書の表示」アイコンをクリックします。文書検証エラーについて詳しくは、124 ページの『文書検証エラー』を参照してください。

レシーバーの詳細の表示および編集

次の手順では、レシーバーの詳細を表示する方法について説明します。この手順の一部として、レシーバーのパラメーターを編集できます。

1. 「ハブ管理」>「ハブ構成」>「レシーバー」の順にクリックします。
2. 「レシーバー・リスト」ウィンドウで、詳細を表示するレシーバーの横にある「詳細の表示」アイコンをクリックします。「レシーバーの詳細」ウィンドウがコンソールに表示されます。
3. 「レシーバーの詳細」ウィンドウで、「編集」アイコンをクリックします。
4. 必要に応じてパラメーターを編集します。
5. 「保存」をクリックします。

レシーバーの使用可能化および使用不可化

「レシーバー・リスト」ウィンドウからレシーバーを使用可能または使用不可にするには、「状況」列で「有効」または「無効」をクリックします。これを実行するには、次のステップを実行します。

1. 「ハブ管理」>「ハブ構成」>「レシーバー」の順にクリックします。
2. 「レシーバー・リスト」ウィンドウで、「編集」アイコンをクリックしてレシーバーを編集します。
3. 状況を変更するレシーバーの横にある「有効」または「無効」をクリックします。

レシーバーの削除

使用しないレシーバーを削除することができます。削除は即時実行されます。このステップの確認を求める警告メッセージは表示されません。

1. 「ハブ管理」>「ハブ構成」>「レシーバー」の順にクリックします。

注: 次の手順では、警告メッセージが表示されることなく、レシーバーは即時に削除されます。このレシーバーが削除の対象であることを確認してください。

2. 「レシーバー・リスト」ウィンドウで、削除するレシーバーの横にある「削除」アイコンをクリックします。

HTTP 同期ターゲット・タイムアウトのローカライズ

WebSphere Partner Gateway では、すべての HTTP レシーバーに関して、ローカライズされた同期タイムアウト値と同期接続値を持つことができます。同期接続値は、コンテナ許可された TCP 接続限度を超えることはできません。レシーバーごとの最大同期接続は、単独でコンテナ限度のスーパー・セット内で制御されます。Web コンテナ (WebSphere Application Server) は、HTTP 接続数を許可または制限する管理アプリケーションによって、個別に構成されます。「最大同期タイムアウト」値と「最大同期接続」値を変更するには、次の手順を行います。

1. 「レシーバー作成」ページ > 「ハブ管理」> 「レシーバー」にナビゲートします。
2. HTTP レシーバーに対応する「編集」アイコンをクリックします。
3. 「最大同期タイムアウト」と「最大同期接続」を変更します。

注: 「最大同期タイムアウト」には負の値を入力できません。「最大同期接続」にゼロの値を入力すると、すべてのレシーバーに対する「最大同期接続」の制限が外されます。

インタラクションと文書定義の管理

2 つの文書定義間でのインタラクションを使用可能にするか、使用不可能にするか、または編集するには、次の手順を行います。

1. 「ハブ管理」>「ハブ構成」>「文書定義」の順にクリックします。
2. 「インタラクションの管理」をクリックします。
3. WebSphere Partner Gateway が使用可能、使用不可能にする、または編集するインタラクションの検索に使用する検索条件を入力します。
4. 「検索」をクリックします。検索条件に一致するすべてのインタラクションが検出されます。
5. インタラクションを使用可能にするには、使用可能にしたいインタラクションの横にある「アクティブ化」アイコンをクリックします。確認を求める確認メッセージが表示されたら、「OK」をクリックします。WebSphere Partner Gateway により、「アクティブ化」アイコンが「非アクティブ化」アイコンに置き換えられ、インタラクションが使用可能になったことが示されます。
6. インタラクションを使用可能にするには、使用可能にしたいインタラクションの横にある「無効なデフォルト定義 (Disabled Default Definition)」アイコンをクリックします。確認を求める確認メッセージが表示されたら、「OK」をクリックします。WebSphere Partner Gateway により、「削除」アイコンが「有効なデフォルト定義 (Enabled Default Definition)」アイコンに置き換えられ、インタラクションが使用可能になったことが示されます。

7. インタラクシオンを編集するには、インタラクシオンの横にある「編集」アイコンをクリックします。編集ウィンドウで、インタラクシオンを編集して、「保存」をクリックします。

インタラクシオン全体が使用されている箇所を表示するには、次の手順に従います。

1. 「ハブ管理」>「ハブ構成」>「文書定義」の順にクリックします。
2. 「インタラクシオンの管理」をクリックします。
3. 表示したいインタラクシオンを検索するために WebSphere Partner Gateway が使用する検索条件を入力します。
4. 「検索」をクリックします。検索条件に一致するすべてのインタラクシオンが検出されます。
5. 「使用箇所」アイコンをクリックします。これにより、このインタラクシオンが使用されている箇所のすべての接続がリストされます。各ページには、この特定のインタラクシオンに関する接続情報が、最大で 10 個表示されます。

インタラクシオンを削除するには、次の手順に従います。

1. 「ハブ管理」>「ハブ構成」>「文書定義」の順にクリックします。
2. 「インタラクシオンの管理」をクリックします。
3. 削除するインタラクシオンの検索に WebSphere Partner Gateway が使用する検索条件を入力します。
4. 「検索」をクリックします。検索条件に一致するすべてのインタラクシオンが検出されます。
5. 「削除」アイコンをクリックします。そのインタラクシオンがチャンネルのいずれかにより使用されているときは、警告メッセージが表示されます。
6. そのインタラクシオンに対応するチャンネルと共に削除するには、「OK」をクリックします。

すべての文書定義が使用されている箇所を検索するには、次の手順を行います。

「使用箇所」アイコンを使うと、選択した文書定義が使用されている箇所のすべての情報を表示することができます。

1. 「ハブ管理」>「ハブ構成」>「文書定義」の順にクリックします。
2. 表示したい文書定義の「使用箇所」アイコンをクリックします。これにより、この文書定義が使用されている箇所のすべてのインタラクシオンと B2B 機能がリストされます。

文書定義を削除するには、次の手順に従います。

1. 「ハブ管理」>「ハブ構成」>「文書定義」の順にクリックします。
2. 削除したい文書定義に対する「削除」アイコンをクリックします。その文書定義がインタラクシオンまたは B2B 機能のいずれかで使用されている場合のみ、警告メッセージが表示されます。
3. 警告メッセージ・ウィンドウの「OK」をクリックします。この操作により、対応チャンネル、インタラクシオン、全パートナーの B2B 機能、およびその文書定義の関連属性のすべてが削除されます。
4. 削除を中止するには、警告メッセージ・ウィンドウの「キャンセル」をクリックします。

XML 形式の管理

「XML 形式の管理」ウィンドウを使用して、システム内の XML 形式にアクセスすることができます。XML 形式は、XML 文書ファミリーを使用して編成されます。コンソールを使用して、XML 文書ファミリーの追加、削除、および変更が可能です。ファミリーごとに、ファミリー内の XML 形式を追加、削除、および変更できます。また、ファミリー内の形式をコピーしたり、形式をファミリー間で移動させたりすることもできます。

XML 文書ファミリーおよび形式の作成について詳しくは、「*WebSphere Partner Gateway E/A ハブ構成ガイド*」を参照してください。

ラージ・ファイルのサポート

WebSphere Partner Gateway では、形式で XPath バージョン 1.0 の式を使用できます。XPath サポートの処理能力により、完全 XPath XML 形式で使用できるファイルのサイズが制限されます。ラージ・ファイルを処理できるようにするには、文書ファミリーを定義するときにラージ・ファイル処理オプションを設定してください。

ラージ・ファイル・オプションのリストには以下のオプションがあります。

- なし
- ラージ・ファイル・プロセッサの使用
- ネーム・スペース認識ラージ・ファイル・プロセッサの使用

全 XPath プロセッサを使用して処理できない大規模な文書の XML 形式を記述する場合には、ラージ・ファイル・オプションを選択します。ネーム・スペース認識オプションは、エレメント・パスが文書に出現する場合に、エレメント・パスがネーム・スペース・プレフィックスを含むことを指定します。

注: ファミリーの作成後にこのオプションを変更することはできません。これは、ファミリー・タイプを変更すると誤りになる XML 形式が文書ファミリーに含まれていることがあるためです。

ラージ・ファイル処理オプションが指定されたファミリー内の形式の XPath 処理能力は制限されます。文書ファミリーにラージ・ファイル処理オプションを指定する場合は、ファミリー内に格納されている XML 形式で使用する式に以下の制限が適用されます。

1. 文書のルートで開始する単一エレメント・パスのみを使用できます。
2. ネーム・スペース・プレフィックスが文書に出現する場合でも、エレメント・パスにネーム・スペース・プレフィックスを含むことはできません。

アクションの使用可能化または使用不可化

「アクション」ウィンドウには、変換マップまたは接続で使用できるすべてのアクションが表示されます。システム提供のアクション（「プロバイダー」列に「製品」のラベルあり）とユーザー作成のアクションの両方がリストされます。

「**ハブ管理**」>「**ハブ構成**」>「**アクション**」の順にクリックして、「アクション」ウィンドウを表示します。

次のパラメーターは、アクションごとに表示されます。

- アクションの名前
- アクションの状況 (使用可能または使用不可)
- アクションのプロバイダー — 「製品」によって示される WebSphere Partner Gateway またはユーザー

このページから以下のアクションを実行できます。

- アクションの詳細を表示するには、「詳細の表示」アイコンをクリックします。ユーザー作成アクションの情報は変更できません。
- 現在アクションを使用している変換マップおよび接続を表示するには、「使用箇所」アイコンをクリックします。
- 選択したアクションに基づいて新規アクションを作成するには、「コピー」アイコンをクリックします。
- 「作成」をクリックすると、新規アクションを作成してそれを使用可能にすることができます。

ハンドラーの管理

「HandlersList」ウィンドウに、アクション、受信者、宛先、または固定ワークフローで使用できるすべてのハンドラーが表示されます。システム提供のハンドラー(「プロバイダー」列に「製品」のラベルがある)と、アップロードされたすべてのユーザー定義ハンドラーの両方がリストされます。

「HandlersList」ウィンドウを使用すると、ハンドラーのタイプ、そのクラス名、およびそれが WebSphere Partner Gateway またはユーザーのどちらから提供されるかなどの、使用可能なハンドラーについての情報を表示できます。ハンドラーをインポートまたは削除することもできます。

ハンドラーのインポート

新規のハンドラーをご使用の環境にインポートするには、次のステップを実行します。

1. 「ハブ管理」>「ハブ構成」>「ハンドラー」の順にクリックします。
2. 「HandlersList」ウィンドウで、「インポート」をクリックします。
3. 「ファイル」で、インポートするハンドラーを表す XML ファイルの名前を入力するか、または「参照」オプションを使用してファイルにナビゲートします。
4. オプションで、ハンドラーをデータベースにコミットするかどうかを指定します。「はい」をクリックすると、ハンドラーは使用可能になります。「いいえ」をクリックすると、ハンドラーは使用できません。デフォルトは「はい」です。
5. オプションで、同じ名前のファイルに上書きするかどうかを指定します。「はい」をクリックして、アップロードするファイルの名前が既存のハンドラー・ファイルの名前と一致すると、既存のファイルはアップロードしたファイルで置き換えられます。この機能は、ユーザー提供のハンドラーを変更して、既存のハンドラーを更新したバージョンで置き換える場合に使用します。デフォルトは「いいえ」です。
6. 「アップロード」をクリックします。

ハンドラー・ファイルがアップロードされると、使用可能ハンドラーのリストに表示されます。

ハンドラーの削除

ハンドラーを削除するには、次のステップを実行します。

1. 「ハブ管理」>「ハブ構成」>「ハンドラー」の順にクリックします。
2. 「HandlersList」ウィンドウで、削除するハンドラーの横にある「削除」アイコンをクリックします。

ハンドラーでのコンテンツ・タイプ属性の構成

場合によっては、text/plain 属性を持つ一部の EDI-X12 文書は、構成が完了するまで文書マネージャーが送信できないことがあります。**BinaryChannelParseHandler**、**XMLRouterBizHandler**、**EDIRouterBizProcessHandler** などのハンドラーは、コンマで区切られたコンテンツ・タイプ値をサポートし、text/plain のコンテンツ・タイプを手動で追加する必要がある場合があります。

注: IBM 担当員からの指示がない限り、ハンドラー値は変更しないでください。

以下の手順を実行して、これらのハンドラーに text/plain 属性を追加します。

1. 「ハブ管理」>「固定ワークフロー」>「ChannelParseFactory」の順にクリックします。
2. 「EDIRouterBizProcessHandler」を選択して、「編集」アイコンをクリックします。
3. 構成済みリストで **EDIRouterBizProcessHandler** を選択し、「構成」をクリックします。
4. コンテンツ・タイプに **text/plain** を追加することによって、コンテンツ・タイプ属性を編集します。
5. 「保存」をクリックします。

マップの管理

このセクションでは、WebSphere Partner Gateway で使用可能なさまざまなタイプのマップの管理方法を説明します。

検証マップの更新

この手順を使用して、現在システムに存在する検証マップを更新します。

1. 「ハブ管理」>「ハブ構成」>「マップ」>「検証マップ」の順にクリックします。

現在システムに存在している検証マップが表示されます。

2. 「マップのダウンロード」アイコンをクリックして、検証マップをローカル・コンピュータにダウンロードします。必要に応じてマップを更新します。
3. 「マップのアップロード」アイコンをクリックして、更新したマップをシステムにロードします。

検証マップの使用箇所の表示

検証マップの使用法 (つまり、検証マップ全体が使用されている箇所) を表示するには、以下の手順を使用します。

1. 「ハブ管理」>「ハブ構成」>「マップ」>「検証マップ」の順にクリックします。

現在システムに存在している検証マップが表示されます。

2. 「使用箇所」アイコンをクリックして、検証マップを使用しているすべてのルーティング・オブジェクトのリストを表示します。

検証マップの削除

検証マップを削除するには、以下の手順を使用します。

1. 「ハブ管理」>「ハブ構成」>「マップ」>「検証マップ」の順にクリックします。

現在システムに存在している検証マップが表示されます。

2. 「削除」アイコンをクリックします。

注: 選択された検証マップが文書定義のいずれかで使用されているかどうかを検査するための警告メッセージが表示されます。検証マップがどのルーティング・オブジェクトにも使用されていない場合は、警告メッセージが表示されません。

3. 削除を確認するための警告メッセージ・ウィンドウで、「**OK**」をクリックします。削除の前に、検証マップは文書定義から逆参照されます。削除操作を中止するには、「**キャンセル**」をクリックします。

変換マップの管理

「変換マップの管理」ページを使用して、現在システムに存在している変換マップのリストを表示したり、特定のマップを検索したりします。

このページから以下のタスクを実行できます。

- 特定のマップの検索 (名前、説明) を実行する。
- 現在システムに存在している変換マップを表示する。

「詳細」アイコンをクリックしてマップについての詳細情報を表示します。

「マップのダウンロード」アイコンをクリックして、変換マップをローカル・コンピュータにダウンロードします。これは、マップを更新する必要があるときに役立ちます。

「マップのアップロード」アイコンをクリックして、更新したマップをシステムにアップロードします。

新規変換マップの作成方法の詳細は、「*WebSphere Partner Gateway E/A* ハブ構成ガイド」を参照してください。

EDI FA マップの管理

「EDI 機能確認通知マップの管理」ページを使用して、現在システムに存在している機能確認通知 (FA) マップのリストを表示したり、特定のマップを検索したりします。FA マップはルーティング・オブジェクトと関連付けることができますが、属性値を編集することはできません。

このページから以下のタスクを実行できます。

- 特定のマップの検索 (名前、説明) を実行する。
- 現在システムに存在している FA マップを表示する。

「詳細の表示」アイコンをクリックしてマップについての詳細情報を表示します。

「使用箇所」アイコンをクリックして、FA マップが使用されている場所を確認します。

「削除」アイコンをクリックして FA マップを削除します。

EDI の管理

EDI 交換の交換に関係する多くの属性を変更することができます。例えば、すべてのエンベロープに指定されているデフォルト値を変更したり、特定の交換に特定のエンベロープを使用するように定義したり、交換のさまざまな部分に割り当てられている制御番号をセットアップしたりできます。また、同じ交換が異なる方法で送達されるように接続プロファイルを設定することもできます。このセクションでは、これらのタスクについて説明します。

エンベロープ・プロファイル

「エンベロープ・プロファイル」ウィンドウを使用して、エンベロープ・プロファイル・レコードを表示、編集、作成、または削除します。EDI 標準 (X12、UCS、EDIFACT) は、リストにあるそれぞれのプロファイルごとに表示されます。

EDI 標準の各エンベロープ・プロファイル属性については、「*WebSphere Partner Gateway E/A ハブ構成ガイド*」を参照してください。

エンベロープ・プロファイル・レコードの編集

1. 「ハブ管理」>「ハブ構成」>「EDI」>「エンベロープ・プロファイル」の順にクリックします。
2. 編集するエンベロープ・プロファイル名の横にある「詳細の表示」アイコンをクリックします。
3. 変更するエンベロープ・プロファイル・タイプを選択し、「編集」アイコンをクリックします。

選択したエンベロープ・プロファイルの属性値 (一般、交換、グループ、またはトランザクション) が表示されます。属性については、「*WebSphere Partner Gateway E/A ハブ構成ガイド*」を参照してください。

4. エンベロープ・プロファイルの属性値を更新し、「保存」をクリックします。属性については、「*WebSphere Partner Gateway E/A ハブ構成ガイド*」を参照してください。

エンベロープ・プロファイル・レコードの作成

1. 「ハブ管理」>「ハブ構成」>「EDI」>「エンベロープ・プロファイル」の順にクリックします。
2. 「エンベロープ・プロファイル」ウィンドウで「作成」をクリックします。
3. 以下のフィールドの値を入力します。

- エンベロープ・プロファイル名: 新規エンベロープ・プロファイルの固有の名前を入力します。このフィールドは必須です。

注: 名前が固有のものでない場合 (同じ名前のエンベロープ・プロファイルが存在する) は、新規エンベロープ・プロファイルを保存しようとするときにエラー・メッセージが返されます。

- 説明: これはオプションの値です。エンベロープ・プロファイルの要旨を入力します。
4. 新規プロファイルに適用されるリストで、EDI 標準タイプ (X12、UCS、または EDIFACT) を選択します。このフィールドは必須です。

EDI 標準のリストで値を選択すると、その標準に特定のエンベロープ・プロファイル属性 (一般、交換、グループ、またはトランザクション) が自動的に表示されます。

5. エンベロープ・プロファイルの属性値を更新し、「保存」をクリックします。属性については、「*WebSphere Partner Gateway E/A* ハブ構成ガイド」を参照してください。

エンベロープ・プロファイル・レコードの削除

1. 「ハブ管理」>「ハブ構成」>「EDI」>「エンベロープ・プロファイル」の順にクリックします。
2. 削除するエンベロープ・プロファイル名の横にある「削除」アイコンをクリックします。

エンベローパー

エンベローパー・ページを使用して、エンベローパーのロックおよびキュー値とスケジューリング値を表示および編集します。

1. 「ハブ管理」>「ハブ構成」>「EDI」>「エンベローパー」の順にクリックします。
2. 「編集」アイコンをクリックしてスケジューラーの属性を編集します。
 - 「最大ロック時間」には、データベースをロックする最大時間 (秒) を入力します。この値は、秒単位で表現されます。ロックは、複数のエンベローパー・インスタンスが同じデータにアクセスするのを防ぐために使用されます。
 - 「最大キュー存続期間」には、キューに入れられた要求がデータベースのロックを獲得するための最大時間 (秒) を入力します。この値は、秒単位で表現されます。
 - 「バッチ・モードの使用」は、グローバル設定であり、デフォルトで選択されます。バッチ・モードをオンにすると、EDI エンベローパーがバッチでトランザクションをエンベロープします。バッチ・モードをオフにするには、「バッチ・モードの使用」チェック・ボックスをクリアします。

- 「間隔ベースのスケジューリング」(デフォルトで選択) または「カレンダー・ベースのスケジューリング」のどちらかをクリックします。「間隔ベースのスケジューリング」では、時間の間隔(秒)を入力します。「カレンダー・ベースのスケジューリング」では、「日次スケジュール」、「週次スケジュール」、または「カスタム・スケジュール」をクリックし、それに応じてスケジュールを設定します。

3. 「保存」をクリックします。

接続プロファイル

接続プロファイルは、エンベロープが解除されたトランザクションおよびエンベローパーによって作成された EDI 交換で使用します。トランザクションの場合、接続プロファイルは、エンベロープが解除された後のトランザクションの処理方法を決定します。交換の場合、接続プロファイルは、交換の配信方法を決定します。

「接続プロファイル」ウィンドウを使用して、新規プロファイルを作成したり、既存のプロファイル情報を編集したりします。現在定義されている各プロファイルの名前およびその説明がある場合には、それらが「接続プロファイル・リスト」に表示されます。接続プロファイルの詳細については、「*WebSphere Partner Gateway E/A ハブ構成ガイド*」を参照してください。

接続プロファイルの編集

1. 「ハブ管理」>「ハブ構成」>「EDI」>「接続プロファイル」の順にクリックします。
2. 「詳細の表示」アイコンをクリックして、「接続プロファイルの詳細」ページを表示します。このページには、接続プロファイルのすべての属性値のリストが表示されます。
3. 「編集」アイコンをクリックして、属性を編集します。
4. 「保存」をクリックします。

接続プロファイルの作成

1. 「ハブ管理」>「ハブ構成」>「EDI」>「接続プロファイル」の順にクリックします。
2. 「接続プロファイルの作成」をクリックして、新規接続プロファイルを作成します。
3. 以下のプロファイル属性フィールドに適切な情報を入力します。

接続プロファイル名

新規プロファイルの固有名 ID。唯一の必要フィールドです。

説明 接続プロファイルの要旨。

修飾子 1

EDI 交換に使用する接続を決定する値。

EDI 使用タイプ

テスト、実動、情報交換のいずれであるかを示します。

アプリケーション送信側 ID

グループの送信側に関連するアプリケーションまたは会社の部門。

アプリケーション受信側 ID

グループの受信側に関連するアプリケーションまたは会社の部門。

パスワード

アプリケーション送信側とアプリケーション受信側の間でパスワードが必要な場合。

「保存」をクリックします。新しく作成された接続プロファイルの「接続プロファイルの詳細」ページが表示されます。

接続プロファイルの削除

1. 「ハブ管理」>「ハブ構成」>「EDI」>「接続プロファイル」の順にクリックします。
2. 「削除」アイコンをクリックして接続プロファイルを削除します。

制御番号の初期化

「制御番号構成」ページを使用して、エンベローパーが使用する制御番号を構成します。名前またはワイルドカード検索条件を使用して、またオプションで EDI 機能を使用して、1 つ以上の制御番号パートナーを検索することもできます。ワイルドカード検索では、他の文字の代わりに、文字とアスタリスク (*) の任意の組み合わせを含めることができます。検索ストリングとしてアスタリスク (*) を 1 つだけ使用する検索では、すべての EDI 対応パートナーのリストが返されます。制御番号と制御番号マスクの詳細については、「*WebSphere Partner Gateway E/A* ハブ構成ガイド」を参照してください。

1. 「ハブ管理」>「ハブ構成」>「EDI」>「制御番号の初期化」の順にクリックします。
2. 「パートナー名」フィールドに検索条件を入力します。検索条件は、パートナーの名前またはワイルドカード検索条件のどちらかにすることができます。EDI 対応パートナーを検索しない場合は、「EDI 対応 (EDI-capable)」チェック・ボックスをクリアします。デフォルトではチェック・ボックスが選択されています。EDI 対応パートナーを検索する場合は、チェック・ボックスを選択したままの状態にします。「検索」をクリックし、検索条件に当てはまる情報を「制御番号の構成」リスト・ページに表示します。

注: 検索を行っても結果が返されない場合は、「この検索条件に該当する結果はありませんでした。」というメッセージが表示されます。「検索」をクリックして制御番号構成の検索ページに戻り、新しい検索条件を使用して別の検索を実行してください。

3. パートナーの横にある「詳細の表示」アイコンをクリックします。
4. パートナーの現行の制御番号割り当てが「制御番号構成の詳細」ページにリストされます (割り当てがある場合)。「編集」アイコンをクリックして、値を追加または変更します。
5. 「交換」の横に値を入力 (または変更) し、交換の制御番号生成の初期化に使用する番号を指示します。

6. 「グループ」の横に値を入力 (または変更) し、グループの制御番号生成の初期化に使用する番号を指示します。あるいは、「マスク」をクリックして、固定値の代わりに使用するマスクを入力することもできます。
7. 「トランザクション」の横に値を入力 (または変更) し、トランザクションの制御番号生成の初期化に使用する番号を指示します。あるいは、「マスク」をクリックして、固定値の代わりに使用するマスクを入力することもできます。
8. 「保存」をクリックします。

現行の制御番号

「制御番号状況の検索」ページを使用して、パートナー・ペアの制御番号状況を検索します。

1. 「ハブ管理」>「ハブ構成」>「EDI」>「現行制御番号」の順にクリックします。
2. 以下のオプションを使用して、1 つ以上の送信側パートナー、および 1 つ以上の受信側パートナーを検索します。
 - **パートナー名:** 特定のパートナーの名前。検索関数では大/小文字が区別されるので、システムに表示されるとおりにパートナー名を入力する必要があります。

注: 送信側パートナーと受信側パートナーの両方を選択する必要があります。

- **EDI 対応の検索:** このチェック・ボックスはデフォルトで選択されています。EDI 対応パートナーを検索しない場合は、「EDI 対応 (EDI-capable)」チェック・ボックスをクリアします。EDI 対応パートナーを検索する場合は、チェック・ボックスを選択したままの状態にします。
 - **検索:** 検索を開始するときにクリックします。
 - **検索結果:** 検索結果はこのフィールドに表示されます。検索結果フィールドには、デフォルトで事前選択されたエントリーである「任意のパートナー」が入力されています。すべてのパートナーを検索するには、「パートナー名」フィールドをブランクのままにして「検索」をクリックします。特定のパートナーを検索するには、「パートナー名」フィールドに名前を入力してから「検索」をクリックします。
 - **現在の状況の表示:** 選択したパートナー・ペアの制御番号状況値を表示する場合にクリックします。
3. 「編集」アイコンをクリックして、変更を実行します。

注意:

「編集」オプションと「すべてリセット」オプションは、制御番号が重複する可能性が生じる、特殊な事情の場合にのみ使用してください。

4. 以下のアクションのいずれかの操作を実行します。
 - 「保存」をクリックしてすべての変更内容を保存し、制御番号状況リストに戻ります。
 - 「戻る」をクリックしてすべての変更内容を取消し、制御番号状況リストに戻ります。
 - 「すべてリセット」をクリックしてパートナー・ペアの状況をリセットし、パートナー間で発生する次のメッセージ交換までに状況値がリセットされるようにします。

システム構成データの管理

システム構成データは、WebSphere Partner Gateway コンポーネントがシステム・リソースにアクセスする方法を指定します。これらのリソースは、ユーザーごとのインストールに応じて異なります。コンポーネント間の通信を確立するために使用されるデータも、各コンポーネントにシステム・リソースを割り振る方法を設定するために使用されるデータもあります。

WebSphere Partner Gateway バージョンでは、システム構成データはデータベースに保存され、hubadmin ユーザーによってコンソール経由で構成されます。現在のシステム構成データは、以前のリリースのように各コンポーネントのプロパティ・ファイルに保存されることはありません。

データベースはすべてのハブ・コンポーネント・インスタンスによって共有されるため、コンポーネント・インスタンスが独自の構成を持つ必要があり、共有の構成データを使用しない場合もあります。このような状況に対処するために、コンポーネントでは、中央データベースから属性データを取得する前に必ず、サーバー・スコープを使用して WebSphere Application Server 環境の属性値を確認します。

サーバー・スコープを使用して変数を定義する手順については、WebSphere Application Server の資料を参照してください。これらのアクションは、WebSphere Application Server 管理コンソールまたは特別に設計されたスクリプトを使用して実装できます。

システム構成データへのアクセス

システム構成データにアクセスするには、以下のステップを実行します。

1. hubadmin としてログインします。
2. メニュー・タブから「システム管理」をクリックします。

注: ナビゲーション・タブの 2 行目を使用して、「共通プロパティ」、「コンソール管理」、「文書マネージャーの管理」、「機能の管理」および「レシーバー管理」から選択します。これらの各タブから、構成データ画面または追加のナビゲーション・タブにアクセスできます。特定の構成データに関する詳細およびその構成データをコンソールから探す方法については、233 ページの『付録 C. コンポーネント固有のシステム属性』を参照してください。

3. 編集する構成ページにナビゲートします。
4. そのページで「編集」をクリックして、データを変更します。
5. 変更内容をデータベースに保存するには「保存」をクリックします。変更内容を破棄するには「キャンセル」をクリックします。

データを変更した後、ほとんどの変更はシステムを再始動しなくても即時適用されます。1 つ以上のコンポーネントの再始動が必要な変更については、付録 C で説明しています。

注: これらの値は、WebSphere Partner Gateway 製品の動作の仕組みに精通していない限り変更しないでください。通常、システム構成データは、経験豊富なシス

テム・エンジニアやサポート・エンジニアが変更します。このデータを変更する場合は、必要になった場合に元の値に戻せるように元の値を記録しておいてください。

アラート・メール・サーバーの構成

アラートは、パートナーにシステム・イベントを通知するテキスト・ベースの E メール・メッセージです。このアラートを使用する場合は、返信先 E メール・アドレスを指定して SMTP サーバーを構成してください。配信の障害がある場合には、返信先 E メール・アドレスを構成する必要があります。

構成属性を探すには、WebSphere Partner Gateway コンソール内で「システム管理」>「DocMgr の管理」>「アラート・エンジン」にナビゲートします。

属性は以下のとおりです。

- bcg.alertNotifications.mailHost
- bcg.alertNotifications.mailFrom
- bcg.alertNotifications.mailReplyTo
- bcg.alertNotifications.mailEnvelopeFrom

これらの属性の目的と値については、246 ページの表 56 で説明しています。

システム・アクティビティの表示

WebSphere Partner Gateway は、システム・アクティビティについてのデータを定期的に要約します。この要約サービス・データは、文書分析または文書ボリューム・レポート機能を使用するときに表示される情報です。

「要約サービス・プロパティ」ウィンドウを使用して、要約データを生成する頻度を編集します。このウィンドウには、要約データが最後に更新された日時も表示されます。

時間間隔を変更するには、次のステップを実行します。

1. 「システム管理」>「イベント処理」>「要約サービス」の順にクリックします。
2. 「要約サービス・プロパティ」ウィンドウで、「処理間隔 (分)」の横にある「編集」アイコンをクリックします。
3. データを再度要約するまでに経過する分数の値 (1 から 60) を入力します。デフォルト値は 15 です。
4. 「保存」をクリックします。

イベント送達の管理

WebSphere Partner Gateway では、システム生成イベントのアプリケーション (例えば、モニター・アプリケーション) へのパブリッシュを選択できます。これらのイベントを JMS キューにパブリッシュします。「イベント・パブリッシュ・プロパティ」ページから、イベント・パブリッシュおよび関連 JMS 構成 (存在する場合) の状況の表示、または状況の変更が行えます。

注: Windows のバージョン (XP 以前) によっては、デフォルトのイベント送達機能を使用する場合に、「JMS キュー・ファクトリー名」と「JMS キュー名」のデフォルト値を変更する必要があります。「JMS キュー・ファクトリー名」の値を WBIC/QCF から WBIC¥¥QCF に変更し、「JMS キュー名」の値を jms/bcg/queue/deliveryQ から jms¥¥bcg¥¥queue¥¥deliveryQ に変更します。

イベント・パブリッシュをアクティブにするには、次のステップを実行します。

1. 「システム管理」>「イベント処理」>「イベント送達情報」の順にクリックします。
2. 「イベント公開プロパティ」ウィンドウで、「イベント・パブリッシュの使用可能化 (Enable Event Publication)」の横にある「編集」アイコンをクリックします。JMS プロパティの値を入力または変更します。

プロパティの説明については、「*WebSphere Partner Gateway E/A* ハブ構成ガイド」を参照してください。

3. 「保存」をクリックします。

API 呼び出しの管理

パートナーは、(コミュニティー・コンソールを使用する代わりに) アプリケーション・プログラミング・インターフェース (API) を呼び出して特定のタスクを実行できます。

管理 API の設定を変更するには、以下のステップを実行します。

1. 「システム管理」>「機能の管理」>「管理 API」の順にクリックします。
2. 「管理 API プロパティ」ウィンドウで、「XML ベースの API の使用可能化」の横にある「編集」アイコンをクリックします。
3. チェック・ボックスを選択して、API を使用可能にするか、またはチェック・ボックスをクリアして API を使用不可にします。
4. 「保存」をクリックします。

注: XML ベースの管理 API は推奨されません。

管理 API の代わりに、WebSphere Partner Gateway によって導入されたマイグレーション・ユーティリティを使用して、タスクの作成と更新を行うことができます。以前は管理 API を使用しなければタスクを作成および更新できませんでしたが、現在は、新規または更新された情報を持つマイグレーション・インポート・ファイルを使用して行えるようになっていました。

インポート・ファイルは、マイグレーション・ユーティリティに付属する XML スキーマによって記述されます。Rational Application Developer などの開発ツールを使用して、スキーマに準拠するインポート XML ファイルを作成できます。マイグレーション・ユーティリティでこのファイルをインポートすることによって、パートナーの連絡先およびビジネス ID を含む新規パートナー定義をロードできます。マイグレーション・ユーティリティでパートナー定義をインポートすることによって、既存のパートナー定義を更新することもできます。管理 API を使用して、システム内の構成成果物の一部をリストできます。マイグレーション・ユーティリティを使用してシステムを完全エクス

ポートすると、エクスポートされた XML ファイルに、パートナーの機能、パートナー接続、およびレシーバー (ターゲット) がリストされます。

文書マネージャー情報の管理

管理コンソールを使用すると、文書マネージャーの管理プロパティを表示および変更できます。文書マネージャーは、WebSphere Partner Gateway システムのその他のコンポーネントが共有している 3 つのファイル・システム・フォルダーをポーリングすることにより、処理対象のファイルを取得します。これらのファイル・システム・フォルダーには複数の文書マネージャー・プロセス (各プロセスは複数のスレッドを保持可能) がアクセスできるため、文書は WebSphere Partner Gateway によってロックされます。これにより、共有フォルダー内の文書を処理できるプロセス (スレッド) は 1 つに制限されます。

最大保持時間

ロック保持時間の最大値を、3 つのフォルダー (メイン、同期、シグナル) ごとに設定して、文書取得エンジン (DAE) プロセス (スレッド) のいずれかが、文書の処理中に文書のロック状態を維持できる最大ロック時間を構成します。

- 「メイン・フォルダー」では、メインのインバウンド・ディレクトリー (例: Common の下位にある router_in フォルダー) をポーリングする DAE インスタンスの最大ロック保持時間を表す値 (秒) を入力します。デフォルト値は **3** 秒です。
- 「同期フォルダー」では、同期メッセージのディレクトリー (例: Common の下位にある sync_in フォルダー) をポーリングする DAE インスタンスの最大ロック保持時間を表す値 (秒) を入力します。デフォルト値は **3** 秒です。
- 「シグナル・フォルダー」では、シグナル・メッセージのディレクトリー (例: Common の下位にある signal_in フォルダー) をポーリングする DAE インスタンスの最大ロック保持時間を表す値 (秒) を入力します。デフォルト値は **3** 秒です。

ポーリング間隔ごとに処理する最大ファイル数

ポーリング間隔ごとに処理するファイルの最大数の値を、3 つのフォルダー (メイン、同期、シグナル) ごとに設定して、各 DAE スレッドが処理するファイルの最大数を構成します。

- 「メイン・フォルダー」では、処理の対象となるメインのインバウンド・ディレクトリー (router_in) をポーリングする DAE インスタンスの最大ファイル数を表す (0 より大きい) 値を入力します。デフォルト値は **5** です。
- 「同期フォルダー」では、処理の対象となる同期メッセージのディレクトリー (sync_in) をポーリングする DAE インスタンスの最大ファイル数を表す (0 より大きい) 値を入力します。デフォルト値は **5** です。
- 「シグナル・フォルダー」では、処理の対象となるシグナル・メッセージのディレクトリー (signal_in) をポーリングする DAE インスタンスの最大ファイル数を表す (0 より大きい) 値を入力します。デフォルト値は **5** です。

管理プロパティを表示または変更するには、以下のステップを実行します。

1. 「システム管理」 > 「DocMgr の管理」 > 「BPE-DAE」の順にクリックします。

2. 「BPE-DAE」タブの下に表示されているいずれかのタブを選択して、「メイン」、「シグナル」、「同期」のいずれかのプロパティ値にアクセスします。
「文書マネージャーの管理」ページでは、プロパティが読み取り専用モードで表示されます。
3. 「編集」アイコンをクリックしてプロパティを変更します。
4. 「保存」をクリックします。

ebMS のサポート

WebSphere Partner Gateway は、ebXML メッセージ・サービス (ebMS) の仕組みをサポートします。 ebMS は、ebXML メッセージを通信プロトコルで転送するために使用するメッセージ・エンベロープおよびヘッダー文書スキーマを定義します。 ebMS は、基本 SOAP および SOAP with Attachment の仕様に対する一連の階層化拡張として定義されます。メッセージの経路指定および配信に使用するメッセージ・ヘッダーの構造とペイロード・セクションも含まれています。 ebMS は、関係者間のペイロードのパッケージ化、ルーティング、およびトランスポート (中継を含む) に焦点を当てています。 ebMS はビジネス・プロセスや送信される ebXML コンテンツの正確性を検証しないことに注意してください。 ebMS の機能は、ebXML ペイロードを安全かつ不変のまま伝送することを送信側に保証することです。 ebMS は、CPA (Collaboration Protocol Agreements) を使用して、2 つの関係者間でデータを伝送する方法と伝送するデータの種類の判別します。

CPA の WebSphere Partner Gateway へのアップロード

CPA は、2 つの関係者間での有効で可視の実施可能なすべての電子データ・インタラクションを定義します。 CPA は電子データを交換する方法に関する 2 つの関係者間での取り決めです。 CPA が提供されている場合は、CPA を WebSphere Partner Gateway にアップロードして製品の構成を支援できます。 CPA が提供されていない場合は、製品を手動で構成できます。

CPA をアップロードするには 2 つの方法があります。「**文書定義**」ページからアップロードする方法と、「**ハブ管理**」ページからアップロードする方法です。

「文書定義」ページからのアップロード

CPA をアップロードするには、以下を実行します。

1. 「**ハブ管理**」>「**ハブ構成**」>「**文書定義**」の順にクリックします。
2. 画面の上部にある「**パッケージのアップロード/ダウンロード**」のリンクをクリックします。
3. パッケージ・タイプとして「**ebMS CPA**」を選択し、「**サブミット**」をクリックします。
4. 画面の上部にある「**CPA のアップロード**」のリンクをクリックします。
5. 「**参照**」をクリックし、該当するファイルに位置指定して「**オープン**」をクリックします。
6. ebMS バージョン 2.0 が選択されていることを確認します。
7. 「**アップロード**」をクリックします。

アップロードが正常に完了すると、内部パートナーと外部パートナーの両方が作成されます。内部パートナーと外部パートナーの企業間取引機能が使用可能になり、インタラクションと接続が作成され、それぞれに対応する宛先も作成されます。CPA のアップロード中にエラーが発生すると、アップロード中に作成された構成はロールバックされないことに注意してください。

注: 既存の証明書を誤って置換しないようにするには、ファイル・システムに保管されている証明書を CPA に手動でアップロードする必要があります。

インタラクションの作成中に、デフォルト・アクションが「パススルー」に設定されます。ebMS をサポートするための追加のフローを以下に示します。

- ping
- 状況要求
- エラー

ランタイム中にパートナーからの ebMS 文書进行处理する際、WebSphere Partner Gateway は、ebMS インタラクションが ebMS 構成に準拠しているかを検証します(例えば、暗号化が必要かどうかなど)。準拠していない場合、その文書は不合格になります。特定の失敗イベントは、文書ビューアーまたは ebMS ビューアーで表示することができます。

ebMS ページからの CPA のアップロード

CPA をアップロードするには、以下を実行します。

1. 「ハブ管理」>「ハブ構成」>「ebMS」をクリックします。
2. 「CPA のアップロード」をクリックします。
3. 「参照」をクリックし、該当の CPA パッケージを選択します。
4. ebMS バージョン 2.0 が選択されていることを確認します。
5. 「アップロード」をクリックします。

CPA のアップロード処理中に、CPA に存在するパートナーから内部パートナーを選択するように求められます。

事前設定されない属性

属性値は、CPA のアップロード中に接続レベルで設定されます。ただし、値が事前設定されない属性もあります。そのような属性と値の例を以下にリストします。

- 暗号化 Mime パラメーター

以下の値にすることができます。

- i. smime-type="enveloped-data"
- ii. type="text/xml" version="1.0"

- 暗号化構成要素

以下の値にすることができます。

- i. text/xml:application/binary:application/edi
- ii. */xml

注: 値はコロン (:) で区切られます。

- Mime パラメーターのパッケージ化

以下の値にすることができます。

- i. type="text/xml" version="1.0"
- ii. type="multipart/related"

- パッケージ化構成要素

以下の値にすることができます。

- i. text/xml:application/pkcs7-mime
- ii. text/xml:application/binary:application/edi

注: text/xml は、先頭の要素にする必要があります。

- 署名から除外

以下の値にすることができます。

- i. application/binary:text/xml:application/pkcs7-mime
- ii. application/pkcs7-mime

ebMS でサポートされるアルゴリズム

ebMS では、以下のような各種のアルゴリズムがサポートされています。

- 『ダイジェストおよびシグニチャー・アルゴリズム』
- 『XML 暗号化アルゴリズムおよび SMIME 暗号化アルゴリズム』

ダイジェストおよびシグニチャー・アルゴリズム

サポートされているダイジェスト・アルゴリズムは以下のとおりです。

- SHA1
- SHA256
- SHA512
- RIPEMD160

サポートされているシグニチャー・アルゴリズムは以下のとおりです。

- DSA-SHA1
- RSA-SHA1

構成の問題が原因で署名に失敗した場合は、「署名が失敗しました」というイベントがコンソールに記録されます。同様に、署名の検証に失敗した場合は、「署名の検証に失敗しました」というイベントがコンソールに記録され、署名検証処理が失敗した理由に関する情報を含む ebMS エラー・メッセージが生成されます。

XML 暗号化アルゴリズムおよび SMIME 暗号化アルゴリズム

ebMS 暗号化では、2 つのプロトコル、XML 暗号化と SMIME 暗号化がサポートされます。

XML 暗号化を使用する場合は、以下のアルゴリズムを使用できます。

1. 3-des-cbc
2. aes-128-cbc
3. aes-192-cbc
4. aes-256-cbc

SMIME 暗号化を使用する場合は、以下のアルゴリズムを使用できます。

1. 3-des-cbc
2. aes-128-cbc
3. aes-192-cbc
4. aes-256-cbc
5. rc2

Web サービスを検証するための構成の詳細

この機能により、SOAP エンベロープで利用できる SOAP 本体またはペイロードを検証できます。ペイロード検証は、SOAP エンベロープの XML ペイロードについてのみサポートされています。この機能により、SOAP 本体をさらに先の処理で使用する前に、SOAP エンベロープのエンベロープ解除を行うこともできます。SOAP エンベロープのエンベロープ解除は、非同期通信の場合にのみ起こることに注意してください。Web サービス検証の詳細は、「*WebSphere Partner Gateway E/A ハブ構成ガイド*」を参照してください。SOAP エンベロープによるペイロードを検証するには、Web サービス・チャンネル構成に加えて、以下の追加構成を行う必要があります。

- WebSphere Partner Gateway に、必要な検証マップをアップロードします。WebSphere Partner Gateway に検証マップをアップロードする方法については、「*WebSphere Partner Gateway E/A ハブ構成ガイド*」の『文書タイプの構成』の章を参照してください。
- DTD ベースの検証の場合は、検証マップに対する DTD をそれぞれの Web サービス・チャンネルの下に関連付けます。検証マップをチャンネルに関連付ける方法については、「*WebSphere Partner Gateway E/A ハブ構成ガイド*」の『文書タイプの構成』の章を参照してください。
- スキーマ・ベースの検証の場合は、オプションで、検証マップをそれぞれの Web サービス・チャンネルの下に関連付けることができます。
- スキーマを WebSphere Partner Gateway にアップロードする間は、ファイル名として SystemId (システム ID) を使用してください。WebSphere Partner Gateway のスキーマ・ロケーション機能と、XML でスキーマ・ロケーションを指定する業界標準の方法に従うならば、外部で検証マップに対するスキーマをそれぞれの Web サービス・チャンネルの下に関連付ける必要はありません。
- Web サービス要求チャンネルの下 SOAP 本体を検証するには、組み込みアクションを選択します。
- 応答検証ルーティング・オブジェクト属性を「いいえ」に設定すると、オプションで、応答を検証しないように選択できます。ターゲット側で、ルーティング・オブジェクト属性である応答検証を変更してください。
- コンテンツ検証ルーティング・オブジェクト属性を有効または無効にすると、ペイロード XML に対するコンテンツ検証を変更できます。デフォルトでは、**コンテンツ検証**は有効です。

否認防止ロギングの使用

WebSphere Partner Gateway では否認防止を使用するための構成オプションが強化されており、取引先またはコミュニティー・マネージャーがパッケージ、プロトコル、および文書フローのレベルで否認防止を構成できるようになっています。この構成を使用することにより、グループ全体ではなく、パートナー・インタラクションごとに否認防止を開始または停止できます。

例えば、取引先とコミュニティー・マネージャーの間の AS2 接続に対する否認防止を開始するには、以下のステップを実行します。

1. 「AS」 > 「なし」の間のパートナー接続を作成します。
2. 取引パートナーとコミュニティー・マネージャーの間のパートナー接続をリストします。
3. AS2 パッケージの属性を編集し、NonRepudiationRequired 属性を yes に設定します。
4. none パッケージの属性を編集し、NonRepudiationRequired 属性を no に設定します。

パッケージ、プロトコル、および文書タイプでの否認防止属性の設定について詳しくは、「*WebSphere Partner Gateway E/A* ハブ構成ガイド」を参照してください。

メッセージ・ストアの使用

WebSphere Partner Gateway ではメッセージ・ストアを使用するための構成オプションが強化されており、取引先またはコミュニティー・マネージャーがパッケージ、プロトコル、および文書フローのレベルでメッセージ・ストアを構成できるようになっています。この構成を使用することで、どの文書をメッセージ・ストアに格納するか決定するための柔軟性を持つことができます。インバウンドおよびアウトバウンドの WebSphere Partner Gateway 文書を個々に、あるいは一緒にメッセージ・ストアに格納しないことを選択できます。

例えば、取引先とコミュニティー・マネージャーの間の AS2 接続に対するメッセージ・ストア・オプションを構成するには、次の手順を行います。

1. 「AS」 > 「None」の間のパートナー接続を作成します。
2. 取引パートナーとコミュニティー・マネージャーの間のパートナー接続をリストします。
3. AS2 パッケージの属性を編集し、「メッセージ・ストアが必要」属性を「はい」に設定します。
4. None パッケージの属性を編集し、「メッセージ・ストアが必要」属性を「いいえ」に設定します。

パッケージ、プロトコル、および文書タイプでのメッセージ・ストア属性の設定について詳しくは、「*WebSphere Partner Gateway E/A* ハブ構成ガイド」を参照してください。

第 4 章 アカウント管理タスク

この章では、アカウント管理によって実行できるタスクについて説明します。タスクの内容は次のとおりです。

- 『パートナー・プロファイルの管理』
- 44 ページの『宛先構成の管理』
- 53 ページの『証明書の管理』
- 57 ページの『B2B 属性値の変更』
- 57 ページの『パートナー接続の管理』
- 62 ページの『除外リストの管理』

パートナー・プロファイルの管理

アカウント管理パートナー機能を使用して、ハブ管理者であるユーザーはパートナー・プロファイルの作成、表示、編集、削除を実行できます。パートナー・プロファイルは、システムに対して会社 (パートナー) を識別します。パートナー・プロファイルの作成については、「*WebSphere Partner Gateway E/A* ハブ構成ガイド」を参照してください。

注: 内部パートナー・ユーザーおよび外部パートナー・ユーザーは、自分のパートナー・プロファイルのみを編集できます。

パートナー・プロファイルの表示および編集

パートナー・プロファイルを表示および編集するには、次のステップを実行します。

1. 「アカウント管理」>「プロファイル」>「外部パートナー」の順にクリックします。
2. 「検索」をクリックします。
3. 詳細を表示するパートナーの横にある「詳細の表示」アイコンをクリックします。
4. 「パートナーの詳細」ウィンドウで、「編集」アイコンをクリックします。
5. 必要に応じて、パートナー・プロファイルを変更します。

注: 「ユーザー・パスワードのリセット」をクリックすると、コミュニティー・コンソールに確認ウィンドウが表示されます。「OK」をクリックして続行するか、「キャンセル」をクリックしてパスワードを保存します。パスワードをリセットすると、そのパートナーのすべてのユーザーは、次のログイン時に新しいパスワードを入力するように強制されます。

6. 「保存」をクリックします。

パートナーの検索

「パートナー」ウィンドウから、検索基準を満たすパートナーを探すことができます。パートナーを検索するには、次のステップを実行します。

1. 「アカウント管理」>「プロフィール」>「外部パートナー」の順にクリックします。
2. パートナー名またはビジネス ID を該当するフィールドに入力します。
3. 「検索」をクリックします。検索条件に一致するパートナーが検出されます。
4. パートナーの状況を変更するには、「状況」列の「使用可能」または「使用不可」をクリックします。
5. パートナーの詳細を表示するには、パートナーの横にある「詳細の表示」アイコンをクリックします。
6. 「編集」アイコンをクリックしてパートナー・プロフィールを編集します。
7. 「保存」をクリックします。

パートナーの削除

パートナーを削除するには、次のステップを実行します。

1. 「アカウント管理」>「プロフィール」>「外部パートナー」の順にクリックします。
2. パートナー名またはビジネス ID を該当するフィールドに入力します。
3. 「検索」をクリックします。検索条件に一致するパートナーが検出されます。
4. 「削除」アイコンをクリックしてパートナーを削除します。
5. 削除を確認して、変更内容を保存します。

宛先構成の管理

宛先は、ハブ・コミュニティの適切な宛先に文書をルーティングするときに使用するトランスポート情報を管理します。宛先の構成時にどの情報が使用されるかは、アウトバウンド・トランスポート・プロトコルによって決まります。宛先の作成については、「*WebSphere Partner Gateway E/A* ハブ構成ガイド」を参照してください。

宛先構成のために必要な情報

宛先のセットアップに必要なパラメーター情報は、トランスポート・タイプによって決まります。45 ページの表 4 では、X でマークされているボックスには構成情報が必要であり、文字 O でマークされているボックスはオプションです。宛先パラメーターについて詳しくは、46 ページの表 5 を参照してください。

注: 特定の宛先構成値を編集できるかどうかは、ユーザーのアクセス権レベルによって異なります。

表 4. 必要なトランスポート情報

必要なトランスポート情報	HTTP トランスポート	HTTPS トランスポート	FTP トランスポート	FTPS トランスポート	FTP スクリプト・ トランスポート	ファイル・ ディレクトリー・トランスポート	JMS トランスポート	SMTP トランスポート
認証が必要							O	O
自動キュー	O	O	O	O			O	O
接続 タイムアウト	X	X	X	X	X			
FTPS モード					O			
JMS ファクトリー名							X	
JMS JNDI ファクトリー名							X	
JMS メッセージ・ クラス							X	
JMS メッセージ・ タイプ							O	
JMS キュー名							X	
ロック・ユーザ					O			
スレッド数	X	X	X			X	X	X
パスワード	O	O	O	O	O	O	O	O
プロバイダー URL パッケージ							O	
再試行カウント	X	X	X	X	X	X	X	X
再試行間隔	X	X	X	X	X	X	X	X
サーバー IP					X			
受信側 URI	X	X	X	X		X	X	X
ユーザー ID					O			
ユーザー名	O	O	O	O		O	O	O
クライアント クライアント IP	O	O	O	O				
クライアント SSL 証明書の 検証		O						

注:

- 宛先の「認証が必要」オプションがオンで、ユーザー名とパスワードが指定されている場合、宛先は、このユーザー名とパスワードを、文書の配信のために接続している外部システムに渡します。宛先は認証を実行せず、これらの認証証明書を、接続を試行しているシステムに渡すだけです。JMS 宛先では、ユーザー名とパスワードは JMS キュー接続ファクトリーの JNDI ルックアップの証明書として使用されます。ファイル・ベースの JNDI を使用して JMS キューに接続する場合、WebSphere MQ 経由の JMS は JNDI 認証を実行しません。
- ネゴシエーションしている FTPS サーバーが、提示されたクライアント証明書に基づいてユーザーをマッピングしていない限り、ユーザー名およびパスワードが FTPS 認証に必要です。実装の詳細については、FTPS サーバー管理者にお問い合わせください。

宛先の表示および編集

宛先を表示および編集するには、次のステップを実行します。

- 「アカウント管理」>「プロファイル」>「宛先」の順にクリックします。
- 宛先のアクセスを変更するには、「アクセス」列の「オンライン」または「オフライン」をクリックします。
- 宛先の状況を変更するには、「状況」列の「使用可能」または「使用不可」をクリックします。
- 「詳細の表示」アイコンをクリックして、宛先の詳細を表示します。
- 「編集」アイコンをクリックします。
- 「宛先の詳細」ウィンドウで、46 ページの表 5 で説明されている宛先パラメーターを編集します。
- 「保存」をクリックします。

「削除」をクリックして、宛先を削除することもできます。

表 5. 宛先パラメーターの説明

パラメーター	説明
認証が必要	このパラメーターを使用可能にすると、ユーザー名およびパスワードは JMS または SMTP メッセージとともに提供されます。
自動キュー	このパラメーターを使用可能にすると、宛先がオフラインになっている場合に文書が一時リポジトリに配置されます。このパラメーターが使用不可で、宛先がオフラインの場合、文書の送信は失敗してエラーが発生します。
カレンダー・ベースのスケジューリング	このオプションを選択すると、宛先に関連付けられている文書は、選択されたスケジュールに基づいて処理されます。
構成ポイント・ハンドラー	プリプロセッシングおよびポストプロセッシングで使用するハンドラーを指定するために使用します。
接続タイムアウト	トラフィックのない状態でソケットが開いている秒数。デフォルト値は 120 (2 分) です。
説明	宛先に関するオプションの説明
FTPS モード	「はい」または「いいえ」を選択して、セキュア接続を使用するかどうかを制御します。

表 5. 宛先パラメーターの説明 (続き)

パラメーター	説明
宛先名	宛先を識別するための名前。 注: 「宛先名」は、ユーザー定義のフリー・フォーマット・フィールドです。一意である必要はありませんが、混乱を避けるため、各宛先には異なる名前を付けてください。
間隔ベースのスケジューリング	このオプションを選択すると、宛先は指定された間隔で文書进行处理します。
JMS ファクトリー名	JMS プロバイダーが JMS キューとの関連付けを生成するために使用する Java TM クラス名。
JMS JNDI ファクトリー名	ネーム・サービスに接続するために使用するファクトリー名。
JMS メッセージ・クラス	メッセージのクラス。
JMS メッセージ・タイプ	JMS メッセージのタイプ。
JMS キュー名	JMS メッセージが格納されるキューの名前。
ロック再試行間隔 (秒)	次のロック再試行までに FTP スクリプト・コンポーネントが待つ時間。
ロック再試行カウント	ロックを取得するまでに FTP スクリプト・コンポーネントが試行する回数。
ロック・ユーザー	「はい」または「いいえ」を選択して、同時接続が可能かどうかを制御します。
最大ロック時間 (秒)	FTP スクリプト・コンポーネントがロックを保持する最大時間。最大時間が経過すると、ロックはデータベースに戻されます。
最大キュー存続期間 (秒)	FTP スクリプト・コンポーネントがロック要求キューに入っているときの最大時間。ロック要求キューに置かれるのは、ロック要求が拒否された場合です。
スレッド数	文書のルーティングに割り当てられるスレッドの数。デフォルト値は 3 です。このパラメーターは、ハブ管理者であるユーザーが使用できます。
オンライン/オフライン	宛先がオンラインまたはオフラインの状態であることを示します。オフラインにすると、文書は宛先がオンラインになるまでキューに入れられます。
パスワード	パートナー・ファイアウォール経由のセキュア・アクセスのためのパスワード。
プロバイダー URL パッケージ	JMS コンテキスト URL を解釈するために Java が使用するクラスまたは JAR ファイルの名前。
再試行カウント	失敗するまでにシステムが試行する文書の最大送信回数。デフォルト値は 3 です。
再試行間隔	次の再試行までに宛先が待つ時間。デフォルト値は 300 (5 分) です。
スクリプト・ファイル サーバー IP 状況	FTP コマンドを含む FTP スクリプト。 サーバーの IP アドレス。 宛先が使用可能または使用不可の状態であることを示します。使用不可にすると、文書はその宛先を通過できません。
受信側 URI スレッド番号 トランスポート	パートナーの URI。 同時に処理される文書数。 文書をルーティングするためのプロトコル (44 ページの『宛先構成のために必要な情報』を参照)。
固有ファイル名の使用	受信側ロケーションで文書を受け取ったときに固有ファイル名を作成。元のファイル名はデータベース内に保管されています。

表 5. 宛先パラメーターの説明 (続き)

パラメーター	説明
ユーザー定義属性	FTP スクリプト・ファイルの場合、ユーザーは固有の属性を追加できます。属性はコンソールで定義可能です。これらの属性は、宛先で読み取られ、スクリプト・ファイル内で置き換えられません。
ユーザー ID	FTP サーバーにアクセスするために必要です。
ユーザー名	パートナー・ファイアウォール経由のセキュア・アクセスのためのユーザー名。
クライアント IP の検証	文書进行处理する前に、送信側パートナーの IP アドレスを検証します。接続の送信元宛先として選択された宛先で使用されます。
クライアント SSL 証明書 の検証	文書进行处理する前に、文書に関連付けられているビジネス ID と照合して、送信側パートナーのデジタル証明書を検証します。接続の送信元宛先として選択された宛先で使用されます。

デフォルト宛先の表示および編集

システムに構成されているデフォルトの宛先を表示および編集するには、次のステップを実行します。

1. 「アカウント管理」>「プロファイル」>「宛先」の順にクリックします。
2. ウィンドウの右上隅にある「デフォルト宛先の表示」をクリックします。すべての動作モードとそれに関連する宛先のリストがコンソールに表示されます。
3. デフォルトの宛先の関連情報を表示するには、その宛先の横にある「詳細の表示」アイコンをクリックします。
4. 必要に応じて情報を編集し、「保存」をクリックします。

宛先の使用箇所の表示

個々の宛先全体が使用されている場所の詳細を表示するには、次の手順を使用します。

1. 「アカウント管理」>「プロファイル」>「宛先」をクリックします。
2. 宛先リストから適切な宛先を選び、その宛先に対する「使用箇所」アイコンをクリックします。選択した宛先全体が使用されている場所のリストが表示されます。

注: 選択した宛先を使用するチャンネルが多数あるかもしれないため、この画面はページング情報と共に提供されます。各ページには、最大で 10 個の接続が表示されます。

宛先の削除

宛先の削除機能は、デフォルト宛先を除くすべての宛先に使用できます。宛先を削除するには、次の手順を使用します。

1. 「アカウント管理」>「プロファイル」>「宛先」をクリックします。
2. 宛先リストから削除する宛先を選び、その宛先に対する「削除」アイコンをクリックします。

注: 「削除」アイコンはデフォルト宛先には使用できません。また、宛先がいずれかのチャンネルに使用されている場合は、警告メッセージが表示されます。宛先の使用法についての情報が必要な場合は、48 ページの『宛先の使用箇所の表示』を参照してください。

3. 削除を確認するための警告ウィンドウで、「OK」をクリックします。

トランスポートのアップロード

トランスポートをアップロードするには、次の手順を使用します。

1. 「アカウント管理」>「プロファイル」>「宛先」の順にクリックします。
2. 「トランスポート・タイプの管理」を選択します。
3. 「参照」をクリックし、トランスポートを選択します。
4. 新規トランスポートをデータベースにコミットするかどうかを選択します。
5. 既存データを上書きするかどうかを選択します。
6. 「アップロード」をクリックします。

トランスポートの削除

トランスポートが不要になった場合は、次の手順に従ってトランスポートを削除します。

1. 「アカウント管理」>「プロファイル」>「宛先」の順にクリックします。
2. 「トランスポート・タイプの管理」を選択します。
3. リストされたトランスポートの横にある「削除」アイコンをクリックします。

トランスポートおよび宛先の再試行

パートナーの宛先への文書の配信が失敗すると、WebSphere Partner Gateway は文書の再配信を試行します。試行それぞれを再試行 と呼びます。WebSphere Partner Gateway には、トランスポートと宛先という 2 つのレベルの再試行機能があります。

トランスポートの再試行

トランスポートの再試行は、すべての宛先に対して適用される下位の組み込み再試行機能です。下位の再試行が実行される誘因としては、配信の試行で経由するネットワーク、とりわけインターネットで一時的な障害が多いことが挙げられます。このように配信システムは自動的に再試行するよう設計されており、ユーザーが再試行パラメーターを明示的に定義する必要はありません。トランスポートの再試行回数 (bcg.delivery.gwTransportMaxRetries) および再試行間隔 (bcg.delivery.gwTransportRetryInterval) は、「システム管理」>「DocMgr の管理」>「デリバリー・マネージャー」の下の「コンソール」で定義します。デフォルト値は、3 秒間隔で再試行 3 回です。再試行間隔を 0 に設定すると、トランスポートの再試行は実行されませんが、宛先の再試行は実行されます。

宛先再試行 (文書再試行とも呼ばれる)

宛先再試行パラメーター (再試行回数および再試行の間隔) は、ユーザーが宛先プロパティを使用して構成します。再試行間隔を 0 に設定すると、トランスポートの再試行の設定値に関わらず再試行は実行されません。通常の宛先再試行間隔は、組み込みトランスポート再試行よりも長くなります。これは、配信の障害になってい

る問題をユーザーが訂正するために十分な時間を指定するためのものです。例えば、宛先の Web サーバーがダウンしていたり、宛先の URL が誤っていたりすることがあります。パラメーター値を設定するには、ユーザーが各宛先の値を割り当てる必要があります。

WebSphere Partner Gateway では、それぞれの (ユーザー定義の) 宛先再試行ごとにトランスポート再試行が自動的に実行されます。例えば、3 回の宛先再試行を指定すると、システムの再試行パターンは次のようになります。

最初の試行が失敗する

宛先再試行 1 が失敗する

トランスポート再試行 1 が失敗する

トランスポート再試行 2 が失敗する

トランスポート再試行 3 が失敗する

宛先再試行 2 が失敗する

トランスポート再試行 1 が失敗する

トランスポート再試行 2 が失敗する

トランスポート再試行 3 が失敗する

宛先再試行 3 が失敗する

トランスポート再試行 1 が失敗する

トランスポート再試行 2 が失敗する

トランスポート再試行 3 が失敗する

文書の配信障害

配信の試行に失敗するたびに、コミュニティー・コンソールで表示可能な警告イベントが生成されます。

再試行の例

以下の例は、HTTP 宛先を使用する再試行のやりとりです。

構成

トランスポート: 再試行回数 = 2、間隔 = 3000 ms (3 秒)

コンソール HTTP ゲートウェイ: 再試行回数 = 3、間隔 = 20 秒、接続タイムアウト = 120 秒。

1. デリバリー・マネージャーが HTTP 宛先送信側を呼び出します。その後、HTTP 宛先送信側は要求を送信しますが、応答は接続タイムアウト値の 120 秒 (指定した「接続タイムアウト」の値による) 以内に返りません。
2. コンソール・ゲートウェイの再試行 1/3 回目。

デリバリー・マネージャーは、コンソール・ゲートウェイ・レベルの再試行回数を調べます。再試行回数が 0 より大きい場合、デリバリー・マネージャーは、指定されているコンソール間隔 (この場合は 20 秒) の間待機します。

- a. HTTP 宛先送信側は要求を送信しますが、応答は接続タイムアウト値の 120 秒 (「接続タイムアウト」の値による) 以内に返りません。
- b. デリバリー・マネージャーは、「トランスポートごとのスリープ」プロパティに指定された間隔である 3000 ミリ秒の間待機します。

- c. HTTP 宛先送信側は要求を送信しますが、応答は接続タイムアウト値の 120 秒（「接続タイムアウト」の値による）以内に返りません。

これはトランスポート再試行の 1/2 回目です。

- d. デリバリー・マネージャーは、「トランスポートごとのスリープ」プロパティに指定された間隔である 3000 ミリ秒の間待機します。
- e. HTTP 宛先送信側は要求を送信しますが、応答は接続タイムアウト値の 120 秒（「接続タイムアウト」の値による）以内に返りません。

これはトランスポート再試行の 2/2 回目です。

3. コンソール・ゲートウェイの再試行 2/3 回目。

デリバリー・マネージャーは、指定されているコンソール間隔である 20 秒待機し、その後コンソール・ゲートウェイの再試行 2/3 回目を開始します。

- a. HTTP 宛先送信側は要求を送信しますが、応答は接続タイムアウト値の 120 秒（「接続タイムアウト」の値による）以内に返りません。
- b. デリバリー・マネージャーは、「トランスポートごとのスリープ」プロパティに指定された間隔である 3000 ミリ秒の間待機します。
- c. HTTP 宛先送信側は要求を送信しますが、応答は接続タイムアウト値の 120 秒（「接続タイムアウト」の値による）以内に返りません。

これはトランスポート再試行の 1/2 回目です。

- d. デリバリー・マネージャーは、「トランスポートごとのスリープ」プロパティに指定された間隔である 3000 ミリ秒の間待機します。
- e. HTTP 宛先送信側は要求を送信しますが、応答は接続タイムアウト値の 120 秒（「接続タイムアウト」の値による）以内に返りません。

これはトランスポート再試行の 2/2 回目です。

4. コンソール・ゲートウェイの再試行 3/3 回目。

デリバリー・マネージャーは、指定されているコンソール間隔である 20 秒待機し、その後コンソール・ゲートウェイの再試行 3/3 回目を開始します。

- a. HTTP 宛先送信側は要求を送信しますが、応答は接続タイムアウト値の 120 秒（「接続タイムアウト」の値による）以内に返りません。
- b. デリバリー・マネージャーは、「トランスポートごとのスリープ」プロパティに指定された間隔である 3000 ミリ秒の間待機します。
- c. HTTP 宛先送信側は要求を送信しますが、応答は接続タイムアウト値の 120 秒（「接続タイムアウト」の値による）以内に返りません。

これはトランスポート再試行の 1/2 回目です。

- d. デリバリー・マネージャーは、「トランスポートごとのスリープ」プロパティに指定された間隔である 3000 ミリ秒の間待機します。
- e. HTTP 宛先送信側は要求を送信しますが、応答は接続タイムアウト値の 120 秒（「接続タイムアウト」の値による）以内に返りません。

これはトランスポート再試行の 2/2 回目です。

この時点で文書が送信されていない場合、その文書はゲートウェイの障害発生ディレクトリーに移動します。

前のシナリオの場合、発生した時間間隔は全部で以下のとおりです。

120 秒 (項目 1 (50 ページ)) - コンソール・ゲートウェイの接続タイムアウト
項目 1 小計 = 120 秒

20 秒 (項目 2 (50 ページ)) - コンソール・ゲートウェイの間隔 (コンソールの再試行 1/3 回目)
120 秒 (項目 2a (50 ページ)) - コンソール・ゲートウェイの接続タイムアウト
3 秒 (項目 2b (50 ページ)) - トランスポートの間隔 (トランスポートの再試行 1/2 回目)
120 秒 (項目 2c (51 ページ)) - コンソール・ゲートウェイの接続タイムアウト
3 秒 (項目 2d (51 ページ)) - トランスポートの間隔 (トランスポートの再試行 2/2 回目)
120 秒 (項目 2e (51 ページ)) - コンソール・ゲートウェイの接続タイムアウト
項目 2 小計 = 386 秒

20 秒 (項目 3 (51 ページ)) - コンソール・ゲートウェイの間隔 (コンソールの再試行 2/3 回目)
120 秒 (項目 3a (51 ページ)) - コンソール・ゲートウェイの接続タイムアウト
3 秒 (項目 3b (51 ページ)) - トランスポートの間隔 (トランスポートの再試行 1/2 回目)
120 秒 (項目 3c (51 ページ)) - コンソール・ゲートウェイの接続タイムアウト
3 秒 (項目 3d (51 ページ)) - トランスポートの間隔 (トランスポートの再試行 2/2 回目)
120 秒 (項目 3e (51 ページ)) - コンソール・ゲートウェイの接続タイムアウト
項目 3 小計 = 386 秒

20 秒 (項目 4 (51 ページ)) - コンソール・ゲートウェイの間隔 (コンソールの再試行 3/3 回目)
120 秒 (項目 4a (51 ページ)) - コンソール・ゲートウェイの接続タイムアウト
3 秒 (項目 4b (51 ページ)) - トランスポートの間隔 (トランスポートの再試行 1/2 回目)
120 秒 (項目 4c (51 ページ)) - コンソール・ゲートウェイの接続タイムアウト
3 秒 (項目 4d (51 ページ)) - トランスポートの間隔 (トランスポートの再試行 2/2 回目)
120 秒 (項目 4e (51 ページ)) - コンソール・ゲートウェイの接続タイムアウト
項目 4 小計 = 386 秒

すべての項目の時間間隔の合計 = 1278 秒 (約 21 分)

接続がタイムアウトにならないが拒否される事例では、前のシナリオはそのまま開始されますが、接続は即時に拒否されていたため、120 秒の接続タイムアウト期間は発生しません。

順方向プロキシ・サポート

HTTP および HTTPS トランスポートでは、構成されたプロキシ・サーバーを介して文書が送信されるように、順方向プロキシ・サポートを設定できます。WebSphere Partner Gateway を使用して、次のサポート・タイプを設定することができます。

- HTTP を介したプロキシ・サポート
- HTTPS を介したプロキシ・サポート
- 認証付きの HTTPS を介したプロキシ・サポート
- SOCKS を介したプロキシ・サポート

順方向プロキシを設定した後、それをデフォルトの順方向プロキシ宛先にすることによって、トランスポート用にグローバルにすることができます (例えば、すべての HTTP 宛先が順方向プロキシを使用します)。その後、個々の宛先ごと

に、デフォルトの順方向プロキシ・サーバーを使用しないよう選択することもでき、異なる順方向プロキシ・サーバーを使用するよう選択することもできます。順方向プロキシ・サポートの詳細については、「*WebSphere Partner GatewayE/A* ハブ構成ガイド」を参照してください。

証明書の管理

デジタル証明書とは、運転免許証やパスポートと同様の、オンラインの身分証明書のことです。デジタル証明書を使用して、個人または組織を識別することができます。

デジタル署名とは、公開鍵暗号方式を使用した電子文書に基づいた計算のことです。この処理によって、デジタル署名は署名される文書および署名者と結合されるため、複製することはできません。連邦政府のデジタル署名法案が通過したことにより、デジタル署名のある電子取引には、手書きで署名された取り引きと同等の法的効力があります。

WebSphere Partner Gateway はデジタル証明書を使用して、内部パートナーと外部パートナー間で行われるビジネス文書トランザクションが信頼できるものであるかどうかを検証します。デジタル証明書は、暗号化や復号化にも使用されます。

1 次証明書と 2 次証明書を指定して、文書交換が中断されないようにすることができます。1 次証明書はすべてのトランザクションで使用します。2 次証明書は、1 次証明書が期限切れになったり失効したりした場合に使用します。

デジタル証明書は、構成処理時にアップロードされ、識別されます。

証明書の有効期限が切れていたり失効していたりすると、証明書は使用不可になり、コンソールにその状態が反映されます。ただし、これはルート証明書または中間証明書としてアップロードされた証明書には適用できません。1 次証明書の期限が切れていると、使用不可になり、2 次証明書が 1 次証明書として設定されます。証明書が期限切れになったり失効したりすると、イベントが生成されます。

選択した証明書タイプを基にした「証明書の使用」オプションを使用できます。ハブ・オペレーター・プロファイルでは、デジタル署名、暗号化、または SSL クライアント証明書に対して「証明書の使用」を設定できます。パートナー・プロファイルでは、暗号化証明書に対して「証明書の使用」を設定することができます。例えばハブ・オペレーター・プロファイル内でのデジタル署名と暗号化のように、同じ証明書が異なる目的で使用されることになっている場合は、デジタル署名のために 1 度と、暗号化証明書のために 1 度の、合わせて 2 度ロードする必要があります。ただし、証明書をデジタル署名や SSL クライアントに使用する場合は、同じ証明書エントリーで、対応するチェック・ボックスを設定できます。

このような証明書は、デジタル署名と SSL クライアントに対してそれぞれ一度ずつ、合わせて 2 回ロードすることもできます。その場合は、2 次証明書でも同じパターンに従う必要があります。例えば、デジタル署名と SSL クライアントに対する別々の証明書として 1 次証明書をロードした場合は、2 次証明書も別々の証明書エントリーとしてロードする必要があります (証明書が同じ場合でもそうします)。

完全な certpath を構築して検証するには、証明書チェーン内の証明書すべてをアップロードする必要があります。例えば、証明書チェーンに A -> B -> C -> D (A -> B は、A が B の発行者という意味) という証明書がある場合は、証明書 A、B、および C はルート証明書としてアップロードしてください。証明書の 1 つが使用不可の場合は、certpath が構築されず、トランザクションは正常に行われません。CA 証明書は、認証局が保持する証明書リポジトリから取得できます。ルート証明書と中間証明書は、ハブ・オペレーター・プロファイルでのみアップロード可能です。

注: 以下のセクションの手順を実行する場合は、先に証明書をシステムにロードしておく必要があります。証明書のロードの詳細については、「*WebSphere Partner Gateway E/A* ハブ構成ガイド」を参照してください。

証明書管理ビューを使用すると、個々のパートナー接続に使用される証明書セットを変更できます。個々のパートナー接続のフィルタリングと配置のオプションが提供されます。接続時に使用する証明書セットを変更してください。別の方法として、これをパートナー接続自体から行うこともできます。証明書セットを管理する手順は、次のとおりです。

1. コンソールで、「プロファイル」 > {パートナー} > 「証明書」 > 「証明書管理」にナビゲートします。
2. ハブ・オペレーターとしてログインしている場合、パートナー接続を配置するには、内部パートナーと外部パートナーを選択します。両方の値が「すべて」にならないようにしてください。
3. 「検索」をクリックして、パートナーまたはパートナーのサブセットをフィルタリングします。

注: 「ソース (From)」パッケージと「ターゲット (To)」パッケージが、パートナーに基づいてプリロードされています。サブセットも、選択に基づいてテーブルに表示されます。テーブルの列には、SSL クライアント、デジタル署名 (「ソース (From)」パートナーが「すべて」に設定されているときに表示されます)、および暗号化 (「ターゲット (To)」パートナーが「すべて」に設定されているときに表示されます) が表示されます。行には操作タイプが表示されます。

4. 証明書セットを更新し、「保存」をクリックします。変更内容は接続レベルで反映されます。

certpath 関連プロパティの構成

certpath プロパティは、WebSphere Application Server 管理コンソールと WebSphere Partner Gateway コンソールを使用して構成できます。これらのプロパティにアクセスするには、「システム構成」 > 「DocMgr 構成」 > 「セキュリティ」をクリックします。プロパティは、読み取り専用表示により表示されます。プロパティを編集する場合は、「編集」アイコンをクリックします。以下に、certpath 関連プロパティを使用した構成処理についての簡単な要約を説明します。

bcg.CRLDir

このプロパティは、CRL を格納するディレクトリの名前を含みます。デフォルト値は以下のとおりです。

<WebSphere Install Dir>/common/security/crl

bcg.checkRevocationStatus

このプロパティは、失効状況を検査するかどうかを指定します。このプロパティで有効な値は true、false、および空白です。

値を true または空白に設定すると、デジタル証明書の失効状況が検査されます。値を false に設定すると、失効状況は検査されません。

このプロパティのデフォルト値および推奨設定値は true です。

bcg.build_complete_certpath

このプロパティは、certpath をルート証明書に作成するか発行者証明書に作成するかを指定します。このプロパティで有効な値は true、false、および空白です。

値を true または空白に設定すると、certpath はルート証明書に作成されます。値を false に設定すると、certpath は発行者証明書のみで作成されます。

このプロパティのデフォルト値および推奨設定値は true です。

CRL DP の構成

CRL DP を構成するには、以下を行う必要があります。

- Java 仮想マシンを設定して CRL DP を使用可能または使用不可にします。
- HTTP プロキシ・ホストおよびポートを設定します。

CRL DP 用の Java 仮想マシン設定の変更: アプリケーション・サーバー・プロセスの Java 仮想マシン構成を表示および変更するには、管理コンソールの「Java 仮想マシン」ページを使用するか、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用してスクリプトで構成を変更します。

1. 管理コンソールで、「サーバー」 > 「アプリケーション・サーバー」 > <サーバー> > 「Java およびプロセス管理」 > 「プロセス定義」 > 「Java 仮想マシン」を選択します。
2. 以下で説明する Java 仮想マシン設定の値を指定して、「OK」をクリックします。
3. 次のページが表示されたら、コンソール・タスクバーの「保存」をクリックして、マスター構成に対する変更内容を保存します。
4. アプリケーション・サーバーを再始動します。

Java 仮想マシンの構成について詳しくは、WebSphere Application Server の資料を参照してください。

CRL DP を使用可能にするには、「汎用 JVM プロパティ (Generic JVM Properties)」フィールドの Java 仮想マシン・プロパティである com.ibm.security.enableCRLDP を以下のように true に設定します。

```
-D-com.ibm.security.enableCRLDP=true
```

CRL DP を使用不可にするには、「汎用 JVM プロパティ (Generic JVM Properties)」フィールドの Java 仮想マシン・プロパティである com.ibm.security.enableCRLDP を以下のように false に設定します。

```
-D-com.ibm.security.enableCRLDP=false
```

CRL DP 用の HTTP プロキシ・ホストおよびポートの設定: 「一般 JVM プロパティ (Generic JVM Properties)」フィールドの以下の Java 仮想マシン・プロパティを設定します。

```
-D-http.proxyHost=<proxy host name or ip address>
```

```
-D-http.proxyPort=<proxy port number>
```

HTTP プロキシ・ホストおよびポートを除去するには、「汎用 JVM プロパティ (Generic JVM Properties)」フィールドの Java 仮想マシン・プロパティから以下のプロパティを除去します。

```
-D-http.proxyHost
```

```
-D-http.proxyPort
```

注: これらのプロパティを変更する場合には、必ず WebSphere Partner Gateway アプリケーションを実行するすべてのサーバーで変更を行ってください。

デジタル証明書の表示および編集

ハブ・オペレーター・プロファイルの下に保管されている (前にシステムにアップロードされた) デジタル証明書をリストおよび編集するには、次の手順を使用します。

注: 取引先プロファイルの下に保管されている証明書を表示および編集するには、まず「パートナーの検索」ページで取引先を選択してから、「証明書」タブを選択します。

1. 「アカウント管理」>「プロファイル」>「証明書」の順にクリックします。デジタル証明書リストが表示されます。

注: デジタル証明書の日付が赤色の場合は、この証明書が期限切れかまだ有効でないことを示しています。

2. 証明書の横にある「詳細の表示」アイコンをクリックします。「証明書の詳細を表示 (Viewing Certificate Details)」ウィンドウが表示されます。
3. 「編集」アイコンをクリックしてデジタル証明書を編集します。
4. ウィンドウに表示された次のパラメーターを更新して、「保存」をクリックします。

表 6. デジタル証明書のパラメーター

パラメーター	説明
証明書の名前	証明書の名前を指定します。
説明	証明書について簡単に説明します。
状況	証明書の状況 (有効または無効) を表示するには、「有効」を選択します。状況を使用不可に設定するには、「無効」を選択します。

デジタル証明書の使用不可化

デジタル証明書を使用しない場合は、次の手順に従って証明書を使用不可にします。

1. 「アカウント管理」>「プロファイル」>「証明書」の順にクリックします。デジタル証明書リストが表示されます。

2. 使用不可にする証明書の横にある「詳細の表示」アイコンをクリックします。
3. 「編集」アイコンをクリックして証明書の詳細を編集します。
4. 「状況」で、「無効」を選択します。
5. 「保存」をクリックします。

注: 1 次証明書が使用不可になっている場合は、対応する 2 次証明書が 1 次になります。2 次証明書が使用不可になっている場合は、2 次証明書がないという警告が表示されます。

B2B 属性値の変更

文書定義の属性値を変更するには、次の手順に従います。

注: 上位の文書定義の属性値を変更すると、その内容は同じノード内にある下位の定義に継承されます。

1. 「アカウント管理」>「プロファイル」>「B2B 機能」の順にクリックします。「B2B 機能」ウィンドウが表示されます。
2. ノードをクリックして、適切な文書定義レベルまでノードを個別に展開するか、0 から 4 までの数字または「すべて」を選択して、表示されているすべての文書定義ノードを選択したレベルまで展開します。
3. 「編集」アイコンをクリックし、「更新」列の適切な属性値を変更します。
4. 「保存」をクリックします。

パートナー接続の管理

パートナー接続とは、システムが文書を処理し、内部パートナーとそのさまざまなパートナーとの間で文書を送信できるようにする仕組みです。接続には、RosettaNet TPA 属性、トランスポート・プロトコル、文書処理アクション、動作モード、パートナー宛先などの各文書タイプの適切な交換に必要な情報が含まれています。内部パートナーとそのパートナーの 1 人との間に接続が存在しないと、文書は送信できません。

システムは、各自の B2B 機能に基づいて、内部パートナーと外部パートナー間の接続を自動的に作成します。コミュニティー・コンソールの B2B 機能モジュールに入力されたデータによって、使用可能な各接続の機能が決まります。各接続の構成は、ハブ・コミュニティーのニーズに合わせて変更できます。

接続コンポーネント

個々の接続は、次の 4 つのコンポーネントで構成されています。

- 属性
- アクション
- 宛先
- 動作モード

接続が作成されると、そのルーティングおよび処理の機能に合わせてこの 4 つのコンポーネントすべてを変更することができます。表 7 では、各コンポーネントが説明されています。

表 7. パートナーの管理コンポーネント

コンポーネント	説明
属性	属性とは、接続によって検証、暗号化検査、再試行カウントなどのさまざまな文書処理およびルーティングの機能で使用される情報です。
アクション	接続作成時の効率を向上させるために、新規接続の属性にパートナーの B2B 機能が自動的に継承されます。 アクションとは、特定文書の処理に使用される一連のステップです。各接続は通常、変換、重複検査、検証、またはパススルー・ルーティングなどの 1 つ以上のステップで構成されています。接続ごとに適切なアクションを選択できます。
宛先	各接続には、宛先と戻り宛先が含まれています。戻り宛先には、文書フローを開始するパートナーの URI およびトランスポート情報が含まれています。受信確認通知や一般例外などのビジネス・シグナルは、戻り宛先経由で開始元のパートナーに送信されます。宛先オプションの「クライアント IP の検証」および「クライアント SSL 証明書の検証」は、戻り宛先に適用されます。
動作モード	宛先には、文書タイプを受信するパートナーの URI およびトランスポート情報が含まれています。 動作モードは、交換される文書の性質を示します。接続は、複数の動作モードを使用して、同じ文書を複数のシステムに対して送信および処理できません。このため、1 つの組織内の複数システムで実動、テスト、またはルーティングに 1 つの接続を使用することによって、接続の効率が向上します。

接続の重複

不注意な接続の重複を避けるために、各接続は次のパラメーターに基づいて一意的に識別されます。

- ソース・パートナー
- ソース・パッケージおよびバージョン
- ソース・プロトコルおよびバージョン
- ソース文書タイプおよびバージョン
- ソース・アクティビティ (定義されている場合)
- ソース・アクション (定義されている場合)
- ターゲット・パートナー

例えば、同じソース・パートナー、ソース文書、およびターゲット・パートナーの接続が 2 つある場合は、各接続でターゲット文書が異なっても、両方の接続をアクティブ化することはできません。この場合、いずれかの接続を非アクティブ化する必要があります。

注: 追加の接続プロファイルが関連付けられている場合、EDI 文書は、説明したように、複数の接続を保持できます。接続プロファイルに構成された値は、接続を一意的に識別するための基準を追加するのに使用されます。

接続の検索

接続にアクセスするには、接続を検索します。接続を検索するには、次の 2 つの方法があります。

- 「接続の管理」ウィンドウを使用して、ソースおよび受信側を選択することによって接続を検索する。後述する『接続の基本検索の実行』を参照してください。
- システムの拡張検索機能を使用して、ビジネス ID、開始および受取のパッケージおよびプロトコル、開始および受取の文書フローなどの追加の検索条件を指定する。60 ページの『接続の拡張検索の実行』を参照してください。

接続の基本検索を実行するには、次の手順に従います。ソースおよび受信側を選択する場合は、次のガイドラインに従ってください。

- ソースおよび受信側は一意にする。
- ソースおよび受信側を選択するときには、実動宛先とテスト宛先を混用しないでください。混用するとエラーが発生します。ソースおよび受信側は、両方とも実動宛先またはテスト宛先にそろえる必要があります。
 1. 「アカウント管理」>「パートナーの接続」の順にクリックします。「接続の管理」ウィンドウが表示されます。
 2. 「ソース」の下で、ソースを 1 つ選択します。
 3. 「受信側」の下で、受信側を 1 つ選択します。

注: 新規接続を作成するには、ソースおよび受信側は一意である必要があります。

4. 「検索」をクリックして、指定した検索条件に一致する接続を検索します。
5. 接続をアクティブ化するには、「アクティブ化」をクリックします。「接続の管理」ウィンドウが表示されます。このウィンドウには、ソースおよび受信側のパッケージ、プロトコル、文書タイプが表示されるほか、パートナー接続状況およびパラメーターを表示および変更するためのオプションも表示されます。
6. 次に示す項目を必要に応じてクリックします。
 - 「非アクティブ化」アイコンをクリックすると、接続が使用不可になります。
 - 「削除」アイコンをクリックすると、接続が使用可能になります。
 - 「属性」をクリックすると、「接続属性」ウィンドウが表示されます。ここでは、接続の属性を表示および変更できます。詳しくは、61 ページの『パートナーの属性値の変更』を参照してください。
 - 「アクション」をクリックすると、「接続の詳細」ウィンドウが表示されます。ここでは、アクションを表示および変更できます。詳しくは、62 ページの『新規アクションの選択』を参照してください。
 - 「宛先」をクリックすると、「接続管理宛先」ウィンドウが表示されます。ここでは、ソースまたは宛先を表示および変更できます。詳しくは、62 ページの『宛先または戻り宛先の変更』を参照してください。

接続の基本検索の実行

接続の基本検索を実行するには、次の手順に従います。ソースおよび受信側を選択する場合は、次のガイドラインに従ってください。

- ソースおよび受信側は一意にする。

- ソースおよび受信側を選択するときには、実動宛先とテスト宛先を混用しないでください。混用するとエラーが発生します。ソースおよび受信側は、両方とも実動宛先またはテスト宛先にそろえる必要があります。
 1. 「アカウント管理」>「パートナーの接続」の順にクリックします。「接続の管理」ウィンドウが表示されます。
 2. 「ソース」の下で、ソースを 1 つ選択します。
 3. 「受信側」の下で、受信側 を 1 つ選択します。

注: 新規接続を作成するには、ソースおよび受信側は一意である必要があります。

4. 「検索」をクリックして、指定した検索条件に一致する接続を検索します。
5. 接続をアクティブ化するには、「アクティブ化」をクリックします。「接続の管理」ウィンドウが表示されます。このウィンドウには、ソースおよび受信側のパッケージ、プロトコル、文書タイプが表示されるほか、パートナー接続状況およびパラメータを表示および変更するためのオプションも表示されます。
6. 次に示す項目を必要に応じてクリックします。
 - 「非アクティブ化」アイコンをクリックすると、接続が使用不可になります。
 - 「削除」アイコンをクリックすると、接続が使用可能になります。
 - 「属性」をクリックすると、「接続属性」ウィンドウが表示されます。ここでは、接続の属性を表示および変更できます。詳しくは、61 ページの『パートナーの属性値の変更』を参照してください。
 - 「アクション」をクリックすると、「接続の詳細」ウィンドウが表示されます。ここでは、アクションを表示および変更できます。詳しくは、62 ページの『新規アクションの選択』を参照してください。
 - 「宛先」をクリックすると、「接続管理宛先」ウィンドウが表示されます。ここでは、ソースまたは宛先を表示および変更できます。詳しくは、62 ページの『宛先または戻り宛先の変更』を参照してください。

接続の拡張検索の実行

接続の拡張検索を実行するには、次の手順に従います。ソースおよび受信側を選択する場合は、次のガイドラインに従ってください。

- ソースおよび受信側は一意にする。
- ソースおよび受信側を選択するときには、実動宛先とテスト宛先を混用しないでください。混用するとエラーが発生します。ソースおよび受信側は、両方とも実動宛先またはテスト宛先にそろえる必要があります。
 1. 「アカウント管理」>「パートナーの接続」の順にクリックします。「接続の管理」ウィンドウが表示されます。
 2. ウィンドウの右上隅にある「拡張検索」をクリックします。

3. 表 8 に示すように、次のパラメーターをすべて入力します。

表 8. 「拡張検索」ウィンドウ

パラメーター	説明
パートナー名で検索	ソースおよび受信側の名前。
ビジネス ID で検索	ソースおよび受信側のビジネス ID。DUNS、DUNS+4、および Freeform があります。
ソース・パッケージ (Source Package)	ソースによって使用されるパッケージ。
受信側パッケージ	受信側によって使用されるパッケージ。
ソース・プロトコル (Source Protocol)	ソースによって使用されるプロトコル。
受信側プロトコル	受信側によって使用されるプロトコル。
ソース文書タイプ	ソースによって使用される文書タイプ。
受信側文書タイプ	レシーバーによって使用される文書タイプ。
接続状況	使用可能と使用不可の両方の接続を検索できます。

4. 「検索」をクリックします。検索条件に一致する接続が検出されます。

接続構成の変更

接続の構成を変更するには、次の手順に従います。

1. 「アカウント管理」>「パートナーの接続」の順にクリックします。「接続の管理」ウィンドウが表示されます。
2. 接続の基本検索 (59 ページの『接続の基本検索の実行』を参照) または接続の拡張検索 (60 ページの『接続の拡張検索の実行』) を実行します。
3. 次に示す適切なセクションを参照してください。
 - 『パートナーの属性値の変更』
 - 62 ページの『新規アクションの選択』
 - 62 ページの『新規変換マップの選択』
 - 62 ページの『宛先または戻り宛先の変更』
 - 62 ページの『接続の使用不可化または非アクティブ化』。

パートナーの属性値の変更

パートナーの属性値を変更するには、次の手順に従います。

1. ソース・パートナーまたは受信側パートナーのいずれかの「属性」をクリックします。
2. 接続に関連したすべての宛先タイプに属性変更を適用する場合は、「スコープ」リストで、「接続」を選択します。または、変更を適用する動作モードを選択します。
3. 「展開」アイコンをクリックし、属性値を変更する文書定義までノードを展開します。
4. 属性値を更新します。
5. 「保存」をクリックします。

新規アクションの選択

新規アクションを選択するには、次の手順に従います。

1. 「アクション」をクリックします。
2. リストから新規アクションを選択します。
3. 「保存」をクリックします。

新規変換マップの選択

新規変換マップを選択するには、次の手順に従います。

1. 「アクション」をクリックします。
2. リストから新規変換マップを選択します。
3. 「保存」をクリックします。

宛先または戻り宛先の変更

ソース受信側または宛先受信側を変更するには、次の手順に従います。

1. 「宛先」をクリックします。
2. リストからソースまたは戻り宛先を選択します。
3. 「保存」をクリックします。

接続の使用不可化または非アクティブ化

接続を使用不可にするには、「有効」列の「非アクティブ化」アイコンをクリックします。接続の表示色が赤色に変わり、接続が使用不可になったことを示します。接続をもう一度使用可能にするには、「削除」アイコンをクリックします。

接続を非アクティブ化するには、「削除」アイコンをクリックします。接続の表示色がグレーに変わり、アイコンが非表示になります。接続を再度使用可能にするには、「アクティブ化」をクリックします。

EDI 文書の場合は、同じパートナーに適用される数個の接続を確立できます。さまざまな接続は、接続プロファイルを使用して区別されます。関連付けられた接続プロファイル名を持つ接続を削除すると、システムからその接続が削除されます。非アクティブ化できるのは、関連付けられた接続プロファイルを持たないベース・レベルの接続のみです。接続プロファイルの詳細については、「*WebSphere Partner Gateway E/A ハブ構成ガイド*」を参照してください。

除外リストの管理

除外リストを使用することにより、ハブ管理者は、文書マネージャーを構成して、取引先からマネージャーに送信される RosettaNet 通知を制限できます。取引先は、名前およびビジネス ID で識別されます。

次の通知をルーティング制限として選択できます。

- 0A1 - 失敗の通知

特定の文書タイプを完了できない通知がパートナーからマネージャーに送信されます。

- バックエンド・イベント

パートナーがビジネス文書を正常に受信したことをマネージャーに通知するために送信されるシステム生成の XML ファイル。

除外リストへのパートナーの追加

パートナーを除外リストに追加するには、次の手順に従います。

1. 「アカウント管理」>「除外リスト」の順にクリックします。「除外リスト」ウィンドウが表示されます。
2. 「パートナー名」リストからパートナーを選択します。パートナーとそのビジネス ID のリスト、および除外の状況が表示されます。「すべての通知の送信」がデフォルトで選択されています。

除外リストの編集

除外リストの編集が必要な場合があります。例えば、通知を内部パートナーに送信するのを制限する場合があります。

1. 「アカウント管理」>「除外リスト」の順にクリックします。「除外リスト」ウィンドウが表示されます。
2. 「パートナー名」リストからパートナーを選択します。パートナーのリスト、パートナーのビジネス ID、および除外の状況が表示されます。
3. 編集する通知の横にある「編集」アイコンをクリックします。
4. 内部パートナーへの送信を制限する通知の下にあるチェック・ボックスを選択します。「すべての通知の送信」を選択して、すべての送信制限を除去します。

第 5 章 パートナー・マイグレーションの管理

構成マイグレーション・ユーティリティーにより、WebSphere Partner Gateway の構成データを選択的にエクスポートおよびインポートできます。これは他のデータ移動オプション（データベースのバックアップやリストアなど）とは異なります。データはユーティリティーを使用したエクスポート時に選択的に抽出されますが、データベース・バックアップは通常選択的でないためです。構成マイグレーション・ユーティリティーでは、システム上に既に存在する構成を上書きせずに構成をインポートできますが、バックアップからのデータベースのリストアでは、通常既存のデータは上書きされます。

構成マイグレーション・ユーティリティーは、選択されたパートナー定義とシステム定義を、XML ファイルおよびサポート・ファイルのセットにエクスポートします。その後、これらのファイルを別のシステムにインポートし、構成をシステム間で移動させることができます。

注：システム間でデータを転送する場合は、両方のシステムで同じバージョンの WebSphere Partner Gateway が稼働している必要があります。

最初にマイグレーション・ユーティリティーを使用して開発システムおよびテスト・システムから実動システムに構成データを移動させますが、提供されている XML スキーマに基づいて作成する XML ファイルから構成データを読み込むこともできます。

マイグレーション・ユーティリティーを実行するのに、以下の 2 つのオプションを選択できます。

1. マイグレーション・ユーティリティーをスクリプトを使用して開始できるように、コマンド行インターフェースが提供されています。
2. ユーザー作成 Java プログラムでマイグレーション・ユーティリティーを呼び出せるように、API が提供されています。API 使用の詳細については、「*WebSphere Partner Gateway Programming Guide*」を参照してください。

マイグレーション・ユーティリティーは、WebSphere Partner Gateway をリモートで呼び出すスタンドアロン Java アプリケーションとしてインプリメントされます。このユーティリティーは、BCGMigrationUtil.zip という名前の .zip ファイルにパッケージングされています。このファイルは、ハブ・インストーラーによって *hub installation/console/support* ディレクトリーにインストールされています。

コマンド行からのマイグレーション・ユーティリティーの使用

マイグレーション・ユーティリティーを使用できるようにするには、このユーティリティーを実行するワークステーション上で BCGMigrationUtil.zip ファイルを解凍する必要があります。ユーティリティーのファイルをローカル・ファイル・システムに解凍したら、次の前提条件のステップを実行します。

1. エクスポート元またはインポート先の WebSphere Partner Gateway システムのコンソール・コンポーネントが稼働している必要があります。ユーティリティー

は、コンソール・コンポーネントがインストールされているマシンとは異なるワークステーションで実行可能です。これは、ネットワーク上で IIOP (EJB) プロトコルを使用して、ユーティリティーがコンソールにアクセスするためです。ワークステーション間は接続されている必要があり、コンソールの IIOP ポート (通常は 58809) は、ユーティリティーが稼働するワークステーションから使用可能である必要があります。

2. ユーティリティーを実行するワークステーションで Java 5 を使用可能にする必要があります。お使いのマシンに JDK1.5 をインストールしてください。

コマンド行スクリプトを実行してユーティリティーを開始すると、ユーティリティーはこのロケーションの JAVA_HOME システム環境変数を取得します。JAVA_HOME が未定義の場合は、スクリプトから Java 5 のホーム位置を入力するよう求められます。例えば、WebSphere Application Server が使用する目的でインストールされている Java 5 のコピーを使用できます。このためには、`<WebSphere Install Dir>%java` という値を使用します。

MIGRATION_PATH という名前の別のシステム環境変数は、BCGMigrationUtil.zip が解凍された場所を指すように設定できます。MIGRATION_PATH が未定義の場合は、スクリプトからこのディレクトリーへのパスを入力するよう求めるプロンプトが出されます。MIGRATION_PATH が指すディレクトリーは、.zip ファイルが解凍されるディレクトリーの下の bcfgmigrate というディレクトリーです。例えば、ファイルをディレクトリー `c:%IBM%migration` に解凍する場合は、MIGRATION_PATH を `c:%IBM%migration%bcfgmigrate` に設定します。

注: bcfgmigrate コマンドを実行するには、bcfgmigrate.bat/bcfgmigrate.sh ファイルへのアクセス権を「実行」に設定しておいてください。これは UNIX プラットフォームに適用されます。

3. データをエクスポートする場合は、エクスポート・オプション・ファイルが必要です。エクスポート・オプション・ファイルには、ユーティリティーによって抽出されるデータのタイプが指定されます。システム内の次の項目の構成データをエクスポートできます。
 - エンベローパーのスケジュール
 - イベント・コード
 - トランスポート・タイプおよび宛先タイプ
 - ハンドラー定義 (メタデータのみ。ユーザー作成実行可能コード JAR ファイルは手動で転送します)
 - 固定ワークフロー定義 (メタデータのみ。ユーザー作成実行可能コード JAR ファイルは手動で転送します)
 - 変数ワークフロー定義 (メタデータのみ。ユーザー作成実行可能コード JAR ファイルは手動で転送します)
 - プロキシ構成、エンベロープ・プロファイル
 - 接続プロファイル、検証マップ、変換マップ
 - FA マップ、レシーバー・インスタンス・データ
 - XML 文書ファミリーおよびフォーマット
 - ルーティング定義 (パッケージ、プロトコル、および文書タイプ)

- パートナー・プロファイル・データ (連絡先、アドレス、EDI 制御番号データ、および宛先データを含む)
- パートナーの B2B 機能
- パートナー接続
- アラート通知

export.zip というサンプルのエクスポート・オプション・ファイルは、*migration utility root/samples/export* ディレクトリにあります。このファイルは、サポートされるすべての構成データ・タイプをシステムからエクスポートします。オプション・ファイルは、XML ファイルか、XML ファイルが含まれる .zip ファイルです。XML は、*migration utility root/schemas* ディレクトリに配置されている XML スキーマ *bcgMigrationExport.xsd* に準拠している必要があります。

注: エクスポート・タイプ間の依存関係要件が満たされていることを確認します。

これらの依存関係については、『マイグレーション構成タイプの依存関係』のトピックで概要が説明されています。

4. データをインポートする場合、インポートするデータが必要です。データをエクスポートすることによってインポート・ファイルを作成することも、システムにロードする定義を含む独自のインポート・ファイルを作成することもできます。エクスポートした後、エクスポートされたデータは .zip ファイルに格納されます。.zip ファイルには、*migration utility root/schemas* ディレクトリに配置されている XML スキーマ *bcgMigrationImport.xsd* に準拠する XML ファイルが含まれます。この XML ファイルには、インポート・コードがエクスポートした構成タイプを再作成するために使用可能なデータが含まれています。

.zip ファイルには、次のバイナリー・ファイルも含まれています。

- エクスポートされた検証マップ、変換マップ、および FA マップ。
- エクスポートされたルーティング・オブジェクト (パッケージ、プロトコル、および文書タイプ) の内部表現を含む *RoutingObjects.zip*。

独自のインポート・ファイルを作成するには、以下の手順に従います。

- *bcgMigrationImport.xsd* に準拠する XML ファイルを作成します。

インポート・タイプ間の依存関係要件が満たされていることを確認する必要があります。依存関係について詳しくは、「Configuration type dependencies」を参照してください。

- インポート XML にマップまたはルーティング・オブジェクトが記述されている場合は、.zip ファイルのルート・ディレクトリに XML ファイルを含む .zip ファイルを作成します。

ディレクトリは以下のとおりです。

- ルーティング・オブジェクトは、ルートの *RoutingObjects* ディレクトリ内にある *RoutingObjects.zip* というファイルに含まれています。
- 変換マップは、root の *TransformationMaps* ディレクトリにあります。
- 検証マップは、root の *ValidationMaps* ディレクトリにあります。

- FA マップは、root の FAMaps ディレクトリーにあります。

注: ファイル・ディレクトリーのレシーバーをインポートしている場合、そのレシーバーのファイル・システムには、そのファイル・システム内のレシーバーが使用するファイル・ディレクトリーが既に存在してはいけません。インポート前に、そのようなディレクトリーは削除してください。

5. マイグレーション・ユーティリティーは、ユーザーが使用しているコンソールにログオンする必要があります。 WebSphere Partner Gateway ユーザー・アカウントには、構成をエクスポートまたはインポートするための許可が必要です。hubadmin ユーザーにはこの許可があります。hubadmin 以外のアカウント、または hubadmin グループのメンバーであるユーザー以外のアカウントを使用する場合は、マイグレーション・モジュールを使用するためのそのユーザーの許可を使用可能にする必要があります。デフォルトでは、この許可は使用不可になっています。

コマンド行からの呼び出し

コマンド行ユーティリティーを使用して、構成データのある WebSphere Partner Gateway インスタンスから別の WebSphere Partner Gateway インスタンスにマイグレーションできます。ユーティリティーを使用する前提条件ステップを計算した後、バッチ・ファイル `bcgmigrate.bat` またはシェル・スクリプト `bcgmigrate.sh` を実行してユーティリティーを起動することができます。これらのファイルがある場所は、以下のとおりです。

- **Windows の場合:** `¥<migration utility root>¥bcgmigrate¥bin¥`
- **Linux/UNIX の場合:** `/<migration utility root>/bcgmigrate/bin/`

注: ユーザーは、マイグレーション・モジュールの許可が使用可能な Hubadmin グループまたはオペレーターの下別のグループに属している必要があります。

引数を指定せずにスクリプトを実行すると、必要な引数および構文を示すヘルプのプロンプトが表示されます。

Windows のコマンド行呼び出しの構文は、以下のとおりです。

```
bcgmigrate [-h hostname:bootstrap_port] [-a import|export] [-f filename with path] [-u userid] [-p password] [-o] [-d 1..5] [-r root_path]
```

UNIX システムの場合、呼び出しの構文は似ていますが、`bcgmigrate` の代わりに `bcgmigrate.sh` を使用します。

凡例:

- h は、コンソール・コンポーネントが稼働している `hostname:bootstrap` ポートです
- a は、アクティビティー (インポートまたはエクスポートのいずれか) です。
- f は、エクスポート・オプション・ファイルまたはインポート構成ファイルの完全なファイル名です
- u は、マイグレーション許可を持つ WebSphere Partner Gateway ユーザー ID です
- p は、WebSphere Partner Gateway ユーザーのパスワードです
- o は、上書きオプションです

注: 上書きオプションは、インポート・アクティビティーでのみ使用されます。
-o を指定しない場合、新規の構成のみが作成され、既存の構成データは変更されません。-o を指定すると、インポートされたデータ内で違いがあると、既存の構成が上書きされます。

-d は、1 から 5 までのデバッグ・レベルで、5 ではほとんどのデバッグ出力が提供されます。引数 -d はオプションなので、省略できます。省略した場合、エラーのみがログに記録されます。

-r は、エクスポートされたデータが保管され、ログ・ファイルが書き込まれるルート・パスです。引数 -r はオプションなので、省略できます。省略すると、エクスポートされたデータは -f オプションによって指定されるディレクトリーの下に書き込まれます。

エクスポート・コマンドの例

以下は、Windows システムでのエクスポート・コマンドの例です。

```
bcgmigrate -h localhost:58809 -a export -f D:\partnerMigration\export.xml  
-u hubadmin -p admin123 -d 5 -r d:%partnermigration%output
```

UNIX システムの場合、呼び出しの構文は似ていますが、bcgmigrate の代わりに bcgmigrate.sh を使用します。

例の出力は、-r オプションによって指定されるルート・ディレクトリーの下に保存されます。

出力は、BCGMigration_<-h オプションで指定される IP またはホスト名>.zip という .zip ファイルに書き込まれます。ログは、BCGMigration.log ファイルに書き込まれます。エクスポートで -r オプションを指定しないと、出力は -f オプションで構成されるディレクトリーに格納されます。

インポート・コマンドの例

以下は、Windows システムでのインポート・コマンドの例です。

```
bcgmigrate.bat -h localhost:58809 -a import  
-f D:%partnerMigration%BCGMigration_localhost.zip -u hubadmin -p admin123  
-d 5 -r d:%partnermigration%output
```

UNIX システムの場合、呼び出しの構文は似ていますが、bcgmigrate.bat の代わりに bcgmigrate.sh を使用します。

コンソールでの XML エLEMENTのマッピング

エクスポートされたファイルまたはインポートされるファイルは XML 形式です。XML エLEMENTは、コンソール上の正確な名前を表さない場合があります。次の表は、コンソール画面と XML ファイル内のルート・ELEMENTの間のマッピングを示しています。この表はビューとELEMENT名のみを含み、画面上の個々のフィールドを含みません。ELEMENT名がビュー内のリンクである場合、そのELEMENT名はイタリック体で表記されています。

表9. コンソールでの XML ELEMENTのマッピング

XML 内のELEMENT名	コンソール・ビュー
EnveloperSchedulingInfo	ハブ管理 > ハブ構成 > EDI > エンベローパー

表9. コンソールでの XML エLEMENTのマッピング (続き)

XML 内のELEMENT名	コンソール・ビュー
TransportTypeInfo	ハブ管理 ハブ構成 > レシーバー > トランスポート・タイプの管理、および、アカウント管理 > パートナー > 宛先 > トランスポート・タイプの管理
DestinationTypeInfo	ハブ管理 > ハブ構成 > レシーバー > レシーバーの作成、および、アカウント管理 > パートナー > 宛先 > レシーバーの作成。動作モードは DestinationTypeInfo で表されます。
HandlerInfo	ハブ管理 > ハブ構成 > ハンドラー。さらに 4 つの内部メニューがあります。そのサブメニューでのすべてのハンドラーは、アクション、固定ワークフロー、宛先、およびレシーバーです。
FixedWorkflowStepInfo	ハブ管理 > ハブ構成 > 固定ワークフロー > インバウンド、および、ハブ管理 > ハブ構成 > 固定ワークフロー > アウトバウンド。それぞれのステップは FixedWorkflowStepInfo として表されます。
WorkflowInfo	ハブ管理 > ハブ構成 > アクション。リスト・ページ内の各アクションは、WorkflowInfo として表されます。
EnvelopeProfileInfo	ハブ管理 > ハブ構成 > EDI > エンベロープ・プロファイル。リスト・ページ内の各エンベロープ・プロファイルは、EnvelopeProfileInfo により表されます。
MapInfo	ハブ管理 > ハブ構成 > マップ > 検証マップ。リスト・ページ内の各マップは、MapInfo として表されます。 routingNameList という内部タグがあります。これは検証マップのリンク先のルーティング・オブジェクト名を表します。
TransformMapInfo	ハブ管理 > ハブ構成 > マップ > 変換マップ。リスト・ページ内の各マップは、TransformMapInfo として表されます。
FAMapInfo	ハブ管理 > ハブ構成 > マップ > FA マップ。リスト・ページ内の各マップは、FAMapInfo として表されます。 routingNameList という内部タグがあります。これは FA マップのリンク先のルーティング・オブジェクト名を表します。
ReceiverInfo	ハブ管理 > ハブ構成 > レシーバー。リスト・ページ内の各レシーバーは、ReceiverInfo により表されます。
ProtocolFamilyInfo	ハブ管理 > ハブ構成 > XML 形式。それぞれの文書ファミリーは、ProtocolFamilyInfo により表されます。

表9. コンソールでの XML エLEMENTのマッピング (続き)

XML 内のELEMENT名	コンソール・ビュー
RoutingObjectPkgInfo	<p>ハブ管理 > ハブ構成 > 文書定義。</p> <p>RoutingObjectPkgInfo は単なるプレースホルダーです。その下に RoutingObject というフォルダーと RoutingObjects.zip という zip ファイルがあります。この zip ファイルには、すべてのパッケージ情報が XML 形式で含まれます。この XML ファイルは、次の場所からダウンロードできるパッケージ・ファイルと同じです。ハブ管理 > ハブ構成 > 文書定義 > パッケージのアップロード/ダウンロード。</p>
ValidObjInteractInfo	<p>ハブ管理 > ハブ構成 > 文書定義 > インタラクションの管理 > 検索。リスト・ページ内の各インタラクションは、ValidObjInteractInfo により表されません。</p>
PartnerInfo	<p>アカウント管理 > パートナー。PartnerInfo は、リスト内の各パートナーを表します。</p>
ContactInfo	<p>アカウント管理 > パートナー > 連絡先。</p> <p>ContactInfo は、リスト内のそれぞれの連絡先を表します。</p>
PartnerAddressInfo	<p>アカウント管理 > パートナー > アドレス。</p> <p>PartnerAddressInfo は、リスト内の各アドレスを表します。</p>
ParticipantControlInfo	<p>ハブ管理 > ハブ構成 > EDI > 制御番号の初期化 > 検索。ParticipantControlInfo は、各パートナーの初期の制御番号を表します。</p>
ConnectionProfileInfo	<p>ハブ管理 > ハブ構成 > EDI > 接続プロファイル。リスト・ページ内のそれぞれの接続プロファイルは、ConnectionProfileInfo により表されます。</p>
GatewayInfo	<p>アカウント管理 > パートナー > 宛先。リストされたそれぞれの宛先の詳細は、GatewayInfo を表します。</p>
DefaultGatewayInfo	<p>アカウント管理 > パートナー > 宛先 > デフォルト宛先の表示。このビューのそれぞれの行は、DefaultGatewayInfo を表します。</p>
CapabilityInfo	<p>アカウント管理 > パートナー > B2B 機能。ツリー内で使用可能状態または使用不可状態が示されている高輝度の行は、CapabilityInfo により表されます。属性を受け取る属性編集アイコンがあります。これらの属性は、ROAttrValueInfo 書式の CapabilityInfo の一部でもあります。</p>

表9. コンソールでの XML エLEMENTのマッピング (続き)

XML 内のELEMENT名	コンソール・ビュー
ChannelInfo	アカウント管理 > パートナー接続 > 検索。それぞれの行はアクティブか、またはアクティブにされた後で非アクティブにされています。最初はすべての接続が非アクティブにされた状態でした。これらを接続の作成に使用することができます。これが一度アクティブにされると、実際の接続が作成されます。非アクティブにされていても、接続はまだ存在しているからです。一度もアクティブにされたことのない接続は、実際の接続ではありません。
ProxyConfigInfo	アカウント管理 > 宛先 > 順方向プロキシ・サポート。リスト・ページ内のそれぞれの行は、ProxyConfigInfo により表されます。
EventCodeInfo	ハブ管理 > ハブ構成 > イベント・コード
AlertInfo	アカウント管理 > アラート

パートナー・マイグレーションのエクスポート

コマンド行ユーティリティーは、オプション・ファイルのロケーションを検索します。オプション・ファイルは、XML 形式または zip 形式が望ましく、同じマシンに配置される必要があります。エクスポート・オプション・ファイルには、タグに対する属性が何もありません。オプション・ファイルが zip 形式の場合、その zip には「XML a」オプションが含まれます。POJO からの入力は、ファイルではなく入力ストリームである可能性があります。その結果は、同じフォルダーの別の XML ファイルに、BCGMigration_HostName.xml という名前で保管されます。同じファイルをインポート機能の入力として使用することもできるため、

BCGMigration_HostName.xml という共通の名前が使用されます。POJO は、構成をエクスポートするパートナー・マイグレーション・ユーティリティーを呼び出すこともできます。オプション・ファイルまたは入力ストリームは、入力の 1 つです。エクスポートの際に、id、rowTS、およびタイム・スタンプなどの内部 ID はエクスポートされません。名前や記述などの論理 ID のみがエクスポートされます。ハンドラー・タイプのような、ユーザー定義構成を持たない構成は、エクスポートされません。エクスポート・オプション・ファイルには、以下のオプションが含まれます。

1. パートナー - 各パートナーはタグにより指定されます。このオプションは、パートナー情報、IP アドレス、ビジネス ID、連絡先、およびアドレスなどの、パートナー・プロファイル情報をエクスポートします。パートナー・オプションが指定されたときは、以下のオプションも内部タグで指定できます。
 - a. ゲートウェイ - 「すべて」または「なし」。ゲートウェイがエクスポートされると、デフォルト・ゲートウェイもエクスポートされます。
 - b. B2B 機能 - 「すべて」または「なし」
 - c. 接続 - 「すべて」または「なし」
 - d. 初期制御番号 - 「すべて」または「なし」
2. グローバル構成

- a. ターゲット - 「すべて」または「なし」
- b. エンベローパー
- c. トランSPORT・タイプ
- d. 宛先タイプ
- e. ハンドラー - 「すべて」または「なし」
- f. ハンドラー属性 - ハンドラーに関して「すべて」または「なし」
- g. アクション - 「すべて」または「なし」
- h. 固定ワークフロー - 「すべて」または「なし」
- i. エンベロープ・プロファイル - 「すべて」または「なし」
- j. 検証マップ - 「すべて」または「なし」
- k. 変換マップ - 「すべて」または「なし」
- l. EDI FA マップ - 「すべて」または「なし」
- m. EDI FA マップ - 「すべて」または「なし」。グローバル DFD - 「すべて」または「なし」。
- n. 対話 - 「すべて」または「なし」
- o. XML 形式ファミリー - 「すべて」または「なし」
- p. 接続プロファイル - 「すべて」または「なし」
- q. プロキシ構成 - 「すべて」または「なし」
- r. イベント・コード - 「すべて」または「なし」
- s. アラート通知 - すべてのアラート通知、選択されたアラート通知、または「なし」

独自のインポート・データ作成時の考慮事項

独自のインポート・ファイルを作成したり、エクスポート・ユーティリティで作成したインポート・ファイルを編集する場合、いくつかの事項を考慮する必要があります。XML ファイルをインポート・ファイルの XML スキーマに準拠させる必要があるだけでなく、スキーマで制御されないファイルの内容に関する規則も存在します。

インポート・ファイルの手動での検証

パートナー・マイグレーション・スクリプトを使用してコマンド行からマイグレーション・ユーティリティを起動する場合は、コンソールを使用するときのようなデータの検証は行われません。例えば、マイグレーション・スクリプトを使用すると誤ったパートナー ID を作成してしまう可能性があります。コンソールを使用する場合にはこの可能性はありません。コンソールでは、入力されたデータが検証されます。例えば、コマンド行からは英字を含む DUNS ID を入力できますが、DUNS ID には数字のみを使用する必要があるため、コンソールからは入力できません。

重要: コマンド行からデータを入力する前に、すべてのデータを目視で検査することが重要です。

マイグレーション構成タイプの依存関係

構成可能項目は、依存関係に基づいて大きく分類すると、独立項目、第 1 レベル依存項目、および複合依存項目の 3 つのセクションに分けられます。一部の構成タイプには依存関係がありません。例えばパートナー定義は、システム内の他の構成済みエンティティを参照しなくても作成できます。独立項目は、ターゲット・システムにインポートされるまでは依存関係を持たない構成可能項目です。

他の構成タイプは、システム内の他のエンティティに依存しているため、単独で存在することはできません。例えば、宛先はパートナーに関連付けられるため、パートナーも存在しない限り存在できません。

依存項目を常に使用できるようにするには、エクスポート・ファイルとインポート・ファイル内の項目の内容と順序付けが重要になります。エクスポートを実行する場合には、依存関係を持つ項目は依存項目の後にエクスポートする必要があります。XML ファイルには、この順序付けが反映されます。同じ論理を使用して、インポートを実行する場合、依存関係を持つ項目は依存項目の後にインポートします。

構成タイプを選択的にエクスポートする場合は、すべての依存タイプに依存関係タイプを指定する必要があります。これは、スキーマ定義を使用してインポート・ファイルを作成する場合にも重要です。スキーマにより順序付けが強制されますが、内容は強制されません。そのため、インポート・ファイルを誤って定義する (例えば、依存項目を指定し忘れたり、依存項目を誤って定義する) と、そのファイルをインポートしようとしても失敗します。

独立構成項目

次の構成可能タイプは独立しています。その他の構成タイプはこれらの項目に依存していますが、これらの項目は、他のシステムの項目に直接依存していません。

- エンベローパー・スケジューリング
- イベント・コード
- トランスポート・タイプ
- 宛先タイプ
- エンベロープ・プロファイル
- 接続プロファイル
- プロキシ構成
- 検証マップ
- FA マップ
- パートナー

個別に考えた場合、検証マップと FA マップは独立項目であることに注意しなくてはなりません。ただし、有効利用するには、それらのマップをシステム内のルーティング・オブジェクト定義にリンクさせる必要があります。ルーティング・オブジェクトがインポートされない場合、マップはリンクなしでシステム内に存在する場合があります。これは間接的な依存関係であるため、マイグレーション・ユーティリティーは、マップ・タイプを参照するルーティング・オブジェクトなしで、マップ・タイプをエクスポートおよびインポートできます。

依存構成項目

第 1 レベル依存項目は、独立項目に依存するか、または第 1 レベル依存項目の 1 つに依存する構成可能項目です。依存項目がインポートされないと、インポートを行っても失敗するか、または予期しないランタイム動作が生じる場合があります。以下の構成タイプは第 1 レベル依存項目です。

- ルーティング・オブジェクト

ルーティング・オブジェクトは、エンベロープ・プロファイルと FA マップのインポートに依存します。検証マップはルーティング・オブジェクトの一部としてインポートされます。発信元システムのルーティング・オブジェクトにプロファイルまたはマップのいずれかとの関連がある場合、予期しないランタイム動作が生じることがあります。発信元システムのルーティング・オブジェクトにエンベロープ・プロファイルおよび FA マップとの関連が何もない場合は、エンベロープ・プロファイルおよび FA マップがインポートされていなくても、予期されるとおりのランタイム動作を行います。

- ハンドラー

トランスポート・タイプ

- FA マップのリンク

FA マップのリンクには、FA マップのインポートとルーティング・オブジェクトのインポートが必要です。ルーティング・オブジェクトがインポートされない場合、既存のルーティング・オブジェクトとのリンクが作成されます。ルーティング・オブジェクトが存在しない場合、リンクは作成されません。

- 検証マップのリンク

検証マップのリンクには、検証マップのインポートとルーティング・オブジェクトのインポートが必要です。ルーティング・オブジェクトがインポートされない場合、既存のルーティング・オブジェクトとのリンクが作成されます。ルーティング・オブジェクトが存在しない場合、リンクは作成されません。

- 固定ワークフロー

ハンドラー

- 可変ワークフロー (アクション)

ハンドラー

- 連絡先

パートナー

- アドレス

パートナー

- 制御番号の初期化

パートナー

- XML ファミリーおよびフォーマット

ルーティング・オブジェクト

- 宛先

トランスポート・タイプ、宛先タイプ、およびハンドラー

- 変換マップ

ルーティング・オブジェクト

複合依存項目は、独立項目に依存し、かつ第 1 レベル依存項目より複雑な構成可能項目です。以下の構成タイプは複合依存項目です。

1. インタラクション - ルーティング・オブジェクトのインポート、アクションのインポート、および変換マップのインポートに依存します。ルーティング・オブジェクトまたはアクションのどちらかがインポートされない場合、インタラクションはインポートされません。
2. レシーバー - トランスポート・タイプのインポート、宛先タイプのインポート、およびハンドラーのインポートに依存します。これらのインポートのうち行われなければならないものがある場合、レシーバーのインポートも行われません。上記の構成可能項目なしでレシーバーをインポートすると、インポート・アクティビティーが終了する場合があります。
3. ゲートウェイ - トランスポート・タイプのインポート、宛先タイプのインポート、およびハンドラーのインポートに依存します。これらのインポートのうち 1 つでも行われなければならないものがある場合、ゲートウェイのインポートも行われません。上記の構成可能項目なしでゲートウェイをインポートすると、インポート・アクティビティーが終了する場合があります。
4. B2B 機能 - B2B 機能のマイグレーションは最も複雑な依存項目の 1 つです。これは、ルーティング・オブジェクトのインポート、FA マップのインポート、エンベロープ・プロファイルのインポート、およびパートナーのインポートに依存します。パートナーのインポートまたはルーティング・オブジェクトのインポートのどちらかが行われなければならない場合、B2B 機能もインポートされません。
5. 接続 - 接続は最も複雑な依存項目です。接続のインポートは、ルーティング・オブジェクトのインポート、インタラクションのインポート、パートナーのインポート、B2B 機能のインポート、ゲートウェイのインポート、アクションのインポート、および接続プロファイルのインポートに依存します。ここにリストした構成可能項目のうち 1 つでもインポートされないものがある場合に、接続をインポートすると、インポート・アクティビティーが終了することがあります。
6. アラート通知 - ルーティング・オブジェクト、パートナー、イベント・コード、および連絡先に依存します。

検証マップと FA マップはルーティングの属性です。変換マップはインタラクションの属性です。変換マップは、変換マップ詳細ビュー内の「ルーティング・オブジェクト ID から」と「ルーティング・オブジェクト ID へ」にリンクされています。検証マップと FA マップを、それらの詳細ビュー内の特定のルーティング・オブジェクト ID にリンクすることができます。マップをリンクすると、そのマップを関連付けのオプションとして使用できます。例えば、検証マップ属性がルーティング・オブジェクト AS-Binary に対して構成されたとします。そしてマップ A とマップ B が AS-Binary にリンクされていたとします。文書フロー定義の下の AS-Binary 編集属性ビューに検証マップがある場合、値は「リストからマップを選

択してください (select a map from the list)」となり、ドロップダウンにはマップ A とマップ B が表示されます。マップのうち 1 つを選択し、属性として関連付けることができます。

つまりマップは、リンクによりオプションの 1 つとして適格になり、関連付けによりランタイムでの使用に適するようになります。FA マップと変換マップにも同じことが該当します。変換マップは、ルーティング・オブジェクトの代わりにインタラクシオンで使用されるため、少し異なります。しかし、リンクと関連付けの概念については同じです。

エクスポート/インポートの順序

エクスポート中の生成済み XML ファイルとインポート中の入力 XML ファイルは、順序に従って処理されることになっています。独立項目が最初にインポートされ、次にパートナーとその依存項目がインポートされる、というように、順序が調整されます。

1. エンベローパー
2. イベント・コード
3. トランスポート・タイプ
4. 宛先タイプ
5. ハンドラー情報
6. ハンドラー属性
7. 固定ワークフロー
8. アクション
9. プロキシー構成
10. エンベロープ・プロファイル
11. 接続プロファイル
12. 検証マップ
13. 変換マップ
14. EDIFA マップ
15. ターゲット
16. XML 形式ファミリー
17. ルーティング・オブジェクト
18. FA マップのリンク
19. 検証マップのリンク
20. 変換マップのリンク
21. インタラクシオン
22. パートナー
23. 連絡先
24. アドレス
25. 制御番号の初期化
26. ゲートウェイ
27. アラート通知

BCG インポートと DIS インポート

BCG マイグレーション・ユーティリティーもマップとルーティング・オブジェクトをインポートします。DIS ツールでインポートされたマップとルーティング・オブジェクトが実動システムに存在する場合、上書きオプションが有効であれば、BCG マイグレーション・ユーティリティーはそれらを上書きします。DIS クライアントを使用してランタイム環境 (マップとルーティング・オブジェクト) をインポートする場合は、BCG インポートの後に DIS インポートを行う必要があります。そうすれば、ランタイムに必要な構成がターゲット実動システムに存在するようになります。

マイグレーションできない構成

以下の構成データはマイグレーションされません。

- システム管理

コンソール構成や文書マネージャー構成などのシステム管理構成は、実動システムの管理パラメーターがテスト・システムの管理パラメーターと異なるため、マイグレーションされません。

- ユーザー

パートナーをマイグレーションする場合、実動システムにはより意味のある別のユーザーが存在することが多いため、ユーザーはマイグレーションされません。

- グループ

実動システムのグループは、テスト・システムのグループとは異なります。

- 証明書

実動システムの証明書がテスト・システムの証明書によって上書きされてしまう状況を避けるため、テスト・システムの証明書はエクスポートされません。

- CPA

CPA (Community Partner Agreement) は、実動システム専用です。テスト・システムには存在しません。

- レポートおよびログはマイグレーションされません。それらは構成項目ではありません。

マイグレーション・ユーティリティーの制限事項

- マイグレーション時にエラーが発生すると、トランザクションはロールバックされません。インポートの場合は以下の理由でエラーが起こります。
 - エクスポート・ファイルが手動で編集され、必要な情報が削除された。
 - 手動で作成されたインポート・ファイルに、各オブジェクトにとって必要な情報がすべて揃っていなかった。
 - 更新の直前に、新しく構成可能になった項目が導入された。

- 更新の直前に、既存の構成可能項目が更新された。
- 選択的にマイグレーションできるのは、パートナー・マイグレーションとパートナー接続のみです。それ以外のすべてのマイグレーションは、全体をマイグレーションする必要があります。
- レシーバー・システムとは異なるファイル・システムを使用する送信元システムからエクスポートを実行する場合は、エクスポートされた出力に格納されている XML 文書を手動で更新し、ファイル・システムに固有の `<targetURL>` エlementを修正する必要があります。これらのElementは、インポートを実行する前に修正し、レシーバー・ファイル・システムの環境と一致させる必要があります。

順方向プロキシ・マイグレーション

順方向プロキシは、HTTP/S 宛先により、インポート処理中のプレースホルダーとして使用されます。実稼働環境 (レシーバー・システム) には、テスト環境 (送信元システム) と同じプロキシが存在しないことがあります。インポート後、管理者は、実稼働環境の情報を反映するようにプロキシ関連情報を変更する必要があります。テスト環境が実稼働環境と同じ場合、管理者は変更を行いません。

注: 上書きオプションは、順方向プロキシでは使用不可にされます。そのため、順方向プロキシがレシーバー・システムに存在する場合は、インポート・ユーティリティによって変更されることはありません。

第 6 章 ログオン認証用の LDAP サポート

WebSphere Partner Gateway では、コンソールの認証に WebSphere Partner Gateway パートナー・レジストリーを使用すること以外に、WebSphere Application Server 認証メカニズムを使用する LDAP (Lightweight Directory Access Protocol) コンテナ・ベースの認証がサポートされています。WebSphere Application Server では、以下の 3 タイプの認証をサポートしています。

1. LDAP レジストリー
2. ローカル・オペレーティング・システム・レジストリー
3. カスタム・レジストリー

WebSphere Partner Gateway では、WebSphere Application Server の LDAP レジストリー認証を使用します。WebSphere Application Server に配置されている WebSphere Partner Gateway のようなアプリケーションでコンテナ管理認証を使用可能にすることにより、管理者は WebSphere Partner Gateway アプリケーションの外部のセントラル・ロケーションでユーザー認証を管理できます。

LDAP の使用

コンテナ・ベースの認証を選択している場合は、以下のようして LDAP を使用します。

- インストール時
- 「コンソール・システム管理 (Console System Administration)」 > 「共通プロパティ」 に置かれている属性 `bcg.ldap.containerauth` を True に設定

コンテナ管理認証メカニズムの使用可能化

コンテナ管理認証メカニズムを使用可能にするには、WebSphere Partner Gateway コンソールで `bcg.ldap.containerauth` プロパティの値を True に設定し、LDAP を使用するように WebSphere Application Server の「グローバル・セキュリティ」設定を構成します。認証を使用可能にすると、WebSphere Partner Gateway にログインするときに、ユーザーは LDAP サーバーに対して認証されます。

注: インストール処理中に LDAP を使用可能にする場合、管理者は構成された LDAP サーバーに `hubadmin` というユーザー名が指定されていることを確認する必要があります。これは、どのログオン・タイプを選択するかに関係なく、LDAP 認証での有効なログオン・ユーザー名になります。

J2EE セキュリティーの使用可能化

WebSphere Application Server のグローバル・セキュリティに加えて J2EE セキュリティーを使用可能にする場合は、Java ランタイム環境 (JRE) 用のポリシー・ファイル (例えば、`wpg.policy`) を作成し、必要なセキュリティ権限を与えます。このファイルを JRE に追加するには、以下のステップを実行します。

1. `WASND_ROOT/java/jre/lib/security` フォルダにある `java.security` ファイルに項目を作成します。

java.security ファイルの新規項目の構文は、以下のとおりです。

```
policy.url.1.3=file:///fully qualified path/wpg.policy
```

2. すべての Java プロセスを再始動します。

ユーザー名およびグループ

以前は、hubadmin ユーザーが、スーパーユーザー管理権限を持つ唯一のユーザー名でした。しかし、WebSphere Partner Gateway 6.1 以降ではグループが作成されているため、Hubadmin グループのメンバーであればすべてのユーザーがスーパーユーザー権限を持つことができます。グループを使用することにより、パスワード・セキュリティを維持しながら、複数のユーザーがハブ管理を行うことができます。

LDAP サーバーでは固有のユーザー名が必要なので、WebSphere Partner Gateway でもユーザー名は固有でなければいけません。新規ユーザーを作成する場合に、そのユーザー名が同じまたは異なるパートナー内に既に存在する場合は、「この名前前のユーザーはすでに存在します」というエラー・メッセージが表示されます。このような場合は、コンソールに別のユーザー名を入力し処理を続けます。ユーザー名が制約されることのなかった前のバージョンから WebSphere Partner Gateway 6.1 にマイグレーションすると、重複するユーザー名の横に二重アスタリスク ** が表示され、同じまたは別のパートナーにその名前が存在することが示されます。いずれかのユーザー名を変更し、お互いが固有になるようにしてください。

注: 新規ユーザーと新規グループは、LDAP サーバーと WAS 管理コンソールに追加されます。これらをアクティブ化するには、WebSphere Partner Gateway コンソールにも追加する必要があります。

LDAP 認証の使用の停止

以下の状況では、LDAP 認証を停止する必要があります。

- LDAP サーバーが停止しているか、永続的にダウンしている。
- WebSphere Partner Gateway のインストール時にコンテナー・ベースの認証が選択されたが、LDAP サーバーの準備ができていない。

UNIX ユーザーに対する注記:

1. DB2 を使用する UNIX ユーザーは、db2instance ユーザーとしてログインし、db2instance のユーザー名とパスワードを使用してスクリプトを実行する必要があります。
2. Oracle を使用する UNIX ユーザーは、Oracle ユーザーとしてログインし、インストール時に指定したユーザー名とパスワードを使用してスクリプトを実行する必要があります。

WebSphere Partner Gateway がパスワードへのアクセスのために LDAP を使用せずに、パスワードを保管している WebSphere Partner Gateway データベースを使用するには、以下のスクリプトを実行します。

- bcgResetAuthentication.bat (Windows の場合)
- bcgResetAuthentication.sh (UNIX の場合)

スクリプトには、以下の入力パラメーターが必要です。

- データベース・スキーマ所有者のユーザー ID

- データベース・スキーマ所有者のパスワード

このスクリプトで WebSphere Partner Gateway データベースに接続するには、これらのパラメーターが必要です。

注: DB2 データベースを使用している場合は、DB2 コマンド行からスクリプトを開始してください。

このスクリプトは、`{dbloader install location}/scripts/{database type}` ディレクトリーにあります。

このスクリプトにより、以下が行われます。

- 「**コンソール・システム管理 (Console System Administration)**」 > 「**コンソールのプロパティー (Console Properties)**」 > 「**共通属性**」に置かれている属性 `bcg.ldap.containerauth` を `False` に設定します。
- `hubadmin` ユーザー ID のパスワードをインストール時のデフォルト値にリセットします。パスワードはデータベースに保管されます。

注: これらのスクリプトを実行した後は、WebSphere Partner Gateway コンソールを使用して、LDAP で構成されたパスワードを定義されているユーザーごとに再入力する必要があります。

サンプル LDAP 構成

以下のセクションでは、WebSphere Application Server が LDAP サーバーに接続してデプロイ済みアプリケーションを認証できるようにするための WebSphere Application Server の構成方法について説明します。ただし、このセクションでは、LDAP サーバーがインストールされているサイトに固有の LDAP サーバー管理については説明していません。LDAP サーバーの構成や LDAP サーバーの管理について詳しくは、WebSphere Application Server の資料を参照してください。

スタンドアロン IBM Tivoli LDAP サーバー用の WebSphere Application Server の構成

WebSphere Partner Gateway でスタンドアロン LDAP サーバーを構成するには、IBM Tivoli LDAP サーバーをインストールして、LDAP サーバーのユーザーを認証するように WebSphere Application Server を構成します。

1. IBM Tivoli LDAP サーバーをインストールします。IBM Tivoli LDAP サーバーに同梱されているインストール・ガイドの説明に従ってください。

インストールのヒント:

- 製品をインストールするときに使用するユーザー名は DB2 インスタンス名と同じ名前にしてください。また、このユーザーは、管理者および DB2Admin グループのメンバーである必要があります。
- ディレクトリー・サーバー名は、DB2 名と同じ名前にしてください。

- DB2 という名前のユーザーを作成し、このユーザー名を管理者グループおよび DB2admin グループに組み込みます。
- DB2 ユーザーとしてログインして、インストールします。

IBM Tivoli LDAP サーバーを正常にインストールしたら、次の手順に進んで LDAP サーバーのユーザー作成を開始します。

2. 以下のコマンドを使用して、LDAP ディレクトリー・サーバーを始動します。

```
idsslapd -I db2
```

3. LDAP に付属している WebSphere Application Server を始動します。
4. 以下のアドレスを使用して、LDAP 用の WebSphere Application Server 管理ページにアクセスします。

```
http://<ip>:12000/IDSWebApp/IDSjsp/Login.jsp
```

5. 以下のコンソール管理 ID を使用してログインします。

ユーザー名: superadmin

パスワード: secret

6. 「コンソール管理者 (Console Administrator)」 > 「コンソール・サーバーの管理 (Manage console server)」の順に移動して、リストの LDAP サーバーを追加します。
7. コンソール管理 ID をログオフします。
8. LDAP サーバーを選択し、管理者ユーザー名およびパスワードを使用してログインします。
9. 「サーバー管理 (Server Administration)」 > 「サーバー・プロパティの管理 (Manage server properties)」 > 「サフィックス (Suffix)」の順に移動して、サフィックス (o=ibm, c=us など) を追加します。
10. 「適用」をクリックします。
11. 「ディレクトリー管理 - 項目を追加 (Directory Management-Add an entry)」に移動して、「構造オブジェクト・クラス (Structural object classes)」で「組織」を選択します。
12. 「次へ」をクリックします。
13. 現在の画面で、デフォルト値 (aixAuxAccount) を選択して「次へ」をクリックします。
14. 以下の設定を指定します。


```
Relative DN='o=ibm'
Reqd attributes= o='ibm'
Parent DN= 'c=us'
```
15. 「終了」をクリックします。
16. ユーザーを作成し、'o=ibm,c=us' の下にディレクトリー項目を追加します。

例えば、ユーザー 'cn=user1,o=ibm,c=us' を追加するには、以下の手順を実行します。

- a. 'password' をオプション属性として取得できるように、'Person' 構造オブジェクト・クラスを選択します。

- b. `sn='user1',cn='user1'` を指定します。
 - c. オプション属性で、`password=<password>` を指定します。
- LDAP サーバーをインストールしてユーザーを作成したら、この LDAP サーバーを使用して、以下の手順で WebSphere Application Server を構成します。
17. 「セキュリティ」>「セキュア管理、アプリケーション、およびインフラストラクチャー」の順にクリックします。
 18. ページの右側ペインで、「セキュリティ構成ウィザード」をクリックします。ウィザードが開き、構成のステップ (1/4) が表示されます。
 19. ステップ 1 では、「アプリケーション・セキュリティを使用可能にする」を選択し、「次へ」をクリックして構成ウィザードのステップ 2 に移動します。
 20. ステップ 2 では、「スタンドアロン LDAP レジストリー」を選択し、「次へ」をクリックして構成ウィザードのステップ 3 に移動します。
 21. ウィザードのステップ 3 では、稼働している LDAP サーバーに関する以下の情報を指定して、「次へ」をクリックします。
 - a. 1 次管理ユーザー名: LDAP に作成したユーザー (`cn=user1,o=ibm,c=us` など)
 - b. LDAP サーバーのタイプ: `IBM_Tivoli_Directory_Server`
 - c. ホスト: <LDAP サーバーの IP アドレス>
 - d. ポート: <LDAP サーバーのポート> (389 など)
 - e. 基本識別名: `o=ibm, c=us`
 - f. バインド識別名 (DN): <ldapadmin 名> (例: `cn=root`)
 - g. バインド・パスワード: <ldap 管理パスワード>
 22. ステップ 4 では、前のページで指定した構成情報の要約が表示されます。この情報の内容を確認して「終了」をクリックし、「保存」をクリックして構成を保存します。
 23. WebSphere Application Server を再始動します。

以下のコマンドを使用して、サーバーを停止します。

```
stopserver <servername> -username <ldap_username> -password <ldap_password>
```

以下のコマンドを使用して、サーバーを再始動します。

```
stopserver <servername> -username <ldap_username> -password <ldap_password>
```

これで、ユーザーは IBM Tivoli LDAP サーバーで作成したいいずれかのユーザー名を使用してログインできます。

WebSphere Partner Gateway Console を使用する LDAP ユーザーの指定

LDAP サーバーでの認証が終了したら、LDAP ユーザーを Hubuser の役割に関連付ける必要があります。この役割のメンバーであるユーザーのみが、認証後にアプリケーションにログインできます。LDAP ユーザーをこの役割のメンバーとして定義するには、以下の手順を実行します。

1. コンソール・アプリケーションがデプロイされている WebSphere Application Server を始動します。

2. 「アプリケーション」>「エンタープライズ・アプリケーション」の順に選択して、「**BCGConsole**」をクリックします。
3. ページの右側にある「追加プロパティ」ペインで、「ユーザーまたはグループへのセキュリティー・ロールのマップ」をクリックします。
4. 正常に認証されたすべてのユーザーを Hubadmin の役割のメンバーにするか、特定のユーザーのみを対象にするかを指定できます。
 - 認証されたすべてのユーザーを対象にするには、「**Hubuser**」という役割の下で「**全認証者?**」を選択します。
 - 特定のユーザーのみを対象にする場合は、「**ユーザーの検索**」をクリックして、「**Hubuser**」の役割のメンバーにする選択済みユーザーのみを指定します。

第 7 章 IPv6 のサポート

インターネット・プロトコル・バージョン 6 (IPv6) は、現行の IPv4 プロトコルの拡張プロトコルです。IPv6 プロトコルでは、IPv4 でサポートされている 32 ビット・アドレスが拡張され、128 ビット・アドレスがサポートされます。アドレス・フォーマットの変更を除けば、コミュニティー・コンソールで IPv6 を適用するのに必要な構成変更はありません。

IPv4 構成と IPv6 構成の違いは、IP アドレス・フォーマット (つまり URL フォーマット) の変更です。

- IPv4 プロトコルを使用していて IP を使用する場合、例えばアドレスを 9.183.12.12 のように記述します。
- IPv6 プロトコルを使用していて IP アドレスを使用する場合、IP を大括弧 (「[」と「]」) で囲んで [0::9.183.12.12] のように記述します。
- IPv6 プロトコルを使用していて HTTP アドレスを使用する場合、IP を大括弧 (「[」と「]」) で囲んで http://[::FFFF:129.144.52.38]:80/index.htm のように記述します。
- IPv6 プロトコルを使用していて FTP アドレスを使用する場合、IP を大括弧 (「[」と「]」) で囲んで ftp://[::FFFF:129.144.52.38]:80/index.htm のように記述します。

IPv4 での IPv6 のトンネリングの使用可能化

IPv6 プロトコルは、現在インターネット全体でルーティングすることができないため、IPv6 パケットを IPv4 パケット内にカプセル化し、IPv4 のみが使用可能なネットワークを「トンネル」させる必要があります。

RHEL Linux 3

RHEL Linux 3 プラットフォームでトンネリングを使用可能にするには、以下の手順に従います。

1. root ユーザーとしてログインします。
2. add - NETWORKING_IPV6=yes の行を etc/sysconfig/network ファイルに追加します。
3. ファイルを保存し終了します。
4. 以下の行を etc/sysconfig/network-scripts/ifcfg-eth0 ファイルに追加します。
 - a. add - IPV6INIT=yes
 - b. add - IPV6T04INIT=yes
5. ファイルを保存し終了します。
6. コマンド・プロンプトから、ifconfig を実行します。

システムにより IPv6 アドレスが自動的に生成されます。このアドレスを使用して、WebSphere Partner Gateway におけるレシーバーと宛先を構成します。

Windows 2003/XP

Windows 2003/XP システムで IPv6 を構成するには、<http://www.microsoft.com/windowsserver2003/techinfo/overview/ipv6faq.mspx> にある Microsoft のガイドラインに従ってください。IPv6 をサポートしている Windows プラットフォームを使用している場合、トンネリング機能を使用可能にするには、システム管理者に問い合わせてください。

HP-UX 11i

HP-UX 11i でトンネリングを使用可能にするには、以下の手順に従います。

1. root ユーザーとしてログインします。
2. トンネリングを使用可能にするには、`IPV6_TUNNEL="1"` という行をファイル `/etc/rc.config.d/netconf-ipv6` に追加します。
3. 以下のパラメーターをファイル `/etc/rc.config.d/netconf-ipv6` に割り当てます。

```
IPV6_DESTINATION[0]=  
IPV6_GATEWAY[0]=" " (if set to 1 the gateway is remote, if set to 0 the gateway is local)  
IPV6_ROUTE_COUNT[0]=  
IPV6_ROUTE_ARGS[0]=
```

詳細については、`netconf-ipv6` ファイルのコメント・テキストおよび `route(1m)` マニュアル・ページを参照してください。

4. ファイルを保存し終了します。
5. 変更内容をアクティブ化するには、以下の 2 つのいずれかの方法を使用します。
 - システムのリブート
 - `ifconfig` コマンドと `route` コマンドの実行による同等な構成の設定

IPV6 の使用可能化

IPV6 を構成するには、WebSphere Application Server コンソールでのランタイム・サポート用の Java 仮想マシン・パラメーターを変更します。Java 仮想マシン・パラメーターを変更するには、以下の手順を実行します。

1. WebSphere Application Server 管理コンソールにログインします。
2. 「サーバー」>「アプリケーション・サーバー」に移動して、サーバーを選択します。
3. 各サーバーを選択して、`java.net.IPv4Stack` プロパティを以下の手順で変更します。
 - a. サーバーを選択します (`bcgdocmgr`、`bcgreceiver`、または `bcgconsole`)。
 - b. 「構成」ページで、このページの「サーバー・インフラストラクチャー」セクションにある「Java およびプロセス管理」を展開して、「プロセス定義」を選択します。
 - c. 「プロセス定義構成 (Process definition configuration)」ページの「追加プロパティ」セクションで、「Java 仮想マシン」を選択します。
 - d. 「カスタム・プロパティ」を選択します。
 - e. プロパティ `java.net.IPv4Stack` を `false` に変更します。

- f. 「適用」をクリックして「保存」をクリックし、この構成を完了します。
 - g. サーバーごとにこの処理を繰り返します。
4. 各サーバーの **java.net.IPv4Stack** を変更した後は、完全配布モードを「ノードの完全再同期 (Full Resynchronization)」にする必要があります。ノードを再同期するには、「システム管理」>「ノード」の順に移動して、「bcgnode」を選択します。「完全な再同期」をクリックします。

注: 同期には、約 5 分から 10 分を要します。

5. すべてのサーバーを再始動します。

属性の構成

文書マネージャーのインストール先のワークステーションが IPv6 を使用して構成されていて、IPv6 プロトコルに基づいたゲートウェイを使用して文書が送信される場合は、ワークステーションの IPv6 アドレスを構成する必要があります。ワークステーション・アドレスを構成するには、次のようにします。

1. WebSphere Gateway コンソールにログインします。
2. 「システム管理」>「DocMgr の管理」>「デリバリー・マネージャー属性」へ移動します。
3. 「公開情報プロパティの編集 (Editing publishing info properties)」アイコンをクリックします。
4. ハブが稼働しているローカル・ワークステーションの IPv6 アドレスを `bcg.router.ipv6.address` プロパティに入力します。

注: 文書マネージャーのインスタンスが複数存在する場合は、プロパティ `bcg.router.ipv6.address` は空白のままにします。

5. 「保存」をクリックします。
6. レシーバー・ベースの IPV6 の場合は、「システム管理」>「レシーバー管理」>「その他」の順に移動します。
7. ハブが稼働しているローカル・ワークステーションの IPv6 アドレスを `bcg.receiver.ipv6` プロパティに入力します。

注: 文書マネージャーのインスタンスが複数存在する場合は、プロパティ `bcg.router.ipv6` は空白のままにします。

8. 「保存」をクリックします。

第 8 章 宛先キューの管理

宛先キューを使用すると、宛先の配信キューに入っている文書を表示できます。次の操作も実行できます。

- 文書が配信のためにキューに入れられているすべてのパートナー宛先の表示。
- キュー内にある文書の表示。
- 宛先の有効化または無効化。

宛先キューには、WebSphere Partner Gateway からパートナー宛先への送信を待機しているメッセージが入っています。

宛先キューは、時間依存の文書をキュー内に滞留させないために使用できます。また、キューに入れられる文書の数が増えないようにするためにも使用されます。宛先キューを使用すると、次の作業が可能になります。

- 配信キューに入っている文書を持つすべての宛先のリストを表示する。
- 長時間 (30 秒以上) 宛先キューに置かれている文書を表示する。これにより、文書自体の問題が示されることもあります。キュー内の文書のトラブルシューティングのために、文書の詳細を表示することもできます。

注: FTP スクリプト記述宛先を間隔またはカレンダー・スケジュールでインプリメントする場合、文書は、間隔または日付と時刻に達するまで、長時間にわたってこのキュー内にとどまることがあります。これは予想通りの操作であり、文書はキューから削除してはいけません。

- 宛先の詳細を表示して正常な動作を確認する。宛先キューでの文書バックアップは、Delivery Manager または宛先における障害を示している場合があります。
- 宛先の状況を確認する。宛先がオフラインの場合、文書は宛先がオンラインになるまでキューに集められます。宛先の状況は、接続の機能には影響を与えません。また、文書は継続して処理され、配信キューに置かれます。
- 「パートナー名」フィールドと「宛先」フィールドを使用して宛先キュー・リストのサイズを制限します。

宛先キューの表示

宛先に存在する文書のリストを表示するには、次の手順に従います。

1. 「ビューアー」>「宛先キュー」を選択します。「宛先キュー」ウィンドウが表示されます。

2. 表 10 に示されているパラメーターを入力します。

表 10. 「宛先キュー」ウィンドウ

検索条件	説明
パートナー名	このフィールドに入力するには、次の処理を実行します。 <ol style="list-style-type: none"> 1. パートナー名を指定します。 2. このフィールドにパートナー名の一部を指定して「パートナーの表示」をクリックします。パートナー・リストからパートナーを選択します。 3. ワイルドカード * を指定して「パートナーの表示」をクリックします。パートナー・リストからパートナーを選択します。 <p>「パートナーの表示」をクリックすると、ページに「パートナー」フィールドが表示されます。「パートナー」フィールドには、選択可能なすべてのパートナーがアルファベット順でリストされます。このリストの最初の項目は「すべて」です。デフォルトではこの項目が選択されています。リストの残りの部分は、宛先トランスポートの番号付きリストです。このリストでは、1 つの宛先のみを選択できません。デフォルトは「すべて」です。</p> <p>注: 宛先リストには選択したパートナーの宛先が自動的に取り込まれ、リストはアルファベット順に表示されます。</p>
宛先	このリストの最初の項目は「すべて」です。デフォルトではこの項目が選択されています。リストの残りの部分は、宛先トランスポートの番号付きリストです。このリストでは、1 つの宛先のみを選択できません。デフォルトは「すべて」です。
キューに入っている最小時間	文書が宛先キューで待機する最小時間 (分)。例えば、6 分を選択すると、6 分以上配信を待機している文書を持つすべての宛先が表示されます。デフォルトは 0 です。
ソート基準	パートナー (デフォルト) または宛先名によって検索結果をソートします。
最新表示	最新表示機能をオンまたはオフ (デフォルト) にします。
キュー内最小項目数	宛先キュー内にある文書の最小数。デフォルトは 1 です。
方向	「昇順」をクリックすると、最も古いタイム・スタンプまたはアルファベットの最後から始まる文書から表示され、「降順」をクリックすると、最新のタイム・スタンプまたはアルファベットの先頭から始まる文書から表示されます。
最新表示頻度	表示されているデータが更新されるまでコンソールが待機する時間 (秒)。

3. 「検索」をクリックします。宛先にある文書のうち、指定した検索条件に合致するすべての文書が検索されます。表 11 に、検索から戻される情報を示します。

表 11. 宛先キュー検索の結果

検索条件	説明
パートナー	宛先に関連した取引先
宛先	宛先の名前
キュー中	宛先キューで配信を待つ文書の数。宛先の詳細にリンクします。
状態	宛先の状態がオンラインかオフラインかを示します

注: コンソールで宛先を表示するには、宛先が AND 論理式を使用する検索条件の要件をすべて満たしている必要があります。

キュー内の文書の表示

特定のパートナーのキューに入っている文書を表示するには、次のステップを実行します。

1. 「ビューアー」>「宛先キュー」の順にクリックします。
2. 「宛先キューの検索」ウィンドウで「文書の検索」をクリックします。
3. 「キュー内の文書の検索 (Queue Documents Search)」ウィンドウで検索条件を指定します (93 ページの表 12を参照)。

表 12. 「キュー内の文書の検索 (Queue Documents Search)」ウィンドウ

検索条件	説明
パートナー名	このフィールドに入力するには、次の処理を実行します。 <ol style="list-style-type: none">1. フィールドにパートナー名を指定します。2. このフィールドにパートナー名の一部を指定して「パートナーの表示」をクリックします。リストからパートナーを選択します。3. ワイルドカード * を指定して「パートナーの表示」をクリックします。パートナー・リストからパートナーを選択します。 <p>注: 「パートナーの表示」をクリックすると、ページに「パートナー」フィールドが表示されます。「パートナー」フィールドには、選択可能なすべてのパートナーがアルファベット順でリストされます。このリストの 1 番目の項目は「すべて」です。デフォルトではこの項目が選択されています。リストの残りの部分は、宛先トランスポートの番号付きリストです。このリストでは、1 つの宛先のみを選択できます。デフォルトは「すべて」です。</p>
宛先	<p>注: 宛先リストには選択したパートナーの宛先が自動的に取り込まれ、リストはアルファベット順に表示されます。</p>
ソート基準	リストのソート基準を「パートナー」(デフォルト)、「宛先」、「参照 ID」、「キューに入れられたタイム・スタンプ」(文書の最終送信時刻) から選択します。
参照 ID	システムによって文書に割り当てられた固有の識別番号を入力します。
方向	「昇順」をクリックすると、最も古いタイム・スタンプまたはアルファベットの最後から始まる文書から表示され、「降順」をクリックすると、最新のタイム・スタンプまたはアルファベットの先頭から始まる文書から表示されます。
文書 ID	ソース・パートナーによって文書に割り当てられた固有の識別番号を入力します。
ページごとの結果件数	1 ページに表示する文書の数を指定します。
許可された最大文書数	表示するレコードの数を指定します。

4. 「検索」をクリックします。キュー検索の結果が表示されます。

宛先キューからの文書の処理の停止

宛先キューを使用して、WebSphere Partner Gateway に対し文書処理を停止する要求を発行できます。「プロセスの停止」アイコンをクリックすると、文書処理の停止要求が実行依頼され、文書の状況に「停止を実行依頼しました」と表示されます。この状況は、文書処理の停止要求が実行依頼されたことを示します。

次の手順では、文書処理を停止する方法について説明します。

1. 「ビューアー」>「宛先キュー」をクリックします。
2. 「宛先キュー」ウィンドウで、「文書の検索」をクリックします。
3. ウィンドウに表示されたパラメーターをすべて入力します (93 ページの表 12 を参照)。
4. 「検索」をクリックします。キュー検索の結果が表示されます。
5. 「プロセスの停止」アイコンをクリックし、文書の処理を停止します。

注: 「プロセスの停止」アイコンをクリックした時点で文書が既に文書マネージャーによって処理されている場合、コンソールからのプロセスの停止アクションには効果がありません。

宛先の詳細の表示

キュー内にある文書のリストなど、特定の宛先の情報を表示するには、次の手順に従います。

1. 「ビューアー」>「宛先キュー」をクリックします。
2. 「宛先キュー」ウィンドウで、検索条件を入力します (92 ページの表 10 を参照)。
3. 「検索」をクリックします。
4. 宛先リストの「キュー内」列にある文書数リンクをクリックし、「キュー文書検索 (Queued Documents Search)」画面を開きます。
5. 「キュー文書検索 (Queued Documents Search)」画面で「検索」をクリックします。宛先の詳細とキュー内にある文書のリストが表示されます。

宛先状況の変更

宛先をオンラインまたはオフラインにするには、次の手順に従います。

1. 「ビューアー」>「宛先キュー」をクリックします。
2. 「宛先キュー」ウィンドウで、検索条件を入力します (92 ページの表 10 を参照)。
3. 「検索」をクリックします。
4. 宛先のリストから、「キュー内」列にある文書数リンクをクリックします。宛先の詳細とキュー内にある文書のリストが表示されます。
5. 「宛先情報」の「オンライン」をクリックして宛先をオンラインにするか、「オフライン」をクリックして宛先をオフラインにします (宛先状況を変更するには、hubadmin としてログインしている必要があります)。

第 9 章 文書フローの分析

文書分析ツールを使用すると、システム内にある文書の数以下の各状態でソートされて詳細に示されます。

- 受信
- 進行中
- 失敗
- 正常終了

以下の基準を使用して検索を絞り込むことができます。

- 日付
- 時刻
- プロセスのタイプ (送信または受信)
- 動作モード
- プロトコル
- 文書タイプ
- プロセスのバージョン

文書ボリューム・レポートは、失敗した文書を探索して表示し、その失敗の原因を調査することによって、ビジネス文書のフローの管理、追跡、およびトラブルシューティングを行います。レポートには、指定期間内にシステムで処理された文書の量が表示されます。また、レポートは表示、印刷、および他のスタッフ・メンバーに送信するために保存 (エクスポート) することができます。このレポートをカスタマイズして、特定の検索条件に基づいて情報を表示できます。

パートナー接続のテスト・ツールは、宛先または Web サーバーのテストに使用されます。

この章で説明する機能は次のとおりです。

- 『文書分析ツール』
- 97 ページの『文書ボリューム・レポート』
- 99 ページの『パートナー接続のテスト』
- 103 ページの『EDI レポート』
- 107 ページの『FTP レポート』

文書分析ツール

文書分析ツールを使用すると、状態別に整理された、指定期間内のシステム内の文書数の詳細な概要を取得できます。

検索条件を使用すると、失敗した文書の特定および失敗の原因の調査ができます。

システム内の文書状態の表示

次の表に、さまざまな文書状態を示します。

表 13. 文書状態

状態	説明
受信 進行中	文書はシステムによって受信され、処理待ちの状態です。 文書は現在、次のいずれかの処理ステップにあります。 <ul style="list-style-type: none">• 不完全 例えば、システムが他の文書を待っています。• データ妥当性検査 例えば、システムは文書の内容を検査しています。• 変換 例えば、システムは文書を別のプロトコルに変換しています。• キュー 例えば、文書は外部パートナーまたは内部パートナーに経路指定されるのを待っています。
失敗	文書処理は、システムのエラー、データ検証のエラー、または重複のために中断されました。
正常終了	文書処理を完了する最終メッセージがシステムから受信側パートナーに送信されました。

システム内の文書の表示

次の手順では、システムで文書を表示する方法について説明します。

1. 「ツール」 > 「文書分析」をクリックします。
2. 「文書分析の検索」ウィンドウで、リストから検索条件を選択します。

表 14 に、表示する文書を決定するために指定できる値を示します。

表 14. 文書の検索条件

値	説明
開始日および開始時刻 (Start Date & Time)	処理が開始された日時。
終了日および終了時刻 (End Date & Time)	処理が完了した日時。
ソース・パートナー	ビジネス・プロセスを開始したパートナー (内部パートナーのみ)。
受信側パートナー	ビジネス・プロセスを受信したパートナー (内部パートナーのみ)。
検索基準 動作モード	受信文書タイプまたは送信文書タイプを検索します。 例えば、すべて、実動、テスト、CPS パートナー、または CPS マネージャー。テストを使用できるのは、テスト動作モードをサポートするシステムのみです。
パッケージ	文書フォーマット、パッケージ化、暗号化、およびコンテンツ・タイプ識別番号について説明します。
プロトコル 文書タイプ	パートナーに対して使用できる文書プロトコル。 特定のビジネス・プロセス。
ソート基準 最新表示	受信パートナー名または送信パートナー名別ソート結果。 検索結果が定期的に最新表示されるかどうかを制御します (内部パートナーのみ)。
最新表示頻度	検索結果の最新表示頻度を制御します (内部パートナーのみが使用)。

3. 「検索」をクリックします。「文書分析の要約」が表示されます。

プロセスおよびイベント詳細の表示

次の手順では、プロセスおよびイベントの詳細を表示する方法について説明します。

1. 「ツール」>「文書分析」をクリックします。「文書分析の検索」ウィンドウが表示されます。
2. リストから検索条件を選択します。
3. 「検索」をクリックします。「文書分析の要約」が表示されます。
4. 表示するソース・パートナーと受信側パートナーの横にある「詳細の表示」アイコンをクリックします。選択されたパートナーのすべての文書が表示されます。文書数量は、文書処理状態別に列に整列されます。
5. 「文書分析の要約」に示された個々の文書フローの下で、「受信」、「進行中」、「失敗」、または「正常」列の数量リンクを選択します。「文書分析レポート」に文書処理の詳細が提示されます。「失敗」を選択すると、レポートには「文書イベントの要約」も表示されます。

文書ボリューム・レポート

文書ボリューム・レポートは有効なツールで、ビジネス文書のフローを管理、追跡、およびトラブルシューティングするのに使用されます。レポートでは、指定期間内にシステムで処理された文書のボリュームを表示します。レポートは表示、印刷、または保存 (エクスポート) して、他のスタッフ・メンバーに送信できます。

このレポートをカスタマイズして、特定の検索条件に基づいて情報を表示できます。

文書ボリューム・レポートに、現在進行中の文書数が状態別に示されます。

表 15. 文書状態

値	説明
受信合計	システムに受信された文書の合計数。
進行中	進行中の文書はテストおよび検証されています。エラーは検出されませんでした。処理はまだ完了していません。
失敗	エラーのために、文書処理が中断しました。
正常終了	文書処理を完了する最終メッセージがシステムから受信側パートナーに送信されました。

次のタスクを実行するには、このレポートを使用します。

- 主要ビジネス・プロセスが完了したかどうかを判断する
- コスト管理のため、プロセスのボリュームの傾向を追跡する
- プロセスの質 (成功と失敗) を管理する
- プロセス効率を追跡する

文書ボリューム・レポートの作成

次の手順では、文書ボリューム・レポートを作成する方法について説明します。

1. 「ツール」 > 「文書ボリューム・レポート」をクリックします。「文書ボリューム・レポートの検索」ウィンドウが表示されます。
2. リストから検索条件を選択します。

表 16. 文書ボリューム・レポート検索条件

値	説明
開始日および開始時刻 (Start date & time)	処理が開始された日時。
終了日および終了時刻 (End date & time)	処理が完了した日時。
ソース・パートナー	ビジネス・プロセスを開始したパートナー (内部パートナーのみ)。
受信側パートナー	ビジネス・プロセスを受信したパートナー (内部パートナーのみ)。
検索基準 動作モード	受信文書タイプまたは送信文書タイプを検索します。 実動またはテスト。テストは、テストの動作モードをサポートするシステム上でのみ実行できます。
パッケージ	文書フォーマット、パッケージ化、暗号化、およびコンテンツ・タイプ識別番号について説明します。
プロトコル	プロセス・プロトコルのタイプ。例えば、XML、EDI、フラット・ファイル。
文書タイプ ソート基準	特定のビジネス・プロセス。 この基準 (文書タイプまたは受信側文書タイプ) によるソート結果。
ページごとの結果件数	1 ページに表示されるレコードの数。

3. 「検索」をクリックします。レポートが表示されます。

文書ボリューム・レポートのエクスポート

1. 「ツール」 > 「文書ボリューム・レポート」をクリックします。「文書ボリューム・レポートの検索」ウィンドウが表示されます。
2. リストから検索条件を選択します。
3. 「検索」をクリックします。レポートが表示されます。
4. 「レポートのエクスポート」アイコンをクリックしてレポートをエクスポートします。ファイルを保存する場所に移動します。

注: レポートはコンマで区切られた値 (csv) ファイルとして保存されます。

レポートの印刷

1. 「ツール」 > 「文書ボリューム・レポート」をクリックします。「文書ボリューム・レポートの検索」ウィンドウが表示されます。
2. リストから検索条件を選択します。
3. 「検索」をクリックします。レポートが表示されます。
4. 「印刷」アイコンをクリックしてレポートを印刷します。

パートナー接続のテスト

パートナー接続のテスト機能は、宛先または Web サーバーのテストに使用されます。内部パートナーの場合は、特定のパートナーを選択することもできます。テストは、宛先または URL へのブランクの POST 要求の送信から構成されます。例えば、要求は、Yahoo の Web アドレス (www.yahoo.com) をブラウザのアドレス・フィールドに入力することと似ています。これは何も送信されず、空の要求です。宛先または Web サーバーから受信した応答に、その状況が示されます。

- 応答が戻される場合、サーバーは稼働しています。
- 何も戻されない場合は、サーバーは停止しています。

重要: パートナー接続のテスト機能は、接続パラメーターを必要としない HTTP で作動します。

パートナー接続のテストは、次の手順で行います。

1. 「ツール」 > 「パートナー接続のテスト」をクリックします。
2. 「パートナー接続のテスト」ウィンドウで、リストからテスト基準を選択します。

表 17. パートナー接続のテスト値

値	説明
受信側パートナー	テストの対象となる特定の受信側パートナーの名前 (内部パートナーのみ)。
送信側パートナー	テストの対象となる特定の送信側パートナーの名前 (外部パートナーのみ)。このフィールドが表示されるのは、「コマンド」フィールドで「Ping ebMS」を選択した場合に限りです。
宛先	選択した受信側パートナーに基づいて、使用可能な宛先を表示します。
URL コマンド	選択した宛先に基づいて、動的に取り込まれます。「Post」、「Get」、「Ping ebMS」のいずれかです。「Ping ebMS」について詳しくは、『ebMS パートナーの ping』を参照してください。

3. 「テスト」をクリックします。テスト結果が表示されます。戻された状況コードについては、100 ページの『Web サーバー結果コード』を参照してください。

ebMS パートナーの ping

「パートナー接続のテスト」ページで、ebMS パートナーに対して ping を実行できます。これは、ping メッセージをパートナーに送信できることを意味し、パートナーが起動して受信する準備ができている場合、パートナーは pong メッセージで応答します。CPA をアップロードすると、ping-pong チャネルが作成されます。

ping を機能させるには、関係するパートナーとの接続を定義する必要があります。詳細については、「WebSphere Partner Gateway E/A ハブ構成ガイド」で、ebMS パートナーの ping のセクションを参照してください。

ebMS パートナーに ping するには、以下を実行します。

1. 「ツール」 > 「パートナー接続のテスト」をクリックします。
2. 「コマンド」に、「PING ebMS」を選択します。

3. 「送信側パートナー」および「受信側パートナー」を選択してください。
4. (オプション) 「宛先」を選択するか、URL を入力します。
5. 「テスト」をクリックして、ping メッセージを送信します。

ping メッセージの状況を判別するには、「ping 状況」をクリックします。最後の ping 要求の状況が「結果」の下に表示されます。

注: 最後の ping 要求は、「パートナー接続のテスト」から開始されていることも、既存の ping 文書の文書ビューアーの再送から開始されていることもあります。

Web サーバー結果コード

以下のセクションでは、サーバーの結果コードについて説明します。

200 シリーズ

- 200 - OK

伝送は正常終了しました。これはエラーではありません。

- 201 - Created

要求は満たされて、新規リソースが作成されました。新たに作成されたリソースは、応答の URL ヘッダー・フィールドで戻された URL で参照でき、「ロケーション」ヘッダー・フィールドで指定されたリソースの最も具体的な URL を持ちます。

- 202 - Accepted

要求は処理のために受信されましたが、処理はまだ完了していません。

- 203 - Non-Authoritative Information

戻されたエンティティ・ヘッダーの META 情報は、元のサーバーが利用できる最終的な情報ではありませんが、ローカル・コピーまたはバンダー取得コピーを基に収集されています。

- 204 - No Content

サーバーは要求を満たしましたが、送り返す新規情報はありません。

- 206 - Partial Content

ファイル内のバイトの範囲を要求しましたが、これがその範囲です。これは HTTP 1.1 の新機能です。

300 シリーズ

- 301 - Moved Permanently

要求されたリソースに新規の永続的な URL が割り当てられており、このリソースを将来参照するには、戻された URL の 1 つを使用します。

- 302 - Moved Temporarily

要求されたリソースは、一時的に新規の URL に存在します。新規の URL にリダイレクトします。元のページは移動しました。これはエラーではありません。ほとんどのブラウザは、この結果が表示される場合、新規のページを隠した状態で取り出します。

400 シリーズ

- 400 - Bad Request

構文の形式に誤りがあるため、要求がサーバーに認識されない可能性があります。クライアントにより、無効な要求が行われました。

- 401 - Unauthorized

要求にはユーザー認証が必要です。応答には、要求されたソースに適用できるユーザー確認を含む、WWW 認証ヘッダー・フィールドを組み込む必要があります。ユーザーは文書を要求しましたが、有効なユーザー名またはパスワードを指定していません。

- 402 - Payment Required

このコードは現在サポートされていませんが、将来の利用のために予約されています。

- 403 - Forbidden

サーバーは要求を認識しましたが、詳細不明な理由により、要求の実行を拒否しています。この文書に対するアクセスは、明示的に拒否されます (これは、要求するファイルに対して Web サーバーに読み取り権限がない場合に発生することがあります)。サーバーは、このファイルを送信することを拒否します。権限が明示的にオフになっている可能性があります。

- 404 - Not Found

サーバーは、要求された URL に一致するものを検出できませんでした。このファイルが存在しません。これは、ブラウザに誤りのある URL を入力したときに表示されるメッセージです。また、文書を保護するため、許可されていないユーザーにはファイルが存在しないと知らせるようにサーバーが指定されている場合にも、このコードが送信されます。404 のエラーは、存在しないページを要求した結果であり、原因として可能性があるものは以下のとおりです。

- 誤った URL を入力した
- ブックマークが指す場所にファイルが存在しない
- 検索エンジンが robots.txt ファイルを検索している (このファイルは、検索エンジンが索引付けしないページにマークを付ける場合に使用されます)
- ユーザーがファイル名を推測で指定している
- ユーザーのサイトまたは他のサイトのリンクに誤りがある

- 405 - Method Not Allowed

要求行で指定されたメソッドは、要求 URL で識別されるリソースには使用できません。

- 406 - None Acceptable

サーバーは要求 URL に一致するリソースを検出しましたが、受け入れまたは受け入れエンコード要求ヘッダーで識別される条件を満たすリソースは検出できません。

- 407 - Proxy Authentication Required

このコードは、将来の利用のために予約されています。これは 401 (Unauthorized) と似ていますが、クライアントは最初にプロキシで自分自身を認証する必要があります。HTTP 1.0 には、プロキシ認証の手段はありません。

- 408 - Request Time Out

クライアントは、サーバーが待機を準備していた時間内に要求を作成しませんでした。

- 409 - Conflict

リソースの現在の状態と矛盾するため、要求は完了しません。

- 410 - Gone

要求されたリソースはサーバーで使用できなくなり、転送先アドレスが不明です。

- 411 - Authorization Refused

クライアントから提供された要求証明書は、サーバーにより拒否されたか、またはリソースにアクセスする許可を認可するのに不十分です。

- 412 - Precondition Failed

- 413 - Request Entity Too Large

- 414 - Request URI Too Large

- 415 - Unsupported Media Type

500 シリーズ

- 500 - Internal Server Error

サーバーは、要求を満たすことができない、予期しない条件を検出しました。Web サーバーに何か問題があり、意味のある応答ができません。通常、ブラウザ側からの操作でこのエラーを修正することはできません。サーバー管理者はサーバーのエラー・ログを調べ、発生した状況を確認します。これは、正しくコーディングされていなかった CGI スクリプトのエラー・メッセージであることがよくあります。

- 501 - Method Not Implemented

サーバーは、要求を満たすのに必要な機能をサポートしていません。アプリケーション・メソッド (GET または POST) が実装されていません。

- 502 - Bad Destination

サーバーが、要求を実行しようとしてアクセスした宛先またはアップストリーム・サーバーから使用できない応答を受信しました。

- 503 - Service Temporarily Unavailable

サーバーは、一時的に過負荷または保守中なので、現在要求を処理できません。
サーバーはリソース不足です。

- 504 - Destination Time Out

サーバーは要求を完了するためにアクセスした宛先またはアップストリーム・サーバーから時間内に応答を受信しませんでした。

- 505 - HTTP Version Not Supported

EDI レポート

期限切れの電子データ交換 (EDI) の機能確認通知 (FA) を検索するには、EDI レポートを使用します。拒否された電子データ交換 (EDI) トランザクションを検索することもできます。以下のセクションでは、EDI レポートを使用する手順について詳しく説明します。

EDI FA 期限経過の検索

「EDI FA 期限経過の検索」ページでは、期限切れの電子データ交換 (EDI) の機能確認通知 (FA) を検索するための検索条件を指定できます。

注: 前回の EDI FA 期限経過の検索で戻されたレコードのうち、結果のレポートから除去されたものはすべてそれ以降の検索で無視されるようになります。そのため、除去されたレコードはその後のレポートに表示されなくなります。「EDI FA 期限経過レポート」ページで「**選択されたレコードを無視**」を選択すると、レポートからレコードを除去できます。レポートからレコードを除去できるのはハブ管理者のみです。

EDI FA 期限経過のレコードを検索するには、以下を行います。

1. 「ツール」 > 「**EDI レポート**」をクリックします。「EDI FA 期限経過の検索」画面が表示されます。

2. 次のドロップダウン・リストから 1 つ以上の検索条件を選択します。

表 18. EDI FA 期限経過の検索条件

値	説明
開始日および開始時刻 (Start date & time)	トランザクションが開始された日時。
終了日および終了時刻 (End date & time)	トランザクションが完了した日時。
ソース・パートナー	トランザクションを開始したパートナー。
ターゲット・パートナー	トランザクションを受信したパートナー。
検索基準	ソース文書タイプまたはターゲット文書タイプのどちらに基づいて検索するか指定します。
パッケージ	文書フォーマット、パッケージ化、暗号化、およびコンテンツ・タイプ識別番号について説明します。
プロトコル	プロセス・プロトコルのタイプ。例えば、XML、EDI、フラット・ファイル。表示されるプロトコルは「パッケージ」フィールドで選択した値によって異なります。
文書タイプ	特定の文書タイプ。表示されるタイプは「プロトコル」フィールドで選択した値によって異なります。
参照 ID	トランザクション ID を指定します。
ソート基準	検索結果を分類するための基準を指定します。デフォルトは「期限経過時間」と「降順」です。期限経過時間が最も長い FA を最初に表示するには「降順」を使用します。期限経過時間が最も短い FA を最初に表示するには「昇順」を使用します。
ページごとの結果件数	各ページに表示するトランザクション検索結果の数を指定します。

3. 「検索」をクリックして、「EDI FA 期限経過の検索」のレポートを表示します。

EDI FA 期限経過レポートの表示

「EDI FA 期限経過の検索」ページで選択された検索条件に従って、「EDI FA 期限経過レポート」ページに検索結果が表示されます。

条件に該当するものがある場合は、次のデータが EDI FA 期限経過レポートに表示されます。

表 19. EDI FA 期限経過レポート

値	説明
日付	EDI がソース・パートナーからターゲット・パートナーに送信された日付。
時刻	EDI がソース・パートナーからターゲット・パートナーに送信された時刻 (GMT)。
アクティビティ ID	トランザクションの仮想上の固有 ID (VUID)。
ソース取引パートナー	トランザクションを送信したパートナー。
ソース・パッケージ	トランザクションのソース・パッケージ。
(Source Package)	
ソース・プロトコル	トランザクションのソース・プロトコル。
(Source Protocol)	
ソース文書タイプ	トランザクションのソース文書タイプ。
ターゲット取引パートナー	トランザクションを送信したパートナー。
ターゲット・パッケージ	トランザクションのターゲット・パッケージ。
ターゲット・プロトコル	トランザクションのターゲット・プロトコル。
ターゲット文書タイプ	トランザクションのターゲット文書タイプ。
交換番号	トランザクションの交換番号。
グループ番号	トランザクションのグループ番号。
トランザクション番号	トランザクションの識別番号。
FA 期限日 (FA Due By)	トランザクションの FA の期限日。
期限切れまでの時間	FA の期限切れまでの時間。
(Overdue By)	
選択されたレコードを無視	レコードに対してこのオプションを選択すると、その特定のレコードがレポートから除去されます。レコードが一度レポートから除去されると、そのレコードはそれ以降の EDI FA 期限経過の検索で無視されるようになります。そのため、そのレコードは結果のレポートに表示されなくなります。レポートからレコードを除去できるのはハブ管理者のみです。

EDI 拒否トランザクションの検索

「EDI 拒否トランザクションの検索」ページには、エラー・コードを含む機能確認通知 (FA) の付いた電子データ交換 (EDI) を検索するための基準が含まれます。EDI 拒否トランザクションの検索で FA の付かないトランザクション・レコードが戻されることはありません。

EDI 拒否レコードを検索するには、以下を行います。

1. 「ツール」 > 「EDI レポート」 > 「EDI 拒否レポート」をクリックします。

2. 次のドロップダウン・リストから 1 つ以上の検索条件を選択します。

表 20. EDI 拒否トランザクションの検索条件

値	説明
開始日および開始時刻 (Start date & time)	トランザクションが開始された日時。
終了日および終了時刻 (End date & time)	トランザクションが完了した日時。
ソース・パートナー	トランザクションを開始したパートナー。
ターゲット・パートナー	トランザクションを受信したパートナー。
検索基準	ソース文書タイプまたはターゲット文書タイプのどちらに基づいて検索するか指定します。
パッケージ	文書フォーマット、パッケージ化、暗号化、およびコンテンツ・タイプ識別番号について説明します。
プロトコル	プロセス・プロトコルのタイプ。例えば、XML、EDI、フラット・ファイル。表示されるプロトコルは「パッケージ」フィールドで選択した値によって異なります。
文書タイプ	特定の文書タイプ。表示されるタイプは「プロトコル」フィールドで選択した値によって異なります。
参照 ID	トランザクション ID を指定します。
ソート基準	検索結果を分類するための基準を指定します。デフォルトは「期限経過時間」と「降順」です。期限経過時間が最も長い FA を最初に表示するには「降順」を使用します。期限経過時間が最も短い FA を最初に表示するには「昇順」を使用します。
ページごとの結果件数	各ページに表示するトランザクション検索結果の数を指定します。

3. 「検索」をクリックして、EDI 拒否トランザクション・レポートを表示します。

EDI 拒否トランザクション・レポート

「EDI 拒否トランザクションの検索」ページで選択された検索条件に従って、「EDI 拒否トランザクション・レポート」ページに検索結果が表示されます。

条件に該当するものがある場合は、次のデータが EDI 拒否トランザクション・レポートに表示されます。

表 21. EDI 拒否トランザクション・レポート

値	説明
日付	EDI が受信された日付。
時刻	EDI トランザクションがソース・パートナーからターゲット・パートナーに送信された時刻 (GMT)。
アクティビティ ID	トランザクションの仮想上の固有 ID (VUID)。
ソース取引パートナー	トランザクションを送信したパートナー。
ソース・パッケージ	トランザクションのソース・パッケージ。
(Source Package)	
ソース・プロトコル	トランザクションのソース・プロトコル。
(Source Protocol)	
ソース文書タイプ	トランザクションのソース文書タイプ。
ターゲット取引パートナー	トランザクションを受信したパートナー。
ターゲット・パッケージ	トランザクションのターゲット・パッケージ。
ターゲット・プロトコル	トランザクションのターゲット・プロトコル。
ターゲット文書タイプ	トランザクションのターゲット文書タイプ。
交換番号	トランザクションの交換番号。
グループ番号	トランザクションのグループ番号。
トランザクション番号	トランザクションの識別番号。
状況コード	FA の状況コード。
状況テキスト	FA の状況テキスト。

FTP レポート

FTP レポートには FTP 統計および FTP 接続の詳細が表示されます。

FTP 統計

「FTP 統計」ページには、FTP サーバー状況が読み取り専用モードで表示されます。

注: FTP サーバーまたは FTP 管理サーバーが使用できない場合、この統計は表示されません。

FTP サーバー状況を表示するには、以下を行います。

1. 「ツール」 > 「FTP レポート」をクリックします。「FTP 統計」ページが表示されます。

2. 次のサーバー状況情報が表示されます。

表 22. FTP 統計

値	説明
サーバー開始時刻	FTP サーバーの開始時刻。
作成されたディレクトリ数	ユーザーが <code>mkdir</code> を使って作成したディレクトリ数。
除去されたディレクトリ数	ユーザーが <code>rmdir</code> を使って除去したディレクトリ数。
アップロードされたファイル数	すべてのユーザーがアップロードしたファイルの数。
ダウンロードされたファイル数	すべてのユーザーがダウンロードしたファイルの数。
削除されたファイル数	すべてのユーザーが削除コマンドを使って削除したファイルの数。
アップロードされたバイト数	アップロードされたバイト数の累計。
ダウンロードされたバイト数	ダウンロードされたバイト数の累計。
現在のログイン数	現在のログイン数を表示します。
合計のログイン数	前回リセットしたときからのログイン数の合計。
失敗したログイン数の合計	失敗したログイン数の合計。
現在の接続数	前回のリセット以降の現在の接続数。
合計の接続数	前回リセットしたときからの接続数の合計。

3. 現在のログイン数を最新表示するには、「再ロード」をクリックします。

4. 値をリセットするには、「リセット」をクリックします。

FTP 接続

下記の手順に従って FTP 接続を表示します。

1. 「ツール」 > 「FTP レポート」 > 「FTP 接続」をクリックします。
2. 次の接続情報がレポートに表示されます。

表 23. FTP 接続

値	説明
ログイン名	この接続にログインしているユーザー ID。これが空白の場合、ユーザーは接続を確立したのみであり、ログインしていません。
ログイン時刻	ユーザーがログインした時刻。これが空白の場合、ユーザーは接続を確立したのみであるということになります。
最終アクセス時刻	ユーザーがこの接続に最後にアクセスした時刻。これが空白の場合、ユーザーはログインしたのみであり、まだコマンドを何も実行していないということになります。
クライアント・アドレス	ユーザーがログインしたクライアント IP。

第 10 章 イベントおよび文書の表示

次の機能により、システム全体の正常性を表示できます。イベント解決のためのトラブルシューティング・ツールでもあります。

- 『イベント・ビューアー』
- 112 ページの『AS ビューアー』
- 115 ページの『RosettaNet ビューアー』
- 118 ページの『文書ビューアー』
- 127 ページの『ebMS ビューアー』
- 130 ページの『宛先キュー』

注: データの時間は、グリニッジ標準時 (GMT) の値を使用してシステムに保管されますが、ユーザーの時間帯設定を使用して表示されます。

RosettaNet ビューアーおよび AS ビューアーには、ハブ管理者用の追加の検索条件が含まれています。詳しくは、「*WebSphere Partner Gateway E/A* ハブ構成ガイド」を参照してください。

イベント・ビューアー

イベントを表示および検索するには、イベント・ビューアーを使用します。

イベントは、システムに何らかの異常が発生したことを知らせます。イベントにより、システム操作または機能が正常であったかどうか (例えば、パートナーがシステムに正常に追加されたかなど) がわかります。イベントによって問題を特定することもできます (例えば、システムが文書を処理できないなど)。大半の文書は何回か再送されるため、文書の処理で障害が発生してイベントが生成された場合、この情報を利用して問題を調査および訂正し、以後同じような障害が発生するのを防ぐことができます。

WebSphere Partner Gateway には、事前定義イベントが用意されています。アカウント管理モジュールの「アラート」機能を使用して、システムに影響を与えるイベントを特定するイベント・ベースのアラートを作成できます。アカウント管理モジュールの「連絡先」機能では、これらのイベントが発生した場合にシステムから通知を受ける担当者を指定します。

注: 管理者は、重大と判断されるイベントにはアラートを関連付けるようにしなければなりません。構成時にこの関連付けを行わないと、WebSphere Partner Gateway 全体でアラート通知が生成されません。

イベント・ビューアーは、特定の検索条件に基づいてイベントを表示します。これらの検索条件を使用して、特定のイベントを割り出し、そのイベントの発生原因を調査できます。イベント・ビューアーを使用すると、時刻、日付、イベント・タイプ (デバッグ、通知、警告、エラー、および重大)、イベント・コード、およびイベント・ロケーションごとにイベントを検索できます。

イベント・ビューアーを介して使用できるデータには、イベント名、タイム・スタンプ、ユーザー、およびパートナーの情報が含まれています。これらのデータは、イベントを作成した文書またはプロセスを識別するのに役立ちます。イベントが文書に関連している場合は、ロー文書を表示することもできます。これにより、ワールド、値、およびエラーの理由を確認できます。

イベント・タイプ

WebSphere Partner Gateway には、表 24 のリストにあるイベント・タイプが用意されています。

表 24. イベント・タイプ

イベント・タイプ	説明
デバッグ	デバッグ・イベントは、下位レベルのシステム操作およびサポートのために使用されます。このイベントの可視性および用途は、ユーザーの権限レベルによって変わります。すべてのユーザーがデバッグ・イベントへのアクセス権を所有しているわけではありません。
通知	通知イベントは、システム操作が正常に終了すると生成されます。これらのイベントは、現在処理中の文書の状況を示すときにも使用されます。通知イベントにはユーザー処置は必要ありません。
警告	警告イベントが発生するのは、文書処理またはシステム機能において、動作を継続できる重大ではない異常が発生した場合です。
エラー	エラー・イベントが発生するのは、文書処理においてプロセス強制終了の原因となる異常が発生した場合です。
重大	重大イベントは、システム障害によってサービスが強制終了すると生成されます。重大イベントが生成されると、サポート要員による操作が必要になります。

イベントの検索

1. 「ビューアー」 > 「イベント・ビューアー」の順にクリックします。

イベントは、「イベント・ビューアー検索」ウィンドウの左から右へ重大度の順に編成されます。左側の情報は重大度が最も低いイベント・タイプです。ウィンドウの右側にある「重大」情報は重大度が最も高いイベント・タイプです。イベントを選択すると、そのイベントと、それより重大度の高いすべてのイベントがイベント・ビューアーに表示されます。例えば、検索条件に警告イベント・タイプを選択すると、警告、エラー、重大のイベントが表示されます。デバッグ・イベントを選択すると、すべてのイベント・タイプが表示されます。

注: デバッグ・イベントは必ずしもすべてのユーザーに表示されるわけではありません。

2. リストから検索条件を選択します。

表 25. イベントの検索条件

値	説明
開始日および開始時刻 (Start date and time)	最初のイベントが発生した日時。
終了日および終了時刻 (End date and time)	最後のイベントが発生した日時。
パートナー	すべてのパートナーまたは特定のパートナーを選択 (内部パートナーのみ)。
イベント・タイプ	イベントのタイプ。デバッグ、通知、警告、エラー、重大のいずれかです。
イベント・コード	選択されたイベント・タイプに基づいて使用可能なイベント・コードを検索します。
イベント・ロケーション	イベントが生成された場所。すべて、不明、ソース (元)、ターゲット (先) があります。
ソート基準	結果を以下の基準でソートします。 <ul style="list-style-type: none">• イベント名• タイム・スタンプ• タイプ• ソース・パートナー• ソース IP
降順または昇順	デフォルトは「タイム・スタンプ」です。 降順では、最新のタイム・スタンプまたはアルファベット順の先頭を最初に表示します。 昇順では、最も古いタイム・スタンプまたはアルファベットの最後を最初に表示します。
ページごとの結果件数 最新表示	デフォルトは「降順」です。 1 ページに表示されるレコードの数。 デフォルト設定はオフです。「最新表示」をオンにすると、イベント・ビューアーはまず新規照会を実行し、その後最新表示モードを持続します。
最新表示頻度	検索結果の最新表示頻度を制御します (内部パートナーのみ)。

3. 「検索」をクリックします。イベントのリストが表示されます。

ヒント: イベント・リストは、「イベント・ビューアー」ウィンドウの上部で選択したイベント・タイプに基づいて、再度フィルター処理できます。次回のウィンドウ最新表示により、新たに選択されたイベント・タイプが反映されます。

イベント詳細の表示

1. 「ビューアー」>「イベント・ビューアー」の順にクリックします。
2. リストから検索条件を選択します。
3. 「検索」をクリックします。
4. 表示されたイベントのリストで、表示するイベントの横にある「詳細の表示」アイコンをクリックします。

5. 表示されたイベントの詳細で、表示する文書がある場合は、その文書の横にある「詳細の表示」アイコンをクリックします。
6. ロー文書がある場合は、「ロー文書の表示 (Display raw document)」アイコンをクリックしてその文書を表示します。
7. 検証エラーがある場合は、「検証エラーの表示」アイコンをクリックして検証エラーを表示します。

ヒント: 「イベント・ビューアー詳細」に重複文書のイベントが表示された場合は、「文書の詳細」の「元の文書の表示 (View original document)」アイコンをクリックして、以前に送信された元の文書を表示します。

AS ビューアー

Applicability Statement 1、2 または 3 (AS1、AS2 または AS3) 通信プロトコルを使用する、パッケージ化された B2B トランザクションおよび B2B プロセスの詳細を表示するには、AS ビューアーを使用します。B2B プロセスと、関連するビジネス文書、確認通知シグナル、プロセス状態、HTTP ヘッダー、および送信済み文書の内容のコレオグラフィーを表示できます。

SMTP を使用するデータ伝送の標準を定義する先行版の AS1 と同様に、AS2 は、HTTP を使用するデータ伝送の標準を定義します。AS3 は、FTP によるデータ伝送の標準です。

AS2 と AS3 では、データの接続方法、配信方法、検証方法、およびデータへの応答方法が定められています。AS2 と AS3 は、文書の内容はやりとりせず、トランスポートの内容のみをやりとりします。AS2 では HTTP または HTTPS、AS3 では FTP を使用してインターネット経由で文書を伝送できるように、文書を囲むラッパーが作成されます。文書とラッパーをまとめてメッセージと呼びます。AS2 には、HTTP パケットで伝送されるデータのセキュリティーを確保し、暗号化を行う機能があります。AS3 では、FTP トランスポートを使用して移送されるデータに対する同様の機能があります。AS2 および AS3 では、暗号化の基本に確実な配信がプラスされています。

AS2 および AS3 の重要なコンポーネントは、Message Disposition Notification (MDN) と呼ばれる受信メカニズムです。MDN により、文書の送信側は、受信側が文書を正常に受信したことを確認できます。送信側は、MDN の返送方法 (同期または非同期、および署名付きまたは未署名) を指定します。

注: 暗号化された着信 AS2 文書の暗号化解除に失敗すると、同じ接続では障害 MDN が送信されません。この送出手を訂正するには、2 つのパートナー間で使用するかしないかに関わらず、パートナー接続をアクティブにする必要があります。作成される接続は、「AS」から「なし」への接続である必要があります。つまり、一方のパートナーでは AS B2B 機能をアクティブ化し、もう一方のパートナーでは非 B2B 機能をアクティブ化するようにして、接続の作成とアクティブ化を行います。AS 側のソース・ゲートウェイは、必ず SMTP ゲートウェイ (AS1 の場合)、HTTP ゲートウェイ (AS2 の場合)、または FTP ゲートウェイ (AS3 の場合) であるようにしてください。このゲートウェイは MDN アドレスに対して構成されます。このように、暗号化解除に失敗した MDN は、この AS を通じて非バイナリー接続へ返送されます。

メッセージの検索

1. 「ビューアー」 > 「AS ビューアー」の順にクリックします。「AS ビューアー」ウィンドウが表示されます。
2. リストから、表 26 で説明されている検索条件を選択します。

表 26. AS ビューアーの検索条件

値	説明
開始日および開始時刻 (Start Date and Time)	処理が開始された日時。
終了日および終了時刻 (End Date and Time)	処理が完了した日時。
ソース・パートナーおよび ターゲット・パートナー パートナー	ソース(開始) パートナーとターゲット(受信) パートナーを指定 します (内部パートナーのみ)。 検索の適用範囲をすべてのパートナーにするか、内部パートナ ー (パートナーのみ) にするかを指定します。
自分の役割は以下	検索する文書のパートナーがターゲットかソースか (パートナ ーのみ) を指定します。
AS ソース・ビジネス ID	AS ヘッダーに定義されているソース・パートナーのビジネス識 別番号。
ペイロード・ソース・ビジ ネス ID	ペイロードの内容によって定義されるソース・パートナーのビ ジネス識別番号。
動作モード	実動またはテスト。テストを使用できるのは、テスト動作モー ドをサポートするシステムのみです。
パッケージ	文書フォーマット、パッケージ化、暗号化、およびコンテン ツ・タイプ識別番号について説明します。
プロトコル	パートナーに対して使用できる文書フォーマット (例: RosettaNet XML)。
文書タイプ メッセージ ID	特定のビジネス・プロセス。 AS のパッケージ済み文書に割り当てられた ID 番号。検索条件 には、アスタリスク (*) のワイルドカードを使用できます。最 大長は 255 文字です。
文書 ID 同期/非同期	文書 ID を指定します。 すべて、同期、非同期のいずれか。同期モード、非同期モー ド、または両方のモードで受信した文書を検索します。

表 26. AS ビューアーの検索条件 (続き)

値	説明
MDN 状況	<p>MDN 状況の複数選択ボックスで 1 つ以上の MDN 状況を指定します。可能なオプションは次のとおりです。</p> <p>すべて すべての結果を表示します。MDN 状況でフィルタリングしません。</p> <p>MDN は不要です MDN がない AS トランザクションや MDN が不要の AS トランザクションをすべて表示します。</p> <p>MDN を処理しました MDN が正常に処理された AS トランザクションをすべて表示します。</p> <p>MDN を待機しています MDN の受信を待機しているが、まだタイムアウトになっておらず、欠落した (または未受信) とは見なされていないすべての AS トランザクションを表示します。</p> <p>MDN が未受信です MDN を待機していたがタイムアウトになった AS トランザクションをすべて表示します。</p> <p>MDN 処理エラー MDN が処理エラー状態で戻された AS トランザクションをすべて表示します。</p> <p>不明 データベースが MDN 状況で更新されていないことを指定します。</p>
ソート基準	<p>結果を以下の基準でソートします。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ターゲット・タイム・スタンプ • ソース文書定義 • ターゲット文書タイプ • メッセージ ID • MDN 状況 • 文書 ID
降順または昇順	<p>デフォルトは「ターゲット・タイム・スタンプ」です。</p> <p>降順では、最新のタイム・スタンプまたはアルファベット順の先頭を最初に表示します。</p> <p>昇順では、最も古いタイム・スタンプまたはアルファベットの最後を最初に表示します。</p>
ページごとの結果件数	<p>デフォルトは「降順」です。</p> <p>1 ページに表示されるレコードの数を選択するのに使用します。</p>

3. 「検索」をクリックします。メッセージのリストが表示されます。

メッセージの詳細の表示

1. 「ビューアー」>「AS ビューアー」の順にクリックします。「AS ビューアー検索」ウィンドウが表示されます。
2. リストから検索条件を選択します。
3. 「検索」をクリックします。メッセージのリストが表示されます。

- 表示するメッセージの横にある「詳細の表示」アイコンをクリックします。表 27 で説明されているメッセージとその関連文書の詳細が表示されます。

表 27. メッセージの詳細

値	説明
メッセージ ID	AS のパッケージ済み文書に割り当てられた ID 番号。この番号で識別できるのは、パッケージのみです。文書自体には、文書の詳細とともに表示される個別の文書 ID 番号があります。最大長は 255 文字です。
ソース・パートナー	ビジネス・プロセスを開始するパートナー。
ターゲット・パートナー	ビジネス・プロセスを受け取るパートナー。
ソース・タイム・スタンプ	文書の処理が開始された日時。
動作モード	テストまたは実動。テストを使用できるのは、テスト動作モードをサポートするシステムのみです。
MDN URI	MDN の宛先アドレス。このアドレスには、HTTP URI または E メール・アドレスを指定できます。
MDN 処理テキスト	このテキストは、発信メッセージの受信状況 (正常または失敗) を示します。以下に例を示します。 <ul style="list-style-type: none"> Automatic-action/MDN-sent-automatically; processed. Automatic-action/MDN-sent-automatically; processed/Warning;duplicate-document. Automatic-action/MDN-sent-automatically; processed/Error;description-failed. Automatic-action/MDN-sent-automatically; failed:unsupported MIC-algorithms.

- (オプション) 「文書の詳細」アイコンをクリックし、文書の詳細情報を表示します。

RosettaNet ビューアー

RosettaNet は、e-ビジネス・トランザクションの業界標準を作成した企業間団体です。PIP (Partner Interface Process) には、ハブ・コミュニティのメンバー間のビジネス・プロセスが定義されます。各 PIP では、特定のビジネス文書と、内部パートナーと外部パートナー間のそのビジネス文書の処理方法が定められています。

RosettaNet ビューアーには、文書フローを正常に完了するために必要なサブトランザクションの配列が表示されます。RosettaNet ビューアーを使用して表示できる値には、プロセスの状態、詳細、ロー文書、関連するプロセス・イベントなどがあります。

イベントを生成した特定のプロセスを検索するには、RosettaNet ビューアーを使用します。ターゲットのプロセスを特定すると、プロセスの詳細とロー文書を表示できます。

RosettaNet ビューアーは、特定の検索条件に基づいてプロセスを表示します。

RosettaNet プロセスの検索

- 「ビューアー」 > 「RosettaNet ビューアー」の順にクリックします。

- 「RosettaNet ビューアー検索」ウィンドウで、リストから、表 28 で説明されている検索条件を選択します。

表 28. RosettaNet の検索条件

値	説明
開始日および開始時刻 (Start Date and Time)	処理が開始された日時。
終了日および終了時刻 (End Date and Time)	処理が完了した日時。
ソース・パートナーおよびターゲット・パートナー	ソース(開始) パートナーとターゲット(受信) パートナーを指定します (内部パートナーのみ)。検索の適用範囲をすべてのパートナーにするか、内部パートナー (パートナーのみ) にするかを示します。
自分の役割は以下	検索する文書のパートナーがターゲットかソースか (パートナーのみ) を示します。
ソース・ビジネス ID	開始パートナーのビジネス識別番号 (例: DUNS)。
動作モード	実動またはテスト。テストを使用できるのは、テスト動作モードをサポートするシステムのみです。
プロトコル	パートナーに対して使用できるプロトコル。
文書タイプ	特定のビジネス・プロセス。
プロセス・インスタンス ID	プロセスに割り当てられた固有の識別番号。検索条件には、アスタリスク (*) のワイルドカードを使用できます。
ソート基準	結果を以下の基準でソートします。 <ul style="list-style-type: none"> ターゲット・タイム・スタンプ 文書タイプ
降順または昇順	デフォルトは「ターゲット・タイム・スタンプ」です。降順では、最新のタイム・スタンプまたはアルファベット順の先頭を最初に表示します。昇順では、最も古いタイム・スタンプまたはアルファベットの最後を最初に表示します。
ページごとの結果件数	デフォルトは「降順」です。1 ページあたりに表示される結果の数を指定します。

- 「検索」をクリックします。検索条件に一致した RosettaNet プロセスが表示されます。

RosettaNet プロセスの詳細の表示

- 「ビューアー」>「RosettaNet ビューアー」の順にクリックします。「RosettaNet ビューアー検索」ウィンドウが表示されます。
- リストから検索条件を選択します。
- 「検索」をクリックします。117 ページの表 29 で説明されている検索結果が表示されます。

表 29. 文書処理の詳細

値	説明
パートナー	ビジネス・プロセスに関与しているパートナー。
タイム・スタンプ	最初の文書の処理が開始された日時。
文書タイプ	特定のビジネス・プロセス (例: RosettaNet (1.1): 3A7)。
動作モード	交換される文書の種類を示します。
プロセス・インスタンス ID	開始取引先によってプロセスに割り当てられる固有番号。
文書 ID	送信パートナーによって割り当てられる専有文書 ID。このフィールドの保管場所は固定されておらず、文書タイプによって異なります。
ソース・パートナー	開始パートナー。
ターゲット・パートナー	受信パートナー。

- 表示する RosettaNet プロセスの横にある「詳細の表示」アイコンをクリックします。選択したプロセスの詳細と関連文書が表示されます。
- 表示する文書の横にある「詳細の表示」アイコンをクリックします。文書とその関連イベントの詳細が表示されます。

ロー文書の表示

この手順を使用して、RosettaNet トランザクションに関連付けられたロー文書を表示します。

- 「ビューアー」 > 「RosettaNet ビューアー」の順にクリックします。「RosettaNet ビューアー検索」ウィンドウが表示されます。
- リストから検索条件を選択します。
- 「検索」をクリックします。プロセスのリストが表示されます。
- 表示するプロセスの横にある「詳細の表示」アイコンをクリックします。選択したプロセスの詳細と関連文書が表示されます。
- 「文書タイプ」の横にある「ロー文書の表示 (Display raw document)」アイコンをクリックして、ロー文書を表示します。

制約事項:

- ロー文書のうち、100K を超える部分は切り捨てられます。例えば、署名がロー文書 (.rno ファイル) の末尾にあり、ロー文書のサイズが 100K を超えるか、または署名が .rno ファイルの先頭から 100K 以降に存在する場合、署名は文書ビューアーに表示されません。
- ロー文書ビューアーに添付文書が表示されないことがあります。添付文書を表示するには、ロー文書ビューアーの「コピー」リンクをクリックし、ファイル (すべての添付文書を含む) をローカル・ディスクにコピーします。

ヒント:

- 処理できなかった文書のトラブルシューティングを行うには、124 ページの『データ検証エラーの表示』を参照してください。
- ロー文書のビューアーは、HTTP ヘッダーを付けてロー文書を表示します。

文書ビューアー

プロセスを構成する個々の文書を表示するには、文書ビューアーを使用します。検索条件を使用すると、ロー文書や関連の文書処理の詳細およびイベントを表示できます。また、文書ビューアーを使用して、処理に失敗した、または正常に処理された文書を再送することもできます。

文書の検索

1. 「ビューアー」 > 「文書ビューアー」の順にクリックします。「文書ビューアー検索」ウィンドウが表示されます。

2. リストから、表 30 で説明されている検索条件を選択します。

表 30. 文書ビューアーの検索条件

値	説明
開始日	文書タイプ・プロセスが開始された日付。
開始時刻	文書タイプ・プロセスが開始された時刻。
終了日	文書タイプ・プロセスが完了した日付。
終了時刻	文書タイプ・プロセスが完了した時刻。
ソース・パートナー	文書タイプを開始したパートナーを表します。デフォルトは「すべて」です。
ターゲット・パートナー	文書タイプを受信したパートナーを表します。デフォルトは「すべて」です。
検索基準	ソース文書タイプまたはターゲット文書タイプのどちらで検索するのかを示します。デフォルトは「ソース文書タイプ」です。
動作モード	交換される文書の種類を指定します (例えば、実動またはテストの目的で使用されるかどうか)。デフォルトは「すべて」です。
文書状況	システムにおける現在の文書の状況。進行中、正常、または失敗。デフォルトは「すべて」です。
パッケージ	文書フォーマット、パッケージ化、暗号化、およびコンテンツ・タイプ識別番号について説明します。検索対象をリストにあるパッケージに制限します。デフォルトは「すべて」です。
プロトコル	パートナーに対して使用できるプロセス・プロトコルのタイプ。
文書タイプ	この文書が含まれる特定の文書タイプ。文書タイプは、パッケージおよびプロトコルの下の第 3 レベルの文書定義です。
元のファイル名	ファイルに割り当てられた最初の名前。
文書 ID	ソース・パートナーによって作成されます。検索条件には、アスタリスク (*) のワイルドカードを使用できます。
参照 ID	文書状況の追跡のためにシステムで作成される ID 番号。
ソース IP アドレス	ソース・パートナーの IP アドレス。
フィルター	同期モードで受信した文書を検索します。これは、イニシエーターと文書マネージャーとの接続が、トランザクション (要求と確認通知、要求と応答など) が完了するまでオープン状態で維持されることを意味します。
ソート基準	結果を以下の基準でソートします。 <ul style="list-style-type: none"> • ターゲット・タイム・スタンプ • ソース文書定義 • ターゲット文書タイプ • 文書 ID
ページごとの結果件数	デフォルトは「ターゲット・タイム・スタンプ」です。1 ページに表示されるレコードの数。
降順または昇順	降順では、最新のタイム・スタンプまたはアルファベット順の先頭を最初に表示します。 昇順では、最も古いタイム・スタンプまたはアルファベット順の最後を最初に表示します。 デフォルトは「降順」です。

3. ユーザー定義検索フィールドを使用して検索するには、「**検索フィールド 1**」から「**検索フィールド 10**」というラベルのフィールドに検索条件を指定します。

ユーザー定義検索フィールドは、XML 形式または EDI 変換マップの構成時にシステム内の文書に対して定義したり、カスタム・ユーザー出口にしたりできます。XML 形式の構成の詳細については、「*WebSphere Partner Gateway Hub 構成ガイド*」を参照してください。ユーザー出口の作成に関するヘルプについては、「*WebSphere Partner Gateway Programmers Guide*」を参照してください。

システム内の文書に対してカスタム検索フィールドが定義されていない場合は、検索フィールドはブランクのままにします。

注: ユーザー定義検索データは、構成完了後に交換される文書の場合のみ保存されます。この構成前に交換された文書には、ユーザー定義検索データはありません。

4. 「**検索**」をクリックします。表 31 で説明されている検索結果が表示されます。

注: パートナーという用語は、ビューアー・ウィンドウで内部パートナーなどのハブ・コミュニティー・メンバーを識別するのに使用します。

表 31. 文書の詳細

値	説明
パートナー	ビジネス・プロセスに関与するソース (開始) パートナーとターゲット (受取) パートナー。
タイム・スタンプ	文書の処理が開始された日時および終了した日時。
文書タイプ	トランザクション処理中のビジネス・プロセス。
動作モード	実動またはテスト。テストを使用できるのは、テスト動作モードをサポートするシステムのみです。
同期	同期モードで受信した文書を識別します。これは、イニシエーターと文書マネージャーとの接続が、トランザクション (要求と確認通知、要求と応答など) が完了するまでオープン状態で維持されることを意味します。

文書の詳細、イベント、およびロー文書の表示

1. 「ビューアー」>「文書ビューアー」の順にクリックします。「文書ビューアー検索」ウィンドウが表示されます。
2. リストから検索条件を選択します。
3. 「**検索**」をクリックします。文書のリストが表示されます。
4. 表示する文書の横にある「**詳細の表示**」アイコンをクリックします。
 - EDI 交換文書では、エンベロープ解除またはエンベロープからの子 EDI トランザクションがある場合、「**文書の子**」ソースまたはターゲット・ラジオ・ボタンを選択してそれらを表示することができます。詳細については、122 ページの『EDI 文書の表示』を参照してください。
 - トランスポート・ヘッダー付きのロー文書を表示するには、その文書の横にある「**ロー文書の表示 (Display raw document)**」アイコンをクリックします。ロー文書の内容が表示されます。

- この文書に割り当てられているユーザー定義検索フィールドを表示するには、「ユーザー定義検索フィールド」セクションの「表示」リンクをクリックします。
- この文書に割り当てられている重複 ID フィールドを表示するには、「重複 ID フィールド」セクションの「表示」リンクをクリックします。

注: この文書が重複文書として戻された場合、重複 ID フィールドは空です。これらのフィールドにデータがある場合、そのデータはシステム内のすべての文書に対して固有である必要があります。

文書の詳細を表示すると、表 32 で説明されている文書処理情報が表示されます。

表 32. 文書ビューアーによって使用可能な文書処理の値

値	説明
参照 ID	システムによって文書に割り当てられた固有の識別番号。
文書 ID	ソース・パートナーによって文書に割り当てられた固有の識別番号。
文書のタイム・スタンプ	パートナーによって文書が作成された日時。
宛先	文書が通過する宛先。
接続文書タイプ	パートナーのビジネス要件と文書との互換性を確保するために、システムによって文書に実行されるアクション。
ソースおよびターゲット (Source and Target)	ビジネス・プロセスに関与しているソース・パートナーおよびターゲット・パートナー。
入力タイム・スタンプ	システムがパートナーから文書を受信した日時。
終了状態タイム・スタンプ	システムがターゲット・パートナーに対して文書を正常に送信した日時。
ソースおよびターゲットのビジネス ID (Source and Target Business ID)	ソース・パートナーおよびターゲット・パートナーのビジネス識別番号 (例: DUNS)。
ソースおよびターゲットの文書タイプ	ソース・パートナーとターゲット・パートナーとの間でトランザクションが処理される特定のビジネス・プロセス。

制約事項:

1. ロー文書のうち、100K を超える部分は切り捨てられます。例えば、署名がロー文書 (.rno ファイル) の末尾にあり、ロー文書のサイズが 100K を超えるか、または署名が .rno ファイルの先頭から 100K 以降に存在する場合、署名は文書ビューアーに表示されません。
2. ロー文書ビューアーに添付文書が表示されないことがあります。添付文書を表示するには、ロー文書ビューアーの「コピー」リンクをクリックし、ファイル (すべての添付文書を含む) をローカル・ディスクにコピーします。

ヒント:

1. 重複文書イベントが表示される場合は、重複文書イベントの横にある「送信済みの元の文書の表示 (View previously sent original document)」アイコンをクリックして、以前に送信された元の文書を表示してから、「元の文書の表示 (View original document)」アイコンをクリックします。

2. 処理に失敗した文書のトラブルシューティングについては、124 ページの『データ検証エラーの表示』を参照してください。

多数の文書の再送

バージョン 6.1.1 では文書ビューアー検索結果の画面が変更され、複数の文書を再送できるようになりました。

1. 「文書の検索」のセクションに記載されている手順に従います。
2. 文書ビューアー結果の画面で「インバウンド」チェック・ボックスまたは「アウトバウンド」チェック・ボックスを選択すると、そのカテゴリに含まれるすべての文書を再送できます。または、文書に対するチェック・ボックスを選択して、文書を個別に再送できます。

注: インバウンドまたはアウトバウンドを送信できますが、一度に両方を送信することはできません。

3. 「再送」をクリックします。

EDI 文書の表示

EDI 交換用のパススルー・サポートに加えて、WebSphere Partner Gateway では、EDI 交換のエンベロープ解除とエンベロープをサポートしています。外部パートナーまたは内部パートナーから受信すると、EDI 交換文書はエンベロープ解除されます。送られてくる交換からエンベロープ解除されるトランザクション文書は、その他のビジネス文書と同様に WebSphere Partner Gateway によって処理することができます。

WebSphere Partner Gateway は EDI トランザクションをエンベロープし、EDI 交換を生成します。EDI トランザクション文書は、XML、EDI、および ROD 文書を EDI トランザクションに変換することによって生成されます。WebSphere Partner Gateway が受信した EDI 交換からエンベロープ解除された EDI トランザクション文書は、別の EDI トランザクション文書タイプに変換できます。WebSphere Partner Gateway は EDI トランザクション文書を EDI 交換文書にエンベロープしてから、EDI 交換文書を対象となる受信者に送信します。

次のシナリオでは、この情報を見つける方法を示します。

- 『EDI 文書ソース・トランザクションの表示』
- 123 ページの『EDI 文書ターゲット・トランザクションの表示』
- 123 ページの『EDI トランザクションのソース交換の検索』
- 123 ページの『EDI 子トランザクションのターゲット交換の検索』

EDI 交換のエンベロープ解除とエンベロープの詳細については、「*WebSphere Partner Gateway E/A* ハブ構成ガイド」を参照してください。

EDI 文書ソース・トランザクションの表示

WebSphere Partner Gateway では、EDI 交換からの着信 EDI トランザクションをエンベロープ解除します。

結果の EDI トランザクションの子を表示するには、以下のステップを実行します。

1. 「ビューアー」>「文書ビューアー」の順にクリックします。「文書ビューアー 検索」ウィンドウが表示されます。
2. リストから検索条件を選択します。
3. 「検索」をクリックします。文書のリストが表示されます。
4. 文書 ID の横にある「詳細の表示」アイコンをクリックします。
5. 文書の子の詳細を表示するには、「文書の子」セクションの「ターゲット」をクリックします。

EDI 文書ターゲット・トランザクションの表示

WebSphere Partner Gateway は、発信 EDI トランザクションをエンベロープのため交換へ送付します。

結果の交換に含まれる EDI トランザクションの子を表示するには、以下のステップを実行します。

1. 「ビューアー」>「文書ビューアー」の順にクリックします。「文書ビューアー 検索」ウィンドウが表示されます。
2. WebSphere Partner Gateway が受信する EDI 交換を見つける検索条件を指定します。
3. 「検索」をクリックします。システムにより、検索条件に合うすべての文書のリストが表示されます。
4. 表示する文書の文書 ID の横にある「詳細の表示」アイコンをクリックします。
5. 文書の子の詳細を表示するには、「文書の子」セクションの「ターゲット」をクリックします。

EDI トランザクションのソース交換の検索

文書ビューアーを使用して、EDI トランザクションのソース交換を取得できます。

1. 「ビューアー」>「文書ビューアー」の順にクリックします。「文書ビューアー 検索」ウィンドウが表示されます。
2. リストから検索条件を選択します。
3. 「検索」をクリックします。文書のリストが表示されます。

各 EDI トランザクションごとにソース交換文書 ID がリストされます。

EDI 子トランザクションのターゲット交換の検索

文書ビューアーを使用して、EDI 子トランザクションのターゲット交換を取得できます。

1. 「ビューアー」>「文書ビューアー」の順にクリックします。「文書ビューアー 検索」ウィンドウが表示されます。
2. リストから検索条件を選択します。
3. 「検索」をクリックします。文書のリストが表示されます。
4. 文書 ID の横にある「詳細の表示」アイコンをクリックします。
5. 「文書イベント」セクションで「情報」をクリックします。
6. 「イベント名」列の「EDI トランザクションがエンベロープされました」の横にある「展開」アイコンをクリックします。

7. 「イベントの詳細」リストからエンベロープ・アクティビティ ID を見付けてコピーします。
8. 「ビューアー」>「文書ビューアー」の順にクリックします。「文書ビューアー検索」ウィンドウが表示されます。
9. エンベロープ・アクティビティ ID を「参照 ID」フィールドに貼り付けて、「検索」をクリックします。

文書ビューアーには、ターゲット交換情報が表示されます。

文書検証エラー

文書検証エラーを表示するには、「文書ビューアー」タブの「文書の詳細」ページにある「文書の表示」アイコンをクリックします。「文書検証エラー」ページに以下のフィールドが表示されます。

- XML フィールド: エラーの原因となっている XML エLEMENTの XPath 式を表示します。
- 値の説明: 表示されているELEMENTに受け入れられない問題のある値を表示します。
- エラーの説明: エラー状態および考えられる正しいELEMENT値を表示します。

データ検証エラーの表示

検証エラーが含まれている XML フィールドで色分けされたテキストを使用すると、処理できなかった文書をすばやく検索できます。検証エラーが含まれるフィールドは、赤色で表示されます。ネストされた XML フィールド内で異なる検証エラーが最大 3 種類発生した場合は、表 33 に示す概要どおり、エラー・フィールドを区別するために色が使用されます。

表 33. 色分けされた文書検証エラー

値	説明
赤色	第 1 の検証エラー
オレンジ色	第 2 の検証エラー
緑色	第 3 の検証エラー

ネストされた XML 検証エラーの例を次に示します。

Contactinformation データ・エレメントは、このタグの位置が間違っているので、最初の検証エラーです。正しい位置は、PartnerRoleDescription の直後です。

FreeFormText データ・エレメントは、このタグが重複しているので、2 番目の検証エラーです。

John データ・エレメントは、少なくとも 6 文字必要なフィールドなので、3 番目の検証エラーです。

```

<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?><!DOCTYPE Pip3 A7PurchaseOrderUpdateNotifion
SYSTEM "3A7_MS_V02_00_PurchaseOrderUpdateNotification.dtd">
<Pip3A7PurchaseOrderUpdateNotificafion>
  <fromRole>
    <PartnerRoleDescription>
      <GlobalPartnerRoleClassificationCode>Seller</GlobalPartnerRoleClassificationCode>
      <PartnerDescription>
        <ContactInformation>
          <ContactName>
            <FreeFormText>John</FreeFormText>
            <FreeFormText>John</FreeFormText>
          </contactName>
          <EmailAddress>John@example.com</EmailAddress>
          <telephoneNumber>
            <CommunicationsNumber>+1-234-567-8998-8</CommunicationsNumber>
            </telephoneNumber>
            <facsimileNumber>
              <CommunicationsNumber>+1-234-567-8998-7</CommunicationsNumber>
              </facsimileNumber>
            </ContactInformation>
          <BusinessDescription>
            <GlobalBusinessIdentifier>123456789</GlobalBusinessIdentifier>
            <GlobalSupplyChainCode>InformationTechnology</GlobalSupplyChainCode>
            <BusinessDescription>
              <GlobalPartnerClassificationCode>Carrier</GlobalPartnerClassificationCode>
            </PartnerDescription>
          </PartnerRoleDescription>
        </ContactInformation>
      </PartnerRoleDescription>
    </fromRole>
  </Pip3A7PurchaseOrderUpdateNotificafion>

```

ネストされていない XML 検証エラーの例は次のとおりです。

EmailAddress データ・エレメントは、このタグの位置が間違っているので、最初のネスト化されない検証エラーです。正しい位置は、Contactinformation の直後です。

```

<billTo>
  <PartnerRoleDescription>
    <EmailAddress>frances@sample.com</EmailAddress>
    <ContactInformation>
      <contactName>
        <FreeFormText>String</FreeFormText>
      </contactName>
      <facsimileNumber>
        <CommunicationsNumber>String</CommunicationsNumber>
      </facsimileNumber>
      <telephoneNumber>
        <CommunicationsNumber>+888-999-0000</CommunicationsNumber>
        <telephoneNumber>

```

電話番号データ・エレメントは、このフィールドにはさらに国別コードの 2 文字が必要なので、2 番目のネスト化されない検証エラーです。

ロー文書の検証エラーの表示方法について詳しくは、117 ページの『ロー文書の表示』を参照してください。

制約事項: コンソールに表示される内容は、ロー文書の先頭の 100KB のみです。100KB を超える検証エラーは表示できません。

処理中の文書の停止

現在進行中の文書を停止させるには、「プロセスの停止」をクリックします。この機能は、モジュールの再送権限が使用可能なユーザーのみ使用可能です。

注: システムが文書の処理を停止するには、最大で 1 時間かかります。この期間、文書ビューアーは文書の状況を進行中として表示し続けます。

コンソールで文書の「プロセスの停止」をクリックした後、プロセス停止を要求すると、文書の停止プロセスが開始され、「停止を実行依頼しました」アイコンが表示されます。

処理に失敗した文書、または正常に処理された文書の再送

処理に失敗した文書は、失敗の原因を修正してから再送できます。また、正常に処理された文書でも、要求があれば再送できます。例えば、バックエンド・システムと接続される前にクライアント・サーバーで元文書が失われた場合には、パートナーが文書の再送を要求する場合があります。

管理者が再送できる文書として 2 つの基本型があります。

- **入力文書**は、バックエンドまたはパートナーから WebSphere Partner Gateway に入ってくる文書です。これらの文書は、レシーバー、文書取得エンジン (DAE)、またはビジネス・プロセス・エンジン (BPE) では失敗する場合があります。
- **出力文書**は、WebSphere Partner Gateway からバックエンドまたはパートナーへ送られる文書です。これらの文書は、BPE または Delivery Manager で失敗する場合があります。

失敗した入力文書を再送するには、入力文書を選択して「再送」をクリックします。文書は、障害のロケーションに基づいて DAE または BPE から再実行依頼されます。例えば、DAE での入力文書の失敗は、次の場合に発生します。

- 受信した文書サイズが最大サイズ制限よりも大きい。
- 受信した文書の否認防止が失敗した。
- BPE への文書の送信が失敗した。

BPE での入力文書の失敗は、次の場合に発生します。

- 固定インバウンド・ワークフローの失敗
 - アンパック中、メッセージの暗号化解除やシグニチャーの検証時にメッセージの失敗が発生することがあります。これは、パートナーまたはハブで証明書を誤って構成したことによって引き起こされます。
 - B2B 機能がパートナーに対して構成されていない。
- 可変ワークフローの失敗
 - 検証マップが構成されていない。
 - 無効な変換マップが構成されている。

注: 管理者が問題を解決すると、レシーバーで失敗した文書が再実行依頼されます。

失敗した出力文書を再送するには、出力文書を選択して「再送」をクリックします。文書は、BPE または Delivery Manager から再実行依頼されます。

出力文書の失敗は、次の場合に発生します。

- BPE 障害で出力文書自体を再実行依頼するのは意味がないので、BPE 障害では入力文書を再実行依頼します。これにより、訂正された BPE フローにおける誤り

が確実に取り出されます。訂正は、例えば、変換内にあります。BPE における出力文書の失敗は、固定アウトバウンド・ワークフローの失敗である可能性があります。パートナーまたはハブに対する誤った証明書構成のため、メッセージの暗号化または署名時に、メッセージのパッケージ化が失敗する場合があります。

- **Delivery Manager** の失敗:
 - 問題が BPE フロー内のエラーである場合は、**入力文書**を再実行依頼する必要があります。これにより、BPE フロー内の訂正が確実に取り上げられます。例えば、宛先情報が誤っている場合です。
 - 例えば宛先トランスポートが停止したなど、別の理由で障害が発生した場合は、**出力文書**の再実行依頼を実行できます。また、**入力文書**の再実行依頼も可能です。

特に DAE または BPE から、再送を中断するような変更はされていないという基本的な前提事項があります。例えば、**入力文書**が暗号化されている場合、文書の暗号化解除に必要な証明書は、文書の暗号化に使用された証明書から変更されてはいけません。管理者は、再送で生じる可能性のある結果を認識している必要があります。

入力文書を再送すると、この文書はすべてのワークフロー処理ステップを通過します。例えば、文書がパートナーからの AS2 要求で、MDN が必要な場合、文書の初回処理時に MDN が既に送信されている可能性がある場合でも、パートナーに対して MDN が送信されます。また、重複文書 ID 検査が迂回されます。ただし、ビジネス・プロトコルによっては、重複文書 ID が検出されると警告が出されることがあります。

文書を再送するには、以下のステップを実行します。

1. 「**ビューアー**」 > 「**文書ビューアー**」の順にクリックします。「**文書ビューアー** 検索」ウィンドウが表示されます。
2. リストから検索条件を選択します。
3. 「**検索**」をクリックします。文書のリストが表示されます。
4. 再送する 1 つ以上の文書を選択します。

注: ebMS Ping 文書を再送する場合は、新規 Ping 文書が作成されます。

5. 「**再送**」をクリックします。

再送が処理されると、確認メッセージを受信します。

ebMS ビューアー

ebXML Message Service (ebMS) メカニズムは、ebXML 取引先間でビジネス・メッセージを交換する標準的な方法を提供します。専有のテクノロジーおよびソリューションに頼ることなくビジネス・メッセージを交換するための、信頼性の高い手段を提供します。ebXML メッセージには、メッセージ・ヘッダーの構造 (ルーティングおよび配信に必要) およびペイロード・セクションが含まれています。ebXML メッセージは、通信プロトコルに依存しない MIME/Multipart メッセージ・エンベロープです。

ebMS プロセスの検索

1. 「ビューアー」 > 「ebMS ビューアー」の順にクリックします。「ebMS ビューアー検索」画面が表示されます。
2. リストから検索条件を選択します。

値	説明
開始日および開始時刻 (Start Date and Time)	処理が開始された日時。
終了日および終了時刻 (End Date and Time)	処理が完了した日時。
ソース・パートナー	送信側パートナーを識別します。
ターゲット・パートナー	受信側パートナーを識別します。
ソース・ビジネス ID	開始パートナーのビジネス識別番号。
動作モード	実動、テスト、RN シミュレーター外部パートナー、または RN シミュレーター内部パートナー。テストを使用できるのは、テスト動作モードをサポートするシステムのみです。
プロトコル	パートナーに対して使用できるプロトコル。
文書タイプ	文書の送信に使用されるソース・プロトコルの名前。
会話 ID	文書の送信に使用されるソース文書タイプの名前。
ソート基準	結果を以下の基準でソートします。 <ul style="list-style-type: none">• ターゲット・タイム・スタンプ• 文書タイプ
降順または昇順	デフォルトは「ターゲット・タイム・スタンプ」です。降順では、最新のタイム・スタンプまたはアルファベット順の先頭を最初に表示します。 昇順では、最も古いタイム・スタンプまたはアルファベットの最後を最初に表示します。
ページごとの結果件数	デフォルトは「降順」です。ページごとの結果の数 n を表示します。

3. 「検索」をクリックします。検索条件に一致した ebMS プロセスが表示されません。

ebMS プロセスの詳細の表示

1. 「ビューアー」 > 「ebMS ビューアー」の順にクリックします。「ebMS ビューアー検索」ウィンドウが表示されます。
2. リストから検索条件を選択します。
3. 「検索」をクリックします。129 ページの表 34 で説明されている検索結果が表示されます。

表 34. ebMS 処理の詳細

値	説明
パートナー	ビジネス・プロセスに関与しているパートナー。
タイム・スタンプ	最初の文書の処理が開始された日時。
文書タイプ	特定のビジネス・プロセス (例: ebMS (2.0): ALMService)。
動作モード	交換される文書の種類を示します。
同期	
プロセス状況	受信側により示されるプロセスの状況。
変換 ID	開始パートナーによってプロセスに割り当てられる固有番号。
ソース・パートナー	開始パートナー。
ターゲット・パートナー	受信パートナー。

- 表示する ebMS プロセスの横にある「**詳細の表示**」アイコンをクリックします。選択したプロセスの詳細 (会話状況など) と関連文書が表示されます。会話状況は、次のプロセスを示します (確認通知の待機など)。会話状況が「完了」の場合、すべての子の処理が完了しています。
- 表示する文書の横にある「**詳細の表示**」アイコンをクリックします。文書とその関連イベントの詳細が表示されます。

ロー文書の表示

この手順を使用して、ebMS トランザクションに関連付けられたロー文書を表示します。

- 「**ビューアー**」 > 「**ebMS ビューアー**」の順にクリックします。「ebMS ビューアー検索」ウィンドウが表示されます。
- 検索条件を入力または選択します。
- 「**検索**」をクリックします。プロセスのリストが表示されます。
- 表示するプロセスの横にある「**詳細の表示**」アイコンをクリックします。選択したプロセスの詳細と関連文書が表示されます。
- 「文書タイプ」の横にある「**ロー文書の表示 (Display raw document)**」アイコンをクリックして、ロー文書を表示します。

制約事項:

- ロー文書のうち、100K を超える部分は切り捨てられます。例えば、署名がロー文書 (.rno ファイル) の末尾にあり、ロー文書のサイズが 100K を超えるか、または署名が .rno ファイルの先頭から 100K 以降に存在する場合、署名は文書ビューアーに表示されません。
- ロー文書ビューアーに添付文書が表示されないことがあります。添付文書を表示するには、ロー文書ビューアーの「**コピー**」リンクをクリックし、ファイル (すべての添付文書を含む) をローカル・ディスクにコピーします。

ヒント:

- 処理できなかった文書のトラブルシューティングを行うには、124 ページの『データ検証エラーの表示』を参照してください。
- ロー文書のビューアーは、HTTP ヘッダーを付けてロー文書を表示します。

文書の状況の要求と表示

文書の状況を要求するには、次の手順を実行します。

注: 状況を要求できるのは、文書状況が保留中で、状況の要求機能が使用可能な場合のみです。

1. 「ビューアー」>「**ebMS ビューアー**」の順にクリックします。「ebMS ビューアー検索」ウィンドウが表示されます。
2. 適切な検索条件を入力または選択します。
3. 「**検索**」をクリックします。プロセスのリストが表示されます。
4. 表示するプロセスの横にある「**詳細の表示**」アイコンをクリックします。選択したプロセスの詳細と関連文書が表示されます。
5. 詳細リストから文書を選択し、「**状況の要求**」をクリックします。
6. 状況が受信されると、ページに「**状況の表示**」が表示されます。「**状況の表示**」をクリックします。

文書が保留中の場合は、文書の最終状態とタイム・スタンプが表示されます。

宛先キュー

宛先キューを使用すると、宛先の配信キューに入っている文書を表示できます。宛先キューを使用することにより、配信のためにキューに入れられた文書を持つすべての宛先を表示したり、キュー内の文書を表示および除去したり、宛先を使用可能または使用不可にしたりできます。詳しくは、91 ページの『第 8 章 宛先キューの管理』を参照してください。

第 11 章 実動トラフィックのシミュレーション

RosettaNet Partner Simulator (RN PS) は、ハブ・コミュニティが稼働する前後に使用可能で、内部パートナーと外部パートナーとの間の実動トラフィック (要求、応答、および確認通知) のシミュレーションを実行します。外部パートナーは、RN PS の記述では仮想テスト・パートナー (VTP) と呼ばれます。

RN PS の目的は、次のとおりです。

- RN 要求をハブを経由して内部パートナーに送信する外部パートナーをシミュレートする手段を提供する。
- RosettaNet Service Content (RNSC) をハブを経由して外部パートナーに送信する内部パートナー・エンタープライズ・システムをシミュレートする手段を提供する。

内部パートナーは、RN PS を使用して、文書のフォーマット設定が正しいことや、文書に有効なビジネス・コンテンツが含まれていることを確認します。

RN PS を使用すると、内部パートナーは、自らのバックエンド・アプリケーションからテストを開始したり、パートナーにデータの送信を要求したりせずに、バックエンド・システム (文書マネージャーおよびレシーバー) をテストできます。その結果、コミュニティ・マネージャーはテスト・システムや技術サポート要員を確保しなくてもテストを実行できます。

テストを開始するには、内部パートナーがテスト文書をアップロードします。この機能が使用できるのは、RNIF v2.0 のみです。RNIF 1.1 との互換性はありません。テスト文書は、RosettaNet サービス・コンテンツ・ファイルである必要があります。RosettaNet オブジェクト (RNO) をアップロードすることはできません。サービス・コンテンツは、RosettaNet ビジネス・メッセージのペイロードの主要コンポーネントです。これは、特定の PIP によって指定されたビジネス・コンテンツを表す XML 文書です。ペイロードには、添付ファイルも含まれます。WebSphere Partner Gateway は、テスト文書を使用してルーティング情報や処理情報を識別します。

RN PS を使用して RN 文書が WebShere Partner Gateway に送られると、確認通知が生成されます。3A4 確認が RN PS に送信されると、文書マネージャーは 0A1 との交換を終了します。

インストール・プロセスは、テスト・プロセスの間に確認通知を受け取るためにリンク宛先 (つまり、ビット・バケット) を作成します。

```
http://<hostname>:<port#>/console/sink
```

または

```
https://<hostname>:<port#>/console/sink
```

この章を構成するセクションは次のとおりです。

- 132 ページの『テストの準備』

- 133 ページの『テスト・シナリオの設定』
- 136 ページの『要求と応答のアップロードおよび表示』
- 136 ページの『文書タイプの開始と表示』

テストの準備

テストを開始する前に、次のタスクを実行しておく必要があります。タスクは、内部パートナーからの要求または応答のいずれか、またはパートナーからの要求または応答のいずれかのうち、シミュレートしている役割によって異なります。

1. 構成した接続を検討し、テスト・シナリオが正しく構成されていることを確認します。特に、接続に構成されている宛先がアクティブであることを確認してください。
2. 受信側が使用可能で、メッセージを受け取るための適切な URL で構成されていることを確認します。異なる受信側には、異なるトラフィックが発生します。

この要件が適用されるのは、応答が必要な文書をテストする場合のみです。受信側の詳細については、「*WebSphere Partner Gateway E/A* ハブ構成ガイド」を参照してください。

3. テスト文書のヘッダーに表示されるビジネス ID を確認します。ビジネス ID は、ルーティング・プロセスを駆動し、文書の送信先を制御します。

例えば、文書を自分自身、つまり内部パートナーに送信する場合は、文書ヘッダーの「送信先」ビジネス ID を自分自身のビジネス ID にする必要があります。システムは、「送信先」のビジネス ID を使用して、正しい接続を検索します。

次に示すのは、テスト文書中の「送信元」ビジネス ID と「送信先」ビジネス ID の例です (関係のない行は削除されています)。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<!DOCTYPE Preamble SYSTEM "3A4_MS_V02_02_PurchaseOrderRequest.dtd">
<Pip3A4PurchaseOrderRequest>
  <fromRole>
    <GlobalBusinessIdentifier>987654321</GlobalBusinessIdentifier>
  <toRole>
    <GlobalBusinessIdentifier>567890123</GlobalBusinessIdentifier>
```

テスト・シナリオの設定

RN PS を使用することにより、コミュニティー・マネージャーとパートナーとの間で、表 35 に示されるシナリオをテストできます。

表 35. テスト・シナリオ

シナリオ	接続の宛先	URL
内部パートナーから外部パートナーへの片方向アウトバウンド。	VTP_Owner	VTP_OWNER
内部パートナーをシミュレートします。 外部パートナーから内部パートナーへの片方向インバウンド。	VTP_TP	このシナリオには適用されません。
外部パートナーをシミュレートします。 内部パートナーから外部パートナーへの両方向アウトバウンド (アップロード要求)。	VTP_Owner	VTP_OWNER
内部パートナーをシミュレートします。 外部パートナーから内部パートナーへの両方向インバウンド (アップロード要求)。	VTP_TP	VTP_TP
外部パートナーをシミュレートします。 内部パートナーから外部パートナーへの両方向アウトバウンド (アップロード応答)。	VTP_TP	VTP_TP
外部パートナーをシミュレートします。 外部パートナーから内部パートナーへの両方向インバウンド (アップロード応答)。	VTP_Owner	VTP_Owner

サンプル・シナリオ

ここでは、2 つの片方向 RosettaNet (RN) インタラクションをシミュレートするために、RN PS の構成に関する手順を説明します。ここでは、RN インタラクションのセットアップ手順を RN PS セットアップに関連づけて説明しています。一般的な RN 構成の詳細については、「*WebSphere Partner Gateway E/A ハブ構成ガイド*」を参照してください。

RN PS で使用されるディレクトリーとハブ構成設定が分かり、パートナー間のルーティングをデバッグするときに、RN PS が役に立つことが良く理解できます。

内部パートナー

内部パートナーの HTTP シンク宛先をセットアップします。これは、次の URL に送信される HTTP 宛先です。http://<console-ip>:<console-port>/console/sink

シンク宛先は、内部パートナーのデフォルト RN PS パートナーおよび RN PS マネージャー宛先として指定する必要があります。

外部パートナー

内部パートナー用にセットアップしたようにパートナー用の HTTP シンク宛先をセットアップします。

RosettaNet PIP XML ファイル

3A4 インタラクションがここで説明するシナリオです。外部パートナーから内部パートナーへのシミュレーションでは、3A4 購入注文要求コンテンツを含む XML を使用します。

内部パートナーから外部パートナーへのシミュレーションでは、3A4 購入注文確認 RNSC コンテンツに適合する XML を使用します。これらの XML ファイルはローカル・ファイル・システムに存在します。

関連情報については、「*WebSphere Partner Gateway E/A ハブ構成ガイド*」を参照してください。ファイルを作成する場合は、宛先および受信元 ID が、これらのファイルの該当する場所の内部パートナーおよび外部パートナーの ID と一致する必要があります。

コンソール・サーバーおよびルーター・サーバーの構成

シミュレーションで暗号化または署名を使用する場合は、公開鍵および秘密鍵証明書のペアが必要です。秘密鍵ストアには p8 フォーマット、公開証明書には der フォーマットを使用します。

1. p8 および der ファイルを `common/security/vtp` ディレクトリーにコピーします。
2. der ファイルを `common/security/ca` ディレクトリーにコピーします。
3. コンソールが開始し、ハブ管理者としてログインしたら、der ファイルをルートおよび中間証明書としてアップロードします。
4. コンソール構成を変更して、証明書および鍵ストア・ファイルをポイントします。
 - a. コンソールで「システム管理」>「コンソール管理」>「RN シミュレーター」にナビゲートし、RN PS プロパティーを表示します。
 - b. 「変更」アイコンをクリックし、画面を編集モードに切り替えます。次に示すプロパティーに、ご使用のシステムに対応した値を指定します。以下に示すように、der および p8 ファイル・フォーマットを使用する必要があります。

```
bcg.console.certs.vtp.CertificateDir=C:/<INSTALL DIR>/common/security/vtp
ibm.bcg.certs.vtp.Certificate=testcert.der
ibm.bcg.certs.vtp.PrivateKey=testkey.p8
ibm.bcg.certs.vtp.Passwd=password
ibm.bcg.certs.vtp.VerifySig=false
ibm.bcg.vtp.RouterIn=C:/<INSTALL DIR>/common/router_in
```
 - c. 「保存」ボタンをクリックして、行った変更を保存します。
5. コンソール・サーバーが実行中の場合は、再始動します。実行中でない場合は、今すぐ開始します。
6. 文書マネージャー構成が正しくセットアップされていることを確認します。
 - a. コンソールで「システム管理」>「DocMgr 管理」>「セキュリティ」にナビゲートし、文書マネージャーのセキュリティ・プロパティーを表示します。
 - b. 「変更」アイコンをクリックし、画面を編集モードに切り替えます。

- c. `bcg.certs.vtp.CertificateDir` プロパティの値を、ステップ 4b (134 ページ) でコンソールが示したディレクトリーを指すように変更します。プロパティ設定を保存します。

注: これらのディレクトリー名は、コンポーネントがインストールされているサーバーに関連づけて設定されています。文書マネージャーとコンソールではファイル・システムのマップ方法が異なることがあるため、この点を考慮して、同一ディレクトリーを指すようにする必要があります。

7. 文書マネージャー・サーバーが実行中の場合は、再始動します。実行中でない場合は、今すぐ開始します。

3A4 接続の構成

RosettaNet ルーティングを熟知している場合は、以下の手順で外部パートナーと内部パートナー間の RosettaNet 接続を構成します。

RosettaNet ルーティングを熟知していない場合は、以下のタスクを実行するときの支援として、「*WebSphere Partner Gateway E/A ハブ構成ガイド*」を参照してください。

1. 3A4 インタラクションをサポートする RN および RNSC ファイルをインポートします。

以下のファイルを示された順にアップロードします。ファイルは、インストール CD の `/B2Bintegrate/rosettanet` ディレクトリーに存在します。

- `Package_RNIF_V02.00.zip`
 - `BCG_Package_RNIFV02.00_3A4V02.02.zip`
 - `Package_RNSC_1.0_RNIF_V02.00.zip`
 - `BCG_Package_RNSC1.0_RNIFV02.00_3A4V02.02.zip`
2. ハブを経由して送信される 3A4 購入注文要求および確認の機能 (インタラクションと呼ばれる) を定義します。
 3. RNSC コンテンツを使用するパートナー 3A4 要求および確認のソースおよび受信側である内部パートナーと外部パートナーを構成します。
 4. シミュレートするシナリオをサポートするために、内部パートナーと外部パートナー間にパートナー接続を確立します。
 5. システムに配置したセキュリティー成果物を使用して、オプションで署名および暗号化を指定するために、接続の属性を設定します。

ファイル・システムにサンプル 3A4 要求 XML と 3A4 RNSC XML ファイルが存在する場合は、RosettaNet パートナー・シミュレーターを使用してすべての内部ルーティング機能を実行できます。「**RosettaNet パートナー・シミュレーター**」ページを選択し、「参照」をクリックします。送信するコンテンツを含むファイル・システムからファイルを選択して、「**経路**」をクリックします。

文書がファイル・システムから読み取られて、ハブにアップロードされます。その文書がルーティングのために文書マネージャーに渡され、ハブに構成した経路が使用されます。

要求と応答のアップロードおよび表示

要求および応答を送信するには、システムの機能をテストする必要があります。両タイプの文書のアップロードには、「文書のアップロード」ウィンドウが使用されます。

要求を送信する場合は、2番目の機能ウィンドウ「文書タイプの表示」を使用して文書を調べ、この文書が正常に処理されたこと（応答が保留状態のオープン文書であること）を確認します。内部アプリケーションを調べて、文書の受信および処理が正常に実行されたことを確認します。テキスト・エディターを使用して、要求の「送信先」と宛先セクションを編集し、応答を作成します。その後、応答をアップロードします。

応答を送信するときにも、「文書タイプの表示」ウィンドウを使用して文書を調べることができます。応答を編集する必要はありません。

「文書タイプの表示」ウィンドウには、確認通知が保留状態の文書は表示されません。

アップロードが完了すると、RN PS ビューがルーティング結果のウィンドウに変わり、RosettaNet ビューアーと文書ビューアーへのリンクが表示されます。これらの2つのリンクは、便宜のために設定されています。これにより、ルーティング結果を確認する2つのビューアーにアクセスできます。数秒間待って、文書マネージャーがメッセージを処理できるようになってから結果を表示します。

文書タイプの開始と表示

この機能を使用すると、片方向および両方向の RosettaNet PIP の開始と受信をシミュレートすることにより、内部アプリケーションをテストする便利な方法を利用できます。

文書タイプを開始するには、次の手順に従います。

1. 「RosettaNet パートナー・シミュレーター」 > 「文書タイプの開始 (Initiate Document Type)」をクリックします。「文書のアップロード」ウィンドウが表示されます。
2. アップロードする RosettaNet サービス・コンテンツ文書を探す場合は、「参照」をクリックします。この文書には、デジタル署名が必要です。
3. 「経路」をクリックして、テスト・プロセスを開始します。文書は、文書のルーティング情報に基づいて、システムを介して適切な宛先に送信されます。
 - 文書が正常に送信されると、RosettaNet および文書ビューアーへのリンクのついたメッセージが表示されます。これらのリンクは、文書の送信の進行状況を追跡するときに使用します。
 - 文書の送信中にエラーが発生した場合は、システム生成イベントのリストを含むエラー・メッセージが表示されます。この情報を使用して文書内のエラーを修正し、RN PS を使用して文書を再送信します。
4. 片方向シナリオのシミュレーションをしている場合、テストはこれで完了です。

オープン文書の検索

1. 「RosettaNet パートナー・シミュレーター」 > 「文書フローの表示 (View Document Flows)」をクリックします。
2. 「詳細の表示」アイコンをクリックして、文書タイプを表示し、開きます。「オープン RN PS 文書タイプ (Open RN PS Document Type)」ウィンドウが表示されます。
3. 「ロー文書の表示 (Display raw document)」アイコンをクリックしてロー文書を表示します。

オープン文書への応答

1. テキスト・エディターを使用して、応答文書が必要なプロセスの宛先や宛先セクションを編集 (VTP_OWNER を VTP_TP に変更、または VTP_TP を VTP_OWNER に変更) し、受信側の URL を適切に変更します。テストのシナリオについて詳しくは、表 36 を参照してください。

表 36. テスト・シナリオ

シナリオ	接続の宛先	URL
内部パートナーから外部パートナーへの両方向アウトバウンド (アップロード要求)。 内部パートナーをシミュレートします。	VTP_TP	VTP_TP
外部パートナーから内部パートナーへの片方向インバウンド。 外部パートナーをシミュレートします。	VTP_OWNER	VTP_OWNER
内部パートナーから外部パートナーへの両方向アウトバウンド (アップロード応答)。 外部パートナーをシミュレートします。	VTP_OWNER	VTP_OWNER
外部パートナーから内部パートナーへの両方向インバウンド (アップロード応答)。 外部パートナーをシミュレートします。	VTP_TP	VTP_TP

2. 「RosettaNet パートナー・シミュレーター」 > 「文書タイプの表示 (View Document Type)」をクリックします。
3. 応答文書が必要な文書の横にある「応答」をクリックします。
4. 「参照」をクリックし、編集済みの文書を選択します。
5. 「経路」をクリックします。文書は、文書に含まれているルーティング情報に基づいて、システムを介して適切な宛先に送信されます。
6. 「文書タイプの表示」をクリックして、文書を表示します。

オープン文書の削除

1. 「RosettaNet パートナー・シミュレーター」 > 「文書タイプの表示 (View Document Type)」をクリックします。
2. 表示されている文書の横にある「除去」をクリックします。文書がシステムから削除されます。

第 12 章 アーカイブ

この章には、WebSphere Partner Gateway ユーザー用のデータ・アーカイブ管理情報が記載されています。タスクを実行する前には、この章全体をお読みください。

UNIX ユーザーに対する注記: アーカイブ・コマンドを実行するとき使用するユーザー ID に以下の権限が付与されていることを確認してください。

- 共通ファイル・システム・ディレクトリーへの読み取り/書き込み権限
- すべてのスクリプト・ファイル名に「.sh」の拡張子が付いていること
- データベース・コマンドの実行権限
 - DB2 の場合、スクリプト `/home/db2inst1/sqlllib/db2profile` を実行して、データベース実行権限をセットアップできます。
 - Oracle の場合は `oraenv` スクリプトを実行します。

詳細については、Oracle UNIX のインストール・ガイドを参照してください。WebSphere Partner Gateway のハブ管理者としてログインすることをお勧めします。WebSphere Partner Gateway のデフォルトのユーザー ID は、`bcguser` です。

この章を構成するセクションは次のとおりです。

- 『ファイル・システム・ログとデータベース・ログのアーカイブおよびページ』
- 144 ページの『データベース・テーブルのページ』

ファイル・システム・ログとデータベース・ログのアーカイブおよびページ

バージョン 6.1.1 では、ファイルのアーカイブがマルチスレッド化され、新規プロパティ `bcg.archive.maxThreads` が導入されました。このプロパティのデフォルト値は 4 です。この値にはアーカイブの間に許可されるスレッドの最大数を指定します。このプロパティの値を変更するには、「**コンソール**」>「**システム管理**」>「**共通プロパティ**」タブにナビゲートします。複数マシンのデプロイメントの場合は、ローカル共通フォルダーを使用したアーカイブが 1 つのマシン上で実行されます。これにより、その他のすべてのマシン上にあるファイルに対しても検査が行われます。復元操作を行うと、操作が呼び出されたローカル・マシンの共通フォルダーにのみ、すべてのファイルが復元されます。複数マシンのデプロイメントの場合は、`DBArchiveParams.properties` という名前のプロパティ・ファイルを作成してください。以下はプロパティ・ファイルの例です。

```
bcg.doc.nonrepstore.x=//9.42.81.233/common/non_rep
bcg.doc.msgstore.x=//9.42.81.233/common/msg_store
bcg.bpe_temp_directory.main.x = //9.42.81.233/common/data
bcg.delivery.gatewayDirectory.x=//9.42.81.233/common/gateways
X denotes the number WPG instances.
```

このプロパティ・ファイルは、bcgArchive.jar ファイルと同じ場所に置くことをお勧めします。例えば、C:\Program Files\IBM\bcghub-distrib\bin などです。WebSphere Partner Gateway の運用効率を維持するには、次の手順を使用して、ファイル・システムおよびデータベースをアーカイブするか、使用していない古いデータをパージします。

アプリケーション・ログ・ファイルのパージ

151 ページの『第 13 章 ログイン機能およびトレース機能の使用』では、WebSphere Partner Gateway がログインおよびトレース処理に使用するファイルについて説明しています。これらのファイルをパージするには、以下の手順に従います。

1. 該当するコンポーネントを停止します。
2. 不要なログ・ファイルを除去します。

否認防止ファイルのアーカイブ

ファイル・システムおよびデータベースからの否認防止データのアーカイブ、パージ、および復元は、以下の 6 つの操作で行います。

1. データベース (LG_MSG_ARCHIVE テーブル) からアーカイブ場所にデータをコピーします。
2. ファイル・システムの non_rep フォルダーからアーカイブ場所にデータをコピーします。

注: この手順の後に、必要に応じてデータを外部メディア・ソースに移動できます。次の手順では、WebSphere Partner Gateway データベースおよびファイル・システムからデータを削除します。

3. ファイル・システムの non_rep および msg_store フォルダーからデータをパージします。
4. データベースからデータをパージします。
5. (データを復元する場合のみ) アーカイブ場所からデータベース・テーブル LG_MSG_ARCHIVE にデータを復元します。
6. (データを復元する場合のみ) アーカイブ場所からファイル・システムの non_rep フォルダーにデータを復元します。

注: WebSphere Partner Gateway 6.1 では、取引先名または文書フロー定義のフィルターを指定することにより、データのサブセットをアーカイブできます。

以下では、下記の操作の詳細について説明します。

1. データベースの LG_MSG_ARCHIVE テーブルからアーカイブ場所にデータをコピーする。
 - a. DB2 コマンド・ウィンドウからデータベースに接続し、スクリプト bcgdbloader\scripts\DB2\bcgDBNonRepExport を実行する。

- b. Oracle データベースを使用している場合、スクリプト `bcgdbloader\scripts\Oracle\bcgDBNonRepExport` を実行する。

使用法:

```
bcgDBNonRepExport <userid> <password> <cutoff date YYYYMMDD>
<archive destination> <partner> [package] [package version]
[protocol] [protocol version] [document type name] [document type version]
```

スクリプト・パラメーター:

- a. データベース・ユーザー名

注: データベース・ユーザーはスキーマ所有者です。

- DB2 の場合、デフォルトは `db2admin` または `db2inst1` です。
- Oracle の場合、デフォルトは `bcgapps` です。

- b. データベース・ユーザー・パスワード

注: Oracle を使用している場合は、SYSTEM ユーザーのパスワードを使用します。

- c. カットオフ日付 YYYYMMDD
- d. アーカイブの宛先ディレクトリー
- e. パートナー名
- f. 文書定義パッケージ名 (オプション)
- g. 文書定義パッケージ・バージョン (オプション)
- h. 文書定義プロトコル名 (オプション)
- i. 文書定義プロトコル・バージョン (オプション)
- j. 文書タイプ名 (オプション)
- k. 文書タイプ・バージョン (オプション)

例:

```
bcgDBNonRepExport db2admin pa55word 20050318 C:%Temp%Database
partnerA N/A * None * EDI-X12 *
```

アーカイブされたエントリーと `msgarchive.txt` ログ・ファイルが、`C:\Temp\Database\20050330` フォルダーに追加されます。

2. WebSphere Partner Gateway 共通ファイル・システムの `non_rep` フォルダーおよび `msg_store` フォルダーから、アーカイブにデータをコピーします。
 - a. 否認防止ストレージが存在するワークステーションからスクリプト `bcghub%bin%bcgArchive.bat` を実行します。

使用法:

```
bcgArchive <userid> <password> <cutoff date YYYYMMDD>
<archive task: COPY|DELETE> <module: NONREP|MSGSTORE|COMMON|PURGEDATA>
<archive destination> <partner> [package] [package version]
[protocol] [protocol version] [document type name] [document type version]
```

スクリプト・パラメーター:

- a. データベース・ユーザー名
- b. データベース・ユーザー・パスワード

- c. カットオフ日付 YYYYMMDD
- d. アーカイブ・タスク: COPY
- e. モジュール: NONREP または MSGSTORE、COMMON および PURGEDATA
- f. アーカイブの宛先
- g. パートナー名 (必須。ただし「*」に設定可)
- h. パッケージ名 (オプション)
- i. パッケージ・バージョン (オプション)
- j. プロトコル名 (オプション)
- k. プロトコル・バージョン (オプション)
- l. 文書タイプ名 (オプション)
- m. 文書タイプ・バージョン (オプション)

パラメーターである「g」から「m」までが「*」(すべて) に設定された場合、スループットが速くなります。

注: モジュールでは、カットオフ日付に DELETE NONREP の指定された bcgArchive が呼び出された場合 (つまり、パートナー名、パッケージ名、パッケージ・バージョン、プロトコル名、プロトコル・バージョン、プロセス名、およびプロセス・バージョンのすべてが「*」(すべて) に設定された場合)、PURGEDATA 値は「True」に設定されます。PURGEDATA が True の場合、以下のことが起こります。

- a. MSGSTORE と COMMON からのフォルダー (およびそのフォルダーに含まれるファイル) も削除されます。
- b. 以下のコンポーネント用のデータベース・テーブルから、データがパーズされます。
 - メッセージ・アーカイブ
 - 状態エンジン
 - ロギング
 - サマリー

例:

```
bcgArchive db2admin pa55word 20050318 COPY NONREP C:¥Temp¥Database
partnerA N/A * None * EDI-X12 *
```

アーカイブされたファイル・システムの non_rep エントリーおよび DBOutput.txt ログ・ファイルが C:¥Temp¥Database¥20050318 フォルダにコピーされます。

注: WebSphere Partner Gateway の否認防止ディレクトリー、メッセージ・ストア・ディレクトリー、および共通ディレクトリーにあるファイルを処理するには、bcgArchive スクリプトを最大 3 回実行する必要があります。

ステップ 1 および 2 が正常に完了した (同じデータ・ソースのデータがアーカイブにコピーされた) 場合に限り、ステップ 3 (143 ページ) および 4 (143 ページ) (ファイル・システムとデータベース・テーブルからデータを除去する)に進みます。

3. ファイル・システムの non_rep および msg_store フォルダからアーカイブ済みデータをパージするために、以下の設定を使用して bcgArchive スクリプトを 2 回実行します。
 - a. ARCHIVE_TASK=DELETE および MODULE= NONREP
 - b. ARCHIVE_TASK=DELETE および MODULE= MSGSTORE
4. データベースからアーカイブ済みデータをパージするために、以下のユーティリティを実行します。
 - a. DB2 コマンド・ウィンドウからデータベースに接続し、スクリプト bcgdbloader¥scripts¥DB2¥bcgNonRepMaintenance を実行します。
 - b. Oracle データベースを使用している場合は、スクリプト bcgdbloader¥scripts¥Oracle¥bcgNonRepMaintenance を実行します。

使用法:

```
bcgNonRepMaintenance <userid> <password> <cutoff date YYYYMMDD> <partner>
[package] [package version] [protocol] [protocol version] [document type name]
[document type version]
```

スクリプト・パラメーター:

- a. データベース・ユーザー名
- b. データベース・ユーザー・パスワード
- c. カットオフ日付 YYYYMMDD
- d. パートナー名
- e. パッケージ名 (オプション)
- f. パッケージ・バージョン (オプション)
- g. プロトコル名 (オプション)
- h. プロトコル・バージョン (オプション)
- i. 文書タイプ名 (オプション)
- j. 文書タイプ・バージョン (オプション)

例:

```
bcgNonRepMaintenance db2admin pa55word 20050318 partnerA N/A * None * EDI-X12 *
```

この時点で、データベースおよびファイル・システムにデータを復元する場合は、ステップ 5 および 6 (144 ページ) に進みます。

5. アーカイブ場所から WebSphere Partner データベースにデータを復元します。
 - DB2 コマンド・ウィンドウからデータベースに接続し、以下のスクリプトを実行します。


```
bcgdbloader¥scripts¥DB2¥bcgDBNonRepImport
```
 - Oracle データベースを使用している場合は、以下のスクリプトを実行します。


```
bcgdbloader¥scripts¥Oracle¥bcgDBNonRepExport
```

使用法:

```
bcgDBNonRepImport <userid> <password> <archive source>
```

スクリプト・パラメーター:

- a. データベース・ユーザー名

- b. データベース・ユーザー・パスワード
- c. アーカイブ・ソース

例:

```
bcgDBNonRepImport db2admin pa55word C:¥Temp¥Database¥20050318
```

6. アーカイブ場所から non_rep フォルダーにデータを復元します。

否認防止ストレージが存在するワークステーションで、以下のスクリプトを実行します。

```
bcghub¥bin¥bcgRestore.bat
```

使用法:

```
bcgRestore <archive location>
```

スクリプト・パラメーター:

- a. アーカイブのロケーション
- b. アーカイブ・ステップのログ・ファイル DBOutput.txt の場所。

例:

```
bcgRestore C:\Temp\Database
```

データベース・テーブルのパージ

必要に応じて特定のデータベース・テーブルをパージできますが、適切なシステム機能性を維持するために、他のテーブルは変更しないでください。

BP_ および LG_ で始まるテーブルはパージできますが、次の 2 つの例外があります。つまり、_QUE および _HIST で終わる BP_ テーブルは RosettaNet エンジンで継続して保守されるので、変更しないでください。_QUE で終わる BP_ テーブルはキュー・テーブルで、_HIST で終わる BP_ テーブルはアーカイブに使用されるヒストリー・テーブルです。例えば、BP_RNSTATEHDR_QUE テーブルは BP_RNSTATEHDR_HIST テーブルにアーカイブされます。

CG_ および PR_ で始まるテーブルには構成データまたはプロファイル・データが格納されており、システムの機能を適正に維持するために、これらのテーブルも未変更の状態を保つ必要があります。

RosettaNet および AS 状態エンジンのアーカイブ機能およびパージ機能

テーブル・データのパージ条件は、データをオンライン状態で保持する日数に基づいています。_Hist で終わるテーブル内のデータは、日次でアーカイブされ、パージされます。また、ログ情報もすべて毎日切り捨てられます。

パージ条件には、p_days という入力パラメーターが 1 つだけ含まれています。このパラメーターは、データがオンラインで保持される日数を表します。

テーブル	ヒストリー・テーブル	アクション
RosettaNet		

テーブル	ヒストリー・テーブル	アクション
BP_rnStateHdr	BP_rnStateHdr_Hist	ページ
BP_rnStateDtl	BP_rnStateDtl_Hist	ページ
BP_Sponsor_State	BP_Sponsor_State_Hist	ページ
BP_rnStateHdrAuditLog	なし	切り捨て
AS		
BP_State_Hdr	BP_State_Hdr_Hist	ページ
BP_AS_State_Hdr	BP_AS_State_Hdr_Hist	ページ
BP_AS_State_Dtl	BP_AS_State_Dtl_Hist	ページ

状態エンジン・テーブルからのデータの除去

状態エンジン・テーブルからデータを除去するには、AR_STATEENGINE_MAINTENANCE データベース・ストアード・プロシージャを使用します。このプロシージャは、データが除去される時までに入力パラメーターをカットオフ日付として扱います。その日付以前の全レコードがデータベースから除去されます。

DB2 の場合、DB2 コマンド行から以下のコマンドを入力します。

```
call AR_STATEENGINE_MAINTENANCE
(<date till when the data is to be removed, as string YYYY-MM-DD>)
```

例: call AR_STATEENGINE_MAINTENANCE('2006-12-31')

Oracle の場合、SQLPLUS から以下のコマンドを入力します。

```
execute AR_STATEENGINE_MAINTENANCE
(<date till when the data is to be removed, as string YYYY-MM-DD>)
```

例: execute AR_STATEENGINE_MAINTENANCE('2006-12-31')

bcgStateEngineMaintenance.sh は、このストアード・プロシージャを呼び出す定義済みスクリプト・ファイルです。

データ保存期間

プロシージャは、ヘッダーのレコード作成日と p_days 入力パラメーターとの組み合わせに基づいて、データをページします。TPA がヘッダーに保管した実行時間は考慮されません。p_days パラメーターが (実行のための時間/1440) の最大値より大きいことの確認は DBA で行います。実行時間は分単位で保管されます。

BP_ テーブルのデータは、p_days または ((実行時間/1440) + 1 日) のいずれか長い方の期間、オンライン上に保持することをお勧めします。BP_DupCheck および BP_RnMsgDigest テーブルのデータは、7 日間保持する必要があります。BP_Process_Log のデータは、2 日間保持する必要があります。

ログ・テーブルとサマリー・テーブル

LG_EventCd、LG_Media、および LG_media_Cfg を除いて、LG_ で始まる名前のテーブルはログ・テーブルとサマリー・テーブルです。これらはメタデータ・テーブ

ルで、システムの機能を適正に維持するために、未変更の状態を保つ必要があります。LG_Access_ で始まるテーブルは、WebSphere Partner Gateway では使用されなくなっています。

次のログ・テーブルのアーカイブおよびパージは、アクティビティ ID に基づいて実行できます。駆動テーブルは LG_Activity になります。作成日または RevDocTS を使用して、データをオンライン上に保持する日数を指定できます。RevDocTS は索引付きの列であるため、選択した方がよいオプションです。データがオンライン上に保持される期間は、7 日間か ((実行時間/1440) + 1 日) のいずれか長い方になります。

テーブル	注
LG_ACTIVITY	
LG_ACTIVITY_DTL	
LG_ACTIVITY_ENDSTATE	
LG_ACTIVITY_RNDTL	
LG_ACTIVITY_RNHDR	
LG_AS_DTL	
LG_AS_HDR	
LG_ACTIVITY_EVENT	LG_Activity を LG_event にリンクします。
LG_EVENT	
LG_EVENT_EVENTSUMMARY	LG_Event を LG_EventSummary および LG_EventSummary にリンクします。DRILLDOWNFLG を使用して、ドリルダウンが使用できないことを指定できます (4.2.1 および 4.2.2 のプロシージャには実装されていません)。
LG_ACTIVITY_SUMMARY	LG_Activity を LG_Summary および LG_Summary にリンクします。DRILLDOWNFLG を使用して、ドリルダウンが使用できないことを指定できます (4.2.1 および 4.2.2 のプロシージャには実装されていません)。

次のログ・テーブルは、作成日に基づいてパージできます。

テーブル	注
LG_Delivery_Log	作成日から 1 日以上経過したレコードをパージできます。
LG_STACKTRACE	作成日から 7 日以上経過したレコードをパージできます。
LG_SYNCH_REQ_RESP	作成日から 7 日間か ((実行時間/1440) + 1 日) のいずれか長い期間が経過したレコードをパージできます。
LG_VALIDATION	作成日から 7 日以上経過したレコードをパージできます。

LG_VTP_STATUS 作成日から 7 日以上経過したレコードをパージできます。

次のサマリー・テーブルは、システムの機能を適正に維持するために、未変更の状態を保つ必要があります。

テーブル 注

イベント・サマリー・テーブル

LG_EVENTSUMMARY

LG_EVENTSUMMARY_XREF

プロセス・サマリー・テーブル

LG_PROCESSSUMMARY_AS

LG_PROCESSSUMMARY_AS_MI

LG_PROCESSSUMMARY_AS_XREF

LG_PROCESSSUMMARY_RN

LG_PROCESSSUMMARY_RN_MI

LG_PROCESSSUMMARY_XREF

文書サマリー・テーブル

LG_DOCPROCESSING_SUMLG_MSGLENGTH_SUMMARY

LG_SUMMARY

LG_SUMMARY_MI

LG_SUMMARY_PROCESSSUMMARY

LG_SUM_XREF_LNK を
LG_PROCESSSUMMARY_XREF にリンクします。

LG_SUMMARY_RN

LG_SUMMARY_RN_MI

LG_SUM_XREF_LNK

LG_SUM_XREF_PART および
LG_SUM_XREF_PRCS を LG_SUMMARY にリンクします。

LG_SUM_XREF_PART

LG_SUM_XREF_PRCS

メッセージ長サマリー

LG_MSGLENGTH_SUMMARY

サマリー・テーブルからのデータの除去

サマリー・テーブルからデータを除去するには、AR_SUMMARY_MAINTENANCE ストアド・プロシージャを使用します。入力パラメーターとしてカットオフ日付を使用します。

DB2 の場合、DB2 コマンド行から以下のコマンドを入力します。

```
call AR_SUMMARY_MAINTENANCE(<cut-off date, format:'YYYY-MM-DD'>)
```

例: call AR_SUMMARY_MAINTENANCE('2005-10-21')

Oracle の場合、SQLPLUS から以下のコマンドを入力します。

```
execute AR_SUMMARY_MAINTENANCE(<cut-off date, format:'YYYY-MM-DD'>)
```

例: execute AR_SUMMARY_MAINTENANCE('2006-12-31')

bcgSummaryMaintenance.sh は、このストアード・プロシージャを呼び出す定義済みスクリプト・ファイルです。

ロギング・テーブルからのデータの除去

ロギング・テーブルからデータを除去するには、AR_PURGE_HEADERS ストアード・プロシージャを使用します。入力パラメーターとしてカットオフ日付を使用します。

DB2 の場合、DB2 コマンド行から以下のコマンドを入力します。

```
call AR_PURGE_HEADERS(<cut-off date, format:'YYYY-MM-DD'>)
```

例: call AR_PURGE_HEADERS('2006-12-31')

Oracle の場合、SQLPLUS から以下のコマンドを入力します。

```
execute AR_PURGE_HEADERS(<cut-off date, format:'YYYY-MM-DD'>)
```

例: execute AR_PURGE_HEADERS('2006-12-31')

bcgPurgeMaintenance.sh は、このストアード・プロシージャを呼び出す定義済みスクリプト・ファイルです。

データベース・テーブル区画の管理

WebSphere Partner Gateway のデータベース管理タスクには、LG_MSG_ARCHIVE テーブルにある区画の保守が含まれます。 WebSphere Partner Gateway では、区画化管理スクリプトを使用して区画の終了日とサイズを指定することにより、区画を追加することができます。各区画には指定した日数分のデータを入れられます。

```
bcgAddPartition <Owner> <Password> <TableName>  
<EndDate> <Size of Partition in NumberOfDays>
```

例えば、次のようになります。

```
bcgAddPartition.sh db2inst2 db2passwd LG_MSG_ARCHIVE 20070831 3
```

注: 「テーブル区画化」機能は、テーブルを区画化した場合にのみ必要です。また、この機能は DB2 バージョン 8 では使用できません。

このスクリプトの例では、最終区画の終了日から 20070831 までの区画を LG_MSG_ARCHIVE に追加し、各区画に 3 日間の範囲を付けます。1 カ月分のデータの入るテーブル内の区画を持つことをお勧めします。1 カ月より長い期間の履歴データは、**実行時間**により必須とされて保守されなければなりません。

また、日付範囲で指定された区画を既定のテーブルから除去することもできます。

```
bcgDropPartition <Owner> <Password> <TableName> <StartDate> <EndDate>
```

例えば、次のようになります。

```
bcgDropPartition.sh db2inst2 db2passwd LG_MSG_ARCHIVE 20070501 20070831
```

このスクリプトを使用すると、日付範囲が 20070501 と 20070831 の間である区画をすべて除去することができます。

既定のテーブルの区画リストを表示するには、次のコマンドを実行します。

```
bcgListPartition <Owner> <Password> <TableName> <StartDate> <EndDate>
```

例えば、次のようになります。

```
bcgListPartition.sh db2inst2 db2passwd LG_MSG_ARCHIVE 20070531 20080331
```

このコマンドの例では、LG_MSG_ARCHIVE にある区画で、20070531 に開始し 20080331 に終了するものをリストします。

第 13 章 ログ機能およびトレース機能の使用

Partner Gateway 管理者のタスクの 1 つは、文書の処理中に発生する問題の診断を支援することです。ロギングおよびトレースは、問題の診断で使用するツールです。管理者は、問題の診断で必要とされる情報を提供できるようにシステムの構成を行う方法を知っておく必要があります。

WebSphere Application Server には、ホストするアプリケーションが使用可能な洗練されたロギング機能とトレース機能があります。Partner Gateway のコンポーネントは、WebSphere Application Server によってホストされるアプリケーションで、WebSphere のログ機能とトレース機能を使用します。

WebSphere Application Server の資料には、ロギングおよびトレースの構成方法についての一般情報が記載されていますが、WebSphere Partner Gateway で使用するには、知っておくべき特定の情報が多数あります。この章では、WebSphere Application Server コンソールを使用したロギングおよびトレースの制御について知っておく必要のある重要な項目を要約して説明します。このような一般情報の他に、ロギングおよびトレースを使用して Partner Gateway の問題を解決する方法についての特定の項目についても示します。

ロギングとトレースの違い

このセクションの目的を考え、ロギングおよびトレースという用語を次のように定義します。

ロギング

ログ・メッセージは、アプリケーションが標準出力ストリームまたは標準エラー・ストリームへの書き込みを行う場合は常に書き込まれます。アプリケーション開発者は、これらのストリームにメッセージを書き込んで、プログラムの状況についての一般情報を提供できます。例えば、アプリケーションの開始時には、通常、アプリケーションが使用するサブシステムへのアクセスがあったことやアプリケーション自体が開始されたことを確認するログ・メッセージが書き込まれます。例外が発生すると、その例外は、検出したアプリケーションによってログ・メッセージの形式で記録されます。例外が発生したときのシステムの状態を示すスタック・トレースは、標準エラー・ストリームに書き込むことによって保存されます。

ログ・メッセージは、WebSphere Application Server の次のファイルに書き込まれます。

- SystemOut.log。標準出力ストリームに書き込まれるメッセージを記録します。
- SystemErr.log。標準エラー・ストリームに書き込まれるメッセージを記録します。

ログ・メッセージの一部を書き込みその他を省略するというフィルタリング方法はありませぬ。ログ・メッセージは常に書き込まれるため、一般的な内容の短いメッセージになる傾向があります。ログ・メッセージは、システム

の状況に関する情報を提供し、問題の発生時に使用すべき詳細トレースのタイプについてヒントを与えてくれるため、多くの場合役立ちます。

トレース

トレース・メッセージは、ログ・メッセージとは異なり、システムがトレース・メッセージを書き込むように構成されている場合にのみアプリケーションによって書き込まれます。WebSphere Partner Gateway アプリケーションには多数のトレース・メッセージが備えられており、それらを使用してシステムの動作に関する詳細情報を取得できます。WebSphere Application Server コンソールを使用して、次の 2 つの基準に基づいてトレース・メッセージをフィルタリングします。

- メッセージの重大度
- メッセージの送信元

トレース・メッセージは、ログ・メッセージがなくてもトレース・メッセージのみでトレース・ファイルに出力されます。

トレース・ファイルの名前、トレース・ファイルの形式、トレース・ファイルの管理方法、およびトレース・ファイルに書き込まれるメッセージのタイプを指定して、WebSphere Application Server を構成できます。各 WebSphere Partner Gateway アプリケーションには、これらの構成値に対応するデフォルトの設定値があります。

ログ・ファイル管理

ログ・ファイル SystemOut.log と SystemErr.log は、アプリケーションが配置されているワークステーションのパス `<WebSphere install dir>/wasND/profiles/<profile-name>/logs/<server-name>` の下に格納されます。

ログ・ファイルを管理するということは、使用可能なディスク・スペースの容量を制御することになります。サイズを制限する何らかの方法が必要です。制限しないと、ログ・ファイルは制御不能となるほど大きくなり、その結果、システムの状態に影響を及ぼす可能性があります。ファイル・サイズを制御するには、それらのファイルを循環ログ・ファイルのセットとして維持します。その場合は、セット内のファイル数、および各ファイルでロギングをセット内の次のファイルに移行させる上限サイズを構成できます。これにより、ログ・ファイルによって消費される合計ディスク・スペースを制限します。

ログ・ファイルを構成する前に、WebSphere Partner Gateway システムが、シンプル・モードと分散モードのどちらを使用してインストールされているかを判別します。シンプル・モード・システムおよび分散モード・システムの詳細については、「*WebSphere Partner Gateway インストール・ガイド*」を参照してください。シンプル・モードと分散モードでは WebSphere Application Server へのアクセス方法が異なるため、インストール済み環境で使用するモードについて知っておくことは重要です。

シンプル・モード・システムの場合、WebSphere Application Server 管理コンソールは、`http://<server-address>/58090/admin` にブラウザすると表示されます。ここで `server-address` は、システムがインストールされているワークステーションのサー

バー・アドレスです。Port 58090 はインストーラーが使用するデフォルト値ですが、インストール時にデフォルト・ポートを使用しなかった場合は、このポートとは異なります。

分散モード・システムを使用する場合は、WebSphere Application Server 管理コンソールのデプロイメント・マネージャーを使用します。デプロイメント・マネージャーを表示するには、`http://<deployment_mgr_address>/55090/admin` へブラウザします。Port 55090 はインストーラーが使用するデフォルト値ですが、インストール時にデフォルト・ポートを使用しなかった場合は、このポートとは異なります。

どちらのモードでも、サーバーが使用する循環ログ・ファイルの構成手順は同じです。

1. 左ペインで「サーバー」、「アプリケーション・サーバー」をクリックしてサーバー名を右ペインにリストし、コンソールでサーバーを検索します。
2. リストでサーバー名を選択し、構成するサーバーの詳細を表示します。
3. ページの終わり付近にある「トラブルシューティング」の見出しが見えるまで、画面をスクロールします。「トラブルシューティング」の下の「ロギングおよびトレース」をクリックします。
4. 「JVM ログ」をクリックして、ロギング構成の詳細を表示します。
5. 表示されるタブ付きのウィンドウには、「構成」および「ランタイム」というタブがあります。

注:

- a. 「構成」ページでの変更は、サーバーの再始動後に有効になります。これらの変更点は、サーバーを何回再始動しても持続されます。
- b. 「ランタイム」ページでの変更は即時有効になりますが、「ランタイム変更も構成に保存する」を選択しない限り、サーバーの再始動が行われると持続されません。

「構成」ページの主な機能は次のとおりです。

- ページには 2 つのセクションがあります。一方のページは標準出力ロギングを構成するためのもので、もう一方のページは標準エラー・ロギングを構成するためのものです。
- サーバーのログ・メッセージを保管するために使用するファイルの名前およびパスを変更できます。
- ログ・メッセージで使用するフォーマットを変更できます。どちらのフォーマットも、アプリケーションが書き込むメッセージをとりなます。基本フォーマットと拡張フォーマットの違いは、各メッセージに含まれるメタ情報の量です。メタ情報は、ログが書き込まれた時刻 (基本および拡張) や情報を書き込んだスレッド名 (拡張のみ) などの情報です。
- 循環ロギングの構成方法を制御することができます。リング内のファイルのサイズと数、およびロールオーバーの起動方式 (ファイル・サイズまたは時間) を設定するオプションが用意されています。

「ランタイム」ページの主な特徴は、「表示」をクリックして特定のファイルのログ・ファイルを表示できることです。表示される行番号は、行番号の範囲を入力してビューアーのページを最新表示することにより変更できます。

これらの機能の詳しい説明については、WebSphere Application Server の資料を参照してください。

トレース・ファイル管理

トレース・ファイルの管理には、以下のタスクが含まれます。

- トレース・ファイルが消費可能なディスク・スペースの容量の制御
- トレース・ファイルの名前とパスの設定
- トレース・ファイル・フォーマットの設定
- トレース情報をファイルに書き込む WebSphere Partner Gateway コンポーネントの決定
- 選択したコンポーネントのトレース・レベルの設定

トレース構成の設定は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用しています。

シンプル・モード・システムでのトレースの構成

シンプル・モード・システムのトレースの設定は、分散モード・システムの設定と若干異なります。シンプル・モード・システムのトレースを構成するには、<http://<server-address>/58090/admin> へブラウザして WebSphere Application Server 管理コンソールを使用します。

Port 58090 はインストーラーが使用するデフォルト値ですが、インストール時にデフォルト・ポートを使用しなかった場合は、このポートとは異なります。

1. 左ペインで「**サーバー/アプリケーション・サーバー (Servers/Application servers)**」をクリックしてサーバー名を右ペインにリストし、コンソールで server1 という名前のシンプル・モード・サーバーを見つけます。
2. リスト内の名前をクリックして、server1 の詳細を表示します。
3. ページの終わり付近にある「**トラブルシューティング**」の見出しが見えるまで、画面をスクロールします。「**トラブルシューティング**」の下の「**ロギングおよびトレース**」をクリックします。
4. 「**診断トレース**」をクリックして、トレース構成の詳細を表示します。

デフォルトでは、シンプル・モードの WebSphere Partner Gateway アプリケーションのトレース・ファイルは、155 ページの表 37 に示すように構成されます。すべての WebSphere Partner Gateway アプリケーションが server1 に配置されるため、すべてのトレース・メッセージが同じトレース・ファイルに書き込まれます。トレース・ファイルは、`<WebSphere install dir>/wasND/profiles/<profile-name>/logs/<server-name>` のデフォルト・ディレクトリーに保管されます。これは、ログ・ファイルが書き込まれるデフォルト・ディレクトリーと同じです。

表 37. シンプル・モードのトレース構成

アプリケーション	トレース・ファイル名	フォーマット	ファイル数	最大ファイル・サイズ
すべてのアプリケーション (コンソール、レシーバー、および 文書マネージャー)	trace.log	基本	1	20 Mb

シンプル・モード・インストーラーは、WebSphere Partner Gateway アプリケーションのコンポーネントにはロギング・レベルを設定しません。ロギング・レベルは、コンポーネントが提供するトレース情報の量を制御します。WebSphere Partner Gateway アプリケーションでトレースが必要な場合は、ロギング・レベルを指定する必要があります。ロギング・レベルの変更については、157 ページの『ログ詳細レベルの設定』を参照してください。

分散モード・システムでのトレースの設定

分散モード・インストールでトレース・ファイルを管理するには、WebSphere Application Server 管理コンソールのデプロイメント・マネージャーを使用します。デプロイメント・マネージャーを表示するには、<http://<server-address>/55090/admin> へブラウザします。

Port 55090 はインストーラーが使用するデフォルト値ですが、インストール時にデフォルト・ポートを使用しなかった場合は、このポートとは異なります。

1. 左ペインで「**サーバー/アプリケーション・サーバー (Servers/Application servers)**」をクリックしてサーバー名を右ペインにリストし、トレースするサーバーを見つけます。
2. 構成するサーバーの詳細を表示するには、リスト内のサーバー名を選択します。
3. ページの終わり付近にある「**トラブルシューティング**」の見出しが見えるまで、画面をスクロールします。「**トラブルシューティング**」の下の「**ロギングおよびトレース**」をクリックします。
4. 「**診断トレース**」をクリックして、トレース構成の詳細を表示します。

デフォルトでは、分散モードの WebSphere Partner Gateway アプリケーションのトレース・ファイルは、表 38 に示すように構成されます。トレース・ファイルは、`<WebSphere install dir>/wasND/profiles/<profile-name>/logs/<server-name>` ディレクトリーに書き込まれます。これは、ログ・ファイルがデフォルトで書き込まれるのと同じ場所です。

表 38. 分散モードのトレース構成

アプリケーション	トレース・ファイル名	フォーマット	ファイル数	最大ファイル・サイズ
レシーバー	bcg_receiver.log	拡張	10	10 Mb
文書マネージャー	bcg_router.log	拡張	10	50 Mb
コンソール	bcg_console.log	拡張	10	50 Mb
メッセージング・サーバー	trace.log	基本	1	20 Mb

インストーラーは、WebSphere Partner Gateway アプリケーションのすべてのコンポーネントのロギング・レベルを、重大レベルのトレース・メッセージをログ記録するように設定します。ロギング・レベルは、コンポーネントが提供するトレース情報の量を制御します。ロギング・レベルの変更については、157 ページの『ログ詳細レベルの設定』を参照してください。

両方のタイプのシステムに共通のトレース・タスク

1. 左ペインで「サーバー」、「アプリケーション・サーバー」をクリックしてサーバー名を右ペインにリストし、コンソールでサーバーを検索します。
2. リストでサーバー名を選択し、構成するサーバーの詳細を表示します。
3. ページの終わり付近にある「トラブルシューティング」の見出しが見えるまで、画面をスクロールします。「トラブルシューティング」の下の「ロギングおよびトレース」をクリックします。
4. 「JVM ログ」をクリックして、ロギング構成の詳細を表示します。ウィンドウには、「構成」および「ランタイム」という 2 つのページがあります。

注:

- a. 「構成」ページでの変更は、サーバーの再始動後に有効になります。これらの変更点は、サーバーを何回再始動しても持続されません。
 - b. 「ランタイム」ページでの変更はすぐに有効になりますが、「ランタイム変更も構成に保存する」を選択しない限り、サーバーの再始動が行われると持続されません。
5. 「構成」および「ランタイム」の両方のページの右側には、「ログ詳細レベルの変更」というリンクがあります。このリンクでは、次の操作を実行できます。
 - WebSphere Partner Gateway コンポーネントによるトレース・ファイルへの書き込みを使用可能に設定する
 - 使用可能なコンポーネントごとにロギング・レベルを選択する。ロギング・レベルは、コンポーネントが提供するトレース情報の量を制御します。ログの詳細レベルの設定については、157 ページの『ログ詳細レベルの設定』を参照してください。

理解すべき「構成」ページ内の主な機能は次のとおりです。

- 「ログを使用可能にする」を選択し、変更を保存してサーバーを再始動するまでは、トレースは指定されたファイルに書き込まれません。
- トレース・メッセージは、メモリー・バッファーまたはファイルに書き込み可能です。これを指定するには、「トレース出力」ラジオ・ボタンのいずれかを選択します。
 - 「メモリー・バッファー」オプションを選択する場合は、メッセージを表示できるようにするため、メモリー内のデータを取り出してファイルに書き込む手段が必要になります。この操作は、「ランタイム」ページから実行されます。これについては、このセクションの後半で説明します。
 - 「トレース・ファイル」オプションを使用する場合は、システム循環ロギングの構成と似た方法で循環ログを構成します。循環ロギングを使用することにより、トレース・ファイルのサイズを制限し、ファイル・システム・リソースを

消費し過ぎることのないようにすることができます。また、トレース・ファイルの名前とパスを構成することもできます。

- 「**トレース出力フォーマット**」オプションは、「**基本**」または「**拡張**」のいずれかにすることができます。トレース・ファイルは、「**ログ・アナライザー (Log Analyzer)**」フォーマットと呼ばれるバイナリー・フォーマットを使用して書き込むこともできます。ログ・アナライザー・フォーマットを指定することにより、トレース出力ファイルをログ・アナライザー・ツールを使用して開くことができます。ログ・アナライザー・ツールは、WebSphere Application Server に組み込まれているアプリケーションです。ログ・アナライザーについて詳しくは、WebSphere Application Server の資料を参照してください。

「**ランタイム**」ページの主な利点は、サーバーを再始動せずにトレース・ロギングを動的に変更できることです。保存前に「**ランタイム変更も構成に保存する**」を選択すれば、実行時に行った変更を永続的な構成に反映させることができます。

これらの機能の詳しい説明については、WebSphere Application Server の資料を参照してください。

ログ詳細レベルの設定

問題が発生すると、サービスおよびサポートの担当者が、問題の性質を理解するのに役立つトレース・ファイルの提出を求め場合があります。システム管理者は、問題の診断に役立つトレースを取得するようにシステムを構成します。これは、ロギング・レベルを設定するためです。サーバーのロギング・レベルを設定する場合は、次の点を決定します。

- トレース・メッセージの書き込みを行う WebSphere Partner Gateway コンポーネント (Java クラス) を決定する。
- 5 つのレベルの重要度を使用して、トレース・ファイルに書き込むメッセージのタイプを決定する。

トレース・メッセージは、WebSphere Partner Gateway バージョン 6.0 以前で使用されたレベルから派生した重大度レベルを使用して分類されます。これらの古い重大度レベルは、表 39 に従って、WebSphere Application Server の重大度レベルにマップされます。次のテーブルに、新規レベルを使用して同じレベルのトレースを実行する方法を示します。

表 39. WebSphere Application Server の重大度レベル

バージョン 6.0 の重大度レベル	バージョン 6.1 の重大度レベル
FATAL	FATAL
ERROR	SEVERE
WARN	WARNING
INFO	INFO
DEBUG	FINEST

ログの詳細レベルにアクセスするには、アプリケーション・サーバーの診断トレースの「**構成**」ページと「**ランタイム**」ページに表示されるリンクを使用します。このリンクをクリックすると、コンポーネントのツリー・ビューを表示したページが

開きます。コンポーネントは、アプリケーション・サーバーによる発行時にトレース情報を提供するクラスの Java パッケージ名によって表されます。

ログ詳細レベルを設定するには、以下の 3 つの方法があります。

- コンポーネント・ツリーを使用してコンポーネント・レベルでログ詳細を設定するには、次の手順を実行します。

1. 項目を選択します。
2. 必要なトレース・レベルを選択します。
3. ページ上で「OK」をクリックし、変更を加えます。

注: WebSphere Partner Gateway クラスの Java パッケージ名は、すべて `com.ibm.bcg` というプレフィックスで始まるので、このプレフィックスの付いているパッケージを検索することによって、個別のコンポーネントを見つけることができます。

- グループ・ツリーを使用してグループ・レベルでログの詳細を設定するには、次の手順を実行します。

1. グループ名を選択します。
2. 必要なトレース・レベルを選択します。
3. 「OK」をクリックして変更を加えます。

注: コンポーネントのグループには、レシーバーや 文書マネージャーの状態エンジンのような WebSphere Partner Gateway サブシステムを表すものがあります。サブシステムは、「グループ」リンクをクリックして表示できます。

WebSphere Partner Gateway のグループ名は、BCG というプレフィックスで始まるので、それによって識別できます。各グループには、そのグループに属するクラスやパッケージの目的が分かるような名前が付いています。

- パッケージ名とクラス名を直接入力してログの詳細を設定します。ツリー・ビュー内の名前は、WebSphere Partner Gateway アプリケーションを構成するすべてのパッケージとクラスのうちの一部に過ぎません。これらのリストにないクラスのトレース情報を入手するよう要求される場合があります。

「構成」ページを変更する場合は、ページの先頭に表示されるメッセージに従って、その構成をマスター構成に保存してください。

WebSphere Partner Gateway のトレース・メッセージの識別

トレースを拡張フォーマットで構成すると、各トレース・メッセージに、クラス名、メソッド名、発信元、スレッド ID、スレッド名、およびメッセージに関するその他の情報が書き込まれます。基本ログ・フォーマットでは、これらの情報は書き込まれません。

注: WebSphere Partner Gateway では、WebSphere Application Server の First Failure Data Capture (FFDC) 機能を使用しません。製品サポート部門の指示や特定のトラブルシューティングの指示がない限り、FFDC ログは参照しないでください。

EDI、XML、ROD サブコンポーネントのトレース

DIS クライアントによって作成される検証マップと変換マップに関連して使用される EDI、XML、および ROD (フラット・ファイル) の各コンポーネントの一部に対して、トレースを使用可能に設定する場合があります。使用可能にするには、「WebSphere Partner Gateway Console」>「システム管理」>「機能の管理」>「EDI プロパティ」を使用します。トレース・レベルの設定値と各プロパティの目的について詳しくは、242 ページの表 52 を参照してください。

WebSphere Application Server のログ・メッセージとトレース・メッセージの解釈

WebSphere Application Server のコンソール処理のメッセージおよびエラーは、WebSphere Partner Gateway ログに出力されます。一部のメッセージはエラーのように見える場合がありますが、それは通知メッセージで、WebSphere Partner Gateway アプリケーションで問題になることはありません。次の情報を使用して、システム出力ログに記録される WebSphere Application Server の状態を解釈してください。

WebSphere Application Server のイベント・タイプ

1 文字フィールドは、メッセージまたはトレース・イベントのタイプを示します。メッセージ・タイプは大文字です。考えられる値は以下のとおりです。

- F** 重大なメッセージ
- E** エラー・メッセージ
- W** 警告メッセージ
- A** 監査メッセージ
- I** 通知メッセージ
- C** 構成メッセージ
- D** 詳細メッセージ
- O** ユーザー・アプリケーションまたは内部コンポーネントによって SystemOut.log に直接書き込まれたメッセージ。
- R** ユーザー・アプリケーションまたは内部コンポーネントによって SystemErr.log に直接書き込まれたメッセージ。
- Z** タイプが認識されなかったことを示すプレースホルダー。

レベル値は、ロガーの作成時に構成データから設定され、実行時に管理コンソールから変更できます。

統合 FTP サーバーのロギング

ここでは、FTP サーバーのアクションの成功と失敗を知らせるイベント・メッセージの統合について説明します。WebSphere Partner Gateway のパートナーが WebSphere Partner Gateway の統合 FTP サーバーに文書を送信しようとするとき、統合 FTP サーバーはクライアント接続を通知するイベントを作成します。適切な接続イベント・メッセージは、FTP サーバー応答コードの検査後、WebSphere Partner Gateway データベースに記録されます。

FTP サーバーのアクションの成功と失敗を通知するイベント・メッセージの統合

接続の確立、ユーザーのログイン、ファイルのアップロード、ファイルのダウンロード、および切断などのさまざまなアクションに対して FTP サーバーが作成したイベント・メッセージは、イベントとして WebSphere Partner Gateway のデータベースに記録されます。これらのイベントは、WebSphere Partner Gateway のコンソールから、既存のイベント・ビューアーを使用して表示することができます。

接続イベントには、以下の応答コードが可能です。

- 220 新規ユーザーへのサービスの準備ができました。
- 530 その IP からのサーバー・アクセス権限はありません。
- 530 サーバー接続が最大数に達しました。

接続の確立後、ユーザー情報が認証されます。ユーザー認証後、FTP サーバーはクライアントのログインを通知するイベントを作成します。適切なログイン・イベント・メッセージは、WebSphere Partner Gateway データベースに記録されます。ユーザー認証には、以下の応答コードが可能です。

- 501 パラメーターまたは引数の構文エラーがあります。
- 503 最初に USER でログインしてください。
- 202 既にログインしています。
- 21 匿名ログインが最大数に達しました。
- 421 ログインが最大数に達しました。
- 230 ユーザーがログインしました。続行してください。

ユーザーのログインが成功すると、WebSphere Partner Gateway の FTP 送信側は、文書を FTP サーバーに置こうとします。ファイルがアップロードが完了すると、FTP サーバーはアップロードの終了を通知するイベントを作成します。アップロード開始イベントには、以下の応答コードが可能です。

- 150 ファイル状況は良好であり、データ接続を開くところです。
- 226 転送が完了しました。
- 550 無効なパスです。
- 550 アクセス権が拒否されました。
- 425 データ接続を開くことができません。
- 426 データ接続のエラーです。
- 551 出力ファイルのエラーです。

FTP ロケーションへの文書のアップロードが成功すると、FTP 接続は切断されます。FTP サーバーは切断を通知するイベントを作成します。このイベントは WebSphere Partner Gateway データベースに記録されます。

WebSphere Partner Gateway のロギングと例外情報の統合

FTP サーバー・コードは、内部でロギングと例外情報を作成します。この情報は、FTP サーバーがインストールされたシステム上に生成されたログ・ファイル内で使用することができます。これらのログ・ファイルは、すべてのエラーまたはデバッグ情報についての詳細を得るために別々に検査され、分析されます。このログ・ファイルの形式は、ほかの WebSphere Partner Gateway コンポーネントが使用する形式と似ています。

第 14 章 FTP サーバー構成管理

FTP サーバー構成プロパティは、WebSphere Partner Gateway データベースに格納されています。コンソールで、「システム管理」>「FTP 管理」にナビゲートしてください。FTP サーバー構成は、次の 6 つのタブに分けられています。

- イベント・プロパティ
- リスナー・プロパティ
- 接続プロパティ
- IP 制御因子プロパティ
- データベース・プロパティ
- その他のプロパティ

4 つのタブすべてで、サーバーの始動と停止のアイコンが使用できます。

イベント・プロパティ

イベント・プロパティ・ページには、FTP サーバーのイベント・メッセージのロギングに使用される、編集可能な構成プロパティが表示されます。

リスナー・プロパティ

「リスナー・プロパティ」ページには、すべての編集可能なプロパティのリストが表示されます。

接続プロパティ

「接続プロパティ」ページには、すべての編集可能なプロパティのリストが表示されます。

IP 制御因子プロパティ

IP 制御因子を使うと、IP アドレスを使用して FTP サーバーへのアクセスを制限することができます。新しい IP アドレスを追加するには、「追加」をクリックします。ワイルドカードである *、?、および - を使用して、IP アドレスを指定できます。ルールの順序は重要です。クライアントがサーバーと接触を試みると、ルールは上から下へと評価されます。変更内容を保存するには、「保存」をクリックします。変更内容を有効にするために、FTP サーバーが再始動します。すべての受動ポートがクライアント接続により使用中の場合、次のクライアントはポートが利用可能になるまで待機しなければなりません。許可される範囲は 0 から 65535 までです。 **config.data-connection.passive.ports** プロパティを使用すると、受動ポートを単一ポートまたは複数ポートとして指定するか、またはポートの範囲を指定することができます。

データベース・プロパティ

「データベース・プロパティ」ページを使うと、**ホスト名、ユーザー名、パスワード、およびポート**のようなデータベース・プロパティを入力することができます。これらの値は自動的に FTP サーバーに保存されます。

その他のプロパティ

「その他のプロパティ」ページには、すべての編集可能なプロパティのリストが表示されます。

FTP ユーザー管理

FTP ユーザーを管理するには、FTP ユーザー管理を使用します。コンソールで、「**アカウント管理**」 > 「**FTP ユーザー管理**」にナビゲートします。「FTP ユーザー管理」ページを使用すると、以下のタスクを行うことができます。

- 必須の検索条件に基づき、パートナーを越えて FTP ユーザーを検索できます。
- FTP ユーザー情報を編集できます。
- 新規 FTP ユーザーを作成でき、そのユーザーがハブ・オペレーターの FTP ユーザーを作成できます。
- FTP 構成情報を表示できます。
- FTP 構成情報を編集できます。

第 15 章 トラブルシューティング

この章では、問題を特定して解決するために使用できるトラブルシューティング情報を示します。障害発生時イベントおよびこれに対応する説明のリストは、付録 B を参照してください。

この章のトピックは次のとおりです。

- 167 ページの『暗号化された大容量 AS 文書の処理時間の長期化防止』
- 167 ページの『暗号化された大容量文書の処理時間の長期化防止』
- 167 ページの『メモリー不足エラーの回避』
- 168 ページの『複数言語のデータの照合』
- 169 ページの『DB2 エージェント用の十分な仮想メモリーの確保』
- 170 ページの『現行構成のエクスポートによるサポート』
- 170 ページの『DB2 SQL エラーの修正』
- 172 ページの『IBM 保守ログを判読できない』
- 172 ページの『WebSphere Application Server 通知メッセージ』
- 173 ページの『レシーバー・タイムアウト設定の増加』
- 173 ページの『データベース照会効率の最適化』
- 174 ページの『イベント 210031 の解決』
- 174 ページの『文書マネージャー・サーバーへのネットワーク接続が突然失われるか、サーバーが異常シャットダウンすると、文書が 2 回送信される』
- 174 ページの『データ検証エラーが生成された 0A1』
- 175 ページの『EDI レポートが最初の 1000 レコードのみをエクスポートする』
- 175 ページの『サーバーの再始動後にコンソールが開始しない』
- 175 ページの『FTPScripting レシーバーが StringIndexOutOfBoundsException を受信する』
- 176 ページの『レシーバーが構成ファイルの読み取りに失敗した』
- 176 ページの『アラート通知を受信するユーザーの構成』
- 176 ページの『ユーザー出口クラスの ClassNotFoundException の解決』
- 177 ページの『データベースへのログ記録に失敗したイベントおよびビジネス文書の再処理』
- 178 ページの『WebSphere Partner Gateway が javacore を生成した場合の WebSphere Application Server 内での JIT の無効』
- 178 ページの『カスタム・トランスポート・タイプの定義』
- 178 ページの『WebSphere Partner Gateway エラー BCG210031 および BCG240415 の解決』
- 179 ページの『C: 以外のドライブ上での WebSphere Partner Gateway の作成』
- 179 ページの『WebSphere Partner Gateway によるパートナー・トランザクションの処理の無効化』
- 180 ページの『ブラウザ・エラー: 500 の修正』

- 180 ページの『SSL トランザクションを実行するための CRL のダウンロード』
- 181 ページの『WebSphere Process Server 内の JMS エクスポート/インポートでのデータ・バインド』
- 182 ページの『SSL 接続のためのテスト・パートナー接続の修正』
- 182 ページの『エラー BCGEDIEV0056 と BCG210001 の修正』
- 183 ページの『ORA-00988 エラーの修正』
- 183 ページの『固定ワークフロー・ハンドラーの Content-Types 属性の構成』
- 184 ページの『BCG210013 エラーの修正』
- 185 ページの『文書伝送パフォーマンスの低下を防止するためのバッファ・サイズの拡張』
- 185 ページの『WebSphere Partner Gateway ハブ・インストーラー・ログ・エラー・メッセージ』
- 185 ページの『bcgHubInstall.log に記録される DB パスワード必須エラー』
- 186 ページの『取り消しチェックの使用および CRL DP サポートの使用』
- 186 ページの『文書ボリューム・レポートからのコンソールに関する検索情報の戻り』
- 186 ページの『ネイティブ・ライブラリーの読み込み』
- 187 ページの『エラー TCPC0003E および CHF0029E の修正』
- 188 ページの『CA 証明書の有効期限切れ』
- 189 ページの『SystemOut.log 内の VCBaseException』
- 189 ページの『2 GB より大きい文書のファイル・サイズのレポート』
- 189 ページの『証明書を受信していないために SSL ハンドシェイクが失敗する』
- 190 ページの『スレッド停止警告の修正』
- 191 ページの『文書マネージャー例外の停止』
- 190 ページの『WebSphere MQ メッセージの修正』
- 192 ページの『java.security.InvalidKeyException: 正しくないキー・サイズまたはデフォルト・パラメーター』
- 192 ページの『ヒープ・サイズの増加』
- 193 ページの『AS トランザクションの MDN 状況「不明」』
- 193 ページの『フィックス適用後にサーバーが始動に失敗する』
- 194 ページの『WebSphere Application Server のショートカット・ポートの訂正』
- 194 ページの『WebSphere Application Server のショートカット・ポートの訂正』
- 194 ページの『複数ルーターを使用している場合の重複文書配信の回避』
- 194 ページの『1024 より大きい解像度のディスプレイでのタブ見出しのレンダリング』
- 194 ページの『Oracle 9i リリース 2 の使用時に文書が処理されない』
- 195 ページの『データベースが停止したときの文書処理』
- 195 ページの『java.lang.NoClassDefFoundError および reprocessDbLoggingErrors.bat』

- 195 ページの『キューとディスクがフルまたは使用不可能なときのリカバリー処理』

暗号化された大容量 AS 文書の処理時間の長期化防止

暗号化された大容量の AS 文書を一部の低位モデルのハードウェア構成で処理すると、処理に長い時間がかかることがあります。遅延を防止するため、次の処置を行ってください。

1. AS 圧縮属性を「はい」に設定して、送信する文書のサイズを小さくします。
2. メモリー不足エラーの回避に記載されている手順に従ってメモリー・サイズを増加し、暗号化された文書の処理速度を向上させます。

暗号化された大容量文書の処理時間の長期化防止

大容量ファイルを送信する前に圧縮することができます。GB 単位のサイズを扱える大容量ファイルのサポートが AS2 と AS3 に拡張されました。バージョン 6.1.1 では、バイト配列を使って処理される最大ファイル・サイズを構成できます。割り振られたメモリー量が使用可能ヒープ・サイズより大きいときは、

OutOfMemoryError (メモリー不足エラー) が生じます。データ・サイズが使用可能メモリーより小さくても、割り振られたメモリー量が使用可能メモリーより大きい場合は、やはり OutOfMemoryError が生じる場合があります。構成されたファイル・サイズがサポートされるかどうかは、使用可能ヒープ・メモリーに基づいて実行時に判別されます。プロパティー `bcg.maximumFileSizeForByteArrays` を使用すると、バイト配列で利用できる最大ファイル・サイズを指定できます。ファイル・サイズがこのプロパティーの値より大きい場合は、ストリームを使用して処理されます。ファイル・サイズがこのプロパティーの値より小さくても、十分なメモリーが使用できない場合は、エラー・イベント BCG210050 が生成されます。ハブ・オペレーターとしてログインしているときは、「システム管理」タブ > 「共通属性」タブにナビゲートしてください。 `bcg.maximumFileSizeForByteArrays` プロパティーのデフォルト値を上書きして、バイト配列で使われる最大ファイル・サイズを指定してください。効率を良くするには、このプロパティーの値を増やします。メモリー不足エラーを避けるには、非常に大きいファイルがバイト配列ではなくストリームを使用して処理されるように、プロパティー

`bcg.maximumFileSizeForByteArrays` の値を設定する必要があります。例えば RAM サイズが 512 MB の場合、`bcg.maximumFileSizeForByteArrays` プロパティーの値は 20 MB に設定できます。そうすると、20 MB より大きいサイズの文書はすべて、バイト配列を使用せずにストリームを使用して処理されるようになります。また、20 MB より小さいサイズの文書は、メモリー内で処理されるようになります。

メモリー不足エラーの回避

メモリー不足状態の原因となる可能性のある領域は、以下のとおりです。

- 文書マネージャーのメモリー構成

この構成では、基本 Java アプリケーションにより作業用に割り当てられたメモリー量を指定します。

- 文書マネージャー・ワークロード

サブコンポーネントが使用できるスレッドの数を構成できます。構成されているスレッド数が多く、作業負荷が高い場合は、すべての文書を処理するために必要なメモリーの量が増加します。

- 処理中の文書の文書構造

文書構造によっては、文書 (特に大きな文書) の処理に必要なメモリーの量が増加することがあります。この影響を受ける領域は、セキュリティー (暗号化、暗号化解除、署名、署名検証)、XML 変換処理ステップ、および検証処理ステップです (特に大きなテキスト値が含まれる文書の場合)。

大容量ファイル・サイズによる `OutOfMemoryError` (メモリー不足エラー) の詳細については、167 ページの『暗号化された大容量文書の処理時間の長期化防止』を参照してください。

文書マネージャーのメモリー構成

パフォーマンスを向上させ、メモリー不足エラーを回避するには、WebSphere Partner Gateway コンポーネントの初期ヒープ・サイズと最大ヒープ・サイズを増やします。WebSphere Application Server 管理コンソールで次の手順を実行します。

1. 「アプリケーション・サーバー」にナビゲートします。
2. WebSphere Partner Gateway コンポーネントを選択します。
3. 「Java およびプロセス管理」 > 「プロセス定義」 > 「Java 仮想マシン」を選択します。
4. 「初期ヒープ・サイズ」と「最大ヒープ・サイズ」の値を更新します。
5. WebSphere Partner Gateway を再始動します。

文書マネージャー・ワークロード

システム・プロパティを設定して、複数のサブコンポーネントで使用する処理スレッドの数を構成できます。これらのプロパティのデフォルト値は小さく設定されていますが、管理者がこの値を変更している可能性があります。スレッド構成に関連するプロパティについては、233 ページの『付録 C. コンポーネント固有のシステム属性』の構成の表を参照してください。

文書構造

外部パートナーまたは内部パートナー (バックエンド・アプリケーション) から大きな文書を受信することがあります。文書サイズを削減する方法があるかどうか (バッチ・サイズの削減または小さな文書の使用など) を判別します。

複数言語のデータの照合

WebSphere Partner Gateway は、基盤となるデータベースに依存してデータを照合します。ご使用のインストール・システムが複数言語をサポートしていて、ユニコード・データが正しくソートされない場合は、このセクションの内容を検討してください。

DB2

6.0 以降のバージョンでは、WebSphere Partner Gateway は UCA400_NO 照合設定を使用するように DB2 を構成します。DB2 バージョン 8.2 は、すべての言語に対してすべての特殊な場合 (ユニコード標準バージョン 4.00 技術標準 #10 で説明) をサポートしません。このような場合は、DB2 に直接接続してください。

Oracle

Oracle データベースでは、照合シーケンスに応じた動的変更を使用します。この機能を使用するため、WebSphere Partner Gateway は NLS_SORT セッション変数の値を現行ユーザーのロケールに応じて変更します。表 40 に、可能なユーザー・ロケール、サポートされる WebSphere Partner Gateway の言語、およびそれぞれに対応する NLS_SORT 値を示します。この情報は、PR_LOCALE データベース・テーブルに保管されています。

表 40. ロケール情報

ブラウザのロケール	言語	NLS_SORT 値
pt_BR	ブラジル/ポルトガル	BINARY
zh	中国語	SCHINESE_RADICAL_M
en_US	英語	BINARY
fr	フランス語	FRENCH_M
de	ドイツ語	XGERMAN
it	イタリア語	BINARY
ja	日本語	JAPANESE_M
ko	韓国語	KOREAN_M
es	スペイン語	SPANISH_M
zh_TW	中国語 (繁体字)	TCHINESE_RADICAL_M
その他	その他	BINARY

DB2 エージェント用の十分な仮想メモリの確保

WebSphere Partner Gateway ログに存在する以下のエラーは、データベース・エージェントがソート処理に使用できる仮想メモリが不十分であることを示します。この状況を修正するには、WebSphere Partner Gateway 用に作成したデータベースの SORTHEAP パラメーターの値を減らします。ご使用の環境にこのパラメーターを設定する方法の詳細については、データベース管理者にお問い合わせください。

不十分な仮想メモリ・エラーの例を次に示します。

```
Error[DBChannelCheck] [main Thread 2] - Error in channel check for
com.ibm.bcg.channel.CheckChannelParameters@ebda9664
com.ibm.ejs.cm.portability.ResourceAllocationException: DB2 SQL error:
SQLCODE: -955, SQLSTATE:57011, SQLERRMC: null
```

```
ERROR [BPEEngine] [main Thread 2] - BPE:
```

```
ERROR [BPEEngine] [main Thread 2] -
java.lang.ArrayIndexOutOfBoundsException: 0
```

```
ERROR [BPEEngine] [main Thread 2] - Error closing
transConn.com.ibm.ejs.cm.exception.WorkRolledbackException: Outstanding
work on this connection which was not committed or rolledback by the user
has been rolledback.
```

現行構成のエクスポートによるサポート

IBM サポート担当員は、検討するためにユーザーの構成情報を担当者側にエクスポートするように依頼する場合があります。この処理は、`{INSTALL DIR}¥bin` ディレクトリーにある `BCGConfigurationExport` ツールと `BCG_DBConfigurationExport` ツールを使用して行うことができます。

- `BCGConfigurationExport`

このユーティリティーは、ログ・ファイルとプロパティー・ファイルをコピーします。出力は `BCGConfigurationExport.output.<hostname>.jar` というファイルです。`<hostname>` は、WebSphere Partner Gateway が稼働しているワークステーションのホスト名です。ファイルは、ユーザーが指定するディレクトリーに作成されます。このユーティリティーは 3 つのパラメーターを使用します。

- WebSphere Application Server ログ・ルート・ディレクトリー (`{INSTALL DIR}¥was`)
- WebSphere Partner Gateway ルート・ディレクトリー (`{INSTALL DIR}¥`)
- 宛先ロケーション

- `BCG_DBConfigurationExport`

このユーティリティーは、WebSphere Partner Gateway データベースから構成データをコピーします。出力先は

`BCGDB_ConfigurationExport.DB.output.<dbname>.jar` というファイルです。

`<dbname>` はデータベース名です。ファイルは、ユーザーが指定するディレクトリーに作成されます。このユーティリティーは 5 つのパラメーターを使用します。

- 宛先ディレクトリー
- データベース・フラグ (DB2 または ORA)
- データベース名
- データベース・ログイン ID
- データベース・パスワード

どちらのユーティリティーを実行する場合でも、まずパスに `Java jre` ディレクトリー (`<INSTALL DIR>¥was¥java¥bin¥`) が含まれていることを確認してください。DB2 によって `BCG_DBConfigurationExport` を実行する場合は、DB2 コマンド行を使用します。Oracle の場合は、Oracle ツールを実行できるように環境がセットアップされていることを確認してください。

注: WebSphere Partner Gateway が複数のワークステーションにインストールされている場合は、各ワークステーションでこれらのユーティリティーが稼働している必要があります。エクスポート・ファイルが作成されると、IBM サポート担当員からファイルの配信方法についての指示があります。

DB2 SQL エラーの修正

特定の DB2 SQL メッセージを修正するには、次に示すセクションを参照してください。

- 171 ページの『SQLCODE -444 エラー』
- 171 ページの『SQLCODE -289 エラー』

- 『SQLCODE -1225 エラー』
- 172 ページの『BCGMAS データベースでの SQL 0964C (トランザクション・ログ・フル) エラー』

SQLCODE -444 エラー

WebSphere Partner Gateway コンポーネント (bcgconsole、bcgreceiver、bcgdocmgr) のいずれかを始動するときに SQLCODE -444 エラー・メッセージが表示された場合は、DB2 データベース・マネージャーの SHEAPTHRES パラメーターの値を大きくしてください。このパラメーターは、DB2 インスタンス内のすべてのデータベースに定義される最高の sortheap 値より、少なくとも 2 倍の値にします。この設定を変更する前に、データベース管理者に相談するか、ご使用の DB2 の管理者ガイドを参照してください。サンプル・コマンドを次に示します。

```
db2 UPDATE DBM CFG USING SHEAPTHRES xxxxx IMMEDIATE
```

SHEAPTHRES の値を変更した後も SQLCODE -444 が解消されないときは、WebSphere Partner Gateway データベースの STMTHEAP と APPLHEAPSZ の値を減らすことができます。サンプル・コマンドを次に示します。

```
db2 UPDATE DB CFG FOR <dbname> USING STMTHEAP xxxxx
db2 UPDATE DB CFG FOR <dbname> USING APPLHEAPSZ xxxxx
```

設定を変更する前に、DBA に連絡するか、またはご使用の DB2 の管理者ガイドを参照してください。

また、<DB2Home>%SQLLIB%bin\db2diag.log ファイルにも記録される場合があります。

SQLCODE -289 エラー

DB2 エラー・コード -289 は、データベースがファイル・システム上のスペースを使い尽くしたことを示しています。データベース・サーバーの容量を追加できるかどうかをデータベース管理者に問い合わせてください。

あるいは、WebSphere Partner Gateway データを別のストレージ・ロケーションにアーカイブして、ディスク・スペースを解放することもできます。

SQLCODE -1225 エラー

システム上の DB2 リソースが少なくなると、WebSphere Partner Gateway サーバーのログに SQLCODE -1225 エラーとその後にスタック・トレースが出力されることがあります。SQLCODE エラーの例を次に示します。

```
java.sql.SQLException: com.ibm.db2.jcc.c.SqlException:
DB2 SQL error: SQLCODE: -1225, SQLSTATE: 57049, SQLERRMC: null
```

このエラーは一般に、トランザクション速度が速く (1 秒あたりの処理文書数が多い)、DB2 がこの速度を維持できない場合に発生します。データベース管理者がデータベースをモニターし、このような高トランザクション期間に対応できるようデータベースを調整することをお勧めします。データベース・ロギングのパフォーマンスを向上させるには、以下の DB2 パラメーターを調整します。

- LOGPRIMARY
- LOGSECOND

- LOGFILESIZ

BCGMAS データベースでの SQL 0964C (トランザクション・ログ・フル) エラー

WebSphere Partner Gateway では、次のデフォルト構成値で BCGMAS データベースが作成されます。

```
LOGFILSIZ=1024  
LOGPRIMARY=13  
LOGSECOND=4
```

DB2 トランザクション・ログに必要なスペースの量は、さまざまな要因 (特定の期間におけるピーク時の WebSphere Partner Gateway による文書処理速度など) に基づいて決まります。キューにまだ文書が存在するのに WebSphere Partner Gateway が静止している様子である場合には、BCGMAS サーバーの FFDC ログを確認してください。BCGMAS サーバーがエラー SQL 0964C で失敗した場合は、BCGMAS データベースのトランザクション・ログのサイズ (LOGFILESIZ) と数 (LOGPRIMARY、LOGSECOND) を増やしてください。

IBM 保守ログを判読できない

WebSphere Partner Gateway の以前のリリースでは、テキスト・エディターまたは `more` コマンドを使用してログを表示できました。現行リリースのいくつかのログは、バイナリー・フォーマットであるため、テキスト・エディターまたはコマンド行からの `more` コマンドを使用して読むことができません。これらの方法のいずれかを使用して出力した保守ログが文字化けしていた場合は、ツールがあるワークステーションから次のような `showlog` コマンドを発行して、保守ログをバイナリー・フォーマットからプレーン・テキストに変換します。

```
showlog -format CBE-XML-1.0.1 filename
```

`filename` は、保守ログ・ファイルのファイル名です。保守ログがデフォルト・ディレクトリ内にはない場合は、保守ログ・ファイルの完全修飾名を指定する必要があります。

この `showlog` コマンドは、Common Base Event XML フォーマットの出力を生成します。Showlog スクリプトの例については、http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/wasinfo/v6r1/index.jsp?topic=/com.ibm.websphere.base.doc/info/aes/ae/ttrb_viewsvclog.html を参照してください。

WebSphere Application Server 通知メッセージ

WebSphere Partner Gateway システム出力ログにエラーとして記録される WebSphere Application Server メッセージの中には、実際には WebSphere Partner Gateway の問題を示していない単なる通知メッセージも含まれます。WebSphere Application Server のログおよびトレース・メッセージの解釈については、159 ページの『WebSphere Application Server のログ・メッセージとトレース・メッセージの解釈』を参照してください。

レシーバー・タイムアウト設定の増加

パートナーが WebSphere Partner Gateway への接続を開き、「接続がピアによって打ち切られました: ソケットの書き込みエラーです (Connection aborted by peer: socket write error)」というエラー・メッセージを受け取った場合、WebSphere Partner Gateway のレシーバーでは、パートナーからの伝送速度が遅いためタイムアウトが発生し始めます。

WebSphere Application Server 管理コンソールで次の手順を実行します。

1. 「アプリケーション」にナビゲートします。
2. WebSphere Partner Gateway レシーバー・コンポーネントを選択します。
3. 「Web コンテナ」> 「Web コンテナ・トランスポート・チェーン」を選択します。
4. WebSphere Partner Gateway レシーバー・ポートのタイムアウト設定を変更します。

データベース照会効率の最適化

RUNSTATS コマンドを実行すると、テーブルおよび索引ごとにデータベース照会アクセス・プランが更新されます。データベース照会効率を最適化するには、IBM WebSphere Partner Gateway のアプリケーションおよびデータベースのアクティビティが最小のときに、週に 1 度以上 RUNSTATS を実行します。データベースのトラフィックの増加に従って、最高で 1 日に 1 回まで、RUNSTATS の実行頻度を上げてください。

注:

1. RUNSTATS を実行するとデータベース・システム情報が更新されるため、特定の環境ではロック・タイムアウトが発生する可能性があります。WebSphere Partner Gateway アプリケーションを静止させ、データベースへのアクセスは RUNSTATS の実行のみに制限してください。
2. ロック・タイムアウトは、RUNSTATS および db2rbind が同時に実行されるときに発生する場合があります。これらのコマンドは、毎日異なる時刻に実行することをお勧めします。

DB2 アクセス・プランを更新するもう 1 つの方法として、reorgchk コマンドを使用する方法があります。DB2 コマンド・ウィンドウから、以下のコマンドを実行します。

1. db2 connect to <database name>
2. db2 -v reorgchk update statistics on table all
3. db2 connect reset

注: この手順を開始する前に、すべての Websphere Partner Gateway コンポーネントを停止してください。reorgchk の完了後には、データベース・インスタンスの停止および再始動も行ってください。

イベント 210031 の解決

文書による否認防止の実行中に、以下のいずれかの状態が検出されると、イベント 210031 を受け取ることがあります。

- データベースまたはネットワーク (接続) がダウンした。
- 共通ファイル・システムへのネットワーク接続がダウンした。
- 共通ファイル・システム・ディスク・スペースが満杯である。

このイベントを解決するには、以下の確認を実行してから、イベント・コード 210031 の障害が発生した文書の再送を開始します。

1. WebSphere Partner Gateway データベースおよび DB ワークステーションへのネットワークが設定済みであり、稼働中であることを確認します。
2. 共通ファイル・システムと WebSphere Partner Gateway コンポーネントの間のネットワーク接続が確立されていることを確認します。
3. 共通ファイル・システム・ディスクに文書を書き込むための十分なフリー・スペースがあることを確認します。

文書マネージャー・サーバーへのネットワーク接続が突然失われるか、サーバーが異常シャットダウンすると、文書が 2 回送信される

状況がまだ更新されていない文書の処理中に、文書マネージャーを実行しているシステムへのネットワーク接続が突然失われた場合またはシステムがシャットダウンした場合は、文書が 2 回送信される可能性があります。システム管理者は、文書マネージャー・ワークステーションの予期しないシャットダウンまたは異常終了を回避するための手順を実行する必要があります。

データ検証エラーが生成された 0A1

0A1 仕様では、GlobalSupplyChainCode は XML に存在すると規定されています。着信 3A7 にこの値が含まれていない場合は、属性として 0A1 に追加する必要があります。GlobalSupplyChainCode は 3A7 文書に存在するか、または文書定義で属性として 0A1 に追加する必要があります。

属性を追加するには、次の手順を実行します。

1. 「ハブ管理」 > 「ハブ構成」 > 「文書定義」の順にクリックします。コンソールに「文書定義の管理」ウィンドウが表示されます。
2. 「パッケージ: RNIF」 > 「プロトコル: Rosettanet」 > 「文書タイプ: 0A1」の順にクリックして、「属性値の編集」アイコンをクリックします。
3. グローバル・サプライ・チェーン・コード属性がそこに存在しない場合は、「属性の追加」をクリックして追加します。
4. リストから値を選択します。
5. 「保存」をクリックします。

EDI レポートが最初の 1000 レコードのみをエクスポートする

EDI FA 期限経過および EDI 拒否トランザクションの 2 つの EDI レポートのエクスポート機能では、メモリー・オーバーフロー問題を原因とする予期しないシステム・シャットダウンを最小限に抑えるため、最初の 1000 レコードのみをエクスポートします。レポートから 1000 を超える多数のレコードをエクスポートする場合は、関連するデータベース・ビュー LG_EDI_Overdue_FA_VW または LG_EDI_Rejected_Tx_VW からレコードを直接エクスポートします。

サーバーの再始動後にコンソールが開始しない

WebSphere Partner Gateway をインストールし、コンソール・サーバーを始動してからコンソールに正常にログインしたにもかかわらず、サーバーを再始動するとコンソールが表示されなくなり、ループとして実行される場合は、トレース・レベルが「WAS.*=finest」に設定されていないことを確認します。この設定は、すべての WebSphere Application Server 関連クラスの最も詳細なロギングを実行するために使用されます。WebSphere Partner Gateway コンソールの開始のデフォルト接続タイムアウトは、180 秒に設定されています。WebSphere Application Server トレース・レベルが「finest」に設定されている場合は、そのすべての情報をログに記録し、必要なデータベース接続を確立するために処理時間がかかるため、システム・タイムアウトが発生します。この設定を変更し、コンソール・サーバーを再始動します。

注: トレース・レベルを「finest」に設定すると、システム・パフォーマンスに影響することがあります。

FTPScripting レシーバーが StringIndexOutOfBoundsException を受信する

Pro FTP サーバーへの接続中に StringIndexOutOfBoundsException を受け取った場合、FTP サーバー用のウェルカム・メッセージからすべての空白行を削除することを、パートナーに要求してください。クライアントがこの FTP サーバーに接続すると必ずこのメッセージが送信されます。

エラー・シナリオ

以下の例は、ウェルカム・メッセージ内の空白行を示しています。

```
ftp myftp.mycompany.com
Connected to myftp.mycompany.com
220-
<blank line>
You have connected to myftp.mycompany.com FTP Server.
<blank line>
Please enter userid and password to login
<blank line>
220 MYCOMPANY FTP Server ready.
User (myftp.mycompany.com:(none)):
```

有効なシナリオ

以下の例は、空白行を除去したウェルカム・メッセージを示しています。

```
ftp myftp.mycompany.com
Connected to ftp myftp.mycompany.com
220-You have connected to myftp.mycompany.com FTP Server.
Please enter userid and password to login
220 MYCOMPANY FTP Server ready.
User (myftp.mycompany.com:(none)):
```

レシーバーが構成ファイルの読み取りに失敗した

レシーバーが構成ファイルの読み取りに失敗した場合は、以下のエラー・メッセージが表示されます。

```
Unable to update the Receiver Config file java.io.IOException: A file
or directory in the path name does not exist.
```

このエラーは、WebSphere Partner Gateway レシーバーが開始され、データベースへの接続がなく、BCGReceiverConfiguration.xml ファイルからの構成情報の読み取りを試行しているときに発生します。BCGReceiverConfiguration.xml は、コンソールの「システム管理」ページ上の bcg.receiver.configpath 属性で指定されたフォルダーに格納されています。

bcg.receiver.configpath に正しいパスが指定されていることを確認してください。

アラート通知を受信するユーザーの構成

WebSphere Partner Gateway コンソールの「システム管理」ページで SMTP 構成が指定されていない場合、文書マネージャーは必要な SMTP 構成を見つけられないため、構成されたアラートはユーザーに送信されません。

アラートを構成するには、以下の 2 つの属性の値を更新します。

- 「システム管理」 > 「DocMgr の管理」 > 「アラート・エンジン」 ページで、**bcg.alertNotifications.mailHost** 属性を更新します。
- 「システム管理」 > 「DocMgr の管理」 > 「デリバリー・マネージャー」 ページで、**bcg.delivery.smtpHost** 属性を更新します。

オプションとして、属性 **bcg.alertNotifications.mailFrom** および **bcg.alertNotifications.mailReplyTo** の値を変更できます。

ユーザー出口クラスの ClassNotFoundException の解決

以下のユーザー出口に必要なクラスが見つからない場合は、ClassNotFoundException エラーが発生することがあります。

- 受信側ユーザー出口
- カスタム・アクション・ユーザー出口
- 送信側ユーザー出口

ClassNotFoundException エラーが発生した場合は、次の情報を確認してください。

1. ユーザー出口が受信側ユーザー出口に関連している場合は、対応する jar またはクラスが以下のフォルダーのいずれかに存在することを確認します。
 - `<WebSphere Install Dir>/Receiver/lib/userexits`

- `<WebSphere Install Dir>/Receiver/lib/userexists/classes`
2. ユーザー出口が文書マネージャーに関連している場合は、対応する jar またはクラスが以下のフォルダーに存在することを確認します。
 - `<WebSphere Install Dir>/Router/lib/userexits`
 - `<WebSphere Install Dir>/Router/lib/userexits/classes`
 3. ユーザー出口の jar またはクラス・ファイルが正しいロケーションに存在する場合は、対応するユーザー出口共有ライブラリー内の項目が正しいことを確認します。これを実行するには、次の手順を実行します。
 - a. WebSphere Application Server 管理コンソールを開きます。
 - b. 「環境」 > 「共有ライブラリー」に移動します。
 - c. BCG_RCVR_USEREXISTS および BCG_ROUTER_USEREXITS を探します。
 - d. これらの属性の共有ライブラリー情報を編集して、対応する jar またはクラスをクラスパスに追加します。

データベースへのログ記録に失敗したイベントおよびビジネス文書の再処理

WebSphere Partner Gateway がデータベースにイベントまたは文書の状況を記録できないと、データは DATALOGERERRORQ キューに入れられ、後で問題が解決したときに再処理できるようになります。

ログ記録に失敗したこれらのイベントおよび文書を再処理するには、手動ユーティリティー `reprocessDbLoggingErrors.sh` を使用します。このユーティリティーを実行すると、DATALOGERERRORQ キューにあるすべてのイベントおよび文書はデキューされ、DATALOGERERRORQ キューに再キューイングされます。これにより、`DocumentLogReceiver` はイベントおよび文書のログを再度データベースに記録できます。

このユーティリティーは、DATALOGERERRORQ にある既存のすべてのイベントおよび文書を処理した後、停止します。ログ記録に失敗したイベントや文書は、再度 DATALOGERERRORQ に入れられます。ただし、今回の場合、イベントまたは文書が再処理されるのは 1 回のみです (つまり、ユーティリティーは失敗したイベントや文書のエンドレス・ループには入りません)。

`reprocessDbLoggingErrors.sh` または `reprocessDBLoggingErrors.bat` ユーティリティーを実行するには、次の手順を実行します。

1. 次のように入力して、すべてのルーターの `reprocessDbLoggingErrors.sh` ですべての変数が正しく定義されていることを確認します。

```
REPROCESSOR_HOME=Document Manager installation root
JAVA_HOME=$REPROCESSOR_HOME/java
LOG_REPROCESSOR_CLASSES=$REPROCESSOR_HOME/classes
```

2. 次のコマンド行からユーティリティーを実行します。

```
./reprocessDbLoggingErrors.sh または reprocessDBLoggingErrors.bat
```

WebSphere Partner Gateway が javacore を生成した場合の WebSphere Application Server 内での JIT の無効

WebSphere Partner Gateway コンポーネント (レシーバー、文書マネージャー、またはコンソール) が異常終了し、javacore を生成した場合、この原因は一般に、Java JIT (Just-In-Time) コンパイラーで発生した問題にあります。この動作が発生した場合は、WebSphere Application Server 管理コンソールから JIT を無効にします。

WebSphere Application Server から JIT を無効にするには、次の手順を実行します。

1. WebSphere Application Server 管理コンソールにログオンします。
2. 「サーバー」の下で、「サーバー」をクリックし、「WebSphere Partner Gateway サーバー (WebSphere Partner Gateway Server)」を選択します。
3. 構成ページ上で、「Java およびプロセス管理」>「プロセス定義」を選択します。
4. 「追加プロパティ」で、「Java 仮想マシン」を選択します。
5. 「JIT を使用不可にする」チェック・ボックスを選択します。

カスタム・トランスポート・タイプの定義

カスタム・トランスポート・タイプを定義するときには、URI という名前の属性を作成しないでください。これは、WebSphere Partner Gateway の予約キーワードと競合します。このような属性を作成すると、そのトランスポート・タイプの宛先を作成、保存することができなくなります。

例えば、<tns2:AttributeName>URI</tns2:AttributeName> は使用しないでください。

WebSphere Partner Gateway エラー BCG210031 および BCG240415 の解決

WebSphere Partner Gateway は引き続き同じ文書の処理を試行しますが、次に示すエラーが発生します。

```
BCG210031: 文書 {0} を否認防止できません
BCG240415: AS パッケージャー・エラー: {0}
```

router.log ファイル内のメッセージの例を次に示します。

```
17 Oct 2005 17:55:30,681 ERROR [BPEEngine] [main Thread 1] - Error in nonRepProcess
17 Oct 2005 17:55:30,681 ERROR [BPEEngine] [main Thread 1] - java.io.FileNotFoundException:
/opt/wbi/ca/common/data/Inbound/process/917/fa/xxx (A file or directory in the path name does not exist.)
at java.io.FileInputStream.open(Native Method)
at java.io.FileInputStream.<init>(FileInputStream.java(Inlined Compiled Code))
at java.io.FileInputStream.<init>(FileInputStream.java(Inlined Compiled Code))
at com.ibm.bcg.util.NonRepudiationDbImpl.copyFile(NonRepudiationDbImpl.java
(Compiled Code))
at com.ibm.bcg.util.NonRepudiationDbImpl.store(NonRepudiationDbImpl.java(Compiled Code))
at com.ibm.bcg.server.BPEBean.doNonRepudiation(BPEBean.java(Compiled Code))
at com.ibm.bcg.server.BPEBean.processDocument(BPEBean.java(Compiled Code))
```

```
ASPackaging Exception:java.io.FileNotFoundException:
/opt/wbi/ca/common/data/Inbound/process/917/fa/xxx (A file or directory in the path name does not exist.)
```

```
at java.io.FileInputStream.open(Native Method)
at java.io.FileInputStream.<init>(FileInputStream.java(Inlined Compiled Code))
at java.io.FileInputStream.<init>(FileInputStream.java(Inlined Compiled Code))
at com.ibm.bcg.util.Util.readFile(Util.java(Compiled Code))
at com.ibm.bcg.ediint.ASPackaging.process(ASPackaging.java(Compiled Code))
at com.ibm.bcg.ediint.ASPackaging.process(ASPackaging.java(Inlined Compiled Code))
at com.ibm.bcg.ediint.ASPackagingHandler.process(ASPackagingHandler.java(Compiled Code))
at com.ibm.bcg.server.HandlerProcessWrapper.process(HandlerProcessWrapper.java (Compiled Code))
at com.ibm.bcg.server.DocumentProcessor.process(DocumentProcessor.java(Compiled Code))
at com.ibm.bcg.server.BPEBean.processDocument(BPEBean.java(Compiled Code))
```

これらのエラーは、影響を受ける文書 (ログ・ファイル内で固有 ID (UUID) により示される文書) がシステム内で main_inboundq キューと data¥inbound¥serialize フォルダを循環している場合に生成されます。

このエラーを解決するには、次の手順を実行します。

1. 文書マネージャーを停止します。
2. キューをクリアします。
3. main_inboundq フォルダおよび data¥inbound¥serialize フォルダの両方で、影響を受ける UUID 項目を除去します。
4. 最初の操作が成功しない場合は、タイミング条件が原因である可能性があります。この場合には、システムを再度クリアします。
5. router.log にエラーが出力されなくなり、ルーター CPU の使用状況が通常に戻ります。

C: 以外のドライブ上での WebSphere Partner Gateway の作成

WebSphere Partner Gateway のファイル・ディレクトリー宛先のアドレスが C: 以外のドライブに定義されている場合、WebSphere Partner Gateway は「宛先ディレクトリーが存在しません (Destination Directory does not exist)」というエラーを戻します。コンソールではファイル・ディレクトリー宛先の作成が受け入れられますが、実行時に以下のようなエラーが生成されます。

```
17 Oct 2005 19:00:12,844 INFO [FileSender] [Gw_1_2] - Exception in delivering the message in first attempt.
Exception is: java.lang.Exception: Destination directory '/wsi_gateway/inbound/tradingpartner01'; does not
exist at com.ibm.bcg.delivery.FileSender.getFileSystemProperties(FileSender.java:244)
```

```
17 Oct 2005 19:00:12,844 ERROR [SenderFramework] [Gw_1_2] - First attempt failed: reason: java.lang.
Exception : Destination directory '/wsi_gateway/inbound/tradingpartner01' does not exist
```

C: 以外のドライブ上のフォルダを定義するには、スラッシュを 2 つではなく 3 つ使用します。例えば、次のようになります。

```
file:///d:¥HubMgrGateway
```

WebSphere Partner Gateway によるパートナー・トランザクションの処理の無効化

パートナーとの間の文書処理を無効にするには、WebSphere Partner Gateway 管理者が、「WebSphere Partner Gateway コンソール接続 (WebSphere Partner Gateway Console Connections)」ウィンドウでその特定のパートナーに対して作成された接続を非アクティブ化する必要があります。

パートナー・プロファイルを無効にすると、「パートナー接続」メニューにエンティティがリストされなくなりますが、この操作ではそのパートナーとコミュニティー・マネージャーの間のアクティブなチャンネルは切断されません。

ブラウザー・エラー: 500 の修正

ブラウザーにより、エラー ERROR: 500 と SRVE0026E: [Servlet Error]-[action]: java.lang.NullPointerException が SystemOutlog ファイルに出力されることがあります。これらのエラーは、以下の操作の後に発生することがあります。

1. WebSphere Partner Gateway をインストールする。
2. コンソールを開始する。
3. hubadmin としてログインし、デフォルト・パスワードを変更する。

これらのエラーが発生する場合は、ブラウザー内で Cookie がオフになっているか、または Cookie のファイアウォール設定が高すぎます。このエラーを解決するには、次の手順を実行します。

1. ファイアウォール・セキュリティー・レベルを中または中高に変更します。
2. ブラウザーで Cookie を有効にします。

ブラウザー・エラー: 500 は、サーバーの 1 つがダウンしている結果として発生することもあります。

1. すべての WebSphere Partner Gateway サーバーが稼働中であることを確認します。
2. すべてが稼働中である場合は、ログを確認して、エラーの原因を判別します。

WebSphere Partner Gateway が C:\IBM\WPG にインストールされている場合:

- コンソール・ログは
C:\IBM\WPG\bcghub\was\profiles\bcgconsole\logs\bcgconsole にあります。
 - レシーバー・ログは
C:\IBM\WPG\bcghub\was\profiles\bcgreceiver\logs\bcgreceiver にあります。
 - 文書マネージャー・ログは
C:\IBM\WPG\bcghub\was\profiles\bcgdocmgr\logs\docmgr にあります。
3. 各フォルダーの SystemErr ログを調べます。このファイルには、最新のアクセス試行のタイム・スタンプが記録されています。
 4. ファイルの終わりまでスクロールダウンして、最新のログ項目を表示し、エラー・メッセージを確認します。

SSL トランザクションを実行するための CRL のダウンロード

CRL が使用不可である場合、証明書を使用しているときに SSL トランザクションが失敗することがあります。問題が存在する場合、証明書を使用している SSL トランザクションは、以下のエラー・イベントを発行して失敗します。

BCG240024: 「CertPath の検証が失敗しました」

イベント 240024 のルーター・ログは、証明書の取り消し状況を判別できなかったことを示しています。

このエラーを解決するには、次のステップを実行します。

1. 「詳細」タブの「証明書 CRL 配布ポイント (certificate CRL Distribution Point)」フィールドで指定された認証局サイト、または認証局ダウンロード・サイトにより使用可能にされた認証局サイトから、CRL リストをダウンロードします。

例: `http://SVRSecure-crl.verisign.com/SVRTrialRoot2005.crl`

2. CRL を WebSphere Partner Gateway `common/security/crl` フォルダーにコピーします。

注: あるいは、CRL DP を使用して 実行時に CRL DP から CRL を取得できます。

WebSphere Process Server 内の JMS エクスポート/インポートでのデータ・バインド

WebSphere Process Server 内の JMS エクスポート/インポートで WebSphere Partner Gateway データ・バインドを使用するときに、間違った情報または不適切な情報を提供するメッセージがいくつかあります。WebSphere Process Server 内の JMS エクスポート/インポートで WebSphere Partner Gateway データ・バインドを使用するときには、以下のメッセージが出力されます。

```
[11/1/05 14:14:07:426 PST] 00000080 SystemOut 0 <<com.ibm.bcg.dataBinding.Utility>>
warning : Error in the element JMS-IBM-MsgTypeMsg :
Class 'BCGPackagingHeaders' does not have a feature named 'JMS-IBM-MsgType'
```

```
[11/1/05 14:14:07:426 PST] 00000080 SystemOut 0 <<com.ibm.bcg.dataBinding.Utility>>
warning : Error in the element JMS-IBM-PutTimeMsg :
Class 'BCGPackagingHeaders' does not have a feature named 'JMS-IBM-PutTime'
```

```
[11/1/05 14:14:07:426 PST] 00000080 SystemOut 0 <<com.ibm.bcg.dataBinding.Utility>>
warning : Error in the element JMS-IBM-Character-SetMsg :
Class 'BCGPackagingHeaders' does not have a feature named 'JMS-IBM-Character-Set'
```

```
[11/1/05 14:14:07:426 PST] 00000080 SystemOut 0 <<com.ibm.bcg.dataBinding.Utility>>
warning : Error in the element JMSXDeliveryCountMsg :
Class 'BCGPackagingHeaders' does not have a feature named 'JMSXDeliveryCount'
```

```
[11/1/05 14:14:07:426 PST] 00000080 SystemOut 0 <<com.ibm.bcg.dataBinding.Utility>>
warning : Error in the element JMS-IBM-EncodingMsg :
Class 'BCGPackagingHeaders' does not have a feature named 'JMS-IBM-Encoding'
```

```
[11/1/05 14:14:07:426 PST] 00000080 SystemOut 0 <<com.ibm.bcg.dataBinding.Utility>>
warning : Error in the element JMS-IBM-PutApplTypeMsg :
Class 'BCGPackagingHeaders' does not have a feature named 'JMS-IBM-PutApplType'
```

```
[11/1/05 14:14:07:426 PST] 00000080 SystemOut 0 <<com.ibm.bcg.dataBinding.Utility>>
warning : Error in the element JMSXGroupSeqMsg :
Class 'BCGPackagingHeaders' does not have a feature named 'JMSXGroupSeq'
```

```
[11/1/05 14:14:07:426 PST] 00000080 SystemOut 0 <<com.ibm.bcg.dataBinding.Utility>>
warning : Error in the element JMS-IBM-System-MessageIDMsg :
Class 'BCGPackagingHeaders' does not have a feature named 'JMS-IBM-System-MessageID'
```

```
[11/1/05 14:14:07:426 PST] 00000080 SystemOut 0 <<com.ibm.bcg.dataBinding.Utility>>
warning : Error in the element JMSXGroupIDMsg :
```

```
Class 'BCGPackagingHeaders' does not have a feature named 'JMSXGroupID'

[11/1/05 14:14:07:426 PST] 00000080 SystemOut 0 <<com.ibm.bcg.dataBinding.Utility>>
warning : Error in the element x-out-filenameMsg :
Class 'BCGPackagingHeaders' does not have a feature named 'x-out-filename'

[11/1/05 14:14:07:436 PST] 00000080 SystemOut 0 <<com.ibm.bcg.dataBinding.Utility>>
warning : Error in the element JMS-IBM-PutDateMsg :
Class 'BCGPackagingHeaders' does not have a feature named 'JMS-IBM-PutDate'

[11/1/05 14:14:07:436 PST] 00000080 SystemOut 0 <<com.ibm.bcg.dataBinding.Utility>>
warning : Error in the element JMSXUserIDMsg :
Class 'BCGPackagingHeaders' does not have a feature named 'JMSXUserID'

[11/1/05 14:14:07:436 PST] 00000080 SystemOut 0 <<com.ibm.bcg.dataBinding.Utility>>
warning : Error in the element JMS-IBM-FormatMsg :
Class 'BCGPackagingHeaders' does not have a feature named 'JMS-IBM-Format'

[11/1/05 14:14:07:436 PST] 00000080 SystemOut 0 <<com.ibm.bcg.dataBinding.Utility>>
warning : Error in the element JMSXAppIDMsg :
Class 'BCGPackagingHeaders' does not have a feature named 'JMSXAppID'
```

上記のメッセージはエラーではないため、無視しても差し支えありません。

SSL 接続のためのテスト・パートナー接続の修正

Gateway https URL が選択されている場合にツール/テスト・パートナー接続が失敗すると、以下のエラー・メッセージが表示されます。

```
Exception during http POST-: null
```

このエラーは、POST または GET のいずれかのコマンドを使用しているときに発生することがあります。

コンソール・ツール/テスト・パートナー接続は、HTTP でのみ有効です。

エラー BCGEDIEV0056 と BCG210001 の修正

Oracle システム上で EDI 変換マップが失敗して、チャンネル検査エラーおよびエラー BCGEDIEV0056 と BCG210001 が発生し、以下の警告イベントが生成されることがあります。

```
Warning BCGEDIEV0056 Event "Translation Table Lookup Warning": A translation table lookup
returned no entry while deenveloping a message. Next: "Check Channel Error - Channel lookup
failed. Not enough channel info
```

このエラーは、ユニコード文字セットを使用して Oracle データベースを作成せずに、データベースを Windows 1252 などの非ユニコード・コード・ページに間違っ
て設定した場合に発生します。

Oracle の文字セットを確認するには、次の手順を実行します。

1. Oracle データベースに接続します。
2. v\$nlsp_parameters から NLS_CHARACTERSET を選択します。
3. AL32UTF8 の値が戻されるはずですが。

ご使用の Oracle システムでこれを確認します。

データベースが作成された後でデータベースの文字セットを直接変更する方法はありません。解決方法は、データベース文字セットおよび国別文字セットをユニコードにして、データベースを再作成することです。

ORA-00988 エラーの修正

このエラーは Oracle の制限が原因で発生します。数値で開始されるパスワードを引用符で囲まないで入力した場合は、以下のエラー・メッセージが表示されます。

ORA-00988: missing or invalid password(s)

このエラーを解決するには、数字から始まる Oracle データベース用のパスワードを WebSphere Partner Gateway インストール・パネルで入力するときに、パスワードを引用符付きのストリング ("123456ABC" など) にします。

固定ワークフロー・ハンドラーの Content-Types 属性の構成

WebSphere Partner Gateway で、HTTP を介して受信した EDI 文書の送信が失敗することがあります。EDI 文書の送信時にはコンテンツ・タイプとして text/plain のコンテンツ・タイプが使用されるため、固定ワークフロー・ハンドラーが正しく構成されていることを確認してください。

Content-Types 属性は、次の手順で設定できます。

1. 「ハブ管理」>「ハブ構成」>「固定ワークフロー」>「インバウンド」に移動します。
2. **com.ibm.bcg.server.ChannelParseFactory** をクリックします。
3. 「編集」をクリックします。
4. 構成済みのリストで、EDIRouterBizProcessHandler を選択し、「構成」をクリックします。
5. Content-Types 属性を編集して、text/plain コンテンツ・タイプを追加します。

この設定は、EDI ハンドラーおよび EDI として処理される文書に適用されます。これらのコンテンツ・タイプ値は、コンマで区切る必要があります。

Content-Types 属性は、ハンドラーの特定のセットのために使用されます。これらのハンドラーは、以下のとおりです。

- BinaryChannelParseHandler
- XMLRouterBizHandler
- EDIRouterBizProcessHandler
- cXMLChannelParseHandler

これらのハンドラーは、コンテンツ・タイプのデフォルト・リストとともに取り込まれます。コンテンツ・タイプを変更するには、次のステップを実行します。

1. 「ハブ管理」>「ハブ構成」>「固定ワークフロー」>「インバウンド」に移動します。
2. **com.ibm.bcg.server.ChannelParseFactory** をクリックします。
3. 「編集」をクリックします。
4. 構成済みのリストで、ハンドラーを選択し、「構成」をクリックします。

- Content-Types 属性を編集して、新規コンテンツ・タイプを追加します。これらのコンテンツ・タイプ値は、コンマで区切る必要があります。

注: 特に推奨される場合を除いて、これらのコンテンツ・タイプ値は変更しないことをお勧めします。

BCG210013 エラーの修正

以下のエラーが原因で、インバウンド文書を受信できません。

BCG210013 - Connection Not Fully Configured

他のすべての構成が正しい場合、このエラーの最も一般的な原因は、レシーバー指定が正しくないことです。

- レシーバー URL 定義の前にスペースがないことを確認します。
- パートナーで使用可能な他のビジネス ID を使用してテスト EDI メッセージの送信を試行して、問題の範囲を限定します。これがこのビジネス ID に固有の問題かどうかを確認します。
- ステップ 2 が失敗する場合は、エラー・シナリオのデバッグ・トレースを次の手順で取得します。
 - WebSphere Partner Gateway をシャットダウンします。
 - 以下のコマンドを使用して、WebSphere Partner Gateway のレシーバーおよびルーターのデバッグ設定を FINEST に変更します。

```
"*=info:com.ibm.bcg.*=finest"
```
 - 以下のディレクトリー内の現在のログを削除 (または別のフォルダーにバックアップ) します。
 - シンプル・モード・インストール済み環境では、ログは以下のディレクトリーに格納されます。

```
<WebSphere Install Dir>/wasND/Profiles/bcgprofile/logs/server1
```
 - 配布モード・インストール済み環境では、ログは以下のディレクトリーに格納されます。

```
- <Hub Installation  
Directory>%wasND%Profiles%bcgprofile%logs%bcgreceiver  
- <Hub Installation  
Directory>%wasND%Profiles%bcgprofile%logs%bcgdocmgr
```
 - WebSphere Partner Gateway を再始動します。
 - エラー・シナリオを 1 回のみ実行します。
 - フォルダー 184 および 184 内のすべてのログを、コンソール・ビューアーから取得したエラー・メッセージの画面キャプチャーとともに圧縮し、IBM お客様サポートに送信します。

文書伝送パフォーマンスの低下を防止するためのバッファ・サイズの拡張

WebSphere Partner Gateway 文書伝送時間は、最大で 40 分まで急激に増加することがあります。この原因は、DB2 内のデフォルト・バッファ・サイズの定義が小さすぎるために、処理中の文書がキューに追加されることにあります。

バッファ・サイズを拡張するには、次の手順を実行します。

1. DB2 コマンド行プロセッサを開きます (「スタート」 > 「プログラム」 > 「IBM DB2」 > 「コマンド行ツール (Command Line Tools)」 > 「コマンド行プロセッサ (Command Line Processor)」)。

2. 次のコマンドを使用して、データベースに接続します。

```
DB2 > connect to bcgapps user <username> using <password>
```

3. 次のコマンドを使用して、バッファ・サイズを拡張します。

```
DB2 alter bufferpool buff32k immediate size 12500
```

これにより、特定のバッファ・サイズが 500 (デフォルト) から 12500 に拡張されます。

WebSphere Partner Gateway ハブ・インストーラー・ログ・エラー・メッセージ

WebSphere Partner Gateway LaunchPad の実行中に、以下のようなエラーが表示されることがあります。

```
Jun 14, 2005 8:13:04 PM java.util.prefs.FileSystemPreferences$3 run
WARNING: Could not create system preferences directory. System preferences are unusable.
Jun 14, 2005 8:13:31 PM java.util.prefs.FileSystemPreferences checkLockFile0ErrorCode
WARNING: Could not lock System prefs. Unix error code 270913688.
Jun 14, 2005 8:14:01 PM java.util.prefs.FileSystemPreferences checkLockFile0ErrorCode
WARNING: Could not lock System prefs. Unix error code 270931432.
Jun 14, 2005 8:14:32 PM java.util.prefs.FileSystemPreferences checkLockFile0ErrorCode
WARNING: Could not lock System prefs. Unix error code 270937824.
```

これらのメッセージは、無視しても差し支えありません。

bcgHubInstall.log に記録される DB パスワード必須エラー

WebSphere Partner Gateway ハブのインストール中に、インストーラーは bcgHubInstall.log のログに以下のエラー・メッセージを記録します。

```
com.ibm.bcg.install.ismp.wizard.conditions.JdbcDatabaseConnectCondition, err,
ERROR: dbPassword is required
```

このエラー・メッセージによる副次作用が発生することはありません。サーバーは正常に始動され、文書は正常にルーティングされます。このエラー・メッセージは、無視しても差し支えありません。

取り消しチェックの使用および CRL DP サポートの使用

取り消し状況が判別できなかったことが原因で certpath 検証が失敗した場合、これは CRL が使用不可であることを示している可能性があります。CRL は、ローカル・フォルダー内で使用可能にするか、または CRL 配布ポイント (CRL DP) から自動的に取得することができます。CRL を CRL DP から取得する場合は、CRL DP サポートを有効にします。

CRL DP へのアクセスでプロキシ・サーバーを使用する場合は、プロキシ・サーバー・ホストとポートも提供する必要があります。自己署名証明書に対しては、取り消しチェックは実行されません。

詳しくは、54 ページの『certpath 関連プロパティの構成』を参照してください。

文書ボリューム・レポートからのコンソールに関する検索情報の戻り

WebSphere Partner Gateway 文書ボリューム・レポートの検索では、コンソールに関する情報は戻されません。

「コンソール・ツール (Console Tools)」>「DocumentVolumeReportSearch」の「検索」をクリックしても、何も実行されません。ページには、「この検索条件に該当する結果はありませんでした。」という標準的な赤色の通知メッセージは表示されません。ページは明滅するだけで、何の情報も戻されません。

この問題は、ブラウザ・ポップアップ・ブロッカーが結果ページ (ポップアップ・ページ) の表示をブロックしているために発生します。

ポップアップ・ブロッカーをオフにすると、ページは正しく表示されます。

Mozilla Firefox:

1. 「ツール」>「オプション (Options)」>「Web 機能 (Web Features)」にナビゲートします。
2. 「ポップアップ・ウィンドウのブロック (Block Popup Windows)」フィールドをクリアします。

Internet Explorer:

1. 「ツール」をクリックします。
2. 「ポップアップ・マネージャー (Pop-up Manager)」にナビゲートし、「ポップアップ・ウィンドウのブロック (Block Pop-up windows)」をクリックします。
3. 「ツール」をクリックし、「インターネット オプション」をクリックします。
4. 「プライバシー」タブにナビゲートし、「ポップアップ・ウィンドウのブロック (Block Pop-up windows)」をクリックします。

ネイティブ・ライブラリーの読み込み

WebSphere Partner Gateway コンポーネントを開始すると、ログに以下のメッセージが記録されることがあります。

```
java.lang.UnsatisfiedLinkError: Can't find library AIXNative
(libAIXNative.a or .so) in sun.boot.library.path or java.library.path
```

WebSphere Partner Gateway が稼働しているオペレーティング・システムに応じて、次のいずれかのライブラリーが使用されます。

- libWin32Native.dll
- libpLinuxNative.so
- libAixNative.a
- libSolarisNative.so
- libHPNative.so

ライブラリー・パスが正しく設定されていないと、このエラーが戻されます。このエラーを解決するには、次の手順を実行します。

1. WebSphere Application Server 管理コンソールにログオンします。
2. 「環境」 > 「共用ライブラリー」を選択します。
3. 以下のプロパティを編集します。
 - BCG_NAV_CONSOLE
 - BCG_NAV_RCVR
 - BCG_NAV_ROUTER_BPE
 - BCG_NAV_ROUTER_DOCMGR
4. 「native library path」の下に表示されているパスに注目します。
5. 指定されたライブラリー・パスに、該当する .dll、.so、または .a ファイルが存在するかどうかを確認します。
6. ライブラリーが存在しない場合は、別のロケーションからコピーします。
7. 共用ライブラリーが各 WebSphere Partner Gateway アプリケーションに関連付けられていることを確認します。確認するには、次の手順を実行します。
 - a. WebSphere Application Server 管理コンソールの「アプリケーション」ページで、bcgDocMgr を含む任意の WebSphere Partner Gateway アプリケーションをクリックします。
 - b. 「共用ライブラリー参照」をクリックします。
 - c. BCG_NAV_ROUTER_DOCMGR ライブラリーがアプリケーションに関連付けられていることを確認します。ライブラリーに関連付けられていない場合は、アプリケーションを割り当てます。
 - d. 他のアプリケーションに対してこの確認を繰り返します。
 - コンソール共用ライブラリーで関連付けられるライブラリーは BCG_NAV_CONSOLE です。
 - WebSphere Partner Gateway レシーバーで関連付けられる共用ライブラリーは BCG_NAV_RCVR です。
 - WebSphere Partner Gateway BPE アプリケーションで関連付けられる共用ライブラリーは BCG_NAV_ROUTER_BPE です。

エラー TCPC0003E および CHF0029E の修正

WebSphere Partner Gateway レシーバー・コンポーネントの開始が失敗し、SystemOut.log ファイルに TCPC0003E および CHF0029E エラーが出力されることがあります。これらのエラーは、以下の条件が原因で発生することがあります。

1. 構成されているポートが他のアプリケーションによって使用されている可能性がある。このため、ポートが競合しているかどうかを確認してください。
2. 1024 よりも小さい番号のポートは root のために予約されている特権ポートである。この制限に対処できる特別な方法でシステムが構成されていない限り、非 root ユーザーはこれらのポートにバインドできません。WebSphere Partner Gateway は非 root ユーザー bcguser を使用してコンポーネントを開始するため、特権ポートにバインドできません。

注: WebSphere Partner Gateway では、通常の場合、非 root ユーザーはレシーバーを開始しても、これらの特権ポートにはバインドできません。

レシーバー・ポートを 1024 より大きい使用可能なポート (つまり、他のアプリケーションが使用していないポート) に変更します。以下の例は、ポート 80 を *nnn* に変更する方法を示しています。

1. レシーバーを停止します。
2. 以下のファイル内でポート番号 80 を探し、*nnn* に置き換えます。

注: 編集する前に、すべてのファイルをバックアップします。

- a. `<Installed_path>bcghub/was/profiles/bcgreceiver` の下で、以下のファイルを編集します。

- 1) `config%cells%DefaultNode%virtualhosts.xml`
- 2) `config%cells%DefaultNode%nodes%DefaultNode%serverindex.xml`
- 3) `config%templates%servertypes%APPLICATION_SERVER%serverindex.xml`
- 4) `installedFilters%wlm%bcgreceiver%target.xml`
- 5) `logs%portdef.props`

- b. `<Installed_path>%bcghub%receiver%lib%config%bcg_receiver.properties` を編集します。

注: ポート番号は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用して変更することもできます。「`<Server> - ポート`」ページに移動し、「`WC_defaulthost`」のポートを変更します。

3. レシーバーを開始します。
4. ブラウザーでレシーバー URL として `http://<host_name>:xyz/bcgreceiver` を入力して、レシーバーが機能していることを確認します。正しく機能している場合は、ブラウザーに「サポートされない操作 (Unsupported Operation)」が表示されます。ブラウザーに「ページを表示できません (The page cannot be displayed)」が表示される場合は、レシーバーがポートに正常にバインドできなかったことを意味します。

CA 証明書の有効期限切れ

有効期限が切れたときに無効になるのは、暗号化、署名、および SSL クライアント用に使用される証明書のみです。CA 証明書は有効期限が切れても無効にはなりませんが、実行時に使用されません。

サーバーが再始動されてから次に再始動されるまでの間にルートまたは中間の証明書の有効期限が切れた場合、それらの証明書は信頼できる証明書のリストから除外

されます。したがって、CA 証明書が見つからなかったために certpath の作成が失敗した場合の原因は、CA 証明書の有効期限切れである可能性があります。

実行時にルートまたは中間の証明書の有効期限が切れた場合、certpath の作成は失敗し、対応する暗号化、デジタル署名、または SSL 証明書はビジネス・トランザクションで使用されません。

証明書の有効期間状況は、WebSphere Partner Gateway コンソールで確認できます。証明書の有効期間は、WebSphere Partner Gateway コンソールの「証明書リスト」ページに表示されます。証明書の有効期限が切れている場合は、有効期間が赤色で表示されます。

CA 証明書の有効期限が切れた場合は、証明書を発行した CA から新規の証明書を取得します。この新規の CA 証明書を WebSphere Partner Gateway コンソール内でアップロードする必要があります。

注: アップロードした証明書がサーバー認証用の自己署名証明書であり、その有効期限が切れた場合は、WebSphere Partner Gateway コンソールでこの証明書を無効にする必要があります。

SystemOut.log 内の VCBaseException

コンソールを使用したハブの構成中に例外が発生した場合、コンソール・ログには、ロギング情報の一部としても例外が表示されます。例えば、既に存在するインタラクションの作成を試行した場合は、SystemOut.log ファイルに VCBaseException が出力されます。この例外はロギングの一部として受け入れ可能です。

2 GB より大きい文書のファイル・サイズのレポート

文書が 2 GB より大きい場合に、WebSphere Partner Gateway の文書ビューアーで、ファイルの長さが 0 KB と示されることがあります。この原因は、データベースのデータ型の最大サイズ制限にあります。

証明書を受信していないために SSL ハンドシェイクが失敗する

この問題は、クライアント認証で SSL を使用してパートナーへ送信するときに、パートナーと WebSphere Partner Gateway の間での SSLHandShake 実行中に発生します。パートナーから認証局証明書のリストが送信されない場合、WebSphere Partner Gateway の SSL クライアントはクライアント証明書を送信しません。これが原因でハンドシェイクが失敗します。

このハンドシェイク失敗を解決するには、インストールされている WebSphere Application Server の java.security ファイルを変更します。このファイルは <WAS インストール・ディレクトリ>%java%jre%lib%security ディレクトリにあります。

注: UNIX システムでは、バックスラッシュ (¥) の代わりにスラッシュ (/) を使用してください。

java.security ファイルでのプロバイダーのデフォルトの順序は次のとおりです。

```
security.provider.1=com.ibm.crypto.provider.IBMJCE
security.provider.2=com.ibm.jsse.IBMJSSEProvider
security.provider.3=com.ibm.jsse2.IBMJSSEProvider2
security.provider.4=com.ibm.security.jgss.IBMJGSSProvider
security.provider.5=com.ibm.security.cert.IBMCertPath
#security.provider.6=com.ibm.crypto.pkcs11.provider.IBMPKCS11
```

java.security ファイルで、IBMJSSE プロバイダーの前に IBMJSSE2 プロバイダーを配置します。次に例を示します。

注: java.security ファイルの順序変更後に WebSphere Application Server フィックスパックをインプリメントすると、変更した内容が上書きされるため、再度ファイルで順序を変更する必要があります。

```
security.provider.1=com.ibm.crypto.provider.IBMJCE
security.provider.2=com.ibm.jsse2.IBMJSSEProvider2
security.provider.3=com.ibm.jsse.IBMJSSEProvider
security.provider.4=com.ibm.security.jgss.IBMJGSSProvider
security.provider.5=com.ibm.security.cert.IBMCertPath
#security.provider.6=com.ibm.crypto.pkcs11.provider.IBMPKCS11
```

java.security ファイルの変更後に、WebSphere Partner Gateway サーバー (bcgconsole、bcgreceiver、および bcgdocmgr) を再始動します。

スレッド停止警告の修正

スレッドが停止していることを示すメッセージが SystemOut.log (/opt/IBM/bcghub/wasND/Profiles/bcgdocmgr/logs/bcgdocmgr/SystemOut.log) に出力されることがあります。このメッセージの例を次に示します。

```
[7/19/06 14:35:16:839 EDT] 0000000f ThreadMonitor W WSVR0605W:
Thread "WorkManager.BCGBPEWorkManager : 5" (00000055) has been active for
709464 milliseconds and may be hung. There is/are 15 thread(s) in total in
the server that may be hung.
```

注: Websphere Application Server は、一部のスレッドが停止している可能性があることを示す警告メッセージを表示します。ただし WebSphere Partner Gateway はこれらのスレッドを処理します。

このメッセージを解決するには、レシーバー・サーバーの DocumentManager の下の以下のプロパティを変更します。

```
com.ibm.websphere.threadmonitor.interval = 0
```

この値は、「サーバー・インフラストラクチャー」>「管理」の「カスタム・プロパティ」にあります。

WebSphere MQ メッセージの修正

特定の MQ メッセージを修正するには、次に示すセクションを参照してください。

- 191 ページの『MQJMS2007 エラー』
- 191 ページの『MQJMS2013 エラー』

MQJMS2007 エラー

WebSphere MQ をメッセージング・サービスとして使用するゲートウェイとして JMS を使用する場合は、特定のメッセージをキューに入れた場合に次のメッセージを受け取ることがあります。

```
MQJMS2007: failed to send message to MQ queue
```

この結果、コネクタは出力キューへのメッセージの書き込みに失敗します。このエラーの原因は、キュー、キュー・マネージャー、またはチャネルの最大メッセージ長属性に、最大メッセージ・サイズ未満の値が設定されていることにあります。

キュー、キュー・マネージャー、およびチャネルのメッセージ長属性を変更するには、次の手順を実行します。

1. Websphere MQ エクスプローラーの「キュー・マネージャーのプロパティ (Queue manager properties)」を表示します。
2. 拡張タブをクリックして、最大メッセージ長の属性にメッセージのサイズよりも大きい値を設定します。
3. 「チャネルのプロパティ (Channel properties)」に移動します。
4. 拡張タブをクリックして、最大メッセージ長の属性にメッセージのサイズよりも大きい値を設定します。
5. ゲートウェイ作成時に指定されたキューの「キューのプロパティ (Queue properties)」に移動します。
6. 拡張タブをクリックして、最大メッセージ長の属性にメッセージのサイズよりも大きい値を設定します。

MQJMS2013 エラー

WebSphere Partner Gateway と WebSphere MQ の通信中に次のエラーが出力されることがあります。

```
MQJMS2013 invalid security authentication
```

このエラーを解決するには、次のステップを実行します。

1. アプリケーションを実行しているユーザー ID を確認します。
2. 使用されているユーザー ID が mqm グループ (または十分な権限のある他のグループ) に含まれているかどうかを確認します。
3. ユーザー ID が mqm グループに含まれていない場合は、mqm グループにユーザー ID を追加してから `runmqsc REFRESH SECURITY(*)` コマンドを実行します。

文書マネージャー例外の停止

文書の処理中に文書マネージャー (サーバー) を停止するとき次の例外が出力される場合は、この例外を無視してください。

```
[2/1/07 14:04:40:546 EST] 00000088 ExceptionUtil E CNTR0020E: EJB threw an unexpected (non-declared exception during invocation of method "onMessage" on bean "BeanId(BCGPPE#ejb/bcgBpeEJB.jar#BPMainEngineMDB, null)".
Exception data: javax.ejb.TransactionRolledbackLocalException: ;
nested exception is: com.ibm.websphere.csi.CSITransactionRolledbackException:
com.ibm.websphere.csi.CSITransactionRolledbackException:
at com.ibm.ejs.csi.TranStrategy.commit(TranStrategy.java:742)
at com.ibm.ejs.csi.TranStrategy.postInvoke(TranStrategy.java:181)
at com.ibm.ejs.csi.NotSupported.postInvoke(NotSupported.java:99)
at com.ibm.ejs.csi.TransactionControlImpl.postInvoke(TransactionControlImpl.java:581)
at com.ibm.ejs.container.EJSContainer.postInvoke(EJSContainer.java:3876)
at com.ibm.bcg.server.common.EJSLocalStatelessTransController_5c554616.onReceive(Unknown Source)
at com.ibm.bcg.server.common.BaseMDB.onMessage(BaseMDB.java:194)
```

```

at com.ibm.ejs.container.MessageEndpointHandler.invokeMdbMethod(MessageEndpointHandler.java:992)
at com.ibm.ejs.container.MessageEndpointHandler.invoke(MessageEndpointHandler.java:725)
at $Proxy0.onMessage(Unknown Source)
at com.ibm.ws.sib.api.jmsra.impl.JmsJcaEndpointInvokerImpl.invokeEndpoint(JmsJcaEndpointInvokerImpl.java:201)
at com.ibm.ws.sib.ra.inbound.impl.SibRaDispatcher.dispatch(SibRaDispatcher.java:708)
at com.ibm.ws.sib.ra.inbound.impl.SibRaSingleProcessListener$$SibRaWork.run(SibRaSingleProcessListener.java:584)
at com.ibm.ejs.j2c.work.WorkProxy.run(WorkProxy.java:497)
at com.ibm.ws.util.ThreadPool$Worker.run(ThreadPool.java:1469)
javax.ejb.TransactionRolledbackLocalException: ; nested exception is: com.ibm.websphere.csi.CSITransactionRolledbackException:
at com.ibm.ejs.csi.TranStrategy.commit(TranStrategy.java:742)
at com.ibm.ejs.csi.TranStrategy.postInvoke(TranStrategy.java:181)
at com.ibm.ejs.csi.NotSupported.postInvoke(NotSupported.java:99)
at com.ibm.ejs.csi.TransactionControlImpl.postInvoke(TransactionControlImpl.java:581)
at com.ibm.ejs.container.EJSContainer.postInvoke(EJSContainer.java:3876)
at com.ibm.bcg.server.common.EJSLocalStatelessTransController_5c554616.onReceive(Unknown Source)
at com.ibm.bcg.server.common.BaseMDB.onMessage(BaseMDB.java:194)
at com.ibm.ejs.container.MessageEndpointHandler.invokeMdbMethod(MessageEndpointHandler.java:992)
at com.ibm.ejs.container.MessageEndpointHandler.invoke(MessageEndpointHandler.java:725)
at $Proxy0.onMessage(Unknown Source)
at com.ibm.ws.sib.api.jmsra.impl.JmsJcaEndpointInvokerImpl.invokeEndpoint(JmsJcaEndpointInvokerImpl.java:201)
at com.ibm.ws.sib.ra.inbound.impl.SibRaDispatcher.dispatch(SibRaDispatcher.java:708)
at com.ibm.ws.sib.ra.inbound.impl.SibRaSingleProcessListener$$SibRaWork.run(SibRaSingleProcessListener.java:584)
at com.ibm.ejs.j2c.work.WorkProxy.run(WorkProxy.java:497)

```

この例外が出力されても、以下の目標はすべて達成しています。

- 安全なりカバリー
- 損失文書なし
- 重複文書処理なし
- パフォーマンス低下なし (再始動後)
- ハングアップ文書なし

java.security.InvalidKeyException: 正しくないキー・サイズまたはデフォルト・パラメーター

デフォルトでサポートされている暗号方式よりも強力な暗号方式を使用して PKCS#12 ファイルをアップロードした場合、またはデフォルトではサポートされていない不正なキー・サイズのキーを使用した場合にこの例外がスローされます。このエラーを解決するには、法的に可能な場合に限り、強度無制限の暗号化方式ポリシー・ファイルを入手してインストールします。「*WebSphere Partner Gateway E/A* ハブ構成ガイド」の暗号化強度の変更に関するセクションを参照してください。

ヒープ・サイズの増加

暗号化、署名、または圧縮された 50 MB の文書を AS3 で多数 (約 40) 送信する場合は常に、ヒープ・サイズを増加させる必要があります。ヒープ・サイズを増加させないと、OutOfMemory エラーで文書が失敗することがあります。

OutOfMemory エラーは、WebSphere Partner Gateway による文書の一括送信に必要な作業メモリーの不足が原因で発生します。そのため、ヒープ・サイズを増やすことをお勧めします。DocMgr サーバーのヒープ・サイズ・パラメーターの値を増加するには、次の手順を実行します。

1. WebSphere Application Server 管理コンソールにログインします。
2. WebSphere Application Server 管理コンソールで bcgDocMgr サーバーの「**Java** およびプロセス管理」>「プロセス定義」>「**Java 仮想マシン**」を選択します。server.
3. 「初期ヒープ・サイズ」を 1024 に設定します。
4. 「最大ヒープ・サイズ (max heap size)」を 1536 に設定します。システムに 2GB 以上ある場合は、最大ヒープ・サイズを 1536 よりも大きい値に設定できます。

AS トランザクションの MDN 状況「不明」

WebSphere Partner Gateway v6.1 へのアップグレードが完了すると、コミュニティー・コンソールの AS ビューアーで、アップグレード前に発生した AS トランザクションの MDN 状況に「不明」の状態が示されます。これは、マイグレーション・プロシージャとマイグレーション・ユーティリティーの制約事項です。

フィックス適用後にサーバーが始動に失敗する

バージョン 6.1 のアップデート・インストーラーを使用して最近フィックスまたはフィックス・パックを適用した場合に、サーバー (Dmgr、NodeAgent、および AppServers) が始動に失敗することがあります。この障害についての情報は SystemOut.log には出力されません。ただし startServer.log に次のように出力されます。

```
ADMU3011E: Server launched but failed initialization. startServer.log,
SystemOut.log(or job log in zOS) and other log files under
/home/dwhare/WebSphere61/profiles/Dmgr01/logs/dmgr should contain
failure information.
```

この問題は、WebSphere Application Server 環境が非 root ユーザーで稼働するようにセットアップされているときに、root ユーザーでフィックスまたはフィックスパックを適用すると発生します。

注: 既存のインストール済み環境の場合、このインストール済み環境に対して以降インストール操作または削除操作を実行できるユーザーは、現在インストールされているファイルを所有する root または非 root のインストール実行ユーザーのみです。

サーバーが始動に失敗する原因は、権限の問題により、フィックスパック適用後に OSGI キャッシュが更新されていないことにあります。これを検証するには、<WAS_PROFILE_HOME>/configuration/ ディレクトリーで、数字ストリングのファイル名を持つログ・ファイルを見つけます。このファイルには次のようなエラーが記録されています。

```
!ENTRY org.eclipse.osgi 2006-08-24 09:04:14.597
!MESSAGE Error reading configuration:
/home/dwhare/WebSphere61/profiles/Dmgr01/configuration/org.eclipse.osgi/.manager/.fileTableLock (Permission denied)
!STACK 0
java.io.FileNotFoundException:
/home/dwhare/WebSphere61/profiles/Dmgr01/configuration/org.eclipse.osgi/.manager/.fileTableLock (Permission denied)
at java.io.FileOutputStream.openAppend(Native Method)
at java.io.FileOutputStream.<init>(FileOutputStream.java:203)
at org.eclipse.core.runtime.internal.adaptor.Locker_JavaNio.lock(Locker_JavaNio.java:34)
at org.eclipse.core.runtime.adaptor.FileManager.lock(FileManager.java:361)
at org.eclipse.core.runtime.adaptor.FileManager.open(FileManager.java:658)
at ...
```

この問題を解決するには、次の手順を実行します。

1. 実行中のすべての WebSphere Application Server プロセスを停止します。
2. WebSphere インストールのファイル許可を非 root ユーザーに戻します。
3. <WAS_HOME>/profiles/<profile>/bin/osgiCfgInit.sh を実行します。
4. サーバーを始動します。

osgiCfgInit コマンドにより、<WAS_HOME>/configuration/ のサブディレクトリーの内容が更新されます。このディレクトリーは、<WAS_HOME>/plugins/ の jar のデータをキャッシュする目的で使用されます。

jar のデータが更新されたら (サービス・パックのインストール時など)、キャッシュ・データを更新する必要があります。キャッシュの更新は、サービス・パックのインストール後にプロファイルで初めてコマンド (startServer.sh コマンドなど) が実行された時点で行われます。ただし、上記のような例外が発生している場合はキャッシュが更新されないため、手動で更新する必要があります。

WebSphere Application Server のショートカット・ポートの訂正

「スタート」メニューの項目を使用して WebSphere Application Server ND 管理コンソールを起動する際に、Windows システムのショートカットに使用されているポートが正しくない場合は、ポートを変更する必要があります。ポートを変更するには、次の手順を実行します。

1. 「スタート」メニュー>「プログラム」>「IBM WebSphere」>「Application Server Network Deployment V6.1」>「プロファイル」>「bcgprofile」>「管理コンソール」に移動します。
2. プロパティを右クリックして選択し、ポートの値を変更します。

複数ルーターを使用している場合の重複文書配信の回避

UNIX 環境では、大量文書の処理中 (24 時間で 10 万を超える文書を処理する場合など) に、ゲートウェイに重複文書が配信されることがあります。

このような重複は、複数のルーター・インスタンスが使用されており、UNIX 環境で共通ファイル・システムがマウントされている場合に発生します。大量文書の処理中の重複文書の配信を回避するには、各ルーター・インスタンスの WebSphere 変数に以下の属性を組み込みます。

1. bcg.dm.checkFileLatency=true
2. bcg.dm.latencyWaitTime=3000

1024 より大きい解像度のディスプレイでのタブ見出しのレンダリング

解像度の幅が 1024 ピクセルよりも大きい値に設定されているディスプレイでは、コミュニティー・コンソールで「文書の詳細」ビューなどの画面のタブ見出しが正しく表示されないことがあります。

この動作は無視できます。

Oracle 9i リリース 2 の使用時に文書が処理されない

Oracle 9i リリース 2 を使用している場合、文書が処理されず、BCGMAS メッセージング・エンジンのログに次のエラーが出力されることがあります。

```
J2CA0056I: The Connection Manager received a fatal connection error from the Resource Adapter for resource datasources/bcgMASDS The exception received is com.ibm.websphere.ce.cm.StaleConnectionException: No more data to read from socket: java.sql.SQLException: No more data to read from socket
```

この問題を解決するには、Oracle 10g バージョンの JDBC ドライバーをインストールします。このドライバーによって、Oracle 9i と WebSphere Application Server メッセージング・エンジンの非互換性の既知の問題が軽減されます。

詳しくは、この問題に関する IBM 技術情報を参照してください。IBM 技術情報を参照するには、次の手順を実行します。

1. <http://www.ibm.com/support/us/> にアクセスします。
2. 検索ボックスに番号 1239781 を入力します。
3. 検索結果リストから「**Oracle 9i Thin driver running in cognizance with Service Integration Bus and Scheduler Service can result in J2C Connection Pool Exhaustion**」を選択します。

Oracle 10g JDBC ドライバーは Oracle Web サイト (http://www.oracle.com/technology/software/tech/java/sqlj_jdbc/index.html) からダウンロードできます。

データベースが停止したときの文書処理

WebSphere Partner Gateway が文書を処理している間にデータベースが一時的に停止した場合、文書は「処理中」状態のまま動かなくなり、メッセージは `datalogerrorQ` に移動します。データベースが作動したら、メッセージを `datalogerrorQ` から元の場所へ移動して文書処理を続行するために、バッチ・ファイル `reprocessDbLoggingErrors.bat` (`WPG_HOME/bin` の下にあります) を実行する必要があります。

java.lang.NoClassDefFoundError および reprocessDbLoggingErrors.bat

次の理由により `java.lang.NoClassDefFoundError` が生じる場合があります。`reprocessDbLoggingErrors.bat` ファイルには、次のディレクトリーにある `ws_runtime.jar` へのパスが入っています。

```
<WAS_HOME>\deploytool\itp\plugins\com.ibm.websphere.v61_6.1.0.
```

しかし、このフォルダー名 `com.ibm.websphere.v61_6.1.0` は、フィックスパックがリリースされるたびに対応するフィックスパックのバージョンに変更されます。そのため、バッチ・ファイルは `ws_runtime.jar` の検索に失敗します。この問題を修正するには、`ws_runtime.jar` のパスを次のように設定する必要があります。

1. 次のディレクトリーにナビゲートします。

```
<WAS_HOME>\deploytool\itp\plugins
```
2. `ws_runtime.jar` のパスを確認します。
3. 次のディレクトリーにナビゲートします。

```
<WAS_HOME>\bin
```
4. `reprocessDbLoggingErrors.bat` ファイルのディレクトリーを編集します。
5. `ws_runtime.jar` の正しいパスを設定し、スクリプトを再実行します。

キューとディスクがフルまたは使用不可能なときのリカバリー処理

メッセージング・システムと共通ファイル・システムが処理中にフルまたは使用不可能になると、ビジネス文書オブジェクト (BDO) はレシーバー・マシンの一時フォルダー `WPG_HUB_INSTALL_HOME\Receiver\temp` の下に一時的に残存します。この場合、ハブは次の記述の付いたイベント 103205 をトリガーします。

Receiver Processing halted, due to following reason failed to process target:
With Queue and File system unavailable/Full.
Please make sure queue and disk system are available
for processing and start the receiver.

この記述の付いたメッセージを受け取った場合は、次の手順を行います。

1. キューと共通ファイル・システム・ディスクを処理に使用できるようにします。
2. レシーバー・サーバーを再始動します。
3. レシーバーの一時フォルダーの下に残存するビジネス文書オブジェクト (BDO) をハブの共通ファイル・システムの **router_in** フォルダーに移動します。

付録 A. パフォーマンスの考慮事項

この付録には、ご使用の特定の環境で最適なパフォーマンスを実現するための支援情報が含まれています。

キュー・オーバーフローの管理

WebSphere Partner Gateway コンポーネントは、JMS キューを使用してお互いを非同期的に起動します。ただし、キュー内のメッセージの到着率がメッセージの処理率より高い場合、キューが最大メッセージ数に達してしまいます。キュー項目数がそのキューに構成された最大項目数に等しくなった場合、キューはオーバーフローします。WebSphere Partner Gateway では、キューがオーバーフローした場合に着信文書または着信メッセージをファイル・システムに保存するメカニズム (<Hub install root>/common/router_in/) を提供します。

注: キューが最大項目数に達するのは、一般にピーク・ロード時または大規模な文書の処理中です。そのような処理を実行している間は、キューをモニターし、キュー項目数が大きい場合オーバーフローしないことを確認してください。

キューのオーバーフローを管理するために使用する属性のリストについては、233ページの『付録 C. コンポーネント固有のシステム属性』を参照してください。

要約データの生成

WebSphere Partner Gateway は、システム・アクティビティについてのデータを定期的に要約します。この要約サービス・データは、文書分析または文書ポリューム・レポート機能を使用するときに表示される情報です。

「要約サービス・プロパティ」ウィンドウで、要約データを生成する頻度を表示および編集できます。このウィンドウには、要約データが最後に更新された日時も表示されます。

要約データが生成される時間間隔を変更するには、次の手順を実行します。

1. 「システム管理」>「イベント処理」>「要約サービス」の順にクリックします。コンソールに「要約サービス・プロパティ」ウィンドウが表示されます。
2. 「処理間隔 (分)」の横にある「編集」アイコンをクリックします。
3. データを再度要約するまでに経過する分数の値 (1 から 60) を入力します。デフォルト値は 15 です。
4. 「保存」をクリックします。

付録 B. 障害発生時イベント

文書の処理が失敗すると、WebSphere Partner Gateway システムは、イベントを生成します。WebSphere Partner Gateway の障害発生時イベントとその対応する説明のリストについては、表 41 を参照してください。EDI コンポーネントによって生成される可能性のあるイベントのリストについては、211 ページの表 42 を参照してください。

注: HTTP レシーバー・コンポーネントは、文書を維持できなくなると HTTP エラー・コードを返します。それ以外の レシーバー・コンポーネント・タイプの場合、文書の内容は、現在の場所で障害発生時点のまま維持されます。

表 41. 障害発生時イベント

イベント・コード	イベント名	内部での記述	重大度	詳細な説明
BCG103001	データベース障害	データベース・エラー: {0} が {1} 内で例外 {3} で失敗しました	重大	
BCG103101	キャッシュ・エンジン・エラー	キャッシュ・エンジン・ インスタンス ID {0} (ホ スト {1}) の初期化に失敗 しました。問題を訂正し てサービスを再始動して ください。エラーの理由: {2}	重大	
BCG103201	ハブ所有者状態エン ジン・エラー	エラーの理由:{0}	エラー	このイベントが生成される のは、回復不能なシステ ム・エラーが発生し、その 結果、文書の処理が失敗し た場合です。データベース の書き込みエラーなどがこ の例です。
BCG103203	レシーバー処理エラ ー	受信側 '{0},{1}' が文書の 処理に失敗しました。エ ラー: {2}。	エラー	このイベントは、文書エラ ーまたはシステム・エラー のためにレシーバー・コン ポーネントが文書を処理で きない場合に生成されま す。
BCG103205	受信側エラー	受信側 '{0},{1}' が受信側 の処理に失敗しました: {2}。	エラー	
BCG106004	デフォルトの宛先の ペアがありません	接続の作成に失敗しまし た。パートナー {0} と {1} の間にデフォルトの 宛先のペアありませ ん。	エラー	

表 41. 障害発生時イベント (続き)

イベント・コード	イベント名	内部での記述	重大度	詳細な説明
BCG106005	アクションが見つかりません	インタラクションにアクションが関連付けられていないため、B2B 機能のための接続を作成できませんでした。	エラー	
BCG106600	文書定義作成エラー	子レベル {0} が親レベル {1} 以上になっています	エラー	
BCG111001	FTP アカウント作成エラー	パートナー {0} の FTP アカウントの作成に失敗しました。エラー・メッセージ: {1}	エラー	
BCG112002	ディレクトリーの作成に失敗しました	ディレクトリーの作成に失敗しました: {0}	エラー	
BCG112002	文書ルート・ディレクトリーが存在しません	文書ルート・ディレクトリー {0} は既に存在しません	エラー	
BCG200000	デフォルトの宛先のペアがありません	接続の作成に失敗しました。パートナー {0} と {1} の間にデフォルトの宛先のペアがありません。	エラー	
BCG200001	プロトコル変換プログラム・ビジネス・プロセスの取得に失敗しました	ファクトリーが、プロトコル変換プログラム・ビジネス・プロセスのインスタンスの取得に失敗しました。理由: {0}	重大	このイベントは、プロトコル変換プログラムのビジネス・プロセスのインスタンスの検索時にシステム障害が発生した場合に生成されます。
BCG200005	文書変換の失敗	文書の変換に失敗しました。理由 {0}	エラー	このイベントは、文書の変換時に障害が発生した場合に生成されます。
BCG200006	プロトコル変換プログラム入力ファイルの障害	プロトコル変換プログラム入力ファイル・エラー: {0}	重大	このイベントは、例えばファイルが破壊されている場合など、アクションの処理中に入力ファイルで障害が発生した場合に生成されます。
BCG200007	プロトコル変換プログラム出力ファイルの障害	プロトコル変換プログラム出力ファイル・エラー: {0}	重大	このイベントは、出力ファイル・ディレクトリーへの書き込み試行時に障害が発生した場合に生成されます。
BCG200009	文書の解析に失敗しました	構文解析に失敗しました: {0}	エラー	このイベントは、文書の構文解析試行時に障害が発生した場合に生成されます。

表 41. 障害発生時イベント (続き)

イベント・コード	イベント名	内部での記述	重大度	詳細な説明
BCG200013	内部パートナー提供の RN Process-Instance-ID エラー	{0}	エラー	このイベントが生成されるのは、使用できないプロセス・インスタンス ID を受信した場合、および新規のプロセス・インスタンス ID が生成されないことが構成プロパティによって示されている場合です。
BCG200015	内部パートナー提供の RosettaNet GlobalUsageCode エラー	{0}	エラー	このイベントが生成されるのは、x-aux-production ヘッダーの値が使用できない場合、およびエラー発生時にデフォルト値が使用されないことが構成プロパティによって示されている場合です。
BCG210000	チャンネル検査エラー	チャンネル検査エラー	エラー	このイベントは、チャンネル検査関連のエラーがある場合に生成されます。
BCG210001	チャンネル検査エラー	チャンネル検査エラー	エラー	このイベントは、接続の検索に必要なデータが使用可能で、一致する接続が見つからない場合に生成されます。
BCG210002	接続のロックアップに失敗しました	接続検索が失敗しました {0}	エラー	このイベントは、接続の検索に必要なデータが使用不可の場合に生成されます。
BCG210007	アウトバウンド文書をパッケージできません	Outbound Processor のエラー	重大	このイベントは、パッケージャーがアウトバウンド文書で使用できない場合に生成されます。
BCG210008	IP アドレス検証の失敗	元 IP アドレスがパートナー・プロファイル {0} にありません	エラー	このイベントは、該当するパートナーが承認していない IP アドレスから文書が送られた場合に生成されます。
BCG210009	SSL 証明書検証の失敗	クライアント SSL 証明書名がパートナー・プロファイル {0} にありません	エラー	このイベントは、文書の送付に使用される SSL 証明書が、該当するパートナーの承認済み証明書リストに登録されていない場合に生成されます。
BCG210010	文書が大きすぎます	文書が大きすぎます: {0} バイト	エラー	このイベントは、受信した文書が大きすぎて処理できない場合に生成されます。

表 41. 障害発生時イベント (続き)

イベント・コード	イベント名	内部での記述	重大度	詳細な説明
BCG210011	内部パートナー・トランスポートのアンパックの失敗	指定された内部パートナー・トランスポート情報は不十分です: {0}	エラー	このイベントは、提供されたトランスポート情報が不十分な場合に生成されます。
BCG210012	B2B 機能が見つかりません	B2B 機能が見つかりません {0}	エラー	このイベントは、文書の転送に必要な B2B 機能が使用不可の場合に生成されます。
BCG210013	接続が完全に構成されていません	接続が完全に構成されていません {0}	エラー	このイベントは、文書の接続の構成が完了していない場合に生成されます。たいてい、文書の宛先に構成済みの宛先が指定されていないことが原因です。
BCG210014	MIME Multipart アンパックの失敗	MIME multipart 文書のアンパックに失敗しました: {0}	エラー	このイベントは、システムが MIME multipart 文書のアンパックに失敗した場合に生成されます。
BCG210015	cXML パッケージ化の失敗	cXML 文書のパックに失敗しました: {0}	エラー	
BCG210016	cXML チャネル解析の失敗	cXML ルーティング情報の解析に失敗しました: {0}	エラー	
BCG210017	EDI 接続解析の失敗	EDI ルーティング情報の解析に失敗しました: {0}	エラー	このイベントは、システムが EDI ルーティング情報の解析に失敗した場合に生成されます。
BCG210019	この接続では同期操作はサポートされません	この接続では同期操作はサポートされません	エラー	このイベントは、文書によって同期操作が要求されたが、接続が同期操作をサポートしていない場合に生成されます。

表 41. 障害発生時イベント (続き)

イベント・コード	イベント名	内部での記述	重大度	詳細な説明
BCG210031	文書を否認防止できません	文書 {0} を否認防止できません	重大	<p>このイベントは、システムが文書を否認防止できなかった場合に生成されます。</p> <p>システムに十分なディスク・スペースがあることと、次のディレクトリーにシステム専用ファイルが格納されていることを確認します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • /<common information directory>/non_rep/ • /<common information directory>/msg_store/ <p>これら 2 つのディレクトリーにユーザー生成ファイルが格納されている場合、文書の処理は失敗します。</p>
BCG210032	Inbound Processor のシステム・エラー	文書での Inbound Processor でのシステム・エラー: {0}	重大	<p>このイベントは、システムがインバウンド・プロセッサでエラーを検出した場合に生成されます。</p>
BCG210033	メッセージの格納に失敗しました	文書をプレーン・テキストで保管できません。	エラー	<p>このイベントは、システムが文書をプレーン・テキストで保管できなかった場合に生成されます。</p> <p>システムに十分なディスク・スペースがあることと、次のディレクトリーにシステム専用ファイルが格納されていることを確認します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • /<common information directory>/non_rep/ • /<common information directory>/msg_store/ <p>これら 2 つのディレクトリーにユーザー生成ファイルが格納されている場合、文書の処理は失敗します。</p>

表 41. 障害発生時イベント (続き)

イベント・コード	イベント名	内部での記述	重大度	詳細な説明
BCG210034	文書マネージャーでのシステム・エラー (System Error in the document manager)	文書マネージャーでの文書に関するシステム・エラー: {0} (System error in the document manager for document: {0})	重大	このイベントは、システムが文書マネージャーでエラーを検出した場合に生成されます。
BCG210051	複写処理に失敗しました	システム・エラー — プロセスの複写に失敗しました	重大	このイベントは、重複処理時にシステムがデータベース・サーバーにアクセスできなかった場合に生成されます。
BCG210052	重複する文書を受信しました	この文書は、{2} に送信された文書と重複しています	エラー	このイベントは、受信した文書が重複していて拒否された場合に生成されます。
BCG210061	宛先解析の失敗	宛先の構文解析でのエラー	重大	このイベントは、宛先の解析が失敗すると生成されます。通常はデータベースの問題が原因です。
BCG210063	宛先処理の失敗	宛先の処理に失敗しました	重大	このイベントは、宛先の処理が失敗すると生成されます。通常はデータベースの問題が原因です。
BCG210065	宛先判別の失敗	{0}	エラー	このイベントは、宛先の処理時に競合する入力が存在する場合に生成されます。
BCG210066	パッケージおよびコンテンツのビジネス ID を異なるパートナーにマップします	元パートナー ID = {0}、宛先パートナー ID = {1}、元パッケージ・パートナー ID = {2}、宛先パッケージ・パートナー ID = {3}	エラー	このイベントは、内容とパッケージのルーティング情報に不一致が存在する場合に生成されます。
BCG210201	Doctype 処理中の PIP のロードに失敗しました	Doctype の処理中に、文書の PIP をロードできません	重大	このイベントは、PIP のスペックが見つからない場合に生成されます。構成の問題がなければ発生しません。
BCG210202	Doctype 処理中の例外	Doctype 処理中の例外: {0}	重大	このイベントは、DocType タグの挿入時にシステム障害が発生した場合に生成されます。
BCG210203	DoctypeProcess エラー — アクションが見つかりません	DoctypeProcess エラー — アクションが見つかりません	重大	このイベントは、PIP DocType のスペックが見つからない場合に生成されます。

表 41. 障害発生時イベント (続き)

イベント・コード	イベント名	内部での記述	重大度	詳細な説明
BCG210205	文書の処理がキャンセルされました	文書の処理がキャンセルされました。理由: {0} に関連した文書の処理に失敗しました。	重大	このイベントは、「エラー」属性で「エンベロープを廃棄 (Discard envelope)」が「はい」に設定されているために文書処理が取り消された場合に生成されます。
BCG230004	検証の内部エラー	{0}	重大	このイベントは、検証処理中に内部システム障害が発生した場合に生成されます。
BCG230006	検証データベース・エラー	{0}	重大	このイベントは、検証処理中のデータベース・エラーが発生した場合に生成されます。
BCG230007	検証ビジネス・プロセス・ファクトリー・エラー	{0}	重大	このイベントは、システムが検証エンジンに送付するプロセスを判別できなかった場合に生成されます。
BCG230009	RosettaNet 検証エラー	{0}	エラー	このイベントは、文書が RosettaNet プロセスの検証を完了できなかった場合に生成されます。
BCG230010	データ検証エラー	文書のデータ検証に失敗しました: {0}	エラー	このイベントは、文書がデータ検証に失敗して拒否された場合に生成されます。
BCG230012	AS シーケンス検証エラー	{0}	エラー	このイベントは、文書が EDIINT プロセスの検証を完了できなかった場合に生成されます。
BCG240003	RosettaNet アンパック・エラー	RosettaNet アンパック・エラー	エラー	このイベントは、システムがアンパック時に RosettaNet プリアンプルを解析できなかった場合に生成されます。
BCG240005	RNPackager 送達ヘッダー・パーサーの失敗	送達ヘッダー・パーサー・エラー: {0}	エラー	このイベントは、システムがアンパック時に RosettaNet 送達ヘッダーを解析できなかった場合に生成されます。
BCG240007	RNPackager サービス・ヘッダーの失敗	サービス・ヘッダー・パーサー・エラー: {0}	エラー	このイベントは、システムがアンパック時に RosettaNet サービス・ヘッダーを解析できなかった場合に生成されます。

表 41. 障害発生時イベント (続き)

イベント・コード	イベント名	内部での記述	重大度	詳細な説明
BCG240009	RNPackager MIME 解析の失敗	MIME 解析エラー: {0}	エラー	このイベントは、アンパック時に RosettaNet メッセージの MIME 構文解析でエラーが発生した場合に生成されます。
BCG240011	RNPackager 署名に失敗しました	デジタル署名の検証に失敗しました: {0}	エラー	このイベントは、アンパック時にデジタル署名の検証が失敗した場合に生成されます。
BCG240012	RN アンパック状態更新エラー	データベース・アクセスに失敗しました。 RosettaNet 状態を更新できませんでした	重大	このイベントは、RosettaNet の状態の更新時に、アンパッケージャーがデータベース通信エラーを検出した場合に生成されます。
BCG240013	パートナー証明書が署名者に一致していませんでした	署名者証明書の上の名前/シリアルがデータベース項目に一致していませんでした	エラー	このイベントは、DUNS 検査の証明書がデジタル署名に失敗した場合に生成されます。
BCG240014	文書に署名がありません	文書に署名がありません	エラー	このイベントは、TPA で署名が必要だが文書内に見つからない場合に生成されます。
BCG240015	RosettaNet 文書作成の失敗	{0}	重大	このイベントは、RosettaNet 文書の作成に失敗した場合に生成されます。
BCG240016	RosettaNet 否認防止エラー	{0}	エラー	このイベントは、受信確認通知に前のメッセージの正しいダイジェストが格納されていないか、ダイジェストが欠落している場合に生成されます。
BCG240017	同期確認通知が受信されませんでした	同期確認通知が必要でしたが、同期応答で受信されませんでした	エラー	
BCG240025	WBIC セキュリティ・マネージャーの初期化例外です	WBICSecurityManager の初期化に失敗しました。 例外: {1}	重大	
BCG240026	証明書がまだ有効ではありません	証明書がまだ有効ではありません。シリアル番号: {0}、サブジェクト DN: {1}、発行者 DN: {2}	重大	
BCG240027	証明書の有効期限が切れています	証明書は期限が切れています。シリアル番号: {0}、サブジェクト DN: {1}、発行者 DN: {2}	重大	

表 41. 障害発生時イベント (続き)

イベント・コード	イベント名	内部での記述	重大度	詳細な説明
BCG240028	証明書が失効しています	証明書が失効しています。シリアル番号: {0}、サブジェクト DN: {1}、発行者 DN: {2}	重大	
BCG240029	証明書が見つかりません	証明書が見つかりません	重大	
BCG240030	有効な署名証明書が見つかりませんでした	有効な署名証明書が見つかりません	重大	
BCG240031	インスタンス・パッケージ化エラー	エラー: {0}	重大	このイベントは、システムが指定の文書タイプのパッケージを検出できなかった場合に生成されます。
BCG240032	有効な暗号化証明書が見つかりません	有効な暗号化証明書が見つかりません	重大	このイベントは、有効な証明書が見つからない場合に生成されます。 このイベントが表示された場合は、1 次証明書も 2 次証明書も有効ではありません。証明書は、有効期限が切れているか、失効している可能性があります。証明書の有効期限が切れている場合や失効している場合は、イベント・ビューアーに、そのイベントとともに対応するイベント (証明書の期限切れまたは失効) が表示されます。
BCG240033	有効な SSL クライアント証明書が見つかりません	有効な SSL クライアント証明書が見つかりません	重大	
BCG240036	インスタンス・アンパック・エラー	エラー: {0}	エラー	このイベントは、システムが文書のアンパッケージを検出できなかった場合に生成されます。
BCG240065	接続による XML の構文解析に失敗しました	XML 接続の構文解析に失敗しました: {0}	エラー	このイベントは、XML メッセージの接続情報が見つからない場合に生成されます。
BCG240068	接続パーサー RosettaNet の失敗	接続による RosettaNet の構文解析に失敗しました	エラー	このイベントは、RosettaNet 文書内に接続情報が見つからなかった場合に生成されます。

表 41. 障害発生時イベント (続き)

イベント・コード	イベント名	内部での記述	重大度	詳細な説明
BCG240070	XML 接続解析の失敗	XML 接続の解析に失敗しました	エラー	このイベントは、システムが XML ファイルの接続情報を検出できなかった場合に生成されます。
BCG240071	フラット・ファイル接続解析の失敗	フラット・ファイル接続の解析に失敗しました: {0}	エラー	このイベントは、システムがフラット・ファイルの接続情報を検出できなかった場合に生成されます。
BCG240078	Web サービス接続の解析に失敗しました	Web サービス接続の解析に失敗しました	エラー	このイベントは、システムが SOAP メッセージの接続情報を検出できなかった場合に生成されます。
BCG240409	AS アンパッカーの失敗	AS アンパッカー・エラー: {0}	エラー	このイベントは、AS アンパッカーに障害が発生した場合に生成されます。
BCG240411	AS 署名の失敗	AS 署名検証エラー: {0}	エラー	このイベントは、AS 署名の検証が失敗した場合に生成されます。
BCG240412	AS 状態エンジン DB の失敗	AS 状態エンジン DB エラー: {0}	重大	このイベントは、AS 状態エンジンのデータベースに障害が発生した場合に生成されます。
BCG240415	AS パッカーの失敗	AS パッカー・エラー: {0}	重大	このイベントは、AS パッカーに障害が発生した場合に生成されます。
BCG240416	AS 否認防止エラー	{0}	エラー	このイベントは、AS 否認防止が失敗した場合に生成されます。
BCG240417	復号に失敗しました	{0}	エラー	このイベントは、復号に失敗すると生成されます。
BCG240418	Message Digest を生成できません	{0}	エラー	このイベントは、システムがメッセージ・ダイジェストを生成できなかった場合に生成されます。
BCG240419	サポートされない署名形式	{0}	エラー	このイベントは、システムがサポートされない署名形式を受け取った場合に生成されます。
BCG240420	サポートされない署名アルゴリズム	{0}	エラー	このイベントは、システムがサポートされない署名アルゴリズムを受け取った場合に生成されます。
BCG240421	予期しないエラー	{0}	重大	このイベントは、システムが予期しないエラーを検出した場合に生成されます。

表 41. 障害発生時イベント (続き)

イベント・コード	イベント名	内部での記述	重大度	詳細な説明
BCG240422	この MDN の AS 文書が見つかりません	{0}	エラー	このイベントは、MDN が受信され、これに対応する文書が見つからない場合に生成されます。
BCG240423	入力ファイルの障害	文書で無効な入力ファイルが渡されました	エラー	このイベントは、使用できない入力ファイルが検出された場合に生成されます。
BCG240424	メッセージ・セキュリティ不足	{0}	エラー	このイベントは、メッセージ・セキュリティ不足が発生した場合に生成されます。
BCG240500	RosettaNet 状態エンジン・エラー	RosettaNet 状態エンジン・エラー	重大	このイベントは、RosettaNet 状態エンジンによってシステム・エラーが検出された場合に生成されます。
BCG240550	POP3 ポーリング・エラー	POP3 サーバーのポーリング時にエラーが発生しました: {0}。拒否されたメッセージ VUID: {1}	エラー	
BCG240600	AS 状態エンジン・エラー	AS 状態エンジン・エラー: {0}	重大	このイベントは、RosettaNet 状態エンジンによってシステム・エラーが検出された場合に生成されます。
BCG240601	AS 再試行の失敗	AS 属性の最大再試行制限に達しました	エラー	このイベントは、AS の再試行が失敗した場合に生成されます。最大再試行制限に達しています。
BCG240606	パッケージ化エラー	パッケージ化エラー {0}	エラー	
BCG240610	アンパック・エラー	アンパック・エラー {0}	エラー	
BCG240615	プロトコル構文解析エラー	プロトコル構文解析エラー {0}	エラー	
BCG240701	アクティビティ・ロギング・エラー	アクティビティ詳細のロギング時にエラーが発生しました: {0}	エラー	このイベントは、パートナーの文書 ID のアクティビティ ID に対して検索対象が見つからなかった場合に生成されます。
BCG250001	文書の送達に失敗しました	パートナー宛先への文書送達に失敗しました: {0}	エラー	このイベントは、パートナーの宛先への文書の送達が失敗し、文書が障害の状態に設定された場合に生成されます。

表 41. 障害発生時イベント (続き)

イベント・コード	イベント名	内部での記述	重大度	詳細な説明
BCG250002	送達スケジューラーが失敗しました	Delivery Scheduler で内部エラーが発生しました: {0}	重大	このイベントは、Delivery Manager 内部に未分類の内部エラーが発生した場合に生成されます。これは、送達の失敗ではなく、宛先または文書データに問題があったことが原因です。
BCG250005	FTP 送達に失敗しました	パートナー宛先への FTP 送達に失敗しました。例外: {0}	エラー	このイベントは、FTP プロトコル文書の送達が失敗したが、再試行の続行が可能な場合に生成されます。最後の失敗ではイベント 250001 が生成されます。
BCG260002	RosettaNet パススルー・ロギングに失敗しました	RosettaNet パススルー・プロセス表示ロギングに失敗しました: {0}	エラー	このイベントは、文書が RN パススルー・ロギングに失敗した場合に生成されます。
BCG280006	文書処理エラー	文書 {1} の {0} reject および oversize フォルダーでコンテンツ・ファイル、メタデータ・ファイル、およびヘッダー・ファイルが見つかりません	エラー	
BCG281002	コンソールから再送した文書は既にキューに入っています	コンソールで再送した文書は既にキューに入っています: {0}	重大	
BCG310002	EDI トランザクションがエンベロープされました	EDI トランザクションがエンベロープされました。エンベロープ・アクティビティ ID : {0}	エラー	このイベントは、EDI トランザクション文書がエンベロープされたときに生成されます。エンベロープ・アクティビティ ID は、新規エンベロープ文書のものです。
BCG310003	EDI トランザクションのエンベロープに失敗しました	EDI トランザクションのエンベロープに失敗しました	エラー	このイベントは、EDI トランザクション文書がエンベロープされていないときに生成されます。このイベントの前には、失敗の詳細について説明するイベントがあります。
BCG800000	内部パートナー・ビジネス・プロセスの取得に失敗しました	内部パートナー・ビジネス・プロセスのインスタンスの取得に失敗しました。理由: {0}	重大	このイベントは、システムでビジネス・プロセスの内部パートナー・アクションが見つからなかった場合に生成されます。

表 41. 障害発生時イベント (続き)

イベント・コード	イベント名	内部での記述	重大度	詳細な説明
BCG800004	内部パートナー・ビジネス・プロセスがデータベース・エラーを検出しました	{0}	重大	このイベントは、内部パートナーのアクションを処理中にデータベース・エラーが発生すると生成されます。
BCG800005	内部パートナー・プロセスが内部エラーを検出しました	{0}	重大	このイベントは、内部パートナーのアクションを処理中に内部システム・エラーが発生すると生成されます。

表 42. EDI イベント・コードとメッセージ

EDI イベント・コード	イベント名	内部での記述	重大度	詳細な説明
BCGEDICM0001	予期しない例外が発生しました	コンポーネント {0} で予期しない例外が発生しました。例外テキスト: {1}	エラー	
BCGEDICM0003	必要なプロパティがありません	コンポーネント {0} の入力が無効です。必要なプロパティ {1} がありません	エラー	
BCGEDICM0004	プロパティ値が無効です	コンポーネント {0} の入力が無効です。値 {1} はプロパティ {2} では無効です	エラー	
BCGEDICM0005	サポートされない文字セットです	コンポーネント {0} の入力が無効です。プロパティ {2} に指定された文字セット {1} はサポートされていません	エラー	
BCGEDICM0006	コンポーネントに対して文書構文が無効です	コンポーネント {0} の入力が無効です。文書構文 {1} はこのコンポーネントでは無効です	エラー	
BCGEDICM0010	入出力エラーが発生しました	コンポーネント {0} で入出力エラーが発生しました。例外テキスト: {1}	エラー	
BCGEDICM0011	ファイルのオープンに失敗しました	コンポーネント {0} がファイル {1} を開くことができません	エラー	
BCGEDICM0012	メモリー・バッファへのアクセスに失敗しました	コンポーネント {0} がメモリー・バッファにアクセスできません	エラー	
BCGEDICM0013	入力データ・ソースがありません	コンポーネント {0} に入力データ・ソースが指定されていませんでした	エラー	

表 42. EDI イベント・コードとメッセージ (続き)

EDI イベント・コード	イベント名	内部での記述	重大度	詳細な説明
BCGEDICM0014	出力データ・ソースがありません	コンポーネント {0} に出力データ・ソースが指定されていませんでした	エラー	
BCGEDICM0020	コンポーネントの構文解析エラー	入力データの構文解析時のエラーのため、コンポーネント {0} で障害が発生しました	エラー	
BCGEDICM0021	データベース・エラー	データベースへのアクセス試行時にエラーが発生しました。クラス名: {0}、メソッド: {1}、例外: {2}	エラー	
BCGEDICM0022	予期しないデータベース例外が発生しました	データベースへのアクセス試行時に予期しない例外が発生しました。クラス名: {0}、メソッド: {1}、例外: {2}	エラー	
BCGEDICM0023	データベース接続がありません	データベース接続マネージャー・クラス {0} が有効な接続を戻しませんでした	重大	
BCGEDICM0101	コンポーネントのオブジェクトがないか、または無効です	内部エラーが発生しました。コンポーネント {0} に渡されたオブジェクトがないか、または無効です	エラー	
BCGEDICM0102	クラスのロードに失敗しました	動的に構成されたクラスをロードできませんでした。構成キー: {0}、クラス名: {1}	重大	
BCGEDICM0103	関数仮パラメーターが無効です	コンポーネント {0} で内部エラーが発生しました。無効な値 '{1}' が関数 {2} に渡されました	エラー	
BCGEDICM0104	ソース文書が無効です	ソース文書はコンポーネント {0} には適用できません	エラー	
BCGEDIEM0100	転写ファイルの内容	転写ファイルの内容。{0}	エラー	
BCGEDIEM0101	証明書の取得時に例外が発生しました	証明書の取得時に例外が発生しました。詳細: {0}	エラー	
BCGEDIEM0102	転写ファイルの読み取り時に例外が発生しました	転写ファイルの読み取り時に例外が発生しました。詳細: {0}	エラー	
BCGEDIEM0103	必要な属性がヌルです	必要な属性 {0} がヌルです。	エラー	
BCGEDIEM0104	送信するファイルを一時ロケーションに書き込もうとして例外が発生しました	送信するファイルを一時ロケーションに書き込もうとして例外が発生しました。詳細: {0}	エラー	

表 42. EDI イベント・コードとメッセージ (続き)

EDI イベント・コード	イベント名	内部での記述	重大度	詳細な説明
BCGEDIEM0105	証明書を証明書リポジトリにアップロードする必要があります	証明書を証明書リポジトリにアップロードする必要があります。	エラー	
BCGEDIEM0106	秘密鍵ファイルをロードできませんでした。別名が見つかりません	秘密鍵ファイルをロードできませんでした。別名が見つかりません。	エラー	
BCGEDIEM0107	クライアント証明書 (ローカル証明書) の検証に失敗しました。証明書が無効であるか、失効している可能性があります	クライアント証明書 (ローカル証明書) の検証に失敗しました。証明書が無効であるか、失効している可能性があります。	エラー	
BCGEDIEM0108	セキュリティ例外	セキュリティ例外が発生しました。詳細: {0}	エラー	
BCGEDIEM0109	レシーバー・コンポーネントに指定した一時ディレクトリー値がヌルです	レシーバー・コンポーネントに指定した一時ディレクトリー値がヌルです。	エラー	
BCGEDIEM0110	渡された BusinessDocument 配列がヌルです	渡された BusinessDocument 配列がヌルです。	エラー	
BCGEDIEM0111	入力ファイルがヌルです	入力ファイルがヌルです。	エラー	
BCGEDIEM0112	スプリッター例外を受信しました。	スプリッター例外を受信しました。詳細: {0}	エラー	
BCGEDIEM0113	スプリッター例外を受信しました。	スプリッター例外を受信しました。詳細: {0}	エラー	
BCGEDIEM0114	リーダーを検出できません	リーダーを検出できません	エラー	
BCGEDIEM0118	文字のエンコード・エラー	"{0}" の文字セット {1} へのエンコード時にエラーが発生しました。	エラー	
BCGEDIEM0120	RODScanner の初期化時にエラーが発生しました	RODScanner の初期化時にエラーが発生しました。詳細: {0}	エラー	
BCGEDIEM0128	IBM VAN からネットワーク・エラー・メッセージを受信しました。	IBM VAN からネットワーク・エラー・メッセージを受信しました。詳細: メッセージ ID = {0}、メッセージの説明 = {1}、重大度コード = {2}	エラー	
BCGEDIEM0150	渡された文書は EDIAckHandler に適用されません	渡された文書は EDIAckHandler に適用されません	エラー	

表 42. EDI イベント・コードとメッセージ (続き)

EDI イベント・コード	イベント名	内部での記述	重大度	詳細な説明
BCGEDIEM0151	EDI 確認通知の処理時にエラーが発生しました	EDI 確認通知の処理時にエラーが発生しました。エラーのある端末でメッセージを取得しました。	エラー	
BCGEDIEM0152	コンテキストからデータベース接続を取得できません	コンテキストからデータベース接続を取得できません	エラー	
BCGEDIEM0200	データベース接続エラーが発生しました。	コンテキスト内にデータベース接続オブジェクトがないか、または無効です。	エラー	
BCGEDIEM0201	ファイルへの書き込み時に入出力エラーが発生しました。	PROCESS DIR {0} でファイルを作成できません	エラー	
BCGEDIEM0202	AbsDocument を直列化できません。	AbsDocument を直列化しようとしてパーサー例外が発生しました。	エラー	
BCGEDIEM0203	AbsDocument の直列化時に例外が発生しました。	AbsDocument を直列化しようとして例外が発生しました。	エラー	
BCGEDIEM0204	ビジネス文書を導入できません	ID が {0} のビジネス文書をワークフローに戻すことができません。	エラー	
BCGEDIEM0205	状態情報を検索できません。	状態管理サービスで状態情報が見つかりません。	エラー	
BCGEDIEV0003	交換の開始が見つかりません	メッセージをエンベロープ解除しようとしたが、有効な交換の開始が見つからなかったため失敗しました	エラー	
BCGEDIEV0009	取引先のニックネームの検索に失敗しました	取引先のニックネーム {0} が見つかりません	エラー	
BCGEDIEV0010	関数の内部エラーです	内部エラーが発生しました。関数: {0}、戻りコード: {1}	エラー	
BCGEDIEV0011	データベース・トランザクションに失敗しました	データベース・トランザクションに失敗しました。 SQL エラー: {0}	エラー	
BCGEDIEV0018	エンベロープ・セグメントが見つかりません	{0} エンベローパーまたはデエンベローパーがエラーを検出しました。{1} セグメントが見つかりませんでした	エラー	

表 42. EDI イベント・コードとメッセージ (続き)

EDI イベント・コード	イベント名	内部での記述	重大度	詳細な説明
BCGEDIEV0050	変換テーブルの検索に失敗しました	メッセージのエンベロープまたはエンベロープ解除時に、変換テーブルの検索に失敗しました。変換テーブル: {0}、値: {1}	エラー	
BCGEDIEV0051	エンベロープ・セグメントが見つかりません	0) デエンベローパーがエラーを検出しました。{1} が見つかりました ({2} はなし)	エラー	
BCGEDIEV0052	エンベロープするメッセージが空です	{0} エンベローパーがエラーを検出しました。エンベロープする空のメッセージを受信しました	エラー	
BCGEDIEV0053	制御番号マスクの最大グループ数を超過しました	{0} エンベローパーがエラーを検出しました。合計グループ数が制御番号マスクで許可された数を超過しています	エラー	
BCGEDIEV0054	複数交換エラー	{0} デエンベローパーがエラーを検出しました。複数交換が検出されましたが、これは許可されません。	エラー	
BCGEDIEV0055	変換テーブルの検索の警告	メッセージのエンベロープ時に、変換テーブルの検索でエントリーが戻されませんでした。変換テーブル: {0}、値: {1}	エラー	
BCGEDIEV0056	変換テーブルの検索の警告	メッセージのエンベロープ解除時に、変換テーブルの検索でエントリーが戻されませんでした。変換テーブル: {0}、値: {1}、グループ/トランザクション制御番号 {2}	エラー	
BCGEDIEV0057	エンベロープに失敗しました	メッセージをエンベロープしようとして失敗しました。エンベロープ・タイプが {0} でした	エラー	
BCGEDIEV0058	エンベロープ解除に失敗しました	メッセージをエンベロープ解除しようとして失敗しました	エラー	
BCGEDIFT0100	必要な引数がありません	コマンドでの構文エラー: {0}。必要な引数がありませんでした	エラー	

表 42. EDI イベント・コードとメッセージ (続き)

EDI イベント・コード	イベント名	内部での記述	重大度	詳細な説明
BCGEDIFT0110	FTP スクリプト処理が停止しました	エラーにより、FTP スクリプト処理が停止しました	エラー	
BCGEDIFT0111	ファイル基本名がありません	取得されたファイルにはベース名がありません	エラー	
BCGEDIFT0112	コンポーネントのオブジェクトがないか、または無効です	入力端末上に不明のオブジェクトがあります	エラー	
BCGEDIFT0113	コマンドの実行時に予期しないエラーが発生しました	コマンド {0} の実行時に予期しないエラーが発生しました	エラー	
BCGEDIFT0114	ファイルのダウンロード時に予期しないエラーが発生しました	ファイル {0} のダウンロード時に予期しないエラーが発生しました	エラー	
BCGEDIFT0115	FTP スクリプト・ファイルが見つかりません	FTP スクリプト・ファイルが見つかりません	エラー	
BCGEDIFT0116	IO 例外読み取りスクリプト	スクリプトの読み取り時に IO 例外を catch しました	エラー	
BCGEDIFT0117	FTP スクリプトの構文解析時に予期しない例外が発生しました	FTP スクリプトの構文解析時に予期しない例外を catch しました。システム管理者に連絡してください。例外およびスタック・トレースについての詳細は、トレース・ファイルにあります	エラー	
BCGEDIFT0118	ファイルのアップロードに失敗しました	ファイルをアップロードできません。ファイル名: {0}	エラー	
BCGEDIFT0119	MPUT のファイルがありません	MPUT が発行されましたが、送信するファイルが見つかりませんでした。ファイル名: {0}。ディレクトリ: {1}	エラー	
BCGEDIFT0120	FTP コマンドがタイムアウトになりました	FTP コマンドがタイムアウトになりました。送信中のコマンド: {0}	エラー	
BCGEDIFT0200	IO 例外	IO 例外が発生しました。例外テキスト: {0}	エラー	
BCGEDIFT0201	データ・ソケットの作成に失敗しました	データ・ソケットを作成できませんでした。Connection または ControlSocket がヌルです	エラー	
BCGEDIFT0202	応答コードがヌルです	ヌル・ポインター例外: 処理のための応答コードが含まれている StringBuffer がヌルです	エラー	

表 42. EDI イベント・コードとメッセージ (続き)

EDI イベント・コード	イベント名	内部での記述	重大度	詳細な説明
BCGEDIFT0203	引数値が無効です	引数の値が無効です。一部またはすべての値がヌルです	エラー	
BCGEDIFT0204	制御ソケットが作成されません	制御ソケットが作成されません	エラー	
BCGEDIFT0205	必要なファイルが見つかりません	必要なファイルが見つかりません	エラー	
BCGEDIFT0206	例外が発生しました	例外が発生しました	エラー	
BCGEDIFT0207	アクティブなデータ・ソケットがヌルです	アクティブなデータ・ソケットがヌルです	エラー	
BCGEDIFT0208	SocketException が発生しました	SocketException が発生しました	エラー	
BCGEDIFT0209	受動データ・ソケットがヌルです	受動データ・ソケットがヌルです	エラー	
BCGEDIFT0210	データ・ソケットがヌルです	データ・ソケットがヌルです	エラー	
BCGEDIFT0211	秘密鍵の読み込みに失敗しました	ファイル名 — {0} から秘密鍵ファイルをロードできませんでした。別名が見つかりません	エラー	
BCGEDIFT0212	クライアント証明書の検証に失敗しました	クライアント証明書 (ローカル証明書) の検証に失敗しました。証明書が無効であるか、失効している可能性があります	エラー	
BCGEDIFT0220	OPEN コマンドが失敗しました	OPEN コマンドが失敗しました。理由: {0}	エラー	
BCGEDIFT0221	CWD コマンドが失敗しました	CWD コマンドが失敗しました。理由: {0}	エラー	
BCGEDIFT0222	DELE コマンドが失敗しました	DELE コマンドが失敗しました。理由: {0}	エラー	
BCGEDIFT0223	PUT コマンドが失敗しました	PUT コマンドが失敗しました。理由: {0}	エラー	
BCGEDIFT0224	GET コマンドが失敗しました	GET コマンドが失敗しました。理由: {0}	エラー	
BCGEDIFT0225	LIST コマンドが失敗しました	LIST コマンドが失敗しました。理由: {0}	エラー	
BCGEDIFT0226	QUIT コマンドが失敗しました	QUIT コマンドが失敗しました。理由: {0}	エラー	
BCGEDIFT0227	RMD コマンドが失敗しました	RMD コマンドが失敗しました。理由: {0}	エラー	
BCGEDIFT0228	MKD コマンドが失敗しました	MKD コマンドが失敗しました。理由: {0}	エラー	

表 42. EDI イベント・コードとメッセージ (続き)

EDI イベント・コード	イベント名	内部での記述	重大度	詳細な説明
BCGEDIFT0229	PASV コマンドが失敗しました	PASV コマンドが失敗しました。理由: {0}	エラー	
BCGEDIFT0230	GETDEL コマンドが失敗しました	GETDEL コマンドが失敗しました。理由: {0}	エラー	
BCGEDIFT0231	FTP コマンドが失敗しました	FTP コマンド {0} が失敗しました。理由: {1}	エラー	
BCGEDIFT0232	FTP サーバーからの応答がヌルです	FTP サーバーからの応答がヌルです	エラー	
BCGEDIMD0001	メタデータの読み取り時に予期しない例外が発生しました	メタデータの読み取り時に予期しない例外が発生しました。構文: {0}、ディクショナリー: {1}、文書: {2}、例外テキスト: {3}	エラー	
BCGEDIMD0002	メタデータ制御ストリングが無効です	メタデータ制御ストリングが無効であるか、または別のバージョン用にコンパイルされています。構文: {0}、ディクショナリー: {1}、文書: {2}	エラー	
BCGEDIMD0003	メタデータ制御ストリングの読み取りに失敗しました	データベースからメタデータ制御ストリングを読み取ることができません。構文: {0}、ディクショナリー: {1}、文書: {2}	エラー	
BCGEDINK0001	ネットワーク確認通知が無効です	IBM VAN ネットワーク確認通知コンポーネントに渡された文書が、有効なネットワーク確認通知ではありません	エラー	
BCGEDINK0002	属性値が無効です	属性 {0} に無効な値 {1} があります	エラー	
BCGEDISP0002	エンコードを判別できません	XML スプリッターが、XML 入力データのエンコードを判別できませんでした	エラー	
BCGEDISP0003	XML データが無効です	XML スプリッターに渡されたデータは、有効な XML データではありません	エラー	
BCGEDISP0005	交換イテレーターがヌルです	内部エラーが発生しました。前の呼び出し中に交換イテレーターが設定されませんでした	エラー	
BCGEDISP0006	入力データの終了	スプリッターが入力データの終わりに達しました	エラー	

表 42. EDI イベント・コードとメッセージ (続き)

EDI イベント・コード	イベント名	内部での記述	重大度	詳細な説明
BCGEDIUP0001	XML 構文解析時の致命的エラー	XML 文書 {0} の行 {1}、列 {2} の構文解析中に致命的エラーが発生しました。パーサーからのメッセージ・テキスト: {3}	エラー	
BCGEDIUP0002	XML 構文解析時の重大エラー	XML 文書 {0} の行 {1}、列 {2} の構文解析中に重大エラーが発生しました。パーサーからのメッセージ・テキスト: {3}	エラー	
BCGEDIUP0015	メタデータの読み取りに失敗しました	メッセージのメタデータを取得しようとして失敗しました	エラー	
BCGEDIUP0118	文字のエンコード・エラー	"{0}" の文字セット {1} へのエンコード時にエラーが発生しました。	エラー	
BCGEDIUP0021	入力データ・レコードを識別できません	入力データ・レコードを識別できません。レコード番号: {0}。データ・イメージ: {1}	エラー	
BCGEDIUP0023	レコードが指定の最大反復回数を超えました	受信したデータは、指定の最大反復回数を超えています。レコード番号: {0}。データ識別番号: {1}、最大反復回数: {2}	エラー	
BCGEDIUP0033	ディクショナリー値または文書値がありません	構文解析に使用されるディクショナリー値および文書値が指定されていなかったか、またはブランクです	エラー	
BCGEDIUP0034	構造体の使用法が無効です	構造体を含むデータ形式では、文字で区切られたデータはサポートされるオプションではありません	エラー	
BCGEDIUP0038	レコード区切り文字がありません	レコード区切り文字を検出せずにレコードの終わりに達しました。必要なレコード区切り文字: {0}。レコード番号: {1}。レコード名: {2}。バイト・オフセット: {3}	エラー	
BCGEDIUP0039	文字変換に失敗しました	データをユニコード文字に変換しようとして失敗しました。入力データ: {0}、データ長: {1}。受信したエラー: {2}	エラー	

表 42. EDI イベント・コードとメッセージ (続き)

EDI イベント・コード	イベント名	内部での記述	重大度	詳細な説明
BCGEDIUP0040	データ・タイプに対してデータが無効です	{0} タイプ・データを変換しようとして、無効なデータが見つかりました。無効なデータ: {1}	エラー	
BCGEDIUP0041	サポートされない文字セットです	ROD (フラット・ファイル) データに使用される文字セットはサポートされていません。文字セット: {0}	エラー	
BCGEDIUP0042	サポートされないレコードが見つかりました	C および D レコードの処理時にサポートされないレコードが見つかりました。最初の位置に文字 C、D、または Z が必要でした。{0} を受信しました。バイト・オフセット: {1}	エラー	
BCGEDIUP0052	予期しない直列化例外が発生しました	文書の直列化時に予期しない例外が発生しました。例外テキスト: {0}	エラー	
BCGEDIUP0053	パーサーまたはシリアライザーの作成に失敗しました	構文 {0} に対してパーサーまたはシリアライザーを作成できませんでした	エラー	
BCGEDIUP0055	直列化の文書が空です	文書が空のため、文書を直列化できませんでした	エラー	
BCGEDIUP0057	直列化の文書が無効です	文書の内部構造が無効であるため、文書を直列化できませんでした	エラー	
BCGEDIUP0099	認識された入力データがありません	パーサーが認識できる入力データを見つけることができませんでした。パーサー・コンポーネント: {0}	エラー	
BCGEDIUP0100	メタデータの詳細が見つかりません	文書にメタデータ詳細がありません。ディクショナリー={0}、文書={1}、構文={2}	エラー	
BCGEDIUP0101	メタデータ制御ストリングが見つかりません	メタデータ制御ストリングが見つかりません。ディクショナリー={0}、文書={1}、構文={2}	エラー	
BCGEDIUP0106	ROD (フラット・ファイル) データ形式が無効です	ROD (フラット・ファイル) データ形式が無効です。レコード・ノードに下位ノード (構造またはフィールド) がありません。RecordName: {0}	エラー	

表 42. EDI イベント・コードとメッセージ (続き)

EDI イベント・コード	イベント名	内部での記述	重大度	詳細な説明
BCGEDIUP0107	レコードにレコード名がありません	D レコード用の文書にヌルの RecordName がありません	エラー	
BCGEDIUP0108	ルート・ノード下に予期しないノードがあります	ROD (フラット・ファイル) DataFormat が無効です。 ROD (フラット・ファイル) ルート・ノード {0} に、レコードおよびループ以外の下位ノードがあります	エラー	
BCGEDIUP0109	ノードにレコード名がありません	レコード・ノードにヌルまたは空の RecordName があります	エラー	
BCGEDIUP0110	メタデータ情報の取得時にエラーが発生しました	レコードの MetaData から RODMetaDataElement を取得できません: {0}	エラー	
BCGEDIUP0111	空のレコードが見つかりました	MetaDataElement に子エレメントがありません: {0}。エレメント・タイプはレコード	エラー	
BCGEDIUP0112	レコード・ノード下に予期しないノードがあります	ROD (フラット・ファイル) DataFormat が無効です。 ROD (フラット・ファイル) レコード・ノード {0} に、構造およびフィールド以外の下位ノードがあります	エラー	
BCGEDIUP0113	ループ・ノード下に予期しないノードがあります	ROD (フラット・ファイル) DataFormat が無効です。 ROD (フラット・ファイル) ループ・ノード {0} に、ループおよびレコード以外の下位ノードがあります	エラー	
BCGEDIUP0114	構造体ノード下に予期しないノードがあります	ROD (フラット・ファイル) DataFormat が無効です。 ROD (フラット・ファイル) 構造ノード {0} に、構造およびフィールド以外の下位ノードがあります	エラー	
BCGEDIUP0115	空の構造体が見つかりました	MetaDataElement に子エレメントがありません: {0}。エレメント・タイプは構造	エラー	
BCGEDIUP0116	データ形式に無効な文字があります	{0} データ形式で無効な文字が見つかりました。文字: {1}	エラー	

表 42. EDI イベント・コードとメッセージ (続き)

EDI イベント・コード	イベント名	内部での記述	重大度	詳細な説明
BCGEDIUP0117	文字のデコード・エラー	オフセット {0} で文字デコード・エラーが発生しました。	エラー	
BCGEDIUP0118	文字のエンコード・エラー	{2} の文字セット {3} へのエンコード時にエラーが発生しました	エラー	
BCGEDIUT0008	現在のマップ名	処理中のマップ名: {0}	エラー	
BCGEDIUT0011	制御ストリング命令に失敗しました	変換ノード (DTC) が、制御ストリング命令を処理できませんでした。制御ストリング命令: {0}、命令ストリーム・オフセット: {1}、マップ名: {2}	エラー	
BCGEDIUT0023	出力文書の作成に失敗しました	出力文書を作成しようとして失敗しました。ルート・ノード名: {0}、構文: {1}	エラー	
BCGEDIUT0033	ユーザー指定のメッセージ・テキスト	ユーザー指定のメッセージ・テキスト: {0}。このメッセージは、重大度コード {1}、ユーザー・コード {2} でログに記録されました	エラー	
BCGEDIUT0034	HexDecode スtringの長さが無効です	変換コンポーネントがStringを 16 進数でデコードしようとしたが、Stringの長さが無効でした。デコードするStringの文字数は偶数でなければなりません	エラー	
BCGEDIUT0035	HexDecode 文字が無効です	変換コンポーネントがHexDecode コマンドを実行し、デコードできない文字値が検出されました。文字値: {0}	エラー	
BCGEDIUT0041	変換テーブルの検索に失敗しました	変換テーブルの検索項目 {0} が {1} にありません。デフォルト値 {2} が戻されました。	エラー	
BCGEDIUT0061	組み込みマップの値が無効です	組み込みマップにはバイト配列エレメントが必要です。命令ストリーム・オフセット: {1}、マップ名: {2}	エラー	
BCGEDIUT0100	ユーザー出口が見つかりません	ユーザー出口 {0} が見つかりませんでした	エラー	

表 42. EDI イベント・コードとメッセージ (続き)

EDI イベント・コード	イベント名	内部での記述	重大度	詳細な説明
BCGEDIUT0101	ユーザー出口で予期しない例外が発生しました	ユーザー出口 {0} に予期しない例外がありました: {1}	エラー	
BCGEDIUT0401	マップ制御ストリングが見つかりません	データベースでマップ {0} の制御ストリングが見つかりませんでした	エラー	
BCGEDIUT0402	マップ制御ストリングが無効です	マップ {0} の制御ストリングが無効であるか、または別のバージョン用にコンパイルされました	エラー	
BCGEDIUT0403	グローバル変数が見つかりません	グローバル変数 {0} が見つかりませんでした。マップ制御ストリング {1} をロードできませんでした	エラー	
BCGEDIUT0404	グローバル変数に無効な初期値があります	グローバル変数 {0} の初期値が無効です。マップ制御ストリング {1} をロードできませんでした	エラー	
BCGEDIUT0405	マップ制御ストリングの読み取り時に予期しない例外が発生しました	データベースからのマップ制御ストリングの読み取り時に予期しない例外が発生しました。マップ名: {0}、例外テキスト: {1}	エラー	
BCGEDIUT0406	グローバル変数の読み取り時に予期しない例外が発生しました	データベースからのグローバル変数の読み取り時に予期しない例外が発生しました。変数名: {0}、マップ名: {1}、例外テキスト: {2}	エラー	
BCGEDIUT0407	マップ制御ストリングの読み取り時にデータベース・エラーが発生しました	データベース・エラーのため、マップ {0} の制御ストリングをロードできませんでした	エラー	
BCGEDIUT0501	変換用の入力文書が空です	変換用の入力文書が空です	エラー	
BCGEDIVA0001	必須データ・エレメントがありません	必須データ・エレメントがありません。エレメント名 = {0}、セグメント名 = {1}、セグメントの位置 = {2}、送信側取引先 ID/修飾子 = {3}/{4}、受信側取引先 ID/修飾子 = {5}/{6}、制御番号 = {7}	エラー	

表 42. EDI イベント・コードとメッセージ (続き)

EDI イベント・コード	イベント名	内部での記述	重大度	詳細な説明
BCGEDIVA0002	データ・エレメントが長すぎます	データ・エレメントが長すぎます。エレメント名 = {0}、セグメント名 = {1}、セグメントの位置 = {2}、送信側取引先 ID/修飾子 = {3}/{4}、受信側取引先 ID/修飾子 = {5}/{6}、制御番号 = {7}、エレメント・タイプ = {8}、値 = {9}、有効な長さ = {10}、定義済み最大長 = {11}	エラー	
BCGEDIVA0003	データ・エレメントが短すぎます	データ・エレメントが短すぎます。エレメント名 = {0}、セグメント名 = {1}、セグメントの位置 = {2}、送信側取引先 ID/修飾子 = {3}/{4}、受信側取引先 ID/修飾子 = {5}/{6}、制御番号 = {7}、エレメント・タイプ = {8}、値 = {9}、有効な長さ = {10}、定義済み最小長 = {11}	エラー	
BCGEDIVA0004	検証テーブル内でコード値が見つかりません	検証テーブルでコード値が見つかりません。エレメント名 = {0}、セグメント名 = {1}、セグメントの位置 = {2}、送信側取引先 ID/修飾子 = {3}/{4}、受信側取引先 ID/修飾子 = {5}/{6}、制御番号 = {7}、エレメント・タイプ = {8}、値 = {9}、検証テーブル = {10}	エラー	
BCGEDIVA0010	「ペア」(P) の状態に失敗しました	「ペア」(P) の状態に失敗しました。標準では項目 {0} をペアとして定義していますが、項目 {1} のみが存在しました。セグメント名 = {2}、セグメントの位置 = {3}、送信側取引先 ID/修飾子 = {4}/{5}、受信側取引先 ID/修飾子 = {6}/{7}、制御番号 = {8}	エラー	

表 42. EDI イベント・コードとメッセージ (続き)

EDI イベント・コード	イベント名	内部での記述	重大度	詳細な説明
BCGEDIVA0011	「必要」(R) の状態に失敗しました	「必要」(R) の状態に失敗しました。標準では項目 {0} を必要として定義していますが、すべてがありません。セグメント名 = {2}、セグメントの位置 = {3}、送信側取引先 ID/修飾子 = {4}/{5}、受信側取引先 ID/修飾子 = {6}/{7}、制御番号 = {8}	エラー	
BCGEDIVA0012	「排他的」(E) の状態に失敗しました	「排他的」(E) の状態に失敗しました。標準では項目 {0} を相互に排他的として定義していますが、{1} が存在しています。セグメント名 = {2}、セグメントの位置 = {3}、送信側取引先 ID/修飾子 = {4}/{5}、受信側取引先 ID/修飾子 = {6}/{7}、制御番号 = {8}	エラー	
BCGEDIVA0013	「条件付き」(C) の状態に失敗しました	「条件付き」(C) の状態に失敗しました。標準では項目 {0} を条件付きで必要として定義していますが、{1} のみが存在しています。最初の項目が存在している場合は、他のすべての項目が存在していなければなりません。セグメント名 = {2}、セグメントの位置 = {3}、送信側取引先 ID/修飾子 = {4}/{5}、受信側取引先 ID/修飾子 = {6}/{7}、制御番号 = {8}	エラー	

表 42. EDI イベント・コードとメッセージ (続き)

EDI イベント・コード	イベント名	内部での記述	重大度	詳細な説明
BCGEDIVA0014	「条件付きでリスト」(L) の状態に失敗しました	「条件付きでリスト」(L) の状態に失敗しました。標準では項目 {0} を条件付きペアとして定義していますが、{1} のみが存在しています。最初の項目が存在している場合は、他の項目のうち 1 つ以上が存在していなければなりません。セグメント名 = {2}、セグメントの位置 = {3}、送信側取引先 ID/修飾子 = {4}/{5}、受信側取引先 ID/修飾子 = {6}/{7}、制御番号 = {8}	エラー	
BCGEDIVA0015	必須の複合エレメントがありません	必須の複合エレメントがありません。エレメント名 = {0}、セグメント名 = {1}、セグメントの位置 = {2}、送信側取引先 ID/修飾子 = {3}/{4}、受信側取引先 ID/修飾子 = {5}/{6}、制御番号 = {7}	エラー	
BCGEDIVA0016	複合データ・エレメントの最大反復回数を超えました	複合エレメントの反復回数が標準で定義された回数を超えています。エレメント名 = {0}、セグメント名 = {1}、セグメントの位置 = {2}、送信側取引先 ID/修飾子 = {3}/{4}、受信側取引先 ID/修飾子 = {5}/{6}、制御番号 = {7}、反復回数 = {8}、定義済み最大反復回数 = {9}	エラー	
BCGEDIVA0025	交換またはグループでトランザクションまたはメッセージが重複しています	現在の交換または機能グループ内でトランザクション集合またはメッセージが重複しています。トランザクション集合またはメッセージ制御番号 = {0}、送信側取引先 ID/修飾子 = {1}/{2}、受信側取引先 ID/修飾子 = {3}/{4}、制御番号 = {5}	エラー	

表 42. EDI イベント・コードとメッセージ (続き)

EDI イベント・コード	イベント名	内部での記述	重大度	詳細な説明
BCGEDIVA0030	データ・エレメントで文字セットの検証に失敗しました	データ・エレメントで文字セットの検証に失敗しました。エレメント名 = {0}、セグメント名 = {1}、セグメントの位置 = {2}、送信側取引先 ID/修飾子 = {3}/{4}、受信側取引先 ID/修飾子 = {5}/{6}、制御番号 = {7}、エレメント・タイプ = {8}、値 = {9}、検証テーブル = {10}	エラー	
BCGEDIVA0031	数値エレメントが無効です	数値エレメントが無効です。エレメント名 = {0}、セグメント名 = {1}、セグメントの位置 = {2}、送信側取引先 ID/修飾子 = {3}/{4}、受信側取引先 ID/修飾子 = {5}/{6}、制御番号 = {7}、エレメント・タイプ = {8}、値 = {9}	エラー	
BCGEDIVA0032	実数数値エレメントが無効です	実数数値エレメントが無効です。エレメント名 = {0}、セグメント名 = {1}、セグメントの位置 = {2}、送信側取引先 ID/修飾子 = {3}/{4}、受信側取引先 ID/修飾子 = {5}/{6}、制御番号 = {7}、エレメント・タイプ = {8}、値 = {9}	エラー	
BCGEDIVA0033	日付エレメントが無効です	日付エレメントが無効です。エレメント名 = {0}、セグメント名 = {1}、セグメントの位置 = {2}、送信側取引先 ID/修飾子 = {3}/{4}、受信側取引先 ID/修飾子 = {5}/{6}、制御番号 = {7}、エレメント・タイプ = {8}、値 = {9}	エラー	
BCGEDIVA0034	時刻エレメントが無効です	時刻エレメントが無効です。エレメント名 = {0}、セグメント名 = {1}、セグメントの位置 = {2}、送信側取引先 ID/修飾子 = {3}/{4}、受信側取引先 ID/修飾子 = {5}/{6}、制御番号 = {7}、エレメント・タイプ = {8}、値 = {9}	エラー	

表 42. EDI イベント・コードとメッセージ (続き)

EDI イベント・コード	イベント名	内部での記述	重大度	詳細な説明
BCGEDIVA0035	データ・エレメントの最大反復回数を超えました	エレメントの反復回数が標準で定義された回数を超えています。エレメント名 = {0}、セグメント名 = {1}、セグメントの位置 = {2}、送信側取引先 ID/修飾子 = {3}/{4}、受信側取引先 ID/修飾子 = {5}/{6}、制御番号 = {7}、反復回数 = {8}、定義済み最大反復回数 = {9}	エラー	
BCGEDIVA0050	セグメント内のエレメントが多すぎるか、または予期しないエレメントがあります	セグメント内のエレメントが多すぎるか、または予期しないエレメントがあります。エレメント名 = {0}、セグメント名 = {1}、セグメントの位置 = {2}、送信側取引先 ID/修飾子 = {3}/{4}、受信側取引先 ID/修飾子 = {5}/{6}、制御番号 = {7}	エラー	
BCGEDIVA0051	セグメント ID を認識できません	セグメント ID を認識できません。セグメント名 = {0}、セグメントの位置 = {1}、送信側取引先 ID/修飾子 = {2}/{3}、受信側取引先 ID/修飾子 = {4}/{5}、制御番号 = {6}	エラー	
BCGEDIVA0052	必須セグメントがありません	必須セグメントがありません。セグメント名 = {0}、セグメントの位置 = {1}、送信側取引先 ID/修飾子 = {2}/{3}、受信側取引先 ID/修飾子 = {4}/{5}、制御番号 = {6}	エラー	
BCGEDIVA0054	ループの反復回数が標準で定義された回数を超えています	ループの反復回数が標準で定義された回数を超えています。ループ名 = {0}、セグメントの位置 = {1}、送信側取引先 ID/修飾子 = {2}/{3}、受信側取引先 ID/修飾子 = {4}/{5}、制御番号 = {6}、反復回数 = {7}、定義済み最大反復回数 = {8}	エラー	

表 42. EDI イベント・コードとメッセージ (続き)

EDI イベント・コード	イベント名	内部での記述	重大度	詳細な説明
BCGEDIVA0055	セグメントの反復回数が標準で定義された回数を超えています	セグメントの反復回数が標準で定義された回数を超えています。セグメント名 = {0}、セグメントの位置 = {1}、送信側取引先 ID/修飾子 = {2}/{3}、受信側取引先 ID/修飾子 = {4}/{5}、制御番号 = {6}、反復回数 = {7}、定義済み最大反復回数 = {8}	エラー	
BCGEDIVA0101	トランザクション集合またはメッセージ制御番号の組み合わせが不適切です	ヘッダーおよびトレーラーで、トランザクション集合またはメッセージ制御番号が一致しません。グループ・ヘッダー制御番号 = {0}、グループ・トレーラー制御番号 = {1}、送信側取引先 ID/修飾子 = {2}/{3}、受信側取引先 ID/修飾子 = {4}/{5}、制御番号 = {6}	エラー	
BCGEDIVA0102	トランザクション集合またはメッセージ・トレーラーがないか、または無効です	トランザクション集合またはメッセージ・トレーラーがないか、または無効です。制御番号 = {0}、送信側取引先 ID/修飾子 = {1}/{2}、受信側取引先 ID/修飾子 = {3}/{4}、制御番号 = {5}	エラー	
BCGEDIVA0103	トランザクション集合またはメッセージ・トレーラー・カウントが無効です	トランザクション集合またはメッセージ・トレーラーに無効なセグメント・カウントが含まれています。トランザクション集合またはメッセージ制御番号 = {0}、送信側取引先 ID/修飾子 = {1}/{2}、受信側取引先 ID/修飾子 = {3}/{4}、トレーラーからの値 = {5}、実際の受信数 = {6}	エラー	

表 42. EDI イベント・コードとメッセージ (続き)

EDI イベント・コード	イベント名	内部での記述	重大度	詳細な説明
BCGEDIVA0151	機能グループの制御番号の組み合わせが不適切です	ヘッダーおよびトレーラーで、機能グループ制御番号が一致しません。ヘッダー制御番号 = {0}、トレーラー制御番号 = {1}、送信側取引先 ID/修飾子 = {2}/{3}、受信側取引先 ID/修飾子 = {4}/{5}、制御番号 = {6}	エラー	
BCGEDIVA0152	機能グループのトレーラーがないか、または無効です	機能グループ・トレーラーがないか、または無効です。機能制御番号 = {0}、送信側取引先 ID/修飾子 = {1}/{2}、受信側取引先 ID/修飾子 = {3}/{4}、制御番号 = {5}	エラー	
BCGEDIVA0153	機能グループのトレーラー・カウントが無効です	機能グループ・トレーラーに無効なトランザクション集合またはメッセージ・カウントが含まれています。機能制御番号 = {0}、送信側取引先 ID/修飾子 = {1}/{2}、受信側取引先 ID/修飾子 = {3}/{4}、制御番号 = {5}、トレーラーからの値 = {6}、実際の受信数 = {7}	エラー	
BCGEDIVA0158	交換でグループが重複しています	現在の交換内で重複するグループが検出されました。グループ制御番号 = {0}、送信側取引先 ID/修飾子 = {1}/{2}、受信側取引先 ID/修飾子 = {3}/{4}、制御番号 = {5}	エラー	
BCGEDIVA0202	交換のトレーラーがないか、または無効です	交換トレーラーがないか、または無効です。交換ヘッダー制御番号 = {0}、送信側取引先 ID/修飾子 = {1}/{2}、受信側取引先 ID/修飾子 = {3}/{4}	エラー	

表 42. EDI イベント・コードとメッセージ (続き)

EDI イベント・コード	イベント名	内部での記述	重大度	詳細な説明
BCGEDIVA0203	交換の制御番号の組み合わせが不適切です	ヘッダーおよびトレーラーで、交換制御番号が一致しません。交換ヘッダー制御番号 = {0}、交換トレーラー制御番号 = {1}、送信側取引先 ID/修飾子 = {2}/{3}、受信側取引先 ID/修飾子 = {4}/{5}	エラー	
BCGEDIVA0205	交換のトレーラー・カウントが無効です	交換トレーラーに無効なグループまたはメッセージ・カウントが含まれています。交換ヘッダー制御番号 = {0}、送信側取引先 ID/修飾子 = {1}/{2}、受信側取引先 ID/修飾子 = {3}/{4}、トレーラーからの値 = {5}、実際の受信数 = {6}	エラー	
BCGEDIVA0211	交換が重複しています	重複する交換が検出されました。交換ヘッダー制御番号 = {0}、送信側取引先 ID/修飾子 = {1}/{2}、受信側取引先 ID/修飾子 = {3}/{4}	エラー	
BCGEDIVA0981	ユーザー指定の検証マップが見つかりません。	ユーザー指定の検証マップ {0} が見つかりません	エラー	
BCGEDIVA0982	サービス・セグメント検証マップが見つかりません。	サービス・セグメント検証マップ {0} が見つかりません	エラー	
BCGEDIVA0983	文書構文に対して、サービス・セグメント検証がサポートされていません。	文書構文に対して、サービス・セグメント検証がサポートされていません	エラー	
BCGEDIVA0991	必要なプロパティまたはコンテンツ・エレメントが見つかりません	必要なプロパティまたはコンテンツ・エレメント {0} が見つかりません	エラー	
BCGEDIVA0992	メッセージ・プロパティが見つかりません	メッセージ・プロパティが見つかりません	エラー	
BCGEDIVA0993	メタデータが見つかりません	メタデータが見つかりません。ディクショナリー = {0}、文書タイプ = {1}、構文 = {2}	エラー	
BCGEDIVA0994	トランザクション集合またはメッセージが空です	EDI トランザクション集合またはメッセージが空です	エラー	

表 42. EDI イベント・コードとメッセージ (続き)

EDI イベント・コード	イベント名	内部での記述	重大度	詳細な説明
BCGEDIVA0995	致命的パーサー・エラー	致命的パーサー・エラーを検出しました	エラー	
BCGEDIVA0997	フローの向きが不明です	不明のフローの向き {0} が指定されました	エラー	
BCGEDIVA0998	サポートされない構文タイプです	サポートされない構文タイプ {0} が指定されました	エラー	
BCGEDIVA0999	不明のオブジェクトを受信しました	タイプ {0} の不明のオブジェクトを受信しました	エラー	

付録 C. コンポーネント固有のシステム属性

WebSphere Application Server ND 環境変数としての属性の構成

WebSphere Partner Gateway コンソールの「システム管理」ページには、WebSphere Partner Gateway ランタイムの個別のサブコンポーネントのための構成属性があります。これらの属性は、サブコンポーネントのすべてのインスタンスに適用されます。属性について詳しくは、238 ページの『属性表』の表を参照してください。特定のインスタンスの属性の値を変更できます。例えば、コンポーネント・インスタンスが実行されているコンピューターの CPU 能力が高い場合は、スレッドの数を増やすことができます。特定のコンポーネント・インスタンスの属性の値を、WebSphere Partner Gateway コンソールで構成された値から変更するには、「システム管理」ページ上でデプロイメント・マネージャーを使用して、コンポーネントが実行されているノードおよびサーバーの環境変数を作成します。環境変数の値は、WebSphere Partner Gateway コンソールで構成された値よりも優先されます。WebSphere 環境変数について詳しくは、WebSphere Application Server の資料を参照してください。

WebSphere Application Server ND 環境変数を作成するには、次のステップを実行します。

1. WebSphere Application Server 管理コンソールを開きます。
2. 「環境」 > 「WebSphere 変数」にナビゲートします。
3. メニューから、変数を追加する対象となるノードおよびサーバーを選択します。
4. 「新規」をクリックします。
5. WebSphere Partner Gateway の「システム管理」ページに表示されているプロパティの名前を入力し、その値を設定します。
6. 「OK」をクリックします。
7. マスター構成を保存します。

RosettaNet 属性値の編集

PIP に対する XPath 照会が提供されていない場合は、表 43 にリストされているデフォルトの XPath 照会を使用して、対応する値が抽出されます。

表 43. デフォルトの XPath 照会

デフォルトの XPath 照会	抽出される値
<code>thisDocumentIdentifier[0]/ProprietaryDocumentIdentifier[0]</code>	文書 ID
<code>thisMessageIdentifier[0]/ProprietaryMessageIdentifier[0]</code>	
<code>thisDocumentGenerationDateTime[0]/DateTimeStamp[0]</code>	文書作成日およびタイム・スタンプ
<code>theMessageDatetime[0]/DateTimeStamp[0]</code>	
<code>thisMessageDateTime[0]/DateTimeStamp[0]</code>	
<code>GlobalDocumentFunctionCode[0]</code>	グローバル機能コード

表 43. デフォルトの XPath 照会 (続き)

デフォルトの XPath 照会	抽出される値
requestingDocumentIdentifier[0]/ProprietaryDocumentIdentifier[0] WarrantyClaimConfirmData[0]/DocumentReference[0]/ ProprietaryDocumentIdentifier[0] receivedDocumentIdentifier[0]/ProprietaryDocumentIdentifier[0] ReturnProductResource[0]/DocumentReference[0]/ ProprietaryDocumentIdentifier[0] theOffendingDocumentIdentifier[0]/ ProprietaryDocumentIdentifier[0]	要求文書 ID
fromRole[0]/PartnerRoleDescription[0]/PartnerDescription[0]/ GlobalPartnerClassificationCode[0]	送信側パートナー区分コード
fromRole[0]/PartnerRoleDescription[0]/PartnerDescription[0]/ BusinessDescription[0]/GlobalSupplyChainCode[0]	送信側パートナー・グローバル・サプライ・チェーン・コード
fromRole[0]/PartnerRoleDescription[0]/PartnerDescription[0]/ BusinessDescription[0]/GlobalBusinessIdentifier[0] fromRole[0]/PartnerRoleDescription[0]/PartnerDescription[0]/ BusinessDescription[0]/BusinessIdentification[0]/ GlobalBusinessIdentifier[0]	送信側パートナー・ビジネス ID
fromRole[0]/PartnerRoleDescription[0]/ GlobalPartnerRoleClassificationCode[0]	送信側パートナー役割
toRole[0]/PartnerRoleDescription[0]/ GlobalPartnerRoleClassificationCode[0]	受信側パートナー役割
toRole[0]/PartnerRoleDescription[0]/PartnerDescription[0]/ BusinessDescription[0]/GlobalBusinessIdentifier[0]	受信側パートナー・ビジネス ID
toRole[0]/PartnerRoleDescription[0]/PartnerDescription[0]/ GlobalPartnerClassificationCode[0]	受信側パートナー区分コード
toRole[0]/PartnerRoleDescription[0]/PartnerDescription[0]/ BusinessDescription[0]/GlobalSupplyChainCode[0]	受信側パートナー・グローバル・サプライ・チェーン・コード

XSD ベースの PIP パッケージには、対応する XPath 照会が含まれます。これらの値を表示または編集するには、「ハブ管理」 > 「ハブ構成」 > 「文書定義」 > 「文書定義の管理」を選択します。このページ上で、PIP のアクション・ノード (例えば、「アクション: 購買注文更新通知アクション (Action: Purchase Order Update Notification Action)」) に達するまで、「パッケージ: RNIF (Package: RNIF)」ノードを展開します。このページ上で、XPath 照会を表示、作成、および編集できます。

XPath 照会を編集するには、PIP に関連付けられた「アクション」列に表示されている「RosettaNet 値の編集 (Edit RosettaNet values)」アイコンをクリックします。これにより、「RosettaNet 属性」ウィンドウが表示されるので、ここで XPath 照会を表示、追加、および編集できます。

FTP 管理の編集

FTP 管理には以下のプロパティがあります。

- リスナー・プロパティ
- 接続プロパティ
- IP 制御因子

- イベント・プロパティ
- データベース・プロパティ
- その他のプロパティ

リスナー・プロパティ:

クライアント接続やコマンドの実行などを聴取する FTP サーバーのコンポーネント。このリスナーのプロパティは、デフォルトのリスナー・プロパティとクライアント認証です。

表 44. デフォルトのリスナー・プロパティ

プロパティ名	説明
<code>bcg.ftp.config.listeners.default.class</code>	実際のリスナー実装環境。
<code>bcg.ftp.config.listeners.default.address</code>	FTP サーバーを実行するホストの IP アドレスまたはホスト名。
<code>bcg.ftp.config.listeners.default.port</code>	FTP サーバーのポート。これはデフォルト・リスナー用です。
<code>bcg.ftp.config.listeners.default.implicit-ssl</code>	常に SSL が必要な場合。
<code>bcg.ftp.config.listeners.default.ssl.class</code>	SSL を扱うクラス。
<code>bcg.ftp.config.listeners.default.ssl.ssl-protocol</code>	デフォルトの SSL プロトコル。許可される値は、TLSv1、SSLv3、および SSL_TLS です。
<code>bcg.config.listeners.default.ssl.client-authentication</code>	クライアント認証が必要な場合。
<code>bcg.ftp.config.listeners.default.data-connection.class</code>	データ接続を扱うクラス。
<code>bcg.ftp.config.listeners.default.data-connection.idle-time</code>	接続アイドル時間 (秒)
<code>bcg.ftp.config.listeners.default.data-connection.active.enable</code>	このリスナーに対してアクティブ接続が有効な場合。
<code>bcg.ftp.config.listeners.default.data-connection.active.local-address</code>	アクティブ接続での聴取先ローカル・アドレス。
<code>bcg.config.listeners.default.data-connection.active.local-port</code>	アクティブ接続に対する聴取先ローカル・ポート。
<code>bcg.ftp.config.listeners.default.data-connection.passive.address</code>	FTP の受動アドレス。これは、FTP サーバーが稼働する IP アドレスと同じです。
<code>bcg.ftp.config.listeners.default.data-connection.passive.ports</code>	受動ポート。
<code>bcg.ftp.config.listeners.default.data-connection.ssl.class</code>	SSL に使用されるクラス。

表 45. クライアント認証

プロパティ名	説明
<code>bcg.ftp.config.listeners.clientauth.class</code>	実際のリスナー実装環境。
<code>bcg.ftp.config.listeners.clientauth.address</code>	FTP サーバーのポートを実行するホストの IP アドレスまたはホスト名。

表 45. クライアント認証 (続き)

プロパティ名	説明
bcg.ftp.config.listeners.clientauth.port	FTP サーバーのポート。これはデフォルト・リスナー用です。
bcg.ftp.config.listeners.clientauth.implicit-ssl	常に SSL が必要な場合。
bcg.ftp.config.listeners.clientauth.ssl.class	SSL を扱うクラス。
bcg.ftp.config.listeners.clientauth.ssl.ssl-protocol	デフォルトの SSL プロトコル。許可される値は、TLSv1、SSLv3、および SSL_TLS です。
bcg.config.listeners.clientauth.ssl.client-authentication	クライアント認証が必要な場合。
bcg.ftp.config.listeners.clientauth.data-connection.class	データ接続を扱うクラス。
bcg.ftp.config.listeners.clientauth.data-connection.idle-time	接続アイドル時間 (秒)
bcg.ftp.config.listeners.clientauth.data-connection.active.enable	このリスナーに対してアクティブ接続が有効な場合。
bcg.ftp.config.listeners.clientauth.data-connection.active.local-address	アクティブ接続での聴取先ローカル・アドレス。
bcg.config.listeners.clientauth.data-connection.active.local-port	アクティブ接続に対する聴取先ローカル・ポート。
bcg.ftp.config.listeners.clientauth.data-connection.passive.address	PASV アドレス。
bcg.ftp.config.listeners.clientauth.data-connection.passive.ports	受動ポート。
bcg.ftp.config.listeners.clientauth.data-connection.ssl.class	SSL に使用されるクラス。

接続プロパティ

すべての接続プロパティは編集可能です。

表 46. 接続プロパティ

プロパティ名	説明
bcg.ftp.config.connection-manager.max-connection	許可される接続の最大数。
bcg.ftp.config.connection-manager.max-login	許可されるログインの最大数。
bcg.ftp.config.connection-manager.default-idle-time	接続の確立後に切断するまでのデフォルト・アイドル時間 (秒)。
bcg.ftp.config.connection-manager.timeout-poll-interval	アイドル接続を収集するポーリング・スレッドを実行するタイムアウト・インターバル。

IP 制御因子プロパティ

このプロパティには、制限付きアクセス権を持つ IP アドレスのリストが含まれています。

表 47. IP 制御因子プロパティ

プロパティ名	説明
IP Pattern	IP アドレス・パターン。
Permission	この IP アドレスに与えられたアクセス権。

イベント・プロパティ

表 48. イベント・プロパティ

プロパティ名	説明
bcg.config.ftpserver.FTPSerializeFileInterval	WebSphere Partner Gateway 統合 FTP サーバーのインストール場所の下にあり、イベントが持続する場所であるフォルダーの名前。
bcg.config.ftpserver.eventPersistThreads	データベースの更新を行うスレッドのプール。
bcg.config.ftpserver.FTPEventThreshold	データベースまたはファイル・システムで持続する前に集計が可能な FTP イベントの最大数。
bcg.config.ftpserver.FTPEventStoreInterval	FTP イベントがデータベースまたはファイル・システムで持続するまでのインターバル。
bcg.config.ftpserver.FTPEventLoggingLevel	この値には、イベント・レベル (デバッグ/通知、警告、エラー、および重大) に対応して、0、1、2、または 3 が入ります。このプロパティのデフォルト値は 2 であるため、デフォルトではすべてのエラー・イベントと重大イベントがログに記録されます。これらの値は、ログに記録される FTP イベントのレベルを判別するために使用されます。

データベース・プロパティ

表 49. データベース・プロパティ

プロパティ名	説明
Hostname	データベースがインストールされているホスト。
User / Password	データベースに接続するためのユーザー名とパスワード。
Port	データベースが稼働しているポート。

その他のプロパティ

表 50. その他のプロパティ

プロパティ名	説明
bcg.ftp.config.rootdirectory	これは FTP のルート・ディレクトリーです。ユーザーが作成され、ディレクトリーが割り当てられたときはいつでも、このルート内にユーザー・ディレクトリーが作成されます。

属性表

- 1 つ以上のコンポーネントが共用する属性 — 239 ページの表 51
- EDI 文書の処理に使用する属性 — 242 ページの表 52
- コンソール・コンポーネントの構成に使用する属性 — 243 ページの表 53
- コンソール・コンポーネントの JMS の構成に使用する属性 — 245 ページの表 54
- RosettaNet シミュレーターの構成に使用する属性 — 245 ページの表 55
- アラート・エンジンの構成に使用する属性 — 246 ページの表 56
- AS 状態エンジンの構成に使用する属性 — 247 ページの表 57
- ビジネス・プロセス・エンジン (BPE) の構成に使用する属性 — 248 ページの表 58
- シグナルの処理の構成に使用する属性 — 250 ページの表 59
- BPE および文書取得エンジン (DAE) による同期処理の構成に使用する属性 — 250 ページの表 60
- デリバリー・マネージャーの構成に使用する属性 — 250 ページの表 61
- 文書マネージャー・コンポーネントの JMS の構成に使用する属性 — 251 ページの表 62
- 文書マネージャー・パッケージ化プロセスの構成に使用する属性 — 253 ページの表 63
- 文書マネージャーによる RosettaNet 処理の構成に使用する属性 — 254 ページの表 64
- 文書マネージャー内のセキュリティーの構成に使用する属性 — 255 ページの表 65
- レシーバー・コンポーネントの JMS の構成に使用する属性 — 256 ページの表 66
- レシーバー・コンポーネントによる同期応答処理の構成に使用する属性 — 257 ページの表 67
- レシーバー・コンポーネントが使用するディレクトリー名の構成に使用する属性 — 257 ページの表 68
- レシーバー・コンポーネントの各種特性の構成に使用する属性 — 257 ページの表 69
- 文書マネージャーの要約エンジン・サブコンポーネントの構成に使用する属性 — 257 ページの表 70
- 文書マネージャーのスポンサー・エンジン・サブコンポーネントの構成に使用する属性 — 258 ページの表 71

- 文書マネージャーのアーカイバー・サブコンポーネントの構成に使用する属性 — 258 ページの表 72
- ebMS 文書の処理の構成に使用する属性 — 258 ページの表 73
- 文書マネージャーの高信頼性メッセージング・サブコンポーネントの構成に使用する属性 — 259 ページの表 74
- 文書マネージャーのイベント・エンジン・サブコンポーネントの構成に使用する属性 — 259 ページの表 75
- アーカイブの構成とプロセスのページに使用する属性 260 ページの表 77

表 51. 1 つ以上のコンポーネントが共用する属性

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
bcg.ldap.containerauth	False	ブール値 True または False	ユーザーを認証するために、WebSphere Partner Gateway ローカル・データベースを使用するか、または JAAS を使用してエンタープライズ・ユーザー・レジストリーにアクセスするかを示すブール値。
bcg.ldap.jaaslogin	WSLogin	ログイン ID を含むストリング	JAAS システムまたはアプリケーションのログイン構成の名前を指定します。
bcg.receiver.persistpath	<Hub install root>/common/router_in/	ファイル・システム・パス	レシーバーは、DAE が取得するインバウンド文書をここに格納します。
bcg.receiver.sync.persistpath	<Hub install root>/common/sync_in	ファイル・システム・パス	レシーバーは、DAE が取得する同期文書を格納します。
bcg.receiver.signal.persistpath	<Hub install root>/common/signal_in	ファイル・システム・パス	レシーバーは、RosettaNet シグナルをここに格納します。
bcg.vms_inbound_directory.main	<Hub install root>/common/router_in	ファイル・システム・パス	メイン・ルーターのインバウンド・ディレクトリー。
bcg.bpe_temp_directory.main=	<Hub install root>/common/data	ファイル・システム・パス	メイン・ルーターのデータ・ディレクトリー。
bcg.vms_inbound_directory.signal	<Hub install root>/common/signal_in	ファイル・システム・パス	シグナル・ルーターのインバウンド・ディレクトリー。
bcg.bpe_temp_directory.signal	<Hub install root>/common/data	ファイル・システム・パス	シグナル・ルーターのデータ・ディレクトリー。
bcg.vms_inbound_directory.synchronous	<Hub install root>/common/sync_in	ファイル・システム・パス	同期ルーターのインバウンド・ディレクトリー。

表 51. 1 つ以上のコンポーネントが共用する属性 (続き)

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
bcg.bpe_temp_directory.synchronous	<Hub install root>/common/data	ファイル・システム・パス	同期ルーターのデータ・ディレクトリー。
bcg.scheduler_initial_pool_size	10	正整数	スケジューラーのマネージャー・プロパティー。
bcg.scheduler_max_pool_size	50	正整数	スケジューラーのマネージャー・プロパティー。
bcg.global.common.introduce.document.transport	JMS	「FileSystem」または「JMS」のいずれかを含むストリング	レシーバーから文書マネージャーへ文書を内部的に移動するための文書ルーティング・トランスポートを決定します。
bcg.global.common.introduce.document.transport.unavailable.timeout	60000	正整数	レシーバーと文書マネージャーの間の内部ルーティングに JMS トランスポートを使用する場合、この値は、トランスポートの使用時にエラーが発生したかどうかを判別するタイムアウト値です。
bcg.global.common.deletetempfiles	Yes	Yes または No	bcg.global.common.deletetempfiles プロパティー値が Yes に設定されている場合、WebSphere Partner Gateway によって作成された一時ファイルは削除されます。値が No に設定されている場合、一時ファイルは削除されません。
bcg.global.common.deletetempfiles	Yes	Yes または No	bcg.global.common.deletetempfiles プロパティー値が Yes に設定されている場合、WebSphere Partner Gateway によって作成された一時ファイルは削除されます。値が No に設定されている場合、一時ファイルは削除されません。
bcg.messagestore.threshold	100000	バイト単位のファイル・サイズ	bcg.messagestore.threshold 属性の値は、コンテンツ・ファイル・サイズのしきい値をバイト単位で示します。この値を超えるとメッセージ・ストア操作は行われません。
bcg.event_log_exclude	デフォルト値なし	ストリング	処理されないイベント・コードをコンマで区切ってリストします。
bcg.CRLDir	<Hub install root>/common/security/crl/	ディレクトリー・パスを含むストリング	証明書取り消しリスト・ファイルを格納するディレクトリーへのパス。

表 51. 1 つ以上のコンポーネントが共用する属性 (続き)

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
bcg.checkRevocationStatus	TRUE	ストリング・ブール値 TRUE または FALSE	値が TRUE の場合、署名前または署名の検証前に証明書取り消しリストがチェックされます。
bcg.http.SSLDebug	FALSE	ストリング・ブール値 TRUE または FALSE	この属性の値が TRUE の場合、SSL デバッグ・ログが生成されます。デバッグ情報は、 <code><Hub install root >/wasND/Profiles/bcgprofile/logs/<profile name> ディレクトリ内の SystemOut.log ファイルに格納されます。</code>
bcg.rosettanet.encrypt.CertDbRefreshInterval	60000	整数	CRL および VTP 証明書は、この間隔 (ミリ秒) ごとに定期的に再ロードされます。 属性の名前には rosettanet というストリングが含まれていますが、この属性はすべてのプロトコルに適用されます。
bcg.certs.vtp.CertificateDir	<code><Hub install root>/common/security/vtp</code>	ファイル・ディレクトリ・パスを含むストリング	VTP 署名の検証および暗号化で使用する証明書を格納するディレクトリ。この値は、一般コンソール属性設定で設定される bcg.console.certs.vtp.CertificateDir の値と一致する必要があります。
bcg.build_complete_certpath	true	ストリング・ブール値 true または false	true の値は、証明書のチェーンを使用する場合に、ルート証明書までの完全な証明書パスが作成されることを暗黙指定します。これにより、チェーン内のすべての証明書が検証されます。false の値は、先頭の証明書のみが検証されることを意味します。

表 52. EDI 文書の処理に使用する属性

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
traceLevel.All	0	0 から 2 までの整数	<p>この特定の属性 (All) は、すべてのトレースに適用されます。より限定的なトレース設定が必要な場合は、対象となる機能に対して個別のトレースを設定します。</p> <p>0 は、該当する機能に関連するログを書き込まないことを意味します。</p> <p>1 は、エラー・ログのみをトレース・ファイルに書き込むことを意味します。</p> <p>2 は、すべてのログ (エラーおよびデバッグ) をトレース・ファイルに書き込むことを意味します。</p> <p>例えば、traceLevel.Transformation = 1 は、EDI 変換中に生成されたエラーのみをトレース・ログに書き込むことを意味します。</p> <p>トレース・ログは、<Hub install root>/wasND/Profiles/bcgprofile/logs/bcgdocmgr/ に格納されます。トレース・ファイルのデフォルト名は bcg_router.log です。</p>
traceLevel.Transformation	0	0 から 2 までの整数	traceLevel.All の説明を参照してください。
traceLevel.Validation	0	0 から 2 までの整数	traceLevel.All の説明を参照してください。
traceLevel.Enveloper	0	0 から 2 までの整数	traceLevel.All の説明を参照してください。
traceLevel.Deenveloper	0	0 から 2 までの整数	traceLevel.All の説明を参照してください。
traceLevel.EDI-Parser	0	0 から 2 までの整数	traceLevel.All の説明を参照してください。
traceLevel.XML-Parser	0	0 から 2 までの整数	traceLevel.All の説明を参照してください。
traceLevel.ROD-Parser	0	0 から 2 までの整数	traceLevel.All の説明を参照してください。
traceLevel.EDI-Serializer	0	0 から 2 までの整数	traceLevel.All の説明を参照してください。
traceLevel.XML-Serializer	0	0 から 2 までの整数	traceLevel.All の説明を参照してください。

表 52. EDI 文書の処理に使用する属性 (続き)

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
traceLevel.ROD-Serializer	0	0 から 2 までの整数	traceLevel.All の説明を参照してください。
traceLevel.EDI-Splitter	0	0 から 2 までの整数	traceLevel.All の説明を参照してください。
traceLevel.XML-Splitter	0	0 から 2 までの整数	traceLevel.All の説明を参照してください。
traceLevel.ROD-Splitter	0	0 から 2 までの整数	traceLevel.All の説明を参照してください。
traceLevel.ROD-Scanner	0	0 から 2 までの整数	traceLevel.All の説明を参照してください。
traceLevel.FTP-Scripting	0	0 から 2 までの整数	traceLevel.All の説明を参照してください。
traceLevel.IBMVanAckProcessor	0	0 から 2 までの整数	traceLevel.All の説明を参照してください。
traceLevel.EDIackProcessor	0	0 から 2 までの整数	traceLevel.All の説明を参照してください。
traceLevel.Utility	0	0 から 2 までの整数	traceLevel.All の説明を参照してください。
transcript.file.option	N	Y または N	オプション Y を選択した場合は、現行作業ディレクトリー内の「transcripts」フォルダーの下に転写ファイルが生成されます。
database.encoding	UTF-16	ファイル・エンコード	構成データベース内で使用されるエンコード。

表 53. コンソール・コンポーネントの構成に使用する属性

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
bcg.console.outbound.gatewayDirectory	<Hub install root>/common/gateways	ファイル・システム・パス	共通ファイル・システム内で、宛先(ゲートウェイ)を管理するために使用するサブディレクトリーがあるルート・ディレクトリー。
bcg.console.db.debugLevel	0	ブール値 0 または 1	0 と 1 を使用してデータベース・デバッグ・トレースのオフ (0) とオン (1) を切り替えるバイナリー設定。
bcg.console.appserver.mgmt.pool.maxsize	20	整数	IBM のみが使用する内部設定。
bcg.console.EAIDocDir	Documents	有効なディレクトリー名	ファイル・システム・レシーバー・インスタンス用に指定したルート・ディレクトリーの下に作成されるサブディレクトリーの名前。

表 53. コンソール・コンポーネントの構成に使用する属性 (続き)

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
bcg.console.specialChars	!#;\\& /?.,	文字リスト	<p>コンソールを使用して構成されるフィールドの一部で使用できない文字のセット。これらの値は、コンソール上で入力されるパートナー・ログイン・データおよびレシーバーと宛先 (ゲートウェイ) のデータの検証に使用されます。</p> <p>注: 国際化対応のため、これらの値は OS の言語やディレクトリー名で指定される文字に応じて変更できません。</p>
bcg.console.specialCharsDir	!#;& ?,.	文字リスト	<p>コンソール上で入力されるディレクトリー名で使用できない文字のセット。</p> <p>注: 国際化対応のため、これらの値は OS の言語やディレクトリー名で指定される文字に応じて変更できません。</p>
bcg.console.file.encodings	us-asciilasciil646l iso_646.irv:1983l ansi_x3.4-1968l iso646-usldefaultlasciil7l utf-8lutf8l unicode-1-1-utf-8lutf-16lutf16lunicodelsjisl ¥u30B7¥u30D5¥u30C8¥u7B26¥u53F7¥u5316¥u8868¥u73FElpcklgb18030lbig5l windows-1255l windows-1256l ISO8859-8lIBM856l ISO8869-6lIBM1046	<p>クラス sun.io.CharacterEncoding によりサポートされている IANA ファイル・エンコード名のリスト。</p> <p>名前は縦線文字で区切られています。</p>	<p>文書ビューアーにより、IANA エンコードに対応する Java 別名のリストが生成および表示されます。ユーザーは、ファイルの処理に使用するファイル・エンコードを指定できます。</p> <p>1 つの Java 別名は複数の IANA 名に適用できます。デフォルト設定では、最もよく使用される多数のエンコードに IANA 値が設定されています。</p>
bcg.console.help.host	localhost	ホスト名または IP アドレス	コンソールが使用するヘルプ・システム・サーバーのホスト名または IP アドレス。
bcg.console.help.port	58080	整数ポート番号	ヘルプを利用するために使用するヘルプ・システム・サーバーのポート。
bcg.console.version	Version 6.1.0.0.308	ストリング値	使用中のコンソールのバージョンを示す文字ストリング。

表 54. コンソール・コンポーネントの JMS の構成に使用する属性

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
bcg.jms.queue.factory	jms/bcg/cf/CONCF	JNDI 名	コンポーネント間の通信に影響する内部設定。この設定は IBM のみが使用します。
bcg.jms.topic.factory	jms/bcg/cf/CONCF	JNDI 名	コンポーネント間の通信に影響する内部設定。この設定は IBM のみが使用します。
bcg.jms.jndi_factory	com.ibm.websphere.naming.WsnInitialContextFactory	クラス名	コンポーネント間の通信に影響する内部設定。この設定は IBM のみが使用します。
bcg.jms.context_url	corbaloc:iiop:localhost:58809	URL	コンポーネント間の通信に影響する内部設定。この設定は IBM のみが使用します。
bcg.jms.topic.name	jms/bcg/topic/reloadCacheT	JNDI 名	コンポーネント間の通信に影響する内部設定。この設定は IBM のみが使用します。
bcg.jms.retry_connect_interval	300000	整数	コンポーネント間の通信に影響する内部設定。この設定は IBM のみが使用します。
bcg.console.jmsPosterInstance	com.ibm.bcg.shared.event.MQSeriesPoster	クラス名	コンポーネント間の通信に影響する内部設定。この設定は IBM のみが使用します。
bcg.jms.reloadCache.name	デフォルト値なし	JNDI 名	コンポーネント間の通信に影響する内部設定。この設定は IBM のみが使用します。
bcg.oaq_log_q	jms/bcg/queue/datalogQ	JNDI 名	コンポーネント間の通信に影響する内部設定。この設定は IBM のみが使用します。

表 55. RosettaNet シミュレーターの構成に使用する属性

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
bcg.console.certs.vtp.CertificateDir	<Hub install root>/common/security/vtp	ローカル・ファイル・システム・パス	RN シミュレーターの .p8 および .der ファイルを保管するディレクトリーへの絶対パス。このパスが正しくないか、または証明書ファイルおよび秘密鍵ファイルの名前が正しくない場合は、コンソールの SystemErr.log にエラーが記録されます。このエラーはハブの運用に影響を与えないので、警告として処理できます。この属性の値は、文書マネージャーのセキュリティ設定で設定される属性 bcg.certs.vtp.CertificateDir の設定と一致する必要があります。

表 55. RosettaNet シミュレーターの構成に使用する属性 (続き)

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
bcg.console.certs.vtp.Certificate	デフォルト値なし	ファイル名	シミュレーターが使用する公開鍵を格納する証明書ファイル (DER、バイナリー・フォーマット) の名前。名前にはファイル拡張子を含める必要があります。
bcg.console.certs.vtp.PrivateKey	デフォルト値なし	ファイル名	シミュレーターが使用する秘密鍵ファイル (PKCS8、バイナリー・フォーマット) の名前。名前にはファイル拡張子を含める必要があります。
bcg.console.certs.vtp.Passwd	デフォルト値なし	ファイル名	PKCS8 ファイル内に保管された鍵にアクセスするために使用するパスワード。
bcg.console.certs.vtp.VerifySig	FALSE	TRUEIFALSE	シミュレーターを使用するときに署名の検証を実行するかどうかを示すブール値。
bcg.console.vtp.RouterIn	<Hub install root>/common/router_in	ファイル・システム・パス	共通ファイル・システム内で、文書マネージャーに文書を渡すために使用するディレクトリー。

表 56. アラート・エンジンの構成に使用する属性

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
bcg.alertQReceiver.maxRetries	100	整数	アラート・レシーバーによる再試行の最大数。
bcg.alertQReceiver.retryInterval	60000	整数	それぞれの再試行の間隔 (ミリ秒)。
bcg.volumeAlertScheduler.allowanceForProcessingReceivedDocInMins	10	整数	ボリューム・アラート終了時刻の後に、ボリューム・アラートを評価する前に受信された文書を記録するための時間 (分)。この設定は、その間隔内で受信されたすべての文書を確実にカウントするために役立ちます。
bcg.alertNotifications.maxNotificationsInInterval	10	整数	不要な E メール通知を受信しないために、いくつかのプロパティーが使用されます。 maxNotificationIntervalInMins の時間間隔に、同じアラートが maxNotificationsInInterval より多く発生する場合、minNotificationQuietIntervalInMins の時間間隔内に同じタイプのアラートを受け取らなくなるまでアラートは保持され、heldAlertsBatchTimeInMins ごとにバッチ処理されます。

表 56. アラート・エンジンの構成に使用する属性 (続き)

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
bcg.alertNotifications. maxNotificationIntervalInMins	30	整数	maxNotificationsInInterval の説明を参照してください。
bcg.alertNotifications. minNotificationQuietIntervalInMins	30	整数	maxNotificationsInInterval の説明を参照してください。
bcg.alertNotifications. heldAlertsBatchTimeInMins	30	整数	maxNotificationsInInterval の説明を参照してください。
bcg.alertNotifications.mailHost	unknown	ワード unknown または IP アドレスまたはホスト名	アラート通知を送信するために使用する SMTP メール・ホストの IP またはホスト名。
bcg.alertNotifications.mailFrom	unknown@ unknown.com	E メール・アドレス	アラート通知の送信者として使用する E メール・アドレス。
bcg.alertNotifications.mailReplyTo	unknown@ unknown.com	E メール・アドレス	アラート通知の返信先アドレスとして使用する E メール・アドレス。
bcg.alertNotifications. mailEnvelopeFrom	unknown@ unknown.com	E メール・アドレス	誤った E メール・アドレスが検出された場合の返信に使用する E メール・アドレス。
bcg.alert.eventGenerator.schedule	13 1 CertificateExpiration	整数 (分) 整数 (時) アラート名	複数のレコードがある場合は、「 」文字で区切る必要があります。各レコードの項目は、(最初の整数) 分、(2 番目の整数) 時、および (string) アラート名から構成されます。これらの項目は、1 つ以上のスペースで区切る必要があります。
bcg.VolumeAlertScheduler.scheduleTime	10	整数	指定された秒数が経過するごとに、ボリューム・アラート・ジェネレーターがボリューム・アラートを生成します。
bcg.BatchAlertScheduler.scheduleTime	10	整数	指定された秒数が経過するごとに、バッチ・アラート・ジェネレーターがバッチ・アラートを生成します。
bcg.NotificationAlertScheduler.scheduleTime	10	整数	指定された秒数が経過するごとに、通知アラート・ジェネレーターが通知アラートを生成します。

表 57. AS 状態エンジンの構成に使用する属性

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
bcg.asstate.thread_count	1	整数	AS 状態エンジンが使用するスレッドの数。

表 57. AS 状態エンジンの構成に使用する属性 (続き)

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
bcg.asstate.batchSize	1	整数	バッチ・サイズは常に 1 に設定されます。この属性を変更しても、影響はありません。この属性は将来の使用のために予約されています。この設定は、状態エンジンがトリガーされたときに戻される行数であると解釈できます。
bcg.asstate.runinterval	60000	整数	AS 状態エンジンが要求を処理する頻度を決定する時間間隔 (ミリ秒)。

表 58. ビジネス・プロセス・エンジン (BPE) の構成に使用する属性

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
bcg.dae.main.maxLockAge	180000	整数	メイン・フォルダーの最大ロック保持時間 (ミリ秒)。
bcg.dae.main.maxfiles.perPass	5	整数	メイン・フォルダー・ポーリング間隔ごとに処理するファイルの最大数。
bcg.docmgr.channelCache.maxSize	20	整数	文書処理時に、文書のパートナー接続が検索されます。このパートナー接続の構成情報はランタイムにキャッシュされます。ある時点でキャッシュ可能なパートナー接続の最大数は、この属性によって決まります。最大数に達すると、古い情報が除去され、新しいパートナー接続情報が追加されます。
bcg.in_thread_count.main	2	整数	インバウンド・メッセージのメイン・ルーター処理のスレッドの数。
bcg.inbound_poll_interval.main	1000	整数	ディレクトリー・スキャンの間の時間 (ミリ秒)。
bcg.bpe_max_file_size	0	整数	最大ファイル・サイズ (バイト単位)。0 の値は、制限が適用されないことを意味します。
bcg.inbound_files_per_pass.main	5	整数	スキャンごとに取得されるファイルの最大数。
bcg.duplicate.DupField1	x-aux-system-msg-id	ストリング	メッセージの固有 ID の値を提供するメッセージ・ヘッダーの名前。この値を他のヘッダー値と組み合わせて、メッセージを一意的に識別することができます。

表 58. ビジネス・プロセス・エンジン (BPE) の構成に使用する属性 (続き)

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
bcg.duplicate.DupField2	なし	ストリング	メッセージを識別する固有の複合 ID を作成するために、他の DupField と組み合わせることができるメッセージ・ヘッダーの名前。
bcg.duplicate.DupField3	なし	ストリング	メッセージを識別する固有の複合 ID を作成するために、他の DupField と組み合わせることができるメッセージ・ヘッダーの名前。
bcg.duplicate.DupField4	なし	ストリング	メッセージを識別する固有の複合 ID を作成するために、他の DupField と組み合わせることができるメッセージ・ヘッダーの名前。
bcg.duplicate.DupField5	なし	ストリング	メッセージを識別する固有の複合 ID を作成するために、他の DupField と組み合わせることができるメッセージ・ヘッダーの名前。
bcg.duplicate.DupField6	なし	ストリング	メッセージを識別する固有の複合 ID を作成するために、他の DupField と組み合わせることができるメッセージ・ヘッダーの名前。
bcg.duplicate.DupField7	なし	ストリング	メッセージを識別する固有の複合 ID を作成するために、他の DupField と組み合わせることができるメッセージ・ヘッダーの名前。
bcg.duplicate.DupField8	なし	ストリング	メッセージを識別する固有の複合 ID を作成するために、他の DupField と組み合わせることができるメッセージ・ヘッダーの名前。
bcg.duplicate.DupField9	なし	ストリング	メッセージを識別する固有の複合 ID を作成するために、他の DupField と組み合わせることができるメッセージ・ヘッダーの名前。
bcg.duplicate.DupField10	なし	ストリング	メッセージを識別する固有の複合 ID を作成するために、他の DupField と組み合わせることができるメッセージ・ヘッダーの名前。

表 59. シグナルの処理の構成に使用する属性

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
bcg.dae.signal.maxLockAge	180000	整数	シグナル・フォルダーの最大ロック保持時間 (ミリ秒)。
bcg.dae.signal.maxfiles.perPass	5	整数	シグナル・フォルダー・ポーリング間隔ごとに処理するファイルの最大数。
bcg.inbound_poll_interval.signal	1000	整数	ディレクトリー・スキャンの間の時間 (ミリ秒)。
bcg.in_thread_count.signal	2	整数	シグナル・ルーターのインバウンド・スレッドの数。
bcg.inbound_files_per_pass.signal	5	整数	スキャンごとに取得されるファイルの最大数。

表 60. BPE および文書取得エンジン (DAE) による同期処理の構成に使用する属性

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
bcg.dae.synchronous.maxLockAge	180000	整数	同期フォルダーの最大ロック保持時間 (ミリ秒)。
bcg.dae.synchronous.maxfiles.perPass	5	整数	同期フォルダー・ポーリング間隔ごとに処理するファイルの最大数。
bcg.inbound_poll_interval.synchronous	1000	整数	ディレクトリー・スキャンの間の時間 (ミリ秒)。
bcg.in_thread_count.synchronous	2	整数	同期ルーターのインバウンド・スレッドの数。
bcg.inbound_files_per_pass.synchronous	5	整数	スキャンごとに取得されるファイルの最大数。

表 61. デリバリー・マネージャーの構成に使用する属性

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
bcg.delivery.gatewayDirectory	<Hub install root>/common/gateways	ストリング	宛先 (ゲートウェイ) を管理するために使用するファイルおよびサブディレクトリーがあるルート・ディレクトリー。
bcg.delivery.smtpHost	\$ROUTER.DM. SMTP_RELAY\$	IP/ホスト名	SMTP を使用して文書を送付するときに使用するホスト。
bcg.delivery.smtpHostPort	\$ROUTER.DM. SMTP_RELAY.PORT\$	整数	使用される SMTP メール・ホスト上のポート。
bcg.delivery.responseDir	<Hub install root>/common/sync_in	ディレクトリー・パスを含むストリング	同期応答ディレクトリーのロケーション。
bcg.delivery.msMaxFileLockLife	180000	整数	ファイルがロックされる最大時間 (ミリ秒)。
bcg.delivery.threadPoolMaxThreads	50	整数	デリバリー・マネージャーが使用するスレッド・プールの最大サイズ。

表 61. デリバリー・マネージャーの構成に使用する属性 (続き)

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
bcg.delivery.gatewayMaxThreads	20	整数	ゲートウェイ・スレッドの最大数。
bcg.delivery.gwTransportMaxRetries	3	整数	デリバリー・マネージャー・フレームワークによる再試行の数。これは、すべての宛先 (ゲートウェイ) に適用されるグローバル設定です。各宛先では、フレームワークによる再試行ごとに使用される独自の再試行数も構成されます。
bcg.delivery.gwTransportRetryInterval	3000	整数	デリバリー・マネージャー再試行の間隔 (ミリ秒)。
bcg.delivery.numberOfLoggers	10	整数	—
bcg.delivery.jmsTimeout	60000	整数	JMS トランスポートを使用して文書を送付する場合は、このタイムアウト (ミリ秒) を使用して、接続問題があるかどうかを判別します。
bcg.http.socketTimeout	120000	整数	HTTP ソケット・タイムアウト (ミリ秒)。
bcg.http.version	1.1	ストリング	デリバリー・マネージャーが使用する HTTP バージョン。
bcg.router.ipv6.address	デフォルト値なし	ストリング	文書マネージャーのインストール先のコンピューターが IPv6 を使用して構成されていて、IPv6 プロトコルに基づいたゲートウェイを使用して文書が送信される場合は、コンピューターの IPv6 アドレスをここに入力する必要があります。
bcg.delivery.loggerTimeOut	10000	整数	—

表 62. 文書マネージャー・コンポーネントの JMS の構成に使用する属性

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
bcg.jms.queue.factory	jms/bcg/cf/DOCMGRFC	JNDI 名	コンポーネント間の通信に影響する内部設定。この設定は IBM のみが使用します。
bcg.jms.topic.factory	jms/bcg/cf/DOCMGRFC	JNDI 名	コンポーネント間の通信に影響する内部設定。この設定は IBM のみが使用します。
bcg.jms.jndi_factory	com.ibm.websphere.naming.WsnInitialContextFactory	クラス名	コンポーネント間の通信に影響する内部設定。この設定は IBM のみが使用します。

表 62. 文書マネージャー・コンポーネントの JMS の構成に使用する属性 (続き)

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
bcg.jms.context_url	corbaloc:iiop: localhost:58809	URL	コンポーネント間の通信に影響する内部設定。この設定は IBM のみが使用します。ポート 58809 は、シンプル・モードのインストール済み環境でのデフォルト・ポートです。ご使用のインストール済み環境では異なることがあります。
bcg.oaq_bpe_in.main	jms/bcg/queue/ main_InboundQ	JNDI 名	コンポーネント間の通信に影響する内部設定。この設定は IBM のみが使用します。
bcg.oaq_bpe_out.main	jms/bcg/queue/ deliveryManagerQ	JNDI 名	コンポーネント間の通信に影響する内部設定。この設定は IBM のみが使用します。
bcg.oaq_bpe_in.signal	jms/bcg/queue/ signal_InboundQ	JNDI 名	コンポーネント間の通信に影響する内部設定。この設定は IBM のみが使用します。
bcg.oaq_bpe_out.signal	jms/bcg/queue/ deliveryManagerQ	JNDI 名	コンポーネント間の通信に影響する内部設定。この設定は IBM のみが使用します。
bcg.oaq_bpe_in.synchronous	jms/bcg/queue/ sync_InboundQ	JNDI 名	コンポーネント間の通信に影響する内部設定。この設定は IBM のみが使用します。
bcg.oaq_bpe_out.synchronous	jms/bcg/queue/ deliveryManagerQ	JNDI 名	コンポーネント間の通信に影響する内部設定。この設定は IBM のみが使用します。
bcg.delivery.queue	jms/bcg/queue/ deliveryManagerQ	JNDI 名	コンポーネント間の通信に影響する内部設定。この設定は IBM のみが使用します。
bcg.alertQueue.queue	jms/bcg/queue/alertQ	JNDI 名	コンポーネント間の通信に影響する内部設定。この設定は IBM のみが使用します。
bcg.eventAlertQReceiver.queue	jms/bcg/queue/alertEventQ	JNDI 名	コンポーネント間の通信に影響する内部設定。この設定は IBM のみが使用します。
bcg.syncdelivery.queue	jms/bcg/queue/ syncDeliveryManagerQ	JNDI 名	コンポーネント間の通信に影響する内部設定。この設定は IBM のみが使用します。
bcg.logReceiver.queue	jms/bcg/queue/datalogQ	JNDI 名	コンポーネント間の通信に影響する内部設定。この設定は IBM のみが使用します。
bcg.dberrors.queue	jms/bcg/queue/datalogErrorQ	JNDI 名	コンポーネント間の通信に影響する内部設定。この設定は IBM のみが使用します。

表 62. 文書マネージャー・コンポーネントの JMS の構成に使用する属性 (続き)

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
bcg.jms.retry_connect_interval	300000	整数	コンポーネント間の通信に影響する内部設定。この設定は IBM のみが使用します。
bcg.jms.connect_pool_elements	2	整数	コンポーネント間の通信に影響する内部設定。この設定は IBM のみが使用します。
bcg.jms.connect_max_pool_elements	100	整数	コンポーネント間の通信に影響する内部設定。この設定は IBM のみが使用します。

表 63. 文書マネージャー・パッケージ化プロセスの構成に使用する属性

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
bcg.pkg.sponsor.contenttypes	application/xml;text/xml;application/binary	ストリング	複数の MIME タイプをセミコロンで区切ったリスト。これらのコンテンツ・タイプのいずれかを持つ添付ファイルは、base 64 によってエンコードされません。
Wbipackaging_version	1	1.0 および 1.1	この設定は、バックエンド統合 XML パッケージ化トランスポート・エンベロープを作成するために使用されます。バージョン 1.0 はバージョン 4.2.2 FP1 以前用。バージョン 1.1 は 4.2.2 FP2 以降用。バージョン 1.1 には、接続に関連したコンテンツ ID が含まれています。
DBProcDebug	1	整数: 0 または 1	0 と 1 を使用してデータベース・デバッグのオフ (0) とオン (1) を切り替えるバイナリー設定。デバッグ・ログでは、プロシージャ名およびそれに渡されるパラメーターが表示されます。
GlobalStateEngInstanceId	Bcg	ストリング	AS インバウンド文書およびアウトバウンド文書のログは、GlobalStateEngInstanceId を使用して DB に記録されます。AS 状態エンジンは、GlobalStateEngInstanceId を使用して処理される DB 呼び出しを実行して最も古いヘッダー行の最新詳細行を取得し、MDN を生成します。このパラメーターは再試行にも使用されます。
bcg.ediint.reportingUA	WPG	ストリング	レポート UA は、MDN をレポートするユーザー・エージェントを示します。

表 63. 文書マネージャー・パッケージ化プロセスの構成に使用する属性 (続き)

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
bcg.ediint.retryWaitTmMS	5000	整数	AS アウトバウンド・メッセージ (非同期 MDN あり) で MDN が受信されない場合、AS エンジン は、このミリ秒数が経過した後で再試行します。
bcg.maxBatchSize	1000	整数	ゲートウェイが 1 つのバッチとして取得および処理するファイルの最大数。

表 64. 文書マネージャーによる RosettaNet 処理の構成に使用する属性

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
bcg.rosettanet.retryWaitTmMS	5000	整数	再試行間隔 (ミリ秒)。
bcg.rosettanet.strictBoundaryParse	FALSE	ストリング・ブール値 TRUE または FALSE	MIME Multipart (RosettaNet) メッセージの境界を厳密に解析するかどうかを示します。デフォルト値は TRUE です。
bcg.rosettanet.mimeBoundaryValidate	FALSE	ストリング・ブール値 TRUE または FALSE	この値が TRUE に設定されている場合は、MIME Multipart (RosettaNet) メッセージの構造検証が実行されます。デフォルト値は FALSE です。
bcg.rosettanet.globalUsageCode	Literal	「Literal」または任意のストリング値	この値が「Literal」である場合、x-aux-production HTTP ヘッダーは「Production」または「Test」というリテラルになります。 「Literal」でない場合 (例えば、ブランク値に設定した場合)、x-aux-production HTTP ヘッダーは True または False になります。 どの値も大/小文字を区別しません。
bcg.rosettanet.defaultUsageCdOnErr	1	ブール値として解釈されるストリング値 1 または 0	x-aux-production HTTP ヘッダーが「Production」、「Test」、「True」、または「False」のいずれでもなく、このプロパティが「1」に設定されている場合は、属性 bcg.rosettanet.defaultGlbUsageCd で設定された値をデフォルトにします。
bcg.rosettanet.defaultGlbUsageCd	Test	ストリング	デフォルト・グローバル使用コード。

表 64. 文書マネージャーによる RosettaNet 処理の構成に使用する属性 (続き)

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
bcg.rosettanet. useBuilderProcessInstanceId	1	ブール値として解釈される 文字列値 1 または 0	この値が 1 である場合は、ビルダーが x-aux-process-instance-id HTTP ヘッダーの ID を提供し、これをアウトバウンド要求のプロセス・インスタンス ID として使用します。
bcg.rosettanet. genProcessInstanceIdOnError	1	ブール値として解釈される 文字列値 1 または 0	ビルダー提供の process-instance-id が (なんらかの理由により) 誤っていて、この値が 1 である場合は、新規の process-instance-id を生成します。
bcg.rne.inbound_poll_interval	10000	整数	RosettaNet エンジンのポーリング間隔 (ミリ秒)。
bcg.rne.in_thread_count	2	整数	RosettaNet エンジンがインバウンド文書処理するために使用するスレッドの数。
bcg.rne.work_size	50	整数	ポーリング間隔ごとに処理される PIP メッセージの数。
bcg.0A1.fromContactName	\$ROUTER. CONTACT_NAMES\$	文字列	0A1 連絡先の名前。
bcg.0A1.fromEMailAddr	\$ROUTER. CONTACT. MAIL_FROM\$	文字列	0A1 連絡先の E メール。
bcg.0A1.fromPhoneNbr	\$ROUTER. CONTACT. PHONE_NO\$	文字列	0A1 連絡先の電話番号。
bcg.0A1.fromFaxNbr	\$ROUTER. CONTACT.FAX_NOS\$	文字列	0A1 連絡先の FAX 番号。
bcg.rnif.pip.twoaction.correlation	documentid	文字列	このプロパティの値は、2 アクション PIP の 1 アクションと 2 アクションの間の相関パラメータとして機能します。

表 65. 文書マネージャー内のセキュリティーの構成に使用する属性

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
bcg.rosettanet.signature. DigestAlgorithm	SHA1	SHA1 または MD5	Message Digest を生成するために使用するアルゴリズム。属性の名前には rosettanet という文字列が含まれていますが、この属性は RNIF と AS の両方で使用されます。ebMS では使用されません。PKCS7 を使用して文書に署名するすべてのフローに適用されます。ebMS では PKCS7 署名を使用しません。

表 65. 文書マネージャー内のセキュリティーの構成に使用する属性 (続き)

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
bcg.rosettanet.signature.RejectIfFailVal	TRUE	ストリング・ブール値 TRUE または FALSE	TRUE の値は、署名の検証に失敗した場合に文書が拒否されることを暗黙指定します。
bcg.rosettanet.signature.VerifySigner	TRUE	ストリング・ブール値 TRUE または FALSE	TRUE の値は、署名が検証された後で署名者が検証されることを意味します。FALSE は、署名者が検証されないことを意味します。
bcg.rosettanet.encrypt.Algorithm	3des	3des または des または aes または rc2-40	RosettaNet メッセージで使用する暗号化アルゴリズム。このプロパティはすべてのプロトコルに適用されます。

表 66. レシーバー・コンポーネントの JMS の構成に使用する属性

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
bcg.jms.queue.factory	jms/bcg/cf/RCVRCF	JNDI 名	コンポーネント間の通信に影響する内部設定。この設定は IBM のみが使用します。
bcg.jms.topic.factory	jms/bcg/cf/RCVRCF	JNDI 名	コンポーネント間の通信に影響する内部設定。この設定は IBM のみが使用します。
bcg.jms.jndi_factory	com.ibm.websphere.naming.WsnInitialContextFactory	クラス名	コンポーネント間の通信に影響する内部設定。この設定は IBM のみが使用します。
bcg.jms.context_url	corbaloc:iiop:localhost:58809	URL	コンポーネント間の通信に影響する内部設定。この設定は IBM のみが使用します。ポート 58809 は、シンプル・モードのインストール済み環境でのデフォルト・ポートです。ご使用のインストール済み環境では異なることがあります。
bcg.oaq_log_q	jms/bcg/queue/datalogQ	JNDI 名	コンポーネント間の通信に影響する内部設定。この設定は IBM のみが使用します。
bcg.jms.retry_connect_interval	300000	整数	コンポーネント間の通信に影響する内部設定。この設定は IBM のみが使用します。
bcg.jms.connect_pool_elements	2	整数	コンポーネント間の通信に影響する内部設定。この設定は IBM のみが使用します。
bcg.jms.connect_max_pool_elements	100	整数	コンポーネント間の通信に影響する内部設定。この設定は IBM のみが使用します。

表 67. レシーバー・コンポーネントによる同期応答処理の構成に使用する属性

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
bcg.receiver.sync.responseURL	/bcgsyncreceiver/ SyncResponse	URI	同期応答を送付するための内部レシーバー URI。
bcg.receiver.sync.responseURL.port	58081	整数	同期応答 URI で使用するポート番号。

表 68. レシーバー・コンポーネントが使用するディレクトリー名の構成に使用する属性

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
bcg.receiver.configpath	<Hub install root>/common/ receiver/config	ディレクトリー・パスを含むストリング	データベースが使用不可の場合に使用するレシーバー構成 XML ファイルのロケーション。
bcg.vms_receiver_reject_dir	<Hub install root>/common/ receiver/reject	ディレクトリー・パスを含むストリング	レシーバー拒否ディレクトリー。
bcg.vms_receiver_tmp_dir	<Hub install root>/common/ receiver/tmp	ディレクトリー・パスを含むストリング	レシーバー一時ストレージ・ディレクトリー。JMS、POP3、HTTP などの非ファイル・トランスポートを使用するレシーバーは、「.vcd」の拡張子の付いたコンテンツ・ファイルをこのロケーションに格納します。これは IBM が使用する内部設定です。

表 69. レシーバー・コンポーネントの各種特性の構成に使用する属性

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
bcg.receiver.ipv6	デフォルトなし	IPv6 アドレス	レシーバーが使用する IPv6 アドレス。レシーバー・コンポーネントをホストするコンピューターが IPv6 を使用する場合、これは必須です。

表 70. 文書マネージャーの要約エンジン・サブコンポーネントの構成に使用する属性

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
bcg.summary.processingInterval	15	整数	イベント要約処理を実行する頻度を決定する時間間隔 (分)。
bcg.summaryEng.thread_count	1	整数	イベント要約を準備するスレッドの数。

表 71. 文書マネージャーのスポンサー・エンジン・サブコンポーネントの構成に使用する属性

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
bcg.sponsor.inbound_poll_interval	10000	整数	イベント通知文書 (主に XML イベント) を生成するためのテーブルのポーリングの間隔 (ミリ秒) を定義します。XML イベントの詳細については、「エンタープライズ統合ガイド」の XMLEvent のセクションを参照してください。
bcg.sponsor.in_thread_count	1	整数	スポンサーがイベント通知文書を生成するために使用するスレッドの数。
bcg.sponsor.work_size	10	整数	イベント通知文書を生成するためにデータベースから取り出される受け渡しごとの行数。

表 72. 文書マネージャーのアーカイバー・サブコンポーネントの構成に使用する属性

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
bcg.archiver.maxSubVolFiles	70000	整数	1 つのボリュームの下のサブボリュームの最大数。
bcg.archiver.runinterval	600	整数	アーカイバー・サービス処理を実行する頻度を決定する時間間隔 (秒)。

表 73. ebMS 文書の処理の構成に使用する属性

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
bcg.ebXML.language	ja-JP	ストリング	ebXML SOAP メッセージで使用する言語。
bcg.AddKeyInfo	true	ブール値 true または false	この属性は、ebXML メッセージに署名しているときにのみ適用されます。この属性の値が false である場合、Signature エlement に KeyInfo エlement は含まれません。KeyInfo エlement には、署名で使用する公開鍵が含まれます。
bcg.ebXML.version	2.0	ストリング	ペイロードを ebXML メッセージとしてパッケージするために使用する ebXML バージョン。現行では、2.0 のみがサポートされます。

表 73. ebMS 文書の処理の構成に使用する属性 (続き)

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
bcg.ebms.xsd.schemaName	ebXMLSchema.xsd	ファイル名を含むストリング	着信する ebXML メッセージを検証するために使用する XSD 名。インストール中に、デフォルト名の付いた XSD がデータベースに取り込まれます。ユーザーが XSD ファイルを変更し、そのファイルに別の名前を付けてデータベースにアップロードする場合は、この属性の値と同じ名前を付ける必要があります。
bcg.ebms.validate	false	ブール値 true または false	この属性は、schemaName 属性で指定された名前を持つ XSD と照合して ebXML SOAP メッセージを検証するかどうかを決定します。値が「true」の場合、着信するすべての ebXML メッセージが検証されます。

表 74. 文書マネージャーの高信頼性メッセージング・サブコンポーネントの構成に使用する属性

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
bcg.rm.pollInterval	300000	整数	高信頼性メッセージ・サービス処理を実行する頻度を決定する時間間隔 (ミリ秒)。
bcg.rm.thread_count	3	整数	高信頼性メッセージング・サービスが使用するスレッドの数。

表 75. 文書マネージャーのイベント・エンジン・サブコンポーネントの構成に使用する属性

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
bcg.eventeng.alertscache.size	100	整数	アラート・キャッシュのサイズ。

表 76. その他の EDI プロパティ

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
transcript.file.option	N	Y/N	オプション Y を選択した場合は、現行作業ディレクトリー内の「transcripts」フォルダーの下に転写ファイルが生成されます。

表 76. その他の EDI プロパティ (続き)

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
PageThreshold	1000	0-n	このプロパティは、EDI コンポーネント内の繰り返しメッセージ構造のページングを制御します。0 に設定すると、ページングが使用不可になります。ゼロ以外の値に設定すると、ページングが実行される前に特定の項目を繰り返すことができる最大数が指定されます。ページングを使用すると、メモリー使用量は削減できますが、処理時間は増加します。
database.encoding	UTF-16	Oracle データベースでの設定に対応する任意の有効な文字セット・エンコード名	Oracle データベースのエンコードが UTF-16 でない場合は、このプロパティを使用して指定します。

表 77. アーカイブの構成とプロセスのページに使用する属性

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
bcg.archive.maxThreads	4	整数	WebSphere Partner Gateway バージョン 6.1.1 では、ファイルのアーカイブがマルチスレッド化され、新規プロパティである <code>bcg.archive.maxThreads</code> が導入されました。デフォルト値は 4 です。この値にはアーカイブの間に許可されるスレッドの最大数を指定します。

特記事項

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものです。

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒106-8711

東京都港区六本木 3-2-12

日本アイ・ビー・エム株式会社

法務・知的財産

知的財産権ライセンス渉外

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Burlingame Laboratory Director
IBM Burlingame Laboratory
577 Airport Blvd., Suite 800
Burlingame, CA 94010
U.S.A

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができますが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性がありますが、その測定値が、一般に利用可能なシステムのものと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確認できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者をお願いします。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があります、単に目標を示しているものです。

表示されている IBM の価格は IBM が小売り価格として提示しているもので、現行価格であり、通知なしに変更されるものです。卸価格は、異なる場合があります。

本書はプランニング目的としてのみ記述されています。記述内容は製品が使用可能になる前に変更になる場合があります。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

著作権使用許諾

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラット

フォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。

それぞれの複製物、サンプル・プログラムのいかなる部分、またはすべての派生的創作物にも、次のように、著作権表示を入れていただく必要があります。

本「プログラム」は、IBM 社およびその他の著作権により保護されています。

Copyright (c) 1995-2008
All rights reserved.

この情報をソフトコピーでご覧になっている場合は、写真やカラーの図表は表示されない場合があります。

プログラミング・インターフェース情報

プログラミング・インターフェース情報は、存在する場合、プログラムを使用してアプリケーション・ソフトウェアを作成する上で役立つことを目的としています。一般使用プログラミング・インターフェースは、このプログラム・ツールのサービスを含むアプリケーション・ソフトウェアを作成するのに役立ちます。ただし、この情報には、診断、修正、および調整情報が含まれている場合があります。診断、修正、調整情報は、お客様のアプリケーション・ソフトウェアのデバッグ支援のために提供されています。

重要: 診断、修正、調整情報は、変更される場合がありますので、プログラミング・インターフェースとしては使用しないでください。

商標

以下は、International Business Machines Corporation の米国およびその他の国における商標です。

IBM	DB2	i5/OS	MQIntegrator	Informix
IBM ロゴ	DB2 Universal Database	IMS	OS/400	MVS
AIX	Lotus	iSeries	Passport Advantage	WebSphere
CICS	IBMLink	Lotus Domino	SupportPac	z/OS
CrossWorlds		Lotus Notes	Tivoli	

Microsoft、Windows、Windows NT および Windows ロゴは、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

Pentium は、Intel Corporation または子会社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

Java、およびすべての Java 関連の商標およびロゴは Sun Microsystems, Inc.の米国およびその他の国における商標です。

Linux は、Linus Torvalds の米国およびその他の国における商標です。

他の会社名、製品名およびサービス名等はそれぞれ各社の商標です。

WebSphere Partner Gateway Enterprise and Advanced Editions には、Eclipse Project (www.eclipse.org) により開発されたソフトウェアが含まれています。



索引

日本語、数字、英字、特殊文字の順に配列されています。なお、濁音と半濁音は清音と同等に扱われています。

[ア行]

アカウント管理アクティビティー 43
宛先構成の管理 44
宛先構成のための情報 44
宛先の再試行 49
宛先の表示および編集 46
宛先または戻り宛先の変更 62
拡張検索の実行 60
証明書の管理 53
除外リストの管理 62
除外リストの編集 63
除外リストへのパートナーの追加 63
接続構成の変更 61
接続コンポーネント 57
接続の基本検索の実行 59
接続の検索 58
接続の使用不可化または非アクティブ化 62
接続の重複 58
選択
 アクション、新規 62
 変換マップ、新規 62
デジタル証明書の使用不可化 56
デジタル証明書の表示および編集 56
デフォルト宛先の表示 48
トランスポートのアップロード 49
トランスポートの再試行 49
トランスポートの削除 49
パートナー接続の管理 57
パートナーの検索 44
パートナーの削除 44
パートナーの属性値の変更 61
パートナー・プロファイルの管理 43
パートナー・プロファイルの表示および編集 43
B2B 属性、変更 57
アクション
 使用可能化または使用不可化 24
 新規の選択 62
アクセス権
 詳細の表示および編集 19
アクティビティー
 アカウント管理 43
値
 パートナー接続のテスト 99
 文書ビューアー 113, 115, 120, 121

アップロード
 トランスポート 49
 CPA 37
宛先
 キューからの文書の停止 93
 キュー内の文書の表示 93
 キューの使用 91
 構成の管理 44
 再試行 49
 状況の変更 94
 詳細の表示 94
 ソースまたはターゲットの変更 62
 デフォルトの表示 48
 必要な構成情報 44
 表示および編集 46
 リストの表示 91
宛先キューの使用 91
宛先構成のために必要な情報 44
アラート通知 176
アラート・メール・サーバー、構成 34
暗号化された AS 文書 167
イベント
 検索 110
 検索条件 111
 再処理 177
イベント・コード
 管理 19
 名前の保存 20
イベント・コード名の保存 20
イベント・タイプ 110
 説明 110
イベント・ビューアー
 イベント詳細の表示 111
 検索条件 111
 説明 109
エクスポート
 文書ボリューム・レポート 98
エラー・イベント・タイプ 110
エラー・フィールド
 検証エラー 124

[カ行]

拡張検索
 接続 60
管理
 宛先構成 44
 イベント・コード 19
 インポート 25
 キューのオーバーフロー 197
 システム構成データ 33

管理 (続き)

- 証明書 53
- 除外リスト 62
- パートナー接続 57
- パートナー・プロファイル 43
- パートナー・マイグレーション 65
- パスワード・ポリシー 17
- ハンドラー 25
- 文書マネージャー情報 36
- 変換マップ 27
- マップ 26
- API 呼び出し 35
- EDI マップ 28
- FA マップ 28
- XML 形式 24

規則、表記上 ix

- 基本検索、接続 59
- キュー、文書の停止 93
- キューからの文書の停止 93
- キュー内の文書、表示 93
- キューのオーバーフロー 197
- 警告イベント・タイプ 110
- 結果コード

- 200 シリーズ 100
- 300 シリーズ 100
- 400 シリーズ 101
- 500 シリーズ 102
- Web サーバー 100

言語、複数 168

検索

- イベント 110
- 接続 58
- 接続の拡張 60
- 接続の基本 59
- パートナー 44
- メッセージの、AS ビューアー 113
- ebMS プロセス 128
- RosettaNet プロセス 115

検索条件

- イベント・ビューアー 111
- 文書ビューアー 119
- 文書分析 96
- 文書ボリューム・レポート 98
- AS ビューアー 113
- EDI FA 期限経過 104
- EDI 拒否トランザクション 106
- RosettaNet ビューアー 116

検証エラー

- 表示 124

更新

- マップ 26

構成

- 宛先の管理 44
- 宛先の必要な情報 44
- アラート・メール・サーバー 34
- エクスポート 170

構成 (続き)

検証

- Web サービス 40
- 接続の変更 61
- ダウンロード・パッケージ 22
- トランスポートのアップロード 49
- トランスポートの削除 49
- 文書定義 22
- レシーバー 21
- IPv6 属性 89

コミュニティ・コンソール

- アイコン 14
- 移動 14
- ログアウト 16
- ログイン 13

コミュニティ・コンソール内の移動 14

コミュニティ・コンソールのアイコン 14

コンテナ、使用可能化 81

コンテンツ・タイプ

- インポート 26

コンポーネント

- 接続 57

[サ行]

再試行

- 宛先 49
- トランスポート 49

削除

- インポート 26
- トランスポート 49
- パートナー 44
- レシーバー 21

作成

- 文書ボリューム・レポート 98

サポート

- ebMS 37
- IPv6 87

システム構成データ

- アクセス 33

管理 33

システム・アクティビティ

- 表示 34

実行

- 接続の拡張検索 60
- 接続の基本検索 59

実施権、特許権 261

重大イベント・タイプ 110

使用可能化

- アクション 24
- レシーバー 21

IPV6 88

状況

- ebMS の表示 130

状況、宛先の変更 94

詳細、宛先の表示 94

- 使用不可化
 - アクション 24
 - 接続 62
 - デジタル証明書 56
 - レシーバー 21
- 証明書
 - 管理 53
 - 使用不可化 56
 - 表示および編集 56
- 除外リスト
 - 管理 62
 - パートナーの追加 63
 - 編集 63
- 新規アクション、選択 62
- 制御番号
 - 現行 32
 - 初期化 31
- 生成
 - 要約データ 197
- セキュリティ、J2EE 81
- 接続
 - 基本検索の実行 59
 - 検索 58
 - 構成の変更 61
 - コンポーネント 57
 - 使用不可化または非アクティブ化 62
 - 重複 58
 - パートナーの管理 57
- 接続の非アクティブ化 62
- 接続プロファイル
 - 削除 31
 - 作成 30
 - 編集 30
- 選択
 - 新規アクション 62
 - 変換マップ 62
- ソース宛先、変更 62
- 増加、レシーバー・タイムアウト 173
- 属性
 - パートナーの値の変更 61

[夕行]

- ターゲット
 - 宛先の変更 62
- ダウンロード・パッケージ、構成 22
- タスク
 - ハブ管理者 17
- 知的所有権 261
- ツール
 - 説明 95
 - パートナー接続のテスト 99
 - 文書分析 95
 - 文書ボリューム・レポート 97
- 追加
 - 除外リストへのパートナー 63

- 通知イベント・タイプ 110
- 通知メッセージ 172
- データ検証エラー 174
- データの照合 168
- データベース照会効率、最適化 173
- デジタル証明書
 - 管理 53
 - 使用不可化 56
 - 表示および編集 56
- デバッグ・イベント 110
- デフォルト
 - 宛先 48
- 特許権 261
- トラブルシューティング
 - アラート通知 176
 - イベント 210031 174
 - イベントの再処理 177
 - カスタム・トランスポート・タイプの定義 178
 - 構成のエクスポート 170
 - サーバーが始動に失敗する 193
 - サーバーの再始動 175
 - 情報メッセージ 172
 - スレッド、停止 190
 - タブ見出し 194
 - 重複文書配信 194
 - データベース照会効率の最適化 173
 - トランザクションの防止 179
 - 取り消しチェック 186
 - 長い処理時間 167
 - ネイティブ・ライブラリー、読み込み 186
 - バッファ・サイズの拡張 185
 - ハブ・インストーラー・エラー 185
 - ビジネス文書 177
 - ファイル・サイズ 0 KB 189
 - 複数言語のデータの照合 168
 - ブラウザー・エラー 500 180
 - 文書が処理されない 194
 - 文書ボリューム・レポート 186
 - 文書マネージャーの停止 191
 - 別のドライブ上での作成 179
 - メモリー不足エラー 167
 - メモリー不足エラーの回避 167
 - レシーバーの失敗 176
 - レシーバー・タイムアウト設定 173
 - 01A 174
 - 2 回送信される文書 174
 - BCG210001 182
 - BCG210013 184
 - BCG210031 178
 - BCG240415 178
 - BCGEDIEV0056 182
 - bcgHubInstall.log 185
 - CA 証明書の有効期限切れ 188
 - CHFW0029E 187
 - ClassNotFoundException 176
 - content-types 属性 183

トラブルシューティング (続き)

- CRL DP 186
 - CRL のダウンロード 180
 - DB パスワード必須 185
 - DB2 仮想メモリー 169
 - EDI レポート 175
 - FTPScripting レシーバー 175
 - IBM 保守ログ 172
 - java.security.InvalidKeyException 192
 - JIT、無効化 178
 - JMS でのデータ・バインド 181
 - MQ メッセージ 190
 - MQJMS2007 191
 - MQJMS2013 191
 - ORA-00988 183
 - SQLCODE -289 171
 - SQLCODE -444 171
 - SQLCODE: 0964C 172
 - SQLCODE: -1225 171
 - SSL 接続 182
 - SSL ハンドシェイクの失敗 189
 - StringIndexOutOfBoundsException 175
 - TCPC0003E 187
 - VCBaseException 189
 - WebSphere Application Server ショートカット 194
- ## トランスポート
- アップロード 49
 - 再試行 49
 - 削除 49
 - 順方向プロキシ 52
- ## トランスポート・タイプ、カスタム 178

[八行]

パートナー

- 検索 44
 - 削除 44
 - 除外リストへの追加 63
 - 接続コンポーネント 57
 - 接続の拡張検索 60
 - 接続の管理 57
 - 接続の基本検索 59
 - 接続の検索 58
 - 接続の重複 58
 - 属性値の変更 61
 - トランザクションの防止 179
 - プロファイルの管理 43
 - プロファイルの表示および編集 43
- ## パートナー接続のテスト
- 値 99
 - 説明 99
 - Web サーバー結果コード 100
- ## パートナー・マイグレーション
- 管理 65
 - 構成
 - 依存関係 74

パートナー・マイグレーション (続き)

- 構成 (続き)
 - 依存項目 75
 - 独立項目 74
 - 独立項目 74
 - マイグレーションできない構成 78
 - ユーティリティ 65
- ## パッケージの詳細
- AS ビューアー 115
- ## パフォーマンスの考慮事項 197
- ## ハブ管理者のタスク 17
- アクションの使用可能化または使用不可化 24
 - アクセス権の詳細の表示および編集 19
 - イベント・コードの管理 19
 - イベント・コード名の保存 20
 - パスワード・ポリシーの管理 17
- ## ハンドラー
- インポート 25
 - 管理 25
 - コンテンツ・タイプの構成 26
 - 削除 26
- ## 文書定義およびダウンロード・パッケージの構成 22
- レシーバー構成 21
 - レシーバーの削除 21
 - レシーバーの使用可能化または使用不可化 21
 - レシーバーの詳細の表示および編集 21
 - XML 形式の管理 24
- ## ハンドラー
- インポート 25
 - 管理 25
 - コンテンツ・タイプの構成 26
 - 削除 26
- ## ビジネス文書
- 再処理 177
- ## 必要な情報、宛先構成 44
- ## 否認防止
- ロギング 41
- ## ビューアー
- イベント・ビューアー 109
 - 文書ビューアー 118
 - AS ビューアー 112
 - ebMS ビューアー 127
 - RosettaNet ビューアー 115
- ## 表記上の規則 ix
- ## 表示
- アクセス権の詳細 19
 - 宛先 46
 - 宛先の詳細 94
 - 宛先リスト 91
 - イベント 120
 - イベント詳細、イベント・ビューアー 111
 - キュー内の文書 93
 - 検証エラー 124
 - システム・アクティビティ 34
 - デジタル証明書 56
 - デフォルト宛先 48

表示 (続き)

- パートナー・プロファイル 43
- プロセスおよびイベント詳細、文書分析 97
- 文書
 - 文書分析 96
- 文書処理の詳細、ebMS ビューアー 129
- 文書処理の詳細、RosettaNet ビューアー 117
- 文書の詳細 120
- メッセージの詳細、AS ビューアー 114
- レシーバーの詳細 21
- ロー文書 117, 120, 129
- ebMS 状況 130
- ebMS プロセス詳細 128
- EDI 文書 122
- RosettaNet プロセスの詳細 116
- ブラウザ・エラー: 500 180
- プロキシ・サポート、順方向 52
- プロファイル
 - パートナーの管理 43
- 文書
 - キューからの停止 93
 - キュー内の表示 93
 - 詳細、文書ビューアー 120
 - 処理の値、文書ビューアー 121
 - 2 回送信される 174
- 文書状態
 - 定義 95
 - 文書ボリューム・レポート 97
- 文書定義
 - 構成 22
- 文書ビューアー
 - 値 113, 115, 120, 121
 - 検索条件 119
 - 説明 118
 - 文書処理の値 121
 - 文書の詳細 120
- 文書分析
 - 検索条件 96
 - 説明 95
 - プロセスおよびイベント詳細の表示 97
 - 文書の表示 96
- 文書ボリューム・レポート
 - 印刷 98
 - エクスポート 98
 - 検索条件 98
 - 作成 98
 - 説明 97
 - 文書状態 97
- 文書マネージャー
 - 停止 191
- 文書マネージャー情報
 - 管理 36
- 変換マップ
 - 新規の選択 62
- 変換マップ、選択 62

変更

- 宛先状況 94
- 接続構成 61
- ソース宛先またはターゲット宛先 62
- パートナーの属性値 61

編集

- アクセス権の詳細 19
- 宛先 46
- 除外リスト 63
- デジタル証明書 56
- パートナー・プロファイル 43
- レシーバーの詳細 21
- 保守ログ、IBM 172

[マ行]

マップ

- 管理 26
- 更新 26
- 変換の管理 27
- EDI の管理 28
- FA の管理 28
- メッセージ、通知 172
- メモリー不足エラー、回避 167

[ヤ行]

- 要約データ 197

[ラ行]

- ライセンス交付
 - 住所 261
- レシーバー
 - 構成 21
 - 削除 21
 - 使用可能化または使用不可化 21
 - 詳細の表示および編集 21
- レシーバー・タイムアウト、増加 173
- レポート
 - EDI FA 期限経過 105
 - EDI 拒否トランザクション 107
 - FTP 接続 108
 - FTP 統計 108
- レポートの印刷
 - 文書ボリューム・レポート 98
- ロー文書
 - 表示 117, 129
- ロギング
 - 否認防止 41
- ログアウト 16
- ログイン 13

A

- API 呼び出し
 - 管理 35
- AS ビューアー 118
 - 検索条件 113
 - 説明 112
 - パッケージの詳細 115
 - メッセージの検索 113
 - メッセージの詳細の表示 114
- AS 文書、暗号化 167

B

- B2B 属性 57

C

- ClassNotFoundException 176
- CPA
 - アップロード 37
 - サポートされるダイジェストおよびシグニチャー・アルゴリズム 39
 - 事前設定されない属性 38
- CRL DP 186

D

- DB2 エージェント、仮想メモリー 169

E

- ebMS
 - サポート 37
- ebMS ビューアー
 - 説明 127
 - プロセスの検索 128
 - プロセスの詳細の表示 128
 - 文書処理、詳細 129
- EDI FA 期限経過
 - 検索条件 104
 - レポート 105
- EDI 拒否トランザクション
 - 検索条件 106
 - レポート 107
- EDI レポート 175

F

- FTP 接続
 - レポート 108
- FTP 統計
 - レポート 108
- FTPScripting 175

I

- IBM 保守ログ 172
- IPv6
 - サポート 87
 - 使用可能化 88
 - 属性、構成 89
 - HP-UX 11i 88
 - IPv4 を介したトンネリング 87
 - RHEL Linux 3 でのトンネリング 87
 - Windows 2003/XP 88

J

- J2EE セキュリティー 81
- javacore 178
- java.security.InvalidKeyException 192
- JIT、無効化 178
- JMS エクスポート/インポート 181

L

- LDAP
 - コンテナの使用可能化 81
 - サポート 81
 - サンプル構成 83
 - 使用 81
 - 停止 82
 - ユーザー、指定 85
 - ユーザー名およびグループ 82
 - IBM Tivoli 83
 - J2EE セキュリティー 81

R

- RosettaNet ビューアー
 - 検索条件 116
 - 説明 115
 - プロセスの検索 115
 - プロセスの詳細の表示 116
 - 文書処理、詳細 117

S

- SQLCODE
 - 0964C 172
 - 1225 171
 - 289 171
 - 444 171
- SSL 接続 182
- SSL ハンドシェイク 189

U

- URI、制限 178

W

Web サーバー結果コード 100

X

XML
形式の管理 24



Printed in Japan